

ノーステフ・ノーライ
フ

sayutan

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あんなところに”ステフを幸せにしたい!”とほざいた夢想家がありました。

そんなところにある神霊種は問いました―あなたに”愛”はあるんか?―と

こんなテキスト―極まらない展開から織りなしていく物語。

どんな結末になることやら…

※再投稿物です

◆第一目的は読みづらい箇所の修正（同じ人物が地の文を挟まず「」を連用して話す箇所など）

◆第二目的は『完結』させること

以上を踏まえて、スマホでも操作しやすいよう再投稿しました（あと読み返ししやすいゲフンゲフン）

目次

0巻

プロローグは語りたい | 1

赤ん坊は異世界転移の夢を見るか？

11

這い寄れ地の文！ | 24

二日目最初の敵はラスボス級が基本で

しよ？ | 36

執事なる刺客 | 42

愚王の冠 | 58

攻略できない女の子ほど、ヒロイン足

り得る | 70

プロローグは語り疲れる | 84

1巻

『(くうはく)の襲来 | 94

惚れる膨らむ人類種(イマニテイ)関係

| 107

盛り上がっていきましょー！ | 126

魔法(チート) v.s. 原作知(チート)

識 | 136

脳内解説トークショー | 150

神様緊急発進(ゴッド・スクランブル)

!! | 163

神達の部屋 | 175

2巻

ジブリールは不満があるようです

在籍者(ジブリール) v s. 挑戦者(『

』) | 192

転生者(『 | 』) v s. 転生者(シユウ)

| 205

馬鹿と天才の関係 | 217

乱入クエスト(中断不可)!! | 228

素晴らしい執念だ: | 239

布石は打ちつ打たれつ | 250

親愛の証 | 264

この世界の摂理 | 276

ステータスの割り振り方 | 291

3 卷

記憶の操作説明書 | 295

閲覧履歴はパンドラの箱 | 308

異空間物質転送機能 | 328

ギャルゲーの神様は中途半端がお嫌い

なようです | 342

余韻は常に消えゆく | 357

あなたの心に神理学☆ | 369

4 卷

お茶会はゲームの後で | 379

ビーチサイドの暑い余暇(前編)

394

ビーチサイドの暑い余暇(中編)

404

ビーチサイドの暑い余暇（後編）

終巻

416

さあ、終戦（ゲーム）を始めよう

ビーチサイドの暑い余暇（終編）

574

431

無理ゲーに挑むならバグを持って立ち

強引な魅了は全てを惹き寄せるのか？

向かえ

443

繋ぎ紡ぐはゲーマーの道

452 開校！海棲種（セイレーン）学園！

ジブリール最後の質問

466

最初の授業は実習で☆

481

放課後スペクタクル

507

恋は心を惑わせて

526

恋路の敵は理性なり

544

上げて落としたその先へ

617

602

590

0 卷

プロローグは語りたい

「あー、ステフを幸せにしてえ。」

そう思わね？いや、作品中ではものすごく活躍（？）してるしギャグキャラとしては申し分ないと思うよ？ゲームが上手くない人類種イマニヤとしての役も、サポート役としての見せ場も十分にある。そういう役柄で、空への片思いが続く状態であれば、作者的にも読者のにも、もつと踏み込んでみれば作品の登場人物にとってすら都合のいいことなのかもしれない。

だがしかし、故に、満を持して答えよう。

「もう少し報われてもいいと思うんですが画面の前の皆様どう思いますかねんん〜っ
!？」

と、自分勝手なエゴを、誰も反応しないであろうPCスクリーンに返事を求める大学

生童貞二十歳の拗らせメガネは問う。彼はラノベ『ノーゲーム・ノーライフ』のヒロインの一人である。ステファニー・ドーラ」という女性に淡い恋心を抱いてしまった。よくある「〇〇は俺の嫁！」みたいな状態である。

「あく。俺があつちの世界に行つてたら、ステフの話し相手になったり、仕事のお手伝いとかしちやつて、空なんかよりもっと幸せにできてんじゃないのかね。」

こんな妄想をするのは、二次元に嫁を持つ皆様方なら一度はあるだろう。そう、嫁とこんな出会い方をしてゝこんなこととしてゝムフフなこともしちやつたりしてゝ：とかなんとかね。ご都合主義満点で甘々な生活を送る。まったく素晴らしいことではないか！おーい！だれかブラツクコーヒー持つてきてー！とびつきり苦いやつー!!

：けれど、それは結局叶わない。なぜなら私たちは違う次元に生きているからだ。いや、そもそもそのような存在が幻想にすぎない。人間が作り上げた虚構にすぎないのだから。小説だろうとアニメだろうと映画だろうと漫画だろうとVRだろうと：

ゲームだろうと、結局リアルでは体験できないのである。

ああつ！でもそんなに肩を落とすことはないじゃないか！全くもって断じて、そんながつかりする必要ないじゃないか！むしろ私たちは幸運であるといえるだろう！今やこんな虚構にまみれた世界を大部分の人が受け入れ共有し、新たな世界を創造している。共有した分だけ楽しくご都合で飽きることのない没入感を、一生かかつてもつ

かめのないような大量の快樂情報を得れる時代になったではないか！ああ、素晴らしきかなわれらが人類は！なんと愚かしく、それでいて賢しい想像を創造する者たちよ！ああ、この時代に生まれてよかったーっ！

そう、現実から目をそらし続けながら、今日を生きる彼は苦笑いを無意識に作りながら、虚構の世界へと浸水していくのであった。

—さて、普段ならこんな一幕は誰の興味も引かず、無慈悲に時を刻む針に置いてけぼりにされ、風化してしまう一幕だろう。だがここで、テンプレになつてしまつた異世界転生小説の常套句を引用して新たな幕開けとしよう。差し当たつてこうつづるとしよう。

—汝、健やかなるときも病めるときも、富める時も、貧しき時も、己の嫁を敬い、愛し、一日一度は脳内で妄想し、家族兄弟クラスメイトの暖かい視線に屈することなく、堂々とにやけ顔をさらし、その命のかぎり、嫁に幸せを与えることを誓いますか？誓いますか？誓えますかーっ!!?—

ここに新たな二次創作が誕生した—

—世にステフの有らんことを—

—もし?—

ん? 誰だ?

—あなたの心に 愛 はあるんか?—

いきなり何聞いてやがる?…だが答えはもうとつくに決まっている。

「ステフへの奉仕愛が、この俺の胸にしかとあるぞっ!」

—…そうですね。ならばその愛。最後まで貫けるのか、見届けさせてみよ。—

その声が聞こえた瞬間、あたりを闇が覆った。だが少しも恐怖を感じない。むしろどこか心地よい感覚にとらわれ、意識が空間へ溶けていった。

見慣れない天井だ。

そこは日本の木造家屋を少し古くしたような感じのくそのくなんだ。まだ技術が発展しきっていないような雰囲気醸し出している。そんな感じの天井。明らかに俺の部屋ではないことは確かだ。なぜなら俺の部屋の天井にはステフの満面の笑みがプリントアウトされたポスターが貼ってあるからだ。いや、こう言っただがこれくらいは「嫁」とよんでいるキャラクターのポスターを天井に貼り、寝覚めを最高のものにしたいと思っっている俺は異常でないはずだ。断じてな！

…とは言えホントここどこだ？変な夢見たのはかすかに覚えてはいるんだが、どんな内容かも覚えてないし、状況がさっぱり掴めん。というか体が動かしづらい。どうなってるのこれ？俺ってばこんな腕まるるk…

「あら？起きたのシユウ？」

は？シユウ？誰だ？そんなん知らんけど…って、声が出ない!!?

「ん？どうしたの？そんなにママの顔を見つめてくあ！お腹が空いたのね！いま用意するわくちよつと待っててね〜♪」

え？ママ？俺の母さんこんな若くねーし、つか誰だよこいつ？あとご飯くらいは自分で用意するから大丈夫…

と、体を起こして女性に抗議を持ち掛けようとして気づく。立てない。

そこで気づく。今までの言葉、自分の身に起こっていることを脳内で処理した結果導き出された答えは一つ。

俺、幼児化してるうーうーうー！！？

???
視点

「あつれー?なんかこつちの世界に部外者が入ってるんだけど、なんでこんなことしたのか教えてくれる? オールドデウス神霊種ちゃん?」

異世界転移を行った瞬間に現れた唯一神に少々面を食らった オールドデウス神霊種は、だが、予想していた通りの質問をしてきたことに安堵しこう答える。

「いえ、ただの暇つぶしです。私の信条と近いものを持つ者をこちらに呼び出して観察しようとしているまでですわ。」

「へく、てつきり僕は オールドデウス神霊種はみくんな頭固くって無為なこと繰り返してるだけの種族とばかり思ってたんだけどさ、君みたいに面白いのもいるんだね♪」

「ええ、でも彼をこの世界に引き留めるだけで私は精一杯なので今はあなたのお相手ができませぬね。申し訳ございませんわ。」

「えくそんなこと言わずに少しは相手になってよく6000年くらいまともなゲームし

てなくて退屈してたのにさ。」

「…代わりにと言つては何ですが、好敵手となりえるような存在をこの世界に引き入れてはいかがでしょうか？私のように力をかけ続けなくても、この世界につなぐことはできるのでしょうか？」

「ん〜それは最後の手段にしようかな。僕の袂たもとまで来れるような種族はまだないけど、動き始めている勢力はあるからね。一種族でも欠けそうな状態だったら考えるかもね。」

「…フツ。どうぞご自由に、唯一神様。」

「まったく、せっかく面白そうな “Player” を見つけたのかと思つたのに。残念だなあ。」

「そんなことを思っている唯一神様はさしづめ “Prayer” でしょうか？」

「あははっ！言つてくれるね。確かにその通りなんだけど、それは僕のある一面でしかない。僕は僕に挑んでくれる者が現れるのを待つ Prayer であり、その者の挑戦を真剣に、最高に楽しむ Player であり、そのゲームルールを絶対のものとする Game Master でもあるんだよ。ま、でもそれは君でもなりえたんだけどね。その分の期待が外れちゃつて僕はすごく残念だなあ。」

そんな、ケロッと無邪気に、嘘ともとれるような笑顔を浮かべながら唯一神様は言つ

た。

「ま、君の気まぐれに関しては今回は目をつむっておくよ。世界のルールに反してるわけでもないからさ。」

「そうですか。」

そういつて唯一神様が虚空へと消えていった。

さて、私もこのまま眺めるだけでは面白くありませんね。こちらにも筆を執ることにしましょう。せつかくの幕開けです。盛大に広げて見せましょうか。

—こんなお話をご存じだろうか—

と。

赤ん坊は異世界転移の夢を見るか？

さて、どうしたもんかねえ。

全くもって僕は困っている。困りまくリスティーである。もつと言うなら困りまくリスチャード・Now Lodging中なのである。

なぜかつて？よくしよし。聞いてくれるかね画面の前の紳士たちよ！あ、決して画面の明るさを最悪にしちやいかんぞ！場合によってはバケモンが現れっからな！H A H A H A ああああああ待って！本気でシャットダウンとかしないでプラウザバックして俺を一人語りしてる痛い人間にしないで！お願いです！何でもはできないけど理由くらいは話しますからあ！

と、私の計画的カリスマ的な説得に皆様の信用を得たところ（笑）で皆様に質問したい。

ー異世界に来たらず真つ先にすることは何だろうか？ー

え？異世界に行ったことないからわかんねえよつて？おいおい、そりやないぜ、何回も「妄想」で行ってるでしょ？え、わざわざご都合世界でちまいましたことはしない？……ごもつともです。

ならば新しいゲームを買ってきたりダウンロードした時に一番最初にとつて何ですか？

例えば、所持品を確認することだろう

例えば、自らのステータスを確認するだろう

例えば、キャラの動かし方を確認するだろう

例えば、物語背景をつかむため設定資料を読むだろう

例えば、最初っから俺Tueeee!!するためにサイトの攻略見て完璧に進めようとするだろう

例えば、例えば、例えば……まあ無数にあるだろう最初にできることなんて限られてい
るようで割と何でもできてしまいそうだ。

あ皆さまー！考えていらっしやるところ悪いですがこっちにお戻りくだっさい！
意識をこっちに集中して……そうそう。あなたはどんどん私の話を聞きたくな……つて
くださいお願いします。

さて私も例え話に倣って行動してみよう。さしあたってまずはステータス確認！え
いやっ！

ステータス

名前：シユウ

種族：おそらく人類種^{イマニテイ}

年齢：わからん。おそらく目が見えるようになったばかりの赤子

身長体重血圧持病その他健康診断書に書かれていそうなこと：わからんっ！

えー：自分が赤子ということしかわからんやん。いやね、お母さんらしき人がいるってことは現状わかっている。それがおそらく人類種^{イマニテイ}だつてことも。だつてケモミミないし、水ん中でも、翼も光輪も、長耳も、機械っぽい尻尾もないし、極端に背が低いってわけでもないしね。でえじょうぶだあ。何の問題もないっぺさあ。

よし次ッ！所持品確認！

ー隊長！ポケットもバックもありません！ー

なあにいい！他に何ももつとらんのか！？

ーすみません。隊長！何の道具もありません！強いて言うなら布のオムツがあるぐらいかとお！ー

ぐぬぬ、写本すらまともにできんこの町で悠長に布を使ったオムツをはいているだとお？けしからん！今すぐ藁で編んだものに変えるのだ！

ー申し訳ありません隊長！筆者殿が非常に面倒臭そうな顔してドン引きしてます！

なら仕方ないな！時代背景を大切にするのが小説家（笑）の務めだが、面倒なら仕方

あるまい。ご都合万歳だ。バンザーイ！って服きてないから脱ぎ脱ぎきれないな！
H H H H A ::

：なんでこんな無駄茶番流すんだって？赤ん坊で暇だからだよ。
ようし次は体の動かし方だ！

くラジオ体操第一。よーいく

く♪

く腕を前から上にあげて 大きく背伸びの運動から はいく

く♪

うん、体のほうは大丈夫だ。問題ないっ（キリッ）

く腕を振って体をねじります はいく

うん、少々無理してる感はあるが何とか動くね。あれ？赤ん坊の体でもいけるんじゃないか？

く足を戻して手足の運動 はいく

これは足の動かしがむずいがやれる。腕をピツピツとするの楽しいよね。

く体を大きく回しましょう はいく

くおっ!! 腰曲げづらっ。まあ腕だけでもしっかり回せてるから良しとしよう。

…あれ？割と体動かせるやん。ラジオ体操は基本の動きの準備体操やしな！ほほ！
ここまでやれるんならどこぞのボスベイビーみたたく何でも赤子からできるんとちゃう？

え？そうなの？ソーナンスなの？赤子の状態から前世の知識引き継いでそれに加えて身体性能爆上がりなの？スーパーマンになっちゃった？いやーごめんねえ！こりや空白来る前に盤上の世界攻略しちゃうかもなあ〜♪来てるかどうか知らんけども！

いや、頭脳的なところに今のところ全然変化はないんですけれども、成長していくにつれドゥンドゥン開発されちゃってくのな!? そうやってチート使ってチーターみたいな速さで攻略してテトさん下して神様になっちゃってなんでも能力でチー〇ス喰ってご機嫌でハッピーエンドってか!? なはは！

なあんか当初の目的忘れてるっぽいけど大丈夫でしょ何とかなるにやははははははははは!!

〜両足跳びの運動です はい〜

〜両足跳びの運動です はい〜

.....

立ててすらいねえじゃねえかよお!!

立つことはおろかハイハイすらできねえよ!もう一つ残念なお知らせがあるよ!寝返りすら打てねえよ!

ちなみに前世の記憶があるってだけで何もチート能力に目覚めてなんかおりません。やったね読者さん!凡人が増えるよ!(泣)

さつきまでのラジオ体操を客観的にかつ端的に表現してやろうか!?!ただ赤ん坊が腕ぶんぶん振り回してるだけだよ畜生があ!!

「あらシユウちゃん元気ねえ♪」

おかげさまでなっ!

「さ、シユウちゃんおでかけよ♪」

ん?つてことは外に出れるのか!情報収集ができる絶好のチャンスだ!ささ、われを連れ出して給う

外に出て気づいたことが一つ。ここはエルキア王国だった。これで俺は確実に人類種であることが確定しただろう。それともう一つ。獣人種ワイルドがない。つまり東部連合がエルキアと併合する前なのだろう。

∴今わかるのはこれぐらいか。

さて、マイマザーよ。どこへ行くのかな？あんまり外に出てると紫外線が当たって嫌になっちゃうわ。

「さ、ついたわよシユウちゃん。」

ここつて…王城の前やんなんでこんなところに？

ま、まさか。もう空白たちの演説が始まるつてののか!?俺がこんな状態で!?

ということはもうステフは18歳で?空にもう惚れさせられていて?ラノベのような物語を歩んでいくのか!?

おい!My God!!こりやどういう見だ答えろよ!俺がこんな状態じゃステフ

に何にもしてあげられねえじゃんか！なにか？この体でやってみるってか！さっき検証にて何もできなかったよ！あれか、赤ん坊の笑った笑顔見せて癒しを与えろってか！？そんなん認めねえぞ！

それともあれか、この世界に來ただけで満足しろよってか！？確かに神様転生なんて周りの者にはうらやましい限りだろうよ！でもなあ、俺が、主人公なんて言わねえ脇役になつて登場人物たちの手助けしたりできないのか！何もできないなんてただの理不尽だろ！そんな辛酸舐めさせるためにここへ連れてきたってんなら…

夢のまままでよかつたよ畜生がっ！！

「あ、国王さんのお孫さんが見えたわよ〜♪」

あくはいいはい。ついに童貞通り越してハーレム発情期で〇〇しちやつたんですかそうですか。むしろしないほうがおかしいとは思ってましたけどね？いいですよ別に。

…ハア。これ終わつたら舌嚙んで死ぬか。もういいよな。いい夢は見たんだし。

「あらくかわいい女の子ねえ〜♪ほらシユウ見てみなさあい♪って、まだはつきり見えないか。」

ーいや、はつきり見えていたー

むしろ見えすぎていたくらいだ。目よもつと見開くと脳が命じる。

今日の出来事や考察、先ほどまでの悪態をすべてはねのけ入った命令に強制的に脅迫的に従う。

いま、この瞬間を目に焼き付けると、脳に刻み込めと無意識に思った。

そう、目の前に…いや、群衆のだいぶ後ろにいて距離があるがそれでも見逃すまいと目を見張った

その、国王と呼ばれた者の腕に抱かれていたのは…。

―赤毛の、綺麗なアクアマリンの瞳を持った女の子だった―

這い寄れ地の文！

皆さんは休日はいかががお過ごしでしょうか？

テレビみてだらーっと過ごししたり、マンガやラノベ読んでグダーツと過ごししたり、体の鈍りを感じながらも、働きたくない衝動を抑えて仕事に勤しむ方もいるだろう。ある意味家族を作った義務として？お子さんに世話を焼いている主夫の方もいるかもしれないが。

… え？肝心の過ごし方を忘れてるって？

… ああ！そうだろうとも！そのツツコミを待っていたっ！

この題名を、原作を飾ってパクッてるこの作品で、休日にやることと言ったらゲームだろう！我らはこの休日を待ち望み、平日を耐え抜いているのだっ！ええ、ええ。“平常な日”と書く平日は、我らにとっては“苦日”になると！休日こそが我らの“平日”だと、“樂園”だっ！！

まあ、年がら年中休日の人もいらっしやるでしょうがそれはさておき、

我らはゲーマーだ。

たとえそれが、魔王を倒すことでも、目前のミニゲームを潰すことでも、リズムとつ

てハイスコアを目指すことでも、運で勝負することでも、それがゲームであるなら、我らはゲーマーだっ!

…まあ、美少女と一緒にイチヤコラして、ナニいじってナニするのも、ゲーマーということにしておこうか。うん。そうしよう…。

かくいう私も、元の世界ではゲーマーらしく、ゲーム三昧だった。たまに他の娯楽に手を出していたが、休日はほぼ液晶画面の前に両目そろえてカチャピコやってたわけである。

そんなんだから、この世界にきてやることと言ったらゲームだろう。

だってこの世界でのゲームは重要な役割を持てるくらいのことですし、小さいころから一般教育からスポーツとかなんとかやるより、よっぽどゲームの腕磨いたほうがいいでしょ?

プロゲーマーつつう職業が普通の世界なら、みんなそっちに行っちゃうつしょ!?

…ということ踏まえて、俺は今何をやっているのかというやつ!

料理やってます

え？聞こえなかった？仕方ないなあ…

料理やってます

(ジューーーーーーツ)

！ お、いい感じに焼けてきたね。あ、飯テロ画像とかないんで安心して読んでいってね

え？そこじゃない？なんで料理やってるのかって？

…じゃあゲームね。

『俺がゲームやってる理由を答えよ』

特に勝ったときの景品があるわけじゃないから、ゆっくり考えていってね。ちなみに今の私は小学生まで成長しています。いいね。小説って。時間操作いくらでもできるし。

それじゃ、シンキングタイム、スタアアット!!

：ハイ！そのあなたっ！『ステフの胃袋つかんで惚れさせる』
惜しいな！これが間違いな理由は後に説明しよう！

：ハイ！そのYou！『食○のシユウ』みたく料理を勝利条件にしたゲームをするつもり』という意見。

ああ、ありがたが欠点がある。まず、審査する人間が問題だ。味覚という不確定要素を勝敗の要素にされちゃ、勝てる勝負も八百長やらなんやらで台無しにされかねんし、大前提としてそんな勝負受けるゲーマーいねえよっ!!

：ハイ！そのガイ！『小学生にしてステフを籠絡し、夫婦生活を送っていて、今日があなたの食事当番だから』

Wow! Fantastic! 最高だな！感動的だな！だが間違いだ。その理由は一番目と同じだからあとでだ。あとそれだともうこの小説終わっちゃうわ!!…え？そんな感じのやつ期待してた?…ごめんなさい。よそで見つけてきてください。

：ハイ！そのガイ!…ガイ!?!なんだその目!?!ノンケのみならずシヨタまで範囲内だつてえ!?!んく小学生つてシヨタなんですかねえ…つてえ!!あぶなっ!?!その手をやめろお!!盟約でヤレないとはいえ、生理的危機管理能力はピンピンなんですう!!

：ハイ！そのシヨタア!!『家族での位階序列が最下位だから、家事全般やらされる最中だから』つてえ、それなんなん!?!そんな涙ちよちよ切れるくらいの悲しい立ち位

置!!? エルフの奴隷にすらなっていないのにその扱いかよ!!? 前回の母ちゃん見てみるよ!
! そんな母ちゃんに見えたか!? : 見えたんなら仕方ねえ。そう思つとけ。お前ン中
な。

: ハイそこまでえっ!!

まあ、まだ手え挙げたり念を送ってくる人もいますがそこまでです。もうすぐ正解言
われそうな気がしますし。大体の人はもう正解にたどり着いてることでしょう正解は
こちらっ!

『王城の執事になってステフの手助けをするため』

だっ!!

正解者にはこの小説をお気に入りに入れる権利を進呈します。惜しくも不正解だつ
た方にはこの小説をお気に入りに入れる義務を進呈します。

ハイ。理由は単純明快。執事というお助けキャラは万能に動けるからなあ。陰で支
えるにはバツチコイの職業さ!

だから…って何だねその何か言いたげな目は。

…わかるよ。なんで転生してまでそんなクツソあったりまえのような、ノーマルな世界のテンプレ踏んでんだと。異世界作品のテンプレ、いや、フィクションの過激なテンプレがあるだろうと！ギャルゲやエロゲっぽい、幼馴染的な設定とかできたんじゃないかねえのとおっ!!

だがしかし、少し考えてみてほしい私は前世の知識があるというだけだっ！いや、大分チートっぽいけど、それ以外の能力はない。ただの一般人。一般人。これどういう意味か分かります？

ステフに会う方法がないんだよ畜生があ!!!

うおおいカミサマア!! 赤子のステフみたときやあんたを信用していたよ。なんてイイ趣味したカミサマだつてな!! あまりに都合がよくて脳内小躍りしちゃったわ!! 「これで幼馴染になっていろいろ改変できるぜわっはーい」とっ!! ああ、いろいろ妄想したよプランも立てたよ結婚までにやること成すことさあ!! 調子に乗って童貞卒業計画とか

も立てたよ!! 暇な赤子時代特にねえっ!!

小学生になってようやく気付いたよ。自分が井の中の蛙だったってね! なんせ、同じクラスにステフいないもん。そりやそうだよなあ! あつちは貴族身分でこつちは一般会員だからね。プレミアムですら届きそうにねえわ! 入学式の開会式が絶望の開会式になつたわ!

だが、それでも、人生は自分で道を選べる自由な意思があると、それこそリアル人生ゲームの売りだと信じて心機一転。ステフの学び舎を見つげようと母に問いかける。

「あら、シユウちゃんステファニーちゃんのこと好きなのお?」

三日月の双眸で見つめる母を努めて眼中にとどめないようにして聞き出すと、

「噂によると、王族の子息は専属の家庭教師に教育を任せてるみたいよ!」

え:?: 偶然装つて会うこともできないやん。何? どこぞのラプンツェルみたいに城の窓から外を眺めているステフに元氣なあいさつしろつての!?! 無理だよ!! ンなことしたらすんげえ怪しまれちゃうわ!!

このままじゃいけないと七転八起。会えないなら幼馴染イベは難しい。ならば、とりあえずステフに近づくことが最優先事項になる。それならと、小学生の稚拙な頭をフル回転させて出たのが先ほどの回答というわけだ。

…ハア。すんごく回りくどいルートになりそうだなあ。ああ、世の中の落とし神様

よ。私にもつといい方法があるのなら私にご教授願いたい。何なら憑依してくれてもよいですよ? 何でもはしません。

そんなこんなで、大学生の自炊レベルだった料理スキルを上げるべく、経験値をためることに勤しんでいる。執事となるなら、ある程度の料理スキルがあれば何かと役に立つと思うし、何より料理上手なステフと接点を持ちやすいと思ったからな!

執事になるには結構キビシー関門を突破しなければならぬらしい。なぜなら執事とか使用人は基本特定の家庭から排出されるからだ。だが、俺はそれに反旗を翻さなければならぬ。要はそいつらより優秀な一面を見せることがクリア条件となるわけである。何の家柄も無い家系? 関係ないねっ!

というわけで今日も今日とて勉強と料理に精を出しているわけだが、小学二年生がこんなことやつてたら友達あんまできなくてボツチになるのは必然というか…。いいや、大丈夫だ! これはあれだ!

??? 「あなたは…シユウ?」

みたいな幼馴染展開をなくすためだよわかったか! (血涙)

ついでに言うとか親のほうにも心配されたよ! 元の世界の料理ベースにしたら、出来上がったやつ、おかあちゃんが周りに言いふらしてやんの! やめて! 俺の(心の)ライフはもうゼロよ!

まあ、良くも悪くも目立っちゃっているが、無視して気にしないようにしてるからそれは放っておこう。

さて、ここで起承転結の承に来ました。前置き長いね。まだ続くけど。

料理をやつて腕あがるのはいいんだけど、そこでみんなに問おう。自炊やお菓子作りが一番重要なのは何でしょうか。うん。愛情は大事だけど割と現実的な問題があります。それは根源的かつ原始的な、

材料と材料費であるっ!!

お母さんはなぜか不自然なくらい協力的で、生暖かい目で眺めながら、俺のやることになぜか口出ししてこない。それどころか直接手助けするほどだ。料理ばっかしているから、金銭面のことを心配して聞くと、「シユウちゃんは気にすることないわよ」と言ってくる。

うちの家庭事情はお父ちゃんの仕事の収入で主に成り立っている。建築業を営む父ちゃんは最近東部連合との建築事情でなんかすんごく忙しく、帰ってこないことが多い。

そんな状況であの言葉が出てきたけど、夜中帳簿とにらめっこして悩んでいる母ちゃんを見るとすごく胸が苦しい。

食料調達しようにもこんな体じゃ満足に移動できんし、バイトも難しい。山菜や海産

源なども調達しようとしたが、山には砦を出る必要があり、モンスターに襲われる危険があり、海は愚王なる賢王が賭けた土地によつてほぼ封鎖状態。安全な場所の食料は今のエルキアを支える貴重なものなのでほぼ自由には手に入らない状況だ。

でまあ、一見八方塞がりだったこの状況に、一つ思い出す。

材料はなぜかある空間を持つ、ドラちゃんよりドラ○もんしてるあの天使悪魔のことを。あいにくこの時点でもう人類種イマニティの本は巻き上げられて久しいから、この前世の知識を使つて何とかやつてやろう。

というわけできましたジブちゃん家。…これ言つたらアズリールにも殺されかねんな。

とりあえず開けてみよう。形式的には図書館ですし？

…あかない。おい公共施設が機能してないぞ何やつてんの！

とまあ、どうでもいいツツコミは置いて、今はジブリールの所有物だし、開かないのは当然か。

ではノックだ。二回ノックだ。

…返事がない…。

では三回ノックだ。

…返事がない…

では四回ノックだ。

…返事がない。閑古鳥が鳴き始めたな。

では五回ノックだ。

…返事はない。図書館は屍のようだ。

仕方ない。ここは切り札を切るとしよう。リバーズカードオープン！『100連続
ノック

「何の御用でしょうか。猿モドキ。」

…おもらしは治ったと思っただがなあ…。

二週目最初の敵はラスボス級が基本でしよ？

あなたは自然的恐怖を感じたことがあるだろうか。そう。自分より強い者が自身の安全を脅かすと、本能的に感じた者、もしくは動物と対峙した時の感覚だ。おそらくないのではないか。精々黒光りするGや、這いよる百本足を家の中で見つけた時の恐怖くらいだろう。…あれでも相当であるのは認めるが。

動物園などにいる動物を見て、そのような感覚は味わえないだろう。なぜなら安全がほぼ確立されている状態では死ぬ危険性はないと理解しているからだ。御金を払ってまで、命のやり取りをしていた対象と対峙し互いを観察しあうこの行為は、安全が保障されていなければしなないだろう。弱きものを愛で、強き者を嘲笑する我らは、果たして、安全が崩壊したとき、それらに殺されることに文句は言えるだろうか。自由を奪われ、馬鹿にされ続けた者が、枷が外れたのを認識したとき、氾濫した者のとる行動は、火を見るより明らかだろう。

まあ、いろいろ言ってたが、今は盟約という檻に互いに入って眺めあっている。オールドデウス神霊種が100寄って来ても大丈夫な安全が確立しているにもかかわらず、どうして

もまあこんなな脳みそが「逃げろ。さもなくて死ぬぞ。」と、警報を鳴らしまくってるのはなぜでしょう。答えは目の前にいる天使悪魔のせいです。わあ〜い。

「何か報告があるのなら受け付けますが、それ以外の用なら消えていただけないでしょうか。子猿。」

と、話しかけてもらって、やっと白目から回復し、背を向けて三步ほど逃走している自分を認識し、ついでにちびっていることも確認した。

（オムツはいといてよかった〜）と、内心思いつつ、

「いや、ピンポンダッシュしようとしたわけじゃないんですう！殺さないでくださいお願いしますう!!」

と、流れるように土下座をかますシユウ。理由よりなにより謝罪を最優先して即行動。光さえ惚れ惚れするほどの速さを見せつけた小動物に対し、

「はあ、猿モドキに許す許さないの判決を言い渡すことすら徒労に感じるので、お願いとやらは却下させていただきます。」

「さいですか…。」

「ところで、本当の要件は何でしょうか？事によっては首ハネの刑にしますが♡」

「レア度すら存在しないような人類種イマニテの首ハネて何か得でもあるんですかねえ…。」

「ギャーギャー鳴く猿の息を止めるのに最短の方法だと思われませんか？」

「おっしやる通りで。」

と、同意を示して一息入れて

「あなたの図書館の本を読ませていただきたい。あと、あなたの持つ私空間の一つの調理場を使用させていただきたk

「却下でございます♡」

「そこをなんとかああー……っ!!」

即却下を即懇願で応える。

こっつからが勝負だっ!!

「どうか私に本を読ませてください。様々な知識を知りたいんです。何のジャンルかという料理ですっ!知って、あわよくば作らせてほしいですっ!作るのがダメなら読ませてもらうだけでもウクオールオツケ♪ですっ!しませんふざけましたごめんさいっ!あー、本が傷ついて欲しくないなら盟約で縛ってもらってもかまいませんっ!貸し出させてもらえるならなおうれいす!ダメでもいいです立ち読みだけでもいいですからあ!どうか、どうかこの小さなバカ猿にお知恵ヲオ!!」

これぞ必殺「まくしたてる」っ!!これで相手の判断力は相応に減衰s

「私利私欲による要望のため却下いたします」

「どうか理由をお聞かせください!!!」

「先ほどの言葉の意味すら理解できない無能に渡す知恵など無駄にされるのがオチだと思おうのですか？」

「ならば私の作った料理を提供するというのは…。」

「我々^{フリュウゲル}天翼種は食事を必要としない種族ですので、その提案はメリットにはなりえませんがね。」

「なら異世k…あー…。」

『異世界』と言いかけて言葉を止める。これは空白たちがジブルールに対して提示できた唯一の餌、チップである。これを彼らより先に渡すということは、彼らの盤上^{デイスボード}の世界攻略が、さらに困難になることが予想される。まあ、『^{くうはく}』ならこの程度何とかしただけだね。

とりあえずあまりよくないカードだと感じ、別のカードを切る。

「なら、あなたの話し相手になるといっはどうか。どうでしょうか。」

「話し相手…ですか？」

かかったっ！

「そうです！ほら、知識とかがって得たときって感じるものがありますか？好奇心や疑問とか。」

「それを僕が聞いて受け止めてハネ返します！私なりの考えを！」

「なぜ私に話し相手が必要だと思うのでしょうか？」

「なぜって、」

「ここでチート能力発動！原作知識ツ!!」

「だって、えーと、あなたの名前わからない（フリだ）けど、あなたがここに来た理由って他の天翼種^{フリユージュル}と意見が合わなかったとかじゃないの？」

「……………」

「というわけで、少しは話し相手になれるかなあつとおお!!?」

いきなり目前に現れた双眸が、体中に鳥肌を立たせ、冷や汗が尋常じゃなくらい流れた。

その琥珀色の瞳に秘められていたのは壮大な殺意と幾ばくかの好奇心だった。

「…いいでしょう。それを条件に本を読むことを許可いたしました。まあ、盟約である程度の行動制限はこちらで決めておきましょうか。」

「あ、ありがとうございますっ!!!」

「ハア…このチビザルに埃ほどの好奇心が出てしまうとは…。」

これにより、フリーユージェル天翼種 ジブブールとの継続的交友関係を結ぶことができた。

計画通りっ!! (↑後付けの大嘘)

執事なる刺客

別れとは、人と人が離れた位置に移動する。もしくは死別と言われるように、どちらかが死に、片方の生存者が現実を生きるといふような、精神的離別がある。多くの若者が感じるのは前者であり、年配の方が感じるのは後者であろう。出会いは偶然に起こるものでありながら、別れは理不尽に、必然として起こる。

我々は様々な別れを経験して生きていかなければならない。それが、耐え難いものや、開放をもたらすものであっても…。

いゝざゝさらゝあゝばゝ

「誰と誰が分かれるのでしょうか？」

「俺とジブリールさんですかねえ？」

「まだ盟約による拘束が説かれてはいないはずですが？」

「もうそろそろ解除してもらえませんかね？」

「だめにございます？」

と、につこりと笑顔を張り付けた天翼種^{悪魔}ジブリアルは言う。

執事服（手作り）を身に着け、卒業式の歌を斉唱する、ここでも童貞馬鹿は、面倒なことになってしまったなあ、小学生の頃の思考回路を呪っていた。

◆盟約内容◆

「1」ジブリアル個体の所有物である本の損傷に値する行為を禁ずる。また、偶発的に損傷が発生しようになった場合、それらの行為を即座に停止、改善を試みるものとする。

「2」ジブリアル個体の所有物である図書館の自由な出入りを許可する。ただし、その際、ジブリアル個体からの質問等の返事を必ず行うことを義務とする。返事の内容についての真偽は問わないものとする。

「3」この盟約内容の解除方法は、ジブリアル個体による解除宣言のみ行使される。再度盟約の付け直しは不可能なものとする。（ゲームによる再度行使は可）

と、このような盟約によって縛られている。まあ、何度か八百長のゲームをして調整しまくったシロモンだから、拘束力はほぼないように見える。だが、図書館にあまり来

ない日が続くと、来た時に質問攻めにあつて一日が過ぎてしまうことなんてザラである。しかも、質問がある程度終わった時には、「ゴミ猿に期待した私がバカでしたね。」と、ほかにも似た感じの罵倒をされて終わる。結局、ストレス満点の状況で本を読まなければならないのがつらい。いつ質問攻めが始まるかわからんし。ま、そんな面倒から逃れようといういろいろ懇願しているのだが、すべてハネのけられて久しい。

そんな風な関係になつて早10年。只今17歳なんです、ようやく執事になる試験に参加できるようになった。まあ、これがおそらくステフに近づく最後のチャンスになるかもしれない。もう17歳。もうすぐ空達がこの世界にやってくる可能性があるのだ。だから今回必ず受かつて執事にならなければならない。ま、王族専属執事になるにあたつて心機一転したいじゃん？だから面倒な盟約の鎖を引きちぎろうと思つたんだか…。

「なくんでジブちゃんは盟約解除してくれないのかにや〜？もう、うちに興味はないはずにや。」

「なぜアズリール先輩の言葉遣いで聞いてくるのか甚だ疑問であります、解除する気は毛頭ありませんので、ご心配なく。」

「ちえっ」

そう軽い舌打ちをして図書館を出ていく。

ちなみにこの図書館に通っていることは他の人類種イマニテイには隠し通している。なぜかって？おれが天翼種フリユージェルの間者だっと思われちゃ、ここにいられなくなるからな。もしくは逆に利用されるかもしれんが、なーんの権利もってないから意味ないのよね。ただのお騒がせにしかならんな。

さて、王城に着きましたよつと。

じゃ、ちやちやつと合格してきますか。

と、思ったのですが、今現在王城に入れません。

さて、ここで問題です！なぜ王城には入れないのでしょつかつ！次の選択肢からお選びください。

①そもそも試験会場がここではなかったから

②受験票を忘れてしまったから

③日付を間違えていたから

ヒント：現国王が東部連合とのゲームが8回目を迎えた

④王城前にできたクーデターによる群衆のせいで先に進めないから

はい！正解は④です！簡単だったね！

という訳で仕方なく人混み掻き分けて門前を目指す。

あく確かに勝手に土地かけて負け続けられちゃ不満もたまるわな。先の展開知ってなかったら俺もこの中にいたかもね。

「貴様、何用だ？」

こんなときでも用のある人間を見分けられるなんてすごいわー。あ、でも執事服ピツチリキメてクーデター起こす人類種イマニテイなんざいないか。

「執事試験を受けに来ました。」

「……え？正気か？今王政は国民に対し、非常に悪い体制をとっているんだぞ。」

「わかっではいますが、それはそれ、これはこれです。」

「そ、そうか。ええい!!お前ら門から離れろっ！」

と、門番が叫ぶと他の門番が協力して人を門から離し、やっと一人通れるくらいに、

狭く門を開けた。

「さ、早く行くんだな。」

「ありがとうございます。」

門内に入ると門前とは違う喧騒に包まれていた。

クーデターによる不満からか、仕事をボイコットする人員が出ているのは明白で、少ない人員で何とか回している状態なのだろう。貴族らしい余裕の表情は見る影もなく、焦燥にかられている様子だ。

使用人の一人がこちらに気付いて近づいてきた。

「何の御用でしょうか？」

「執事試験を受けに来ました。」

「え!? 正気でございますか!？」

「もう、狂ってるってことにしてもらっていいので案内をお願いしても宜しいでしょうか!？」

「あ、はい……。それではこちらへ……。」

―応接室にて―

「ほつほつ。いやはや何事かと思えば、いらして当然の方だったとは。勝手ながら狂人扱いた非礼、お詫び申しあげます。」

「いえ、冷静に考えて、私の行動はどちらかと言えば異常ですし、そこまでなさらずともよいですよ。」

「それもそうですな」

「開き直った!？」

先程から話しているのは、執事長を勤めていらつしやる落ち着いた雰囲気をもとわせた老年の方だ。

見た目とは裏腹なお茶目な面が先ほどの会話からもわかるだろう。

適当な話を少しして「コホン」とひとつ咳払いした執事長は真面目な雰囲気をもとつて

「では、形式的ではありますが、試験を始めましょうか。」

「…まさか一人だけの試験になるとは。」

試験は常識と政界事情の知識をはかる筆記試験と要求される家事や接待の仕方がキチンとしているかの実技試験。最後に面談だ。

筆記試験は勉強したから大丈夫として、問題は次なんだよな。家事はまだいいとし

て、接待に少し不安がある。

貴族と違って要人やお偉いさんと頻繁に会う訳じゃないから、練習法がかなり特殊だったのよね。

まずは母さんに貴族の役やらせたんだが…。

「シユウちゃん肩揉んでー♪」

「シユウちゃんの料理おいしそー♪」

「ありがとねシユウちゃん♪」

うん。ただの母さんだった。貴族とか向いてなかったみたい。

という訳でジブリアルに頼んでみたところ、

「図書館を利用してあげてるのですから、それくらいの奉仕は寧ろ当然かと。」

と、(図書館使わせてんだからそのくらい奉仕して同然だろアアン!?)という本音の一言で始まり、

「なぜだかあなたがやると下心というか、本心が透けて見えるので気色わるうございませす。」

「人類種イマニテはこんなものを消化しないといけないのですか。哀れなモノですね。」

「え、これを食べるというのでございませるか!? 猿の餌をどうしてっ!」

「うう。口の中がねばついて気持ち悪いです。租借など面倒の極みですね」

「奉仕というのなら、あの17m上空の本を7冊取っていただけませんか？」

とまあ、言いたい放題やりたい放題。貴族は貴族でも悪いほうの貴族ですね。心滅多打ちにされたけど、ほんと役としてやっててよかったわ。こんな生活一週間も持たねえよ。

と、不安に駆られながら実技の試験が始まると目の前にドサツと書類と羽ペン置かれた。

「この書類を整理して資料室のほうへ持ってってください。ああ、それと、洗濯係の手が足りないそうなのでそれが終わり次第向かってください。では90分後に」

キイイ……………バタン。

普通に仕事任されたあああああ!!?

とまあなんやかんやで90分おそらくジャストに来た執事長に仕事の報告をして面

談に入ることになった。

「では面談を始めますが、…単刀直入に聞きましょう。どうしてこの状態のエルキア王城に、今就職なさるのですか？あなたの家系まで非難の対象になりかねませんよ。」

「ええ、それは重々承知しております。ですが、これは私の意志での行動にございます故、両親にも形だけではありませんが承認は得ております。」

「ふむ、そうですか。ならよいのですが…。」

「どうかありませんでしたか？」

「いえね、こういう王族に仕える仕事を人材不足という名目で雇ってよいのかどうか。少々疑問に思いましたな。」

「…確かに、誇りを持つあなた方にとっては、非常に遺憾なことでしょう。」

「いえいえそんなつもりは…。」

「ならば、私はこのクーデター中、もしくは人材不足の今だけの埋め合わせということで雇ってもらっても構いません。」

人員が元通りになってわたしのことが邪魔になったら即解雇してください。」

「…あなたを道具のように使い倒した挙句、必要なくなったら捨ててもよいと？」

「ま、容赦なく言えばそうですね。」

「我々の仕事をそのような覚悟の人間に任せるつもりはありませんよ。」

「いえ、別の覚悟ならもう決めております。解雇された後で、もう一度正式に就職しに来ますから。」

「…今この試験が正式でない？」

「そうならよいのですが、このような非常時で、互いにぬぐえない思惑がありながらの試験です。あなただつて、こんな感覚を抱いたまま働かせるのは気が進まないはず。それは私も同様です。」

「だからこそ、今はその気持ちを抑えて、目前の状況を耐え抜き、今度は互いに真剣に向き合つて仕事ができるようにしたいと願っているだけです。」

…はっはっはっ

「あなたがノブレス・オブリージユを語るのは少々おかしなことですね。」

「そうですか？」

「そうですよ。どこの貴族の出でもない。一般人であるあなたがそれを語らうのだから。」

まあ、一般人というより転生者ですが。

「…ではあと一つだけ。もしあなたがこのような状況ではなく、ごく普通の面談の時、君

は何を語ってくれますかな?」

「…誠心誠意、仕事に向きあ…」

「ほっほっ。そんなことでは、次互いに向き合って働くのは難しいでしょうなあ。」

「…。」

「ほれ。恥ずかしがらずに言ってみなされ。我らは人間。そんな飾りの意志では、どこも雇ってはくれませんよ。」

「…え?マジ?本音?!アカン。本音言ったら絶対切れられてバイバイキンだよ!!くっせえセリフ並べたてといて今更ニヤケ顔タラタラな下心しかねえはずかしいこと言わないかんの!?!このジジイに!!」

「…やべえ。一回出直したほうがいいんじゃない?」

「ほほ。心配せずとも秘密は守りますよ。なんなら、盟約で縛ってもらったって構いません。」

「いえ、そこまでしなくても。あなたはそんなことしないでしょう?」

「わかりませんぞ?明日にはもう屋敷中に響き渡っているかも…。」

「物騒なこと言わないでください。」

「ほら、言ったほうがすつきりしますよ?」

嫌だああ!!こんな本音タラタラな職場嫌だよア!!

「我はステファニー・ドーラを救う者也っ!!」

「彼女にかかる理不尽な厄災をハネのけ、彼女の幸せが成就するのを見守る騎士となりて、この身をささげると誓ったっ!! ああそうともそうだろうとも。そんなじよそこらのペーパーの男が彼女を守れると? そんなくっだらな思考はお前の単なるエゴだどっ!! だが吠えよう、エゴだというその批判こそエゴだど!! 何度でも足掻こう、一般のバカ野郎でも自分が守りたいと思える人は守り切つて見せれると!! どんな結末が待つていようとも。それがたとえ、彼女が自分を異性として感じることはなく。別の男が現れ、彼とともに歩もうと彼女が決めることがあつても。私は意識してしまった。決意してしまつたのだ!! そのお方に従事することができると何度となく願ひ、ついに、神の気まぐれでかなえられる舞台に立つた。ならば、もう迷うことはない。私になすことは彼女を幸せにすることなのだどっつっ!!」

.....

「あああああああかつこつつけていったけどやつぱ恥ずかしいわあ!!! こんなんやつぱ

嫌だわあ!!!」

「とうか叶わぬ恋と分かっているのに何でどうでもいいこと口走ってんだあ!!!? 玉の輿? 夢のまた夢だよお!!!」

…
あ—————言っちゃったあ…。

「…」

「なんだよジジイ面食らってんじやねえか。いいよ。さっさと追い出せよ。というか追い出してくださいお願いします布団にくるまって泣いてやるからさあ! (泣)

「ふふ。ほっほっほっ。どうやら、貴方は私と同類のようですね。」

「は!?! もしや貴方もステファニー殿を狙って!?!」

「いえ、そうではなくて。私は国王様のお人柄に尊敬の念を抱き、忠義を尽くそうと決めたのです。まあ、貴族である私がこのようなことを述べても、説得力は無いでしょうが。」

「いえ、今ここに残って忠義を全うしているではありませんか。それが、何よりの根拠になるかと。」

「ほほっ。そういつてもらえると、私も鼻が高いですな。」

「良いでしょう。貴方をこの王城の執事として認めましょう。また、見習いであるあなたですが、今は悠長にはいられません。なので、しっかりと働いてもらいます。よろしいですね？」

「はいっ!! 勿論です!!」

愚王の冠

出会いとは、人と人が接点を持つことである。話すことができることである。電車の中で見かけた人を「出会った」と認識するだろうか。いや、しないだろう。赤の他人だと。無関係の人間だと。無意識に思考から切り落とし、余分な情報を排除する。それが普通だ。

出会いは偶然に起こるものと言われる。が、この原作でも述べられるように、運など存在しない。出会いは必然であり、確定事項なのである。ただそれを、美しく飾っただけの口実は、なるほど、とても気分が高揚し、普段ない判断を可能とし、突き進むことができるだろう。その運命の相手とやらが、この世界の住人でなかったとしても…？

「まずは、国王にご挨拶いたしましょうか。」

「ええ。」

「案内しますからついてくるように。」

「はい。」

さて、ご無沙汰してます。シユウです。やつとのこき執事になることができました。ま、合格はしたんだが、大きな要因は執事長を口説いたってことなのよね。これジブルール要らなかつた説あるかも?…こんなこと言ったら殺されかねんな黙つとこ。

次は国王とのイベントだ。これは重要だぞ。なんてステフのおじ様だからな!なぜか両親の存在は不明だから、お義父さんやお義母さんに会えるかわからんが、国王は確定でステフに係する人物。しかも、原作ではかなりの重要人物にあたいする。これはいかなる方法を使つてでも、好印象与えてやらあ!よおし、また口説き落としてやるよお…へへへ。

…何で男口説いてんだろ。

「着きましたぞ。では、入る前に三点ほど注意を。」

「一つ。国王様の前で失礼な態度は取らないこと。これは基本ですね。」

「二つ。国王様の王政に余計な口出しをしないこと。私めには、国王様のお考えは分からないのが正直なところですが、国のために何かを成そうとしておられるのはわかります。どうか、信用なさってください。」

「三つ。国王様は今横になってお休みになっております。といつても、就寝なさつてるわけではないのですが。王政とクーデターにより多忙を極めているが故。少々お疲れ気味なので気を付けるように。」

「承知しました。」

コンコン

「国王様、執事長にございます。」

「…よいぞ。」

「失礼します。」

ほう、アニメで少しだけ描写されてたが、まんまランプカードのキングやな。風貌も雰囲気も王様つて感じだ。これなら執事長が惚れるのも分からんでもないな。

「彼は何者かな?」

「は。私は本日より執事として従事させて頂くシユウと申します。これから、よろしくお願ひ致します。」

「そして、ステファニーお嬢様の貞操を狙う不埒な輩やからで御座いますが、どうかご容赦願ひます。」

「ちよ!!目が光ってらっしやる!!アカン盟約通り越して殺されるう!!というか執ジジイ長てめえ少し黙ってろよ!!誰がスピリタス注げって頼んだよ!!」

「だから先ほど盟約で縛って置けといったではないですか。」

「まさか王様の前で暴露するとは思わなかったわ!!しかも内容ぶつ飛ばしすぎだろうが俺ただの変態糞野郎になるだろうが!!」

「はて?そう宣言してませんでした?」

「してねえわ!!?そんな残念頭に問題です!先ほどあなたがおっしやった三つの注意点を守れていない人物がいますさあ誰か自白しろやあ!!」

「王様でしょうか」

「そりや王様自身は聞いてもいないし聞いててもできねえだろうがそんな頓智めいた答え期待してねえよ!正解はあんただよオ!!とんでもない爆弾落としやがってえ!!」

「ありがたき幸せ。」

「ほめてねえよ!!?てんめ王様に頼んで貴様の尻の穴開発させて新たな扉開かせてあげましょうかオウコリア!!」

「望むところですが?」

「いいのかよ!!?もうヤダこのゲイ執ジジイ長オオ!!」

「……って、王様は?!」

「……」グツタリ

「気絶してらっしやるう!!?」

「本当につ！本当に申し訳ありませんでしたあ!!」

「まあ、反省しているならよい。」

「ありがたきお言葉です！」

「して、先程の事はどこまでが真実かな？」ゴゴゴ

「すべてあの執事長の狂言にございます。」

「本当かね？」

「盟約で嘘を縛られても同じことを話すでしょう。」

「そうか。」

「まあ、あの執事長はこの盟約を受け入れずに出ていったのが何よりの証拠かと。」
「そのとおりじゃな。全く、あやつめ……。」

本当にな。いくらお茶目な面があるとはいえ、あれはやり過ぎだろう。ステフのことを気にかけていると言っただけでここまで飛躍した解釈を御披露目するとは、いつぞ清々しかつたな。許しませんが。

「して、シユウよ。なぜこの愚王のもとに來たのだ？」

「は。私はこれから起こる厄災による被害を出来るだけ抑えるよう尽力する次第にございます。」

「それは、この愚王による王政を止めるということか？」

「いえ。そのつもりはございません。」

「ならばそなたの心意気もここまでのようだな。悪いことは言わん。ここからさるのじゃ。」

「なぜ王様は愚王と自身を罵るのでしようか？」

「この結果がすべてを物語っておる。今ここで働いている従者は、わしを盲信した者しかおらん。わしはそのものに哀れな慈悲と結果しか渡せておらぬ。」

「それでいいではないですか。」

「何故じゃ？」

「何故なら王様やっていることは正しい事だからです。従者のかたも、盲信などではない、ハッキリとした王様への信用があるからこそ、今も支えとなることに何の疑いもなく従事しているのですよ。」

「じゃがわしは裏切るばかりでなにも……。」

「ええ。今の王様では、このゲームは勝てないでしょう。」

「……っ!?!」

「しかし、王様はもう勝利への道が見えておられるはず。それをあとは行使するのみです。」

「シユウ。お主、どこまで知っておる!?!」

「何も。ただこうあつたらよいなという予想から述べているだけです。もしそうだったとしても、私にその役目は果たさせません。私はただの執事ですから。」

「……そうじゃな。」

「ご期待に添えぬこと、誠に申し訳ありません。」

「いやよいのだ。理解者がいるだけで、わしは幸せ者じゃな。」

「ありがたきお言葉。」

「……ときにシユウよ。我が孫を、ステファニーをお主に託してもよいか?」

「……申し訳ありません。私は彼女に振りかかる厄災を、振り払うことを心に誓った身。」

幸せを届ける程には至れません。その願いは聞き届けかねます。」

「… どうか。」

「その役は是非、あなたが思い描いた“Player”に託してみては？」

「いるとも知れぬ“Player”にか？それはもはや、我が孫が結婚できるかどうかを賭けるような行為じゃな。」

「いえ、勝ちますよ。その賭けは。」

「その根拠は？」

「このゲームを作り出したカミサマがゲームオーバーなど認めないということです。」

「？それがなぜ根拠なのじゃ？」

「失礼ですが。それは自ら答えをお出しくください。それがわかれば、あなたは立派なゲームです。」

「そうか、ならその問題、わしなりに考えてみるとしよう。」

「そのほうがよろしいかと。」

「さて、そろそろ失礼させていただきます。」

「そうじゃな。ほかの者にもよろしく頼む。」

「は。それでは…」ガチャ

「そうじゃ。最後に一つだけ。」

「？」

「幸せを届けるものと不幸を払いのけるもの。どう違うんじやろうなあ？」

「…。」

ボタン…

「お待たせしました。執事長。」

「お楽しみでしたかな？」

「いえ、まったく。」

「そうですか…。」

「……………」

「本当はどこまで知っておられるのです？」

「内緒にさせていただきます。といっても、大したものではないですがね。」

「左様ですか。」

「唯一神の築きし盤上^{ゲーム}が壊れる時、Playerの出現をもたらす……」

あの男が言った意味深な言葉は、何を意味しておるのだろうか。それが、わしのゲームクリアにつながるとも……

『このゲームを作り出したカミサマがゲームオーバーなど認めないということです。』

もしこの言葉通りなら、Game Masterである唯一神はゲームの何らかの“詰み”を認めないと言っているということだ。もしや、唯一神とゲームするときに必要なもの……もしや……

ポウ……と現れた種の駒「チェスの駒」キング「」を見て、思いを巡らせ……

はは、ハハハハハっ!!!

「シュウよ。わしは成れたぞ。三流ではあるが、立派なゲーマーに…っ!!!」
そう高らかに笑った国王の頬に一筋の光が垂れた。

「ありがとう…。」

攻略できない女の子ほど、ヒロイン足り得る

ステファニー・ドローラ

バスト

ウェスト

ヒツソ

B 89 W 58 H 89と、魅力53万の体を持つ18歳性別女、種族人類種。ゲイ

マーレベルは普通の人類種と比べて割と高い。ぶっ壊れたときは『くうはく』の片翼、空と戦する実力(?)を披露した。普段は空白に多民族連邦の政治的舵取りを一任され、その他空白の要求に日夜睡眠時間を割く。空に盟約で惚れさせられたこともあり、空には好意的態度を示すことが多い。理不尽な扱いをされると盟約をなげうってでも殴ろうと願うシーンもある。だが、辱めを受けることに、心の底では嬉しがってる面もあるとかないか。基本的にやさしい性格で家庭的な面もある。料理やお菓子作りが得意。

「では、あなたの毒牙の対象であるステファニーお嬢様に挨拶しておきましょうか。」

「……はい！」

や、やつとだな!! 執事長の冗談なんて全く気にならないな! ここはもう適当に流してステフとの会話を脳内シミュレーションしておこう。

ああ、どんな挨拶がいいかなあ。固く苦しく誠実さをアピールしておこうか。それ

とも、フランクな方がいいかな？ 同い年なんだからもっと気軽に話しかけて距離を縮めようか。挨拶後の軽い会話も大事だよね！ 何の話しようか。賢さアピールで政治のお話しする？ あー暗い話になりそうだな止めとこ。やはり料理のはなし？ いや、これはもっと後に披露して…。

「おや？ 毒牙にかける対象と肯定しましたな？ すぐに国王様に報告しなくては。」
「まったくください適当に流してすみませんでしたあ!!」

もう、いや結構ステフの印象を悪くしそうな情報を暴露している状態で、これ以上の情報を撒き散らすわけにはいかないっ!!

「そう思うのなら、しっかり返事をした方がよろしいですよ。」

「はい…。」

コンコン

「はい。」

「お嬢様。執事長にございます。」

「あら。入ってきてよろしいですよ。」

「では、失礼します。」

ああ。ようやく来てしまったのか。このときが。長年（17年くらい）待ち望んだこの時が。なんと表せばよいのやら。美しい赤髪と吸い込まれるようなアクアマリンの瞳。あ、体のことをこれ以上考えると顔に出そうだからやめておこう。えーっと、部屋の描写でもいれ…

「女性の部屋をまじまじと見るのは失礼に値するかと。」

「おっしやる通りで…。」

釘を刺されてしまった。いや、グツジヨブだ執ジジイ。ただそれをステフに聞こえるように言うのはいかなものかと思うがね？

「は、はあ…。それで執事長。何のご用ですの？」

ほら、ステフ苦笑いしちやってんじゃねえか。執ジジイ長は俺の印象を悪くするのが仕事なのか？

「はい、ご用というのはこちら、新人執事の紹介兼挨拶に参りました。」

「は。ご紹介に預かりました。私、見習い執事のシユウと申します。」

「そしてお嬢様に振りかかる厄災をこの身で払いのける騎士ナイトにございます。」

「へ？」

「あら～おじいちゃん？どうしたのいきなりそんなこと口走りやがって～♪さあ、お部

屋に戻って休憩しましょうね〜♪」

「ほっほ。」休憩 とはまた、楽しみですなあ。」

「いやっただあくおじさまつたら〜♪さっさと逝きやがりましょうか〜♪」

キイイ… パタン

「おい執ジジイ長。テメエ本当に約束守る気無いかアアン!!?」

「だから先程も盟約で縛っておけと言ったではないですか。」

「ようし、今から盟約に誓ってゲームして、その記憶に関することを言えないようにするから手を出せじゃんけんだ。」

「ほっほ。それは勘弁願いますな。」ダッ

「あつ。逃げんなつ… ちつ、あのクソ執ジジイ長めえ…。」

「あのー…?」

「は。すみません。先ほどはお見苦しいものをお見せしました。申し訳ございません。」

キイイ… パタン

「え、ええ。大丈夫ですわよ。」

あく。しつかり印象悪くなってるな。全く、この事に関しては本当に仕事を全うするよな。給料でも出てんのか?

「ところできつきの騎士ナイトというのは… その、本当ですか?」

「いえ。先程のは執事長の妄言にございますれば、お気になさることはないかと。加えて、確認として、私はただの執事にございますので。」

「そう……なんですのね。」

「私も貴方を守る騎士ナイトになれば、それは歓喜の極致にございますが、今は盟約という屈強な騎士ナイトがついていきますので、私では力不足になるだけです。」

「それには少し同意しますわ。」

「……ところであなたはどこの家系の出ですか？」

「……申し訳ありませんが、私は貴族の出ではありません。」

「な……。まさかあなた、この混乱に乗じて!!?」

「まあ、結果的にはそうになりましたが、それが目的なら執事長が私を受け入れはしないでしよう。」

「た、確かにそうですわね。」

「ですが、執事長同様、お嬢様も疑念を持つのは自然なことでしょう。なので、一つだけ。」

「私はお嬢様か思っておられるような人物かもしれません。」

「しかし、その判断はもう少しだけ後にお願ひできますでしょうか。」

「これからの私の行動を経て、そのように思われるなら、どのような処罰もお受けしま

しよう。」

「なのでどうか、もうしばらくだけ、この執事をここにいさせてもらえないでしょうか……。」

「……わかりましたわ。」

「有り難きお言葉。」

「……ここだっ！ シュウの とっておき！」

「それでは先程のお話を聞き入れていただけたお礼と感謝の気持ちを込めてこちらを……。」

「……？これはなんですか？」

「まあ、なんと申しましょうか。それは開けてみてからのお楽しみということ。」「怪しいですね。」

「盟約により害意ある行為はできませんので、渡すことができた時点で安全は保証されているかと。」

「そ、それもそうですわね。」

「では、これにて失礼させていただきます。」

キイイ…パタン

「おや？ 以外とお早いお帰りでしたね。ソコまで早漏でしたかな？」

「早すぎますし何より初対面でそのような間柄になれるわけないでしょう。」

「いえ？ あなたならヤリかねないとこの執事長、心配で心配で…。」

「執事長とは数時間しか共に過ごしていないとはいえ、そこまで信用ないのですかねえ…。」

「それはあなたも同じでしょう？」

「そのようですねっ！」

ステフ視点

「一体何だったんですの？」

まるで嵐のように去っていった二人を思つて首をかしげる。

（その一人、見習い執事とかいう「シユウ」は、おそらくこの混乱に乗じてこの王城に仕え、多額の給料を狙う。いわば甘い汁をすすりに来た人とはかり思つていましたけど…あの執事長との会話は、どこか打ち解けている雰囲気がありましたわ。おじいさまにはもう会われているでしょうから、大丈夫だとは思うんですけど。）

と、疑念をぐるぐると頭の中で巡らせながら、手に持つている小包を見つめる。

「これを開けてみれば何か分かるかもしれないわね。」

さすがに先ほどの会話だけで決めつけるのはよくないと思い、あの男が渡してきた小包を恐る恐る開けてみた。

それは…

「パン…：… ですか？」

（パン…：… のようではありますが、違う。普通のパンは丸い形をした簡単なものですが、真ん中に丸い穴のあいていて、上の部分が赤に近い桃色の個体がまとつてますの…：…）

ステフはそれを取り出して全体を眺めるようにみて、鼻に近づけてにおいをかいでみる。

「甘い匂い……」

その臭いに脳が反応し、顎の奥から唾液が分泌され、食欲がわく。

甘いものに興味のあるステフはこの感覚に幸せを感じ、それを凝視する。

「……これは、食べても大丈夫なん……ですよね？」

周りに誰もいないのに同意を求めてキョロキョロ見回して、そろそろと口に近づけ、まるでネズミがかかるようにほんの少しだけ口にいった。

（……!!）

ゆっくり、ゆっくりと嘔みしめ……それが安全なものだとわかった瞬間、次々と口に運んですぐにそれは手から消えてしまった。

「ほう……」

と、幸せのため息をつく。大量の砂糖を摂取したことによって肌が少しゾワツとした感覚あったが、そんなの気にならないほどの多幸福感に浸っていた。

そして一言。

「おいしいですわあゝ♥?」

「… ああ、よかったあゝ。」

「何をお渡しになったので?」

「ちよつとしたお菓子おぼぶっ!」バタン!!

「え? あ、執事長!? あ、あの見習い執事の… シュウはどこにいるんですの!?!」

「あ、シュウ殿でしたらあちらで横になっておられますよ。」

「へ? 横に… つて!?! シュウウウウウウウウ!!?!」

「超… エキサイ… テイン」ガクッ

「ごごご、ごめんなさい! まさか部屋の前で立ち話していたなんて気づかなくて…」

「ほっほ。確かに害意の無い行為は本当にキャンセルされないのですな」

「し、執事長！ 追い討ちをかけな… って、何でさっきの会話聴いてるんですの!？」

「いえ、よいのですお嬢様。全ては外開きの扉が悪いのでございま… す…。」

「ほ、本当に大丈夫ですか？」

「ええ。軽く（意識が）とんだだけです…。」

「それで… まあ、予想はつきませんが何用で？」

「そ、そうですわ!! あのお菓子は何なんですの!？」

「ああ、あれはドーナツと呼ばれるお菓子になります。」

「ど、どーなつ… ですか？」

「そうでございます。まあ、母から教わったものなので、受け売りではありませんが。」

「そうなんですの？ そ、それはいいとして私に作り方を教えて欲しいですわ!」

「ええ。お嬢様の望みとならば。」

「ただ、材料に持ち合わせがありませんので、形だけのものになりそうですが。」

「いいですわ! さ、台所へ行きましょう!」

「は。承知しました。」

「… ほう。なかなかやりますなシウウ殿。甘味でお嬢様とお近づきになるとは。」

「執事長がついてすると会話面で厄介なことになりそうなので、お仕事に戻られてはい

かがでしようか?」

「いえいえ、お嬢様がこの色魔に教われないよう見張るといふ仕事はまだ残っておりますので。」

「口が上手ですわねっ!!」

「光栄の至り。」

少女料理中…

「か、完成ですわ!!」

「さすがお嬢様。」

「早速味見ですわね!」パクツ

「… あなたのドーナツと比べると、あまり美味しくないですわね…。」

「申し訳ありません。基本的材料は揃っていたのですが、甘味が物足りなかったのが痛いところでした。」

「そうですね…。でも、ここ(王城)にもあんなに甘いものは無いですわ。何でした

の?。」

「あれはチーゴの実を基本とした材料で作っております。」

「え!?!でもそれってエルヴンガルド周辺にしか実ってないはずですわ!。」

「よくご存じで。まあ、たまたま商店に並んでたのを見つけて、実験がてら作ったものに
ごいします。」

「わ、私は実験台にされたんですの!?!」

「まさか。私もキチンと味見しましたよ。人に与える食べ物を味見しないはずがないで
しょう?。」

「そ、それもそうですわね。」

「ま、それをしない人もいるとかいないとか…。」

「た、大変ですわね。」

「…とところで、なぜいきなりドーナツを作りたいと?。」

「…今の情勢をご存知でしょうか?おじいさまは愚王とののしられ、クーデターが起き、
仲がいいと思っていた人もここから離れていきましたわ。」

「いろんな人が離れて行って、挙句の果てに非難する側に回って…わかつてはいるんで

すの。こうなるのが当然だって。」

「でも、苦しくって悔しくって。そんな気持ちでいっぱいでしたの。」

「そんな時に食べたあなたのドーナツは、そんなつらさを打ち消すような、励ましてくれ
るような優しい気持ちで伝わったような気がしたんですの。スツと心が軽くなつて：
軽く舞い上がっていたのかもかもしれませんわね。」

「…わたくしめには、その気持ちを完全に理解することはかないません。が、この料理の
間、あなたが笑っておられるのを見て安心しました。少しの間だけでも、あなたを幸せ
にできたのなら幸いです。」

「…ありがとうございます m

「このごましめ g

「お、お嬢様！国王様がお倒れになりましたっ!!」

「「え!!」」

プロローグは語り疲れる

「お、おじいさまあ!!」

「おお、ステファニーよ。来てくれたか。」

「もちろんですわ!それより大丈夫なんですの!?!」

「大丈夫: : : か、それはおじいちゃんにもわからないのう。」

「そんな: : : 。」

「ステファニーよ良く聴いておくれ。」

「グスツ: : : なんですか?」

「お前が小さい頃に渡したものの約束を覚えておるか?」

「も、もちろんですわ。」

「そうか。それならよい。」

「: : : グスツ」

「おお。そんなに泣かないでおくれ我が孫よ。」

「私は笑顔でいるお前が好きなんじゃよ。」

「そんなこと: : : 今言われてもできませんわ: : : 。」

「な、なんだと。全身からあふれる黄金の気。まさか、国王が伝説の人類種イマニテイだったというのか!？」

「我が孫を軽々と犯そうとする奴は許さぬぞお!!」

「いえ。王様がいつまでもシリアスしていたので助け船を出したまでにございます。」「へ?」

「先ほどから我ら執事とメイドは、あなたがたの喜劇に笑いをこらえているんですよ?」「執事長に至りましては先ほどから口を押さえっぱなしですし。」

「そ、そんなことはな…ブフォツ!」

「で、でもおじいさまが…」オロオロ

「ええ。倒れなさっただけで、死の淵にはいないのではないかと。」

「…。」

「あとついでに申しますと、お嬢様だけを驚かせようと王様が皆と結託しているようですね。人の良心を利用した全く非道なものです。」

「ひ、ひどいですわあ!!私だけ仲間はずれなんて嫌ですわあ!おじいさまなんて嫌いですわもう知らないですわああん!!」ダッ

「な!!?す、ステファニーよ我が孫よお…。」

おお…… おお……

哀れなり王様よ。そなたがいけないのです。というか王様の構って攻撃なんざうすら寒いからさっさと終わらせたかったです。決して、ステファニー教第三章二項の教え『お嬢様を陥れて楽しもうとする輩には天罰を』に準じた行為として王様をいじめたわけではないよ？ ホントだよ。

というか……

「その、申し訳ありませんが王様。先程私も周りを見て演技だと分かりましたが、もし皆様がポーカーフェイスの達人で、お嬢様にかけてあの言葉だけでお亡くなりになっていたら、私は例え殴つてでも起こしてましたよ？」

「全くその通りじゃな。まだ、布石を打ちきつておらぬからのう。」

そう、まだこの王様にはやってもらわなければならないことがあるしな。この盤上の世界の本当の主人公を招き入れることになる、もっとも重要な遺言を。

「じゃが、わしが死の淵の近くにおるのは事実じゃ。最後くらい我が儘してもよかつたんじゃないかのう？」

「……それはおいておいて、どうです？ 王様。そろそろ打っておかないと不味いのでは？」

「そうじゃな。執事長手を貸してくれ。」

「承知しました。」

のっそりとベッドから立ち上がり王様は複数の従者たちにまるで着せ替え人形のようになりにを整えられ、おもむろにペランダへと歩み出た。

「おい！愚王の野郎がでやがったぞ!!」

その一言でクーデターどもは、我先にと罵詈雑言をしたためる。「愚王辞めろ」と大きく書かれた横断幕を掲げるものもあれば、盟約なんぞ無視して、懐から石や包丁を取り出し投げつけようとして動けなくなったものもいた。

そんな自身に対してあからさまな嫌悪を向ける民衆に、なんの動揺も示さぬまま、王は片手をあげ、静寂を待った。

何分何十分経つただろうか。やっと訪れた静寂の前に、王は言葉をたらず。

「ありがとう。皆の衆。そして、すまなかつた。」

「私の悪あがきは結局、皆の不利益を与える形で終わってしまったようじゃ。情けない」とこの上ない。」

「その罰が下ったのかもしれない。わしは先程倒れてしまった。」

「生命の危機に瀕した訳ではないが、わしの命はもう長くは持たんだろう。」

「そこで、次の国王の選定をすることにした。」

「しかし、今回の国王候補は国民全員とする。」

静まり返っていた民衆に衝撃が走る。が、詳細がわからず困惑するだけにとどまり、国王の次の言葉を要求するようにじっと視線を集める。

「…その選定方法はゲームを勝ち抜くことである。」

「わしのように王族の家系により王に認められこの国を支えようと思ったが、どうやらわしが愚かすぎたようだ。もう取り返しがつかぬ。」

「そこで、わしの悪足掻きの考えで思い望んだのがもつともゲームを勝ち抜く素質のあるものがこの世界でこの国を任せられるものと思う。」

「よって、わしが死亡し次第、次期国王決定戦を開催することをここに示す。」

「ルールは簡単。盟約に誓って国王の資格を守り抜くことが勝利条件であり、資格の譲渡、奪取はできない。1度でも負ければ資格は消失し、ゲーム失格となる。最後まで勝ち残り、王城で開催する最終戦に勝利したものが国王となる。」

ポカンと口を開け、人々は今から起き得る戦争を頭によぎらせシミュレーションしていく。自分でも王になれるのか？身分が問われていないということは、そうなのではないのかと。

そんな民衆を見かね、一言。

「以上だが…… おや？まだおつたのか。ゲームの練習を今のうちにしとかんと、隣の者に負けてしまうぞ？」

その挑発ともとれる発言で、民衆は目の色を変えて蜘蛛の子が散るように王城から去っていった。

最後の一人が消えていったのを見届け、夕日を眺めて告げる。

「これでよいかの？シユウよ。」

「ええ。後はお任せを。」

全く持つて完璧である。あとは、彼らが来るのを待つだけだ。

「え!? シ、シユウ。何が起こっているのかわかるんですの!？」

勿論。そしてこの先何が起こるのか。貴女にどんな厄災が起こるのかを。

ですがご安心くださいませ。貴女に降りかかる厄災は私が振り払ってみせましょう。

今は、心のなかでしか言えませんが、今はどうかこの言葉でお許しくくださいませ。

「…… ええ。これが、王様の最後の仕事にして、最初の勝利への方程式が完成した瞬間ですから。」

???
視点

「…… やつと、あなたの愛が試される時が来ましたね。」

羽ペンを動かし今までの記録をとっていた指を休めずにそう呟き、安堵の表情を示す
オールドデウス
神霊種は、これからもっと書くことが増えそうになるのを楽しみになって、満面の笑みを浮かべる。

「やあやあ！記録楽しくやってる？… ってうわ!?何冊あるの記録冊子!？」

「ざつと200冊でしょうか？」

「うっわー。君どれだけその子にご執心なのさ…。」

「さあ？ただ今はこれしかやれることがないのもので。」

「そうなの？もつとやれることあったと思うけどねえ…。」

「ところで、私になにかご用ですか？」

「ご用も何も、君なら僕がここに来た理由わかるでしょ?」

「お話でしたらいつでもよろしいですよ?」

「とぼけちゃって。ま、ヒントとしたら、ちよつとした愚痴を聴いてほしいな〜と思つたつてことかな?」

「私が以前述べた好敵手転生の事ですか?」

「そおそれ、もう人類種イマニティ、完全に詰む一手打つちやったよ。これはもう僕が何とかゲームを終わらせないようにしないと不味くなる。」

「では、何とかしてみては?」

「だ、か、ら。遊戯の神である僕が、君に踊らされてるようで、なんか気に入らないんだよね。」

「あら。おだてても何も出ませんよ。」

「くつそー。君がゲーマーだったら、僕ももつと楽しめたかもしれないのになー。」

「ふふ。それはいつか別の機会にしましょう。」

「言つたね!?!言質取つたからね!?!僕はもう行くけど、絶対に忘れちゃだめだからね!?!君をこてんぱんに負かしてやるからね!?!」

そう目を輝かせて、異世界にでもとんだのだろう虚空の亀裂を眺めながら。神霊種オールドデウスはひとつ延びをして。

「さて、ようやく本番です。彼共々、頑張シユウつていきますので、見ていてくださいいね？」
「それでは、『ノーステフ・ノーライフ』ご開帳ー……」

「ですわ♥？」

1 卷

『(くうはく)の襲来』

ご無沙汰しております。シユウです。

国王が亡くなって国王選定戦が始まってから、約一ヶ月が経った今日この頃、18年ここで生きててエルキアが一番の盛り上がりをいまだに見せております。ま、当国比です。

酒場へ行けばトランプと吐瀉物で床が汚れ、商店街では選定戦の盟約に加えてここぞとばかりに売人と客で、はたまた業者どうしで商品や値段交渉吹っ掛けて経済を回し、学校へ行けばテストで〇〇点取らないと権利を奪われるというゲームが一時期流行して、世紀末状態になるなど、今までのエルキアでも類を見ない混沌カオスっぷりを発揮しております。

かくいう我々執事やメイドはあまりそのような野心はなく、穏やかに休息をとれると思いきや、国王が修めていた時代より混沌カオスと化したエルキア情勢によって発生した仕事に忙殺される日々が続きました。

あ、執事長は例外でしたね。

『国王様のため、何としてでも王になって見せますぞお!!』

と、野心と権欲にまみれた心にスパイス程度の忠誠心を胸に、なぜか甲冑騎士の姿で町に特攻していった執事長は、翌日身ぐるみはがされた状態で王城前に倒れていた。一番始めに見つけた私は見て見ぬふりをしたかったのですが、二番手ステフの発見により粗大ごみ回収を命じられたので、仕方なく回収にいくと、(燃えるごみでもいいよな?)と、思つて風呂焚き用薪がわりにしようとしたのはいい思い出。(盟約により執事長はご存命ですよ?)

ところで私は何をやっているのかというと……。

「2ペア、ですわ!」

「1ペア、くつ。負けました。」

「やりましたわあ!!」

ステフとポーカーの練習をしています。

「シュウ! わたくし、やっと勝てるようになってきましたわ!」

「それはおめでとうございます。これもお嬢様の頑張りの賜物でしょう。」

「ですわよね! さあ、もう一戦勝負ですわ!」

「喜んで。」

結果

「1ペア…ですわ。」

「なんと、ノーペアにございます…。」

「また勝ちましたわあ!!」

そういつて満面の笑みを浮かべるステフを見て、可愛いと思うのは私だけだろうか？いや、恐らく画面の前の紳士もきつと同意してくれるはずだ。

「どうしたんですの？ほら、もう一回！もう一回ですわー」バンバン

(可愛い)

おっといけない。愛玩動物を愛でる目で見てしまった。衝動に負けて頭撫でたくなってしまったが、良く堪えた私の理性！

じゃなくて、何故ポーカーをやっているのかという回想が必要ですね。それは数十分前の出来事になります。

はい。過去のシユウです。

いま、仕事に忙殺されかけています。頭おかしくなる量ですおかしくなってます助けて。

「シユウウ? いるんですの?」コンコン

あ、女神が来てくれたこれで勝つる。

「はい。ここに。」

「失礼しますわ。そして、ポーカーで勝負ですわよ!!」

・・・
は?

「いま近くの酒場でポーカーというゲームが主流の選定戦ゲームとして行われていますわー!」

「はあ、それで?」

「そこには今無敗の強敵がいるという噂ですの。それさえ倒してしまえば私が王になることは確実ですわー!」

「た、確かに理屈としては理にかなってますがどうしてお嬢様が?」

「どうしてって・・・ どういうことですか・・・。」

あ、地雷踏んじやったつばい。

「皆、みんな頑張ってますのに、私たちは忙しくなるばかり。かといって変なのが王になれば、私たちはもつと酷使されたり、用済みとして追い出されるかもしれないじゃないですか!」

「そんなの絶対に許しませんわ! だから・・・」

ああ、やはりステフはステフなんだな……。こういふとき自分でもやれそうなことをすぐやろうとするその純粋な優しさに私は……

「……どうしたんですの？」

「いえ。愚問でしたね。ならば私は、お嬢様の寛大なる心の船に同乗して、共に歩むことにしましょう。」

「え、えーと……つまり？」

「ポーカーをするのです。お嬢様。」

はい。回想終わり。その後カードを切つて渡したときに、「ぼーかーのルールってなんですの？」と真顔で聞かれたときの、私の驚きは皆さんもわかるかと思えます。取り敢えず役を教えて実際にやってみよう。というのがいまの状況。では何回目かわからない勝負結果どうぞ。

「3カードですわ！」

「1ペア……お見事でございます。」

「シユウってポーカー弱いんですの？」

「いえ？お嬢様の実力がついてる証拠かと。」

「そうなんですの!?!じゃあもつとやるべきですわもう一回ですわ!」

そういうステフにカードをもらって切って渡す。

：．．． ああ、そろそろお気付きになったろうか。先程までの対戦を振り返って、何か思うところがあるだろう。うん。皆まで言うな。ちゃんと自分で言うから。そう．．．

素人同士のポーカー練習なんて何の役にも立たねえよくそがああ!!!

ついでに言う強いポーカーの役なんて一度も成立してねえよお!!!

うまいこといつてる場合じゃねえよおあああ!!!?

うん。ごめんなさい。聴いてくれてありがたや。

そう、わたくしシユウは今のステフぐらい弱いのです。

あ、最初辺りは私が勝ってたよ?でもあれかな?実力の拮抗っていうの?結果が半々に収束してるっていうね。ステフは実力だ何だと言ってるけど、ただの慣れだからね?一般人とはいい勝負するんじゃないかな?馬鹿正直者同士なら?

これじゃあクラミーには勝てんだろうなーと思いつながら、札をオープン。

「2ペアですわ!」

「フルハウスですね。運が良かったです。」

「ぐぬぬ。も、もう一回ですわ！」

「ええ。もちろんで…す…。」

「ど、どうしたんですの？」

ああ、盤上の世界に光が満ちる。

と、かっこつけて言っておこう。まあ、なんだ。私はただここでステフとポーカーを
していたわけではない。

仕事もポーカーもずっと窓の方を向いてやっていたのだ。お陰でステフに後光が
かかってずっと半催眠状態だったけど。

ステフがポーカーの練習を誘ってきたのは少々想定外だった。これを確認してから、
誘おうと思っていたのだが。

ま、練習とかこっつけて時間稼ぎができたのは幸いだったか…。予想以上に弱かった
ことは意外だったが（互いに）。

と、言うわけで待ちに待ったこのときがやって来た。

「そ、そんなに見つめられると…。ちよつと照れますわ…。」

空に三つの流星が舞い降りる。

二つはこの国を救う希望の光

一つは希望を導く神の威光

ああ、やつとこのときが来た。美しい流星を眺めてつい一言。

「綺麗な…」

「へあ!?!」

「空だ…」

「…」

「あ、すみません。お嬢様。あと、10ゲームこなしましたら、その自称最強ポーカー野郎を負かしてさしあげましょう。」

「…」プルプル

「お、お嬢様?」

「フン!!」バァン

「ロ、ロイヤルストレートフラッシュシューウウ!!?」

「も、申し訳ありません。お嬢様。」

「フーン」プイッ

あれから10連続ポーカー勝負したのだが、強い役で庄殺されるという現象が発生。個人的にはこのままクラミーを倒してもらってもいいのだが、正直そうはいってほしくない。

あれだ、原作知識持った転生者って物語通りに進めながら仲良くなるか、物語無視して好き勝手やるかのどっちかだと思うんだが、原作これだぞ？ノゲノラだぞ？空でさえ「一手でも間違ったら詰むんだよ。」的なこと言ってたし？多少の崩壊なんてものともしないだろうけど？ハチャメチャな数式見せられて解けて言われて「これ使ったら簡単にとけるよ！」って聞いたら飛びつくじゃんそれと一緒にだよ。

と、言うわけで原作通りに進めるため宿に向かっている馬車のなかで不貞腐れて強くなってるステフに、弱くなるように一言っておこう。どうせ、綺麗って言葉に過剰反応したんだろうテンプレだかな！というわけで童貞こまし能力執事かぶり発動！

「さ、先程の綺麗というのはお嬢様のアクアマリン色の瞳が青空のように美しかったからで……その……」

「ふ……ふん……」ポツ

ちよろい。あ、なんでこんな大胆なのかって？どうせ、空に惚れさせられるからな！今のうちにいい思いしといていいでしょ!?いまくらいは……さ。あれ？なんか胸がち

クツとするぞ?なんでだろな?

「着きましたね。お嬢様。」

「ええ!さつそくその人をこてんぱんに負かしてあげますわ!!」

「その調子ですお嬢様。では、私はここでお待ちしているので、終わられましたらお声かけを。」

「え?」

「ご武運を。」

「い、一緒に……来てくれないんですの?」

ぐはっ!!その上目づかいは効くうっ!!だけどツ。

「申し訳ありません。二人でいると不正していると疑われる要因になり得ます。ポーカーは一对一の真剣勝負です。どうか自信をお持ちになつてください。」

「: わかりましたわ。」トボトボ

さて、間に合つてよかつた。何故ならもう目の先に

あの二人がいるから。

「そ、そのあなたがポーカー連勝者ですの!？」

「ええ。そうだけど。」

「私と盟約に誓ってポーカーで権利をかけた勝負をお願いしますわ!!」

よかつた。先に始まったようですね。そして、ここからですね。

「なあ、その… 執事さん？宿ってどこかわかるか？泊まれるところならどこでもいいんだが。」

「それでしたら、ここが宿なので宿泊なさるのがよろしいかと。」

「あ、そなの？サンキュー♪行くぞ白。」

「… うん。」

「いやーうまく行けば王城に住めると思ったんだがな〜♪」

「… そんな、ご都合… 存在し、ない…」

「…」

(あれからどれくらい時間が経つただろう。もう、夜が更け始めたな……。星が綺麗だ。)

(……ああ、原作でもこのぐらいの時間になるのかな？じゃあ、始めるか。)

宿前でずっと立っていたシユウは恭しく頭を垂れ、虚空に言葉をこぼしていく。それはステフに当たった謝罪であった。

「お嬢様。私の我が儘で、貴女を厄災に巻き込むことをご容赦ください。」

「貴女の力で王になってもらう道もあった。」

ポーカーで強くなったときのようには。

「貴女の手を引いて、連れ出すこともできた。」

王城の外に連れ出して一緒に暮らすことも。

「私という存在に会わなければ、自分の道をしっかりと歩めたでしょう。」

ドーナツで私との関係を繋ぎなければ……。

「だからこそその、私の我が儘です。」

原作というシナリオに組み込んでしまった我が儘

「貴女を一時でも愛せてよかった。」

もう、私に向ける笑顔など無いだろうから。

「だから、貴女が厄災にあってしまったその時は……

「俺に……

私も共に請け負いますから。」

惚れろっ!!!」

惚れる膨らむ人類種（イマニティ）関係

時を少し遡ることクラミーとのゲーム敗北後。

「あ、あなたイカサマしたんじゃないのですの!？」

「あら？何か証拠でも？」

「ぐ…な、無いですけど…。」

「なら、もういいかしら？私はこれで。」

そういつて去っていく女性に何も言うことができないまま、ステフはそこに佇んでいた。

（負けてしまったんですね…。）

そう、無慈悲なまでに叩きのめされた結果に落胆し、ため息をこぼす。周りの人間が何か噂をたてているがそんなのは今のステフの耳に入っていないかった。

（こ、これじゃあみんなを助けることができせんわ。それに…。）

（あんなに啖呵切っておいてこれなんて、シユウに顔向けできませんわ!）

そう思つて勢良く立ち上がり、宿のオーナーらしき人に向かつて歩く。

「あの二人の部屋はどこですの!？」

「おいおい嬢ちゃん。お客さんのことをペラペラと話しちゃいけないのは知ってるだろ？」

「な、なら今日この宿に泊まりますわ！おいくらですの!?!」

「え!?!あ、そうだな。突然だし銀貨一枚で……」

「ならこれでいいですわね！お釣りはいりませんわ!」

「き、金貨かよ。わ、わかつた落ち着け。ほら、〇〇号室の鍵だ。とつとと行きな。」

「ありがとうございますわ!」

「あんま他の客に迷惑かけんなよ。」

「わかりましたわ……!」

「も、もうこの部屋にあの二人がいるに違いないですわ……」

あれから部屋に泊まるという名目で、あの二人を探してあちこちの部屋を訪問して回ったステフ。訪問したところは人違いがほとんどで、中には変な文字がかかれた袋を頭

に被ったほぼ全裸の人とか、意味不明の言葉を発する宗教団体がいたりしたが、最後に残ったこの部屋がああ二人の部屋だとやっと絞ることができたのであった。

（お、お陰でもうすっかり夜ですわね。まったく最後の部屋まであ二人の部屋に行けないなんて、運が悪すぎますわ。）

（もう、シユウは： 帰りましたわよね。あの女性もきつと：今日はここに泊まってい
くしかありませんわ：）

心でそう呟きながら、部屋の扉をノックした。

「俺に： 惚れろっ!!」

ゲームで負けたステフに対し、ささやかな願いと宣言した男の願いを聞いた。

そう言われたステフの心に、甘く熱い感情が湧いてくる。そんな感情に心を支配されて目の前の男を凝視する。先ほどまで国王を愚王と罵り、不遜にたたずんでいた、いかにも不健康そうな目をした青年が、やけに自分の好みの男性を見ているような感覚に切

り替わった。本能的に求める感覚をさえ芽生えさせていた。

(こゝ、これが惚れるという感情ですの?)

少女から何か言われて、男が少女に土下座をかましていたり言い訳をしている姿を見て、ステフはや彼に対してやきもちを焼いてしまう。自分に構ってくれないのかと、こつちを見てほしいと思つてしまう。

(でも、盟約で乙女心を奪うような真似は許せないですわ!)

と、雀の涙程の反抗心を胸に、空に向かつて歯を立てるが、男に適当に言いくるめられてしまった。その言葉を耳にしてしまうだけで心が揺らぎ、最終的に自分から折れてしまう。

(で、でも、盟約には継続的に惚れる程の効果はないはずですわ!それさえ肝に命じれば...))

「あ、ステファニーって長いからステフって呼んでいいか?」

「いいですわよ♡」

「じゃあ、俺のことは空って呼んでくれ。」

「わかりましたわ♡」

「あ、ステフって王族の家系だよな?」

「はい♡」

「だったら王城って広いよな？」

「ええ♡」

「一緒に住まわせてくれないか？」

「もちろんですわ♡」

（無駄でしたわ…。）

空に要求されたら何でも肯定的に強制的に返事をしてしまう。言葉を聞いているだけでとろけそうな感覚に陥るのに、それが、自分の幸せに直結しているから反抗する気すら湧いてこない。あまりの多幸福感に酔いしれてこんなことを思ってしまった。

（ああ、空が私に幸せを与えてくれる人なのかもしれないね…。）

こんなに素敵な人とならと、言葉を聞いただけで頭がぼわんとするような人と一緒に入れたらという想像をしてついこぼす。

そう、心から心酔しかけたとき、ふと胸に何か引つ掛かった。

（あ、あれ？なんですのこの気持ち…。）

一度抱いた小さく湧いた疑念は、幸せだけで彩られた心にゆがみを生じさせ大きくなり、思考を侵食する。その思いはだんだんと広がり自身の今までの考えさえ混沌に陥れる。

(な、なんですか？このモヤモヤした気持ち。)

この言い様のない気持ちに耐えきれず、助けを求めるような思いで空を見る。

だが感じる。違う、と。今まで私を助けてくれたのは、一緒にいてくれたのは彼ではないと。

(そ、そうですわ。私が一緒にいたかったのは空じゃなくて…)

そう思った思考を止めて、その思考を否定する。

(… 私は、一緒にいたかった人といれなくて、ぼつと出の男と一緒にいたいと思ってしまったんですね…)

暗に、シユウの期待を裏切って自分だけ勝手にいい思いをしようとしていることに気づき、自分を呪った。期待して待っているかもしれない彼の期待を捨てて、惚れさせられた相手と手を取り合おうとしている事実には、それを許容していた自分に無性に腹が立って…あきれて一言、本当に小さく言った。

「最低ですわね。わたくし…。」

そのステフの苦虫を嘔み潰したような表情を、いまもなお白に言い訳をかます空は気づかない。

だが、

（……ステフ……悲しそう……？）

白は見逃さなかった。これから兄を使ってどんなイタズラをしようか考えていた矢先に、目に入ったステフの表情に驚いた。さつきまで空にメロメロだった顔のステフにどんなことをしてやろうか。あまり自分を恋愛対象とみてくれない兄への憂さ晴らしも含めてやろうとしたことが一瞬で吹き飛んでしまった。その理由を考えてみる。

（まさか……にいじや、足りない、ってこと？）

絶対の信頼を置く兄が惚れる相手に相応しくないと判断されたのか？ そう思うと少し腹が立った。王族の出からしたら兄くらいの人間じゃ足りないと思うのだろうか？

（……でも……それだったら、にいの要求……のまない……）

だが、冷静に考えれば先程までのろけた顔してホイホイ返事していた人物が突然そう思うのかという疑問が残る。

色々思案している最中に空が割って言った。

「なあ？ 外で馬車待たせてるんでしょ？ あれに乗って王城に行こうぜ？ こんな埃だらけの部屋だとちと体が心配だしな。早くいきたいよな白？」

「え？う… うん…。」

「あ、でも、でも。もう帰ったかもしれませんわ…。」

「何も言っていないんですよ？ ならいるかもしらんし？ さ、荷物まとめて出発だ!!」
こうして宿をあとにした三人だった。

「… ステフ…？」

「な、なんですか？ 白。」

「… だいじょうぶ…？」

「…。」

「ええ。大丈夫ですわよ。」

「… そう…。」

時をまた遡ること、シユウの謝罪が終わった頃。

頭をゆつくりあげ、空を見上げたシユウの表情は何処か覚悟を決めたような表情をしていた。

「本当に：：これで良かったんだよな：：。」

自分だけが原作を、この物語を知っていて、その世界線の通りに動かすことに、予想できる未来にした、自分の自信の弱さが垣間見えたような気がした。

「良かったんじゃない？：：ププツ：：それで。」

「：：え？」

（な！？さっきの恥っずかしくてくっそクセエ、誰かが聞いたら不審者通報か消臭剤撒くか動画でとって拡散させるような台詞を聞かれただとお！！？）

「だ、誰だ！」

衝撃の事実にも脳内回転が爆走するなか、その声の主の方を見る。

そこにいたのは黒い装束服を身にまとった少女。クラミー・ツエルだった。

(ええええええええ!!?なんでいんのクラミー!!?)

あまりの衝撃に絶句した状態のシユウに、追い討ちをかけるようにクラミーが告げる。

「あ、あんた。一体なんで…プウツ…こんな夜中にあんな告白めいたことを…クハツ…言ってるのよ…アハハ!!」

そう言いながら最終的には本格的に笑い始めたクラミーに、シユウは顔を真っ赤にしてプルプル震えていた。

「あ…貴女…なんでこんなところに…。」

「え?私?夜に散歩に出掛けるのが何か悪いわけ?」

「え?いえ、そうではなくて…。」

「ああ。私がこの宿にいること?そこまで教えてあげる義理はないわ。」

「そもそも私ここから出てつてないでしょ?ずっと表にいた執事さん?」

(た、確かに出ていくとこ見てなかったな。うわー失態だわ。アニメでエルヴンガルドの湖にいるシーンがあつたからつつきりそこにいるとばかり思っていたけど。毎日国外に出ると怪しまれるよな。)

「はあー。でも今日ここに泊まって良かったわ。こんなに笑ったのは久しぶりなもの。」

（こ、この女ア・・・）

「で？さっきのお嬢様にでも告白する練習でもしてたの？でも内容的に謝ってる感じがしたからごめんなさいの練習かしら？」

（くっ。た、耐えるんだ。ここで余計なフラグを立てるわけにはいかない！）

「あなたには関係のないことですが？」

「あら？答える気無し？ふうん。まあいいわ。」

（さ、とつとと散歩にでもエルヴンガルドにでもいつてるよ！）

「でも、あんなやつの執事やつてるのつて大変じゃない？ただの直進バカだったわよ？」

「お？」

「私が他人と勝負してるとこも見ずに勝負を挑んでくるんだもの。これじゃただ負けに来たようなものね。」

「ん？」

「あそこまで表情に出してたら、こうしてくださいってもういつてるようなものよ？笑いこらえるのに大変だったわ。」

「ほー。」

「あんな体してて勿体ないわね。頭に栄養行つてないんじゃない？頭伴つてなけりやただの売女になるわよ？」

ははあくん。もしかしてこいつ、巨乳のステフに男がついている事に嫉妬してんだな
そうかそうか。

ここから言う言葉は私怨では決してない。ステフ教第三章第四項『ステフを影でさえ
傷つける者には天罰を』に乗っ取った行為である。

さあ、天罰を受けるがいい。今回はちよつと陰湿だがな！

「確かにお嬢様はそのようなお方かもしれません。」

「そうでしょ？だから早く帰っちゃえば？」

「それに引き換えあなたは聡明だ。」

「あら？誉めてくださるの？」

「だが胸がない。」

「……え？」

「女性足る象徴的シンボルの胸がない!!あなたは脳があるかもしれないが、そちらにや
り過ぎたようだな!!男性がどちらをとるか選択するなら迷わずあなたではなくお嬢様
だ!!」

「あ、あなた……人が気にしてることをっ!!」

「だが、安心してほしい。」

「貴女は巨乳になる。」

「…へ？」

「断言しましょう。貴女は巨乳になる。」

「な…なんでよ！あなたにはこの胸が見えないの!?!この胸板が!?!夜だから見えないって言うの!?!明るいところに出て見せてあげましょうかこのまな板をお!!！」

「いえ、私はあなたのように胸に夢も希望も詰まってない人をたくさん見てきました。」
「やかましいわよ!！」

「でも彼女らは運命に導かれたように、五年後十年後には必ず巨乳になっていました。」

「そ、そんなの嘘よ!!！」

「ではこちらのメイドの経験談をお聞きください!！」

「では是非。」

「え?どっから出てきたのこのメイド?！」

「馬車の操縦をやってもらっていました。」

「私は20までずっとあなたのようなまな板でした。」

「え!?!本当なの!?!あんた85以上はあるわよ!?!」

「ええ。今は、です。だからあなたの気持ち痛いほどわかります。」

「そ、そうなんだ。」

「私はずっと貴女のように胸が大きくなるようにと夢見て日々を過ごしていました。」

「そうして五年後、やっと胸が大きくなりはじめ、26の今、このように。」

「ほ…… ホントなの？」

「このメイドがやったのは二つ。胸が大きくなると思い描くこと。そして、毎日サイズを測ること!!」

「え!? それだけ!!?」

「そう。イメージは形となり、実現するようになさるべきです! 遺伝子などには負けないのがイメージ!! 胸なんて自分のからだの一部です!! あなた自身が変わればなんでもできるのです。」

「な、なるほど。」

「さあ! いますぐ巨乳の自分を思い描いて、バストサイズを測るのです!!」

「わ、わかったわ!! ありがとう執事とメイドさん!! 本当に今日はいい日だわ!!」

はい、時限式天罰設置完了。一生救われない体に泣いてろ。

「…… ところでメイドさん? 失礼ですがいつ頃から?」

「中学二年の頃からこのサイズです。」

「H A H A H A。」

「なあ。あの執事とメイド、なんで巨乳について熱く語ってんの？」

「……しろも。毎日、測るう……!!」

（もう嫌ですわあ……。）

「シ、シユウ!!あなた何話してるんですの!!?」

「な!?!お嬢様、聞かれてたのですか!?!」

「ああ、あんな大声で捲し立ててたからなあ?白?」

「……しろも、大きく……なる?」

「あ、あれはあの女がお嬢様を馬鹿にしていたから天罰としてついた嘘で……。」
 「ふえ？」

「あ？」

「……そ……そんな……め、メイドさん。う……うそじゃない……よ……ね……？」

「私の胸は中学二年からこうです♪」

「……にい……いい……じんせいだった……よ……」ガクツ

「し、しろおおお!!?だ、大丈夫か!!?目を開けてくれ白オオ!!!」

「シユウ。こ、こんな遅くまで待たせてしまつてごめんなさいですわ。」

「それで、後ろのお二方は？」

「え？あ、あの二人は……その……き、客人ですわ。わ、私の……。」

「そうですか。夜も遅いですが、お嬢様のお望みとあらば今すぐ出発いたしましょう。」

「ええ。お願いしますわ。」

「……シユウは私の本当のわけを話したらどう思うんですの？」

そう、心の奥で嘘をついたことを後悔するステフ。罪悪感で一杯の心は徐々に顔に出てきて……。

「お嬢様？ご気分が優れませんか？」

「いえ、大丈夫ですわ。」

「そうですか。では、ひとつだけお聞きしていただいても宜しいですか？」

「な、なんですか？」

「良く頑張りましたね。お嬢様。私はその事実だけで嬉しゅうございますよ。」

「…!!」

「では、行きましょうか。」

「は、はいですわ!!」

（やっぱり私は…）

「ねえクラミー？昨日測ったばかりなのですから、大きくなっているはずないのですよ。」

「いいえ。フィー。昨日は測るだけじゃ足りなかったの！想像してなかったのがいけなかったの!!」

「そうなのですかー？」

「ええ。そうよ！もつとも大事なことだわ！」

（まあ。私はクラミーのかわいいお胸が見れるだけで満足なんですけどお♪）

そう思いながらメモリの入った紐を巻き付けていく。

「それで！どうなのフィー!?!」

「…… ねえクラミー？昨日の結果は何でしたっけー？」

「え？覚えてないのフィー？」

（覚えてないわけがないのですよ！で、でもこれは……）

「か、確認なのですよ。」

「そ、そうなの？え、えつと、な、70……。」

「クラミー。驚かないで聞いてほしいのですよ。」

「う、うん……。」

「クラミーのお胸、サイズが1cm大きくなってるのですよお!!?」

「え!!? 嘘!!? 本当!!? やったあああああ
!!!!!!」

後日、宿のオーナーは昨日の連続で木霊する大声のクレームをもらったそうなの。

盛り上がっていきましょー！

「ご無沙汰してます。シユウです。」

「ようやく最強ゲーマー『くうはく』の『ご登場により、ステフは無事籠絡され、原作物語本編の口火が切って落とされました。王城にも無事招待され、今では本を読み漁っている最中にございます。」

「やはり『くうはく』と言うべきか。音は同じでも表記は違う言語をさらりと習得している様を見ると驚異的と言う他無いでしょう。私ですら、脳内に残っている日本語と折り合いをつけるのにどれ程時間がかかったことか。」

「なあ、白？なんで漢字的言葉が会話に出てくるのに表記は全部日本語で言う平仮名なんだ？」

「……大人の都合？」

「メタ的なことを言うんじゃないやありません。」

「そこは仕方ないでしょ。一アニメに言語開発までやったら大変なことになるわ。あれでも十分なくらいよ？」

「ああ、そだ。執事さん。この世界の各種族の情勢を知りたいんだが……。」

「は。ではまず獣人種ワイルドから……」

「……じゃ、しろは、これを……」

「位階序列についてですね。簡潔に言えば魔法適正の……」

いやー多いですわー質問が。異世界から来たんだとカミングアウトして読書に耽っていた二人は、うまく理解できないこの世界の常識をガンガン質問してくる。

ジブリールの無理難題に比べたらこんな屁でもないが、いかんせん量が多い。質より量とはこの事。やはりこの二人の状況対応力は、いざとなったら民族的狩りができるほどだからな。素晴らしきゲーマー魂の持ち主たちである。

さて、ここで少し考えてみよう。

なんで俺が二人の質問を聞いているんだと。

なんでヒロインのステフ出さないんですかこの野郎とっ！

「あ、シユウ。お飲み物をお持ちしましたわ。」ガチャ

あ、噂をすればなんとやらですね。

「さ、空と白もどうぞで。」

「お、サンキュ。」

「……ありがと……」

「どういたしましてですわ。」

「わざわざありがとうございます。私の役目なのに……。」

「い、いいんですの！私もあなたにこの二人を任せつきりですし……。」

「いえ、この見習い執事。基本的仕事をおろそかにしているのが恥ずかしゆうござい
ます。」

「そ、その辺はほら、私がフォローを……。」

「いや、ステフのフォローだと、俺たちの質問に対してやけに曖昧に答えるから、本当か
どうかいちいち判断しなきゃならんからな。」

「……情報は、正確な方が、いい……。」

「なっ!?!」

「だから執事のほうがいいと思っただよね。本に載っていないことも良くいつてくれ
るし。わかんないことはハッキリわからんと言ってくれるし。」

「……便利、で、使いやすい……。」

「……っ!!もう知らないですわ!!」 バタン

「あー怒らせちゃったな。後でフォローしとくか?」

「…… そうした方が、いい……。」

「はあ……。」

ん。どうするか。確かにこの二人は速攻で国王になると同時に識者を求めていた節があったけれども、ここで俺かあ。。。

原作ではステフの気持ちを汲んで二人の気持ちに多少なりとも火をつけて、国王になってやる宣言の感動的シーンなんだが。。。ステフがまさかの退場。ここは流れにのって無難に過ぎすかな。。。

「なあ、執事さんさ。なんでここの執事になったの?」

(『なんで王になろうと思ったんだ?』的質問来たあ!!?)

(くっ。。。殺s。。。じゃない!!な、なんとか言い分けを。。。)

「私の奉仕力が皆に認められ、最上の位置に来たと言えば?」

「前半の方はそうかも知らんが、後半は違うな。見習いレベルなら最近ここに仕えたってことだ。つまりこの情勢のなかで、王城に仕えたってことになる。普通なら、こんないつ潰れるか分からんとこに仕えたりしないだろ。」

「人手不足として無理矢理引つ張ってこられた可能性は?」

「可能性としちゃ無くはないが、さっきの理由と、ここで働いている奴等の表情見てた

ら、お前以外余裕があるってことが根拠かな。ま、鎌かけた感はあるけどな。」

「ご明察にございます。」

「おいしい。褒めるより質問に答えてくんねえ？」

「では、あなたが予想する理由は？」

「端的に言うとなスパイ。」

「……なるほど、参りましたね。」

「どう？ 正解？」

「まあ、半分といっておきましようか。」

「ほお？ で、解説は頂けるのかな？」

「ええ。まあ。」

「私は執事採用の試験を受けてこの王城に潜入し、先王の行政を止めることが私の目的でした。」

「ほう……で？ 不正解の半分は？」

「スパイなら、先王亡き今、ここにいる必要はありません。先程申した通り、私の目的でここに来たのです。つまり単独犯ですね。つまり、自分の考えを途中で変えることでもできたのです。」

「ふんふん。それで？」

「私は国王と話をするうちに、国王の本当の思惑に気付き、その壮大な行為に敬意を抱きここに仕えることに決めたのです。」

「ふくん。この次期国王選定戦の?」

「ええ。そしてその先も。」

「なら教えてくれない?今後の行動の参考にするからさ。」

「……不躰ながら申し上げることはできません。」

「え?なんで?」

「先王の思惑を利用できる者は、人類最強のギャンブラーだけであり、そのような人物ならこんなこと言わずともわかるからです。」

「……ほー。つまりなんだ?俺たちを試すってことか?」

「失礼ながら……はい。」

「先王が行った行為の真意を汲み、それを成らせる者しか王になつてはなりません。私と先王は、それを成らせるものが王になるか、滅亡の道に進むかの、大博打のゲームをしているのでございます。」

「……ははっ!楽しそうなゲームしてんじゃん!で?どっちに賭けてんの?」

「もちろん。成せる王が玉座につくほうに。」

「面白いな!俺もそのゲームに混ぜてくれよ。」

「もちろんです。では、どちらにお賭けに？」

「当然。俺たちが玉座に掛けるよ。」

「……なるほど。では、白様は？」

「……三人に、同じっ!!」

タツタツタツ……

「し、失礼しますわ！」バアン

「今日の夕刻までに挑戦者が現れないと、あのクラミーって女性が国王になってしましますわ!!」

「なあ、ステフ。」

「は、はい？」

「俺たちが王になると、そいつが王になると……どっちに賭けるよ?」

「……。」

「決まっていますわ!!」

「あ、執事さんさ、王の思惑以外のとこ、完全に嘘だったけど、騙せると思った？」
「いえ？全く。」

「教える気はないってことね。」

「教えるまでもないということですよ。」

「…なに？」

「でもこの答えは、空様より白様の方が早く回答にたどり着きそうですね。」

「な!?!し、白がか!?!」

「ええ。」

「…うん…?」キョトン

「あら？新しい執事連れてどこへ行くのかしら？」

そんな風に語りかけてきたのは黒い装束服を身に纏った少女。クラミー・ツエル。
対するは…

「し、式典会場に決まっていますわ!!」

先頭を歩くステフとその後ろ、執事服の空とドレスを着た白だ。

「ふうん。まだ負けを認められないのね。呆れたものだけ。」

「な、なんですって!!」

「そ、それにしても… プククツ… あの執事、ごめんなさい失敗したみたいね… フツ。」

「え? シュウのことですか? ごめんなさいって一体…?」

「あら? あの夜その執事が、夜空に向かって言ってたわよ? ごめんなさいの練習をね。」

「え? なんてそんな… あのときは私の方が…。」

「ま、あなたたちの関係なんてこれ以上は知らないし、口は出さないでくわ。」

「そうそう。まだあの執事いるなら伝言頼めるかしら?」

「え? あ、はい。なんですの?」

「『あなたのおかげでバストがああの夜から1. 5cm分大きくなった。本当にありがとう。』ってね♪」

「…え!!」

「は!!」

「…!!」

「あら？ 疑うの？ 気持ちにはわかるけど本当よ。」

そういつて胸を張るクラミーの胸は…… 本当に、小さく、わずかだが、注視しないと見逃してしまうのではないかと思うほど微量に膨らんでいる…… かなあ？ という雰囲気増量に成功しているらしい。

「地の文酷すぎない!!? もういいわ!! 帰るっ!!」

(ほ、本当なんですの?)

(お、俺の脳内スカウターが壊れたというのか!? 本当に増えてんぞ!?)

(…… やっぱりしろも、毎日測るう!!!)

去っていくクラミーに対して一人だけ壮大な決心を固めて、式典会場へ足を運ぶ三人であった。

魔法（チート） v s . 原作知（チート） 識

「さて、この者にもう挑むのはおらぬか？」

そう司祭が告げ、辺りを見渡す。だが、皆沈黙を保って司祭と、その前に佇むクラミー・ツエルを見ていた。

あまりのバカ付きの強さに王になる資質があると信頼を置くものもいれば、完膚なきまでに叩きのめされたことに不信感を抱き、疑いの目で見つめるものもいた。

だが、そんな彼らに挑むと宣言する者はいない。

もはや権利がない。いや、権利があつてもあの少女に勝てる未来が見えない。まさしく、そう思わせてくれる人物こそが、王の求めていた人物。

すなわち、次期国王にふさわしい人類最強のギャンプラーなのだ、皆がその事実を認めようとした。

「では、今この時をもって、次期国王をこの者、クラミー・ツエルに……。」

そのとき、

「戴冠させ」「異議あり!!」「」

…… 予想外によそ者が門を開けて飛び入りをかましてきた。

「異議あり!! ありありでーす!!」

「な、何なんですかあなたたちは!!」

『何なんですかあなたたちは!!』と聞かれたら!!」

「…… 答えてあげよう、われらの名、をつ……!!」

「空!!」

「…… 白!!」

「ステ…… 「あら、やっと来たのね? 三人とも。来ないのかと思つて逆にヒヤヒヤしたわ。」

「……。」

「おや? ということは、来てほしくなかったということかな?」

「当然ね。だって、また面倒が増えるんだもの。あなたたちは面倒回避するために、この時を狙ってきたみたいだけどね。」

「はは。それはちよつと違うんだが。ま、そう思つてくれていいよ。」

「あら? それはごめんなさい。それじゃ、さっさと済ませましょうか?」

「いやまあ、早く勝敗つけるのは嫌いでは無いんだが……。」

「ん? どうかしたの?」

『他国の力使つてチートしてるやつ』と戦つても、楽しくないなと思つてな。」

「……。」

ここで、クラミーの表情は無くなる。と、同時に観客には様々な表情がでていた。

「あいつ、他国の力つつったか？」

「つーことは俺ら負けて当然だったじゃねえか!!」

「あいつ許すまじ!!」

「いやいや落ち着きなさいよ。他国の力があればこの国も持ち直せるかも……。」

と、後ろでガヤガヤと騒ぎ立て始めた観客を尻目に空は、白に合図を送る。

(いたか?)

そして白は合図を送る。その合図に空は予想した通りだと、苦悶の表情を浮かべる白の頭を撫でて慰める。

そう、白の出した合図の内容は……

『いない』……だ。

時を遡ること空たちが某悪役の登場常套句をのべ始めた頃。

ご無沙汰してます。シユウです。

いま、観客席にて舞台の様子を眺めている様子にございます。

え？なんでここにいますのかって？それは空達の計画に（無理矢理）加担させられてるだけですどうしてこうなった……。

まあ、それはいいとして、私に与えられた任務は他国の種族、空が言うところの森精種^{エルフ}を探し出し、空の言動に合わせて観衆に森精種^{エルフ}の存在を知らしめること。

原作ではこれによって、魔法を直接には受けない一見平等なゲームに持ち込む事が可能になる、重要な一手になります。

そこで、私はここに先回りして森精種^{エルフ}を探し出しておくという行動を起こしていたのですが……ここで問題が発生してしまった。

その問題とは……

(森^{エルフ}種が見当たらねえ!!?)

…である。いやアニメでは居たよねフィーさん!? 原作では男の森^{エルフ}種で（クラミーの彼氏かこの野郎羨ましい!!）と思ったが、きちんとしましたよね!!

それがいいっ!!

なんだ? 俺がいることによつて物語改変したつて言うのか!? ある程度同じに進められていると思つていたけど、どこで間違えた!?

このままでは空が王になれず、クラミーが王になって森^{エルフ}種の傀儡^{かいらい}政府状態になつて? エルキア防戦状態にするのはいいもののジリ貧になつて? 結局人類種全員森^{エルフ}種の奴隷になつて? 美人の森^{エルフ}種に囲まれて使い倒されてしまう!!

…うん。悪くないな。

じゃねえよ!! そうなつたらまだご褒美だけど、醜悪で臭悪な中年森^{エルフ}種の奴隷になつてみる!! 毎日が地獄だわ!!

…お、落ち着こう。冷静になつて考えよう。エルフが魔法を使えるなら、しかもアニメ準拠でフィーなのだとしたら…

姿の改変なんてお手のものだろう。

『^{ヘキサ・キヤスター}六重術者』のフィーなら姿改変に一つ、あと五つもクラミーのゲーム支援に魔法を回せる可能性がある。

そんな余裕を持っているやつとゲーム？ご冗談。勝ち目なんてない。いくらなんでも今の『^{くはく}』では勝ち目がないに等しい状態だ。

どうする？このまま見つけきれずに終わっちゃうのか!? どうするどうするどうするどうするどうする!!!

『他国の力使って魔法してるやつ』と戦っても、楽しくないなと思つてな。』

もう間に合わないのか!? 白が俯いて泣きそうになるのをこらえている。

く、くそっここで終わってしまうわけに……は……

(シユウ。信じてますわ。)

……お嬢様が、ステフが、そんな目で私を、いや俺を見た。

……はあ、何て顔をしていたんでしょうか私は。そんな思い詰めた顔をなさらないでくださいよ。お嬢様。

そう思つてシユウはステフにとつておきの作り笑いを披露して、自分を奮い立たせた。

何て情けない姿さらしてんだと、俺が守ると決めた人が、森^エ精^ル種^フの中年親父の奴隷になるかもしれない未来を『うん……悪くないな。』だと!!?ふざけんな!!

そういままでの自分を責め立てて、心に決意という名の火ともし、目をあげる。そこには……。

(おいおい。布石はもう打ったぞ?お前の提案したゲームでお前が先に降りるなんて、ぜってえ許さねえぞ?)

と、今も白の頭を撫でて慰め、余裕の表情を崩さずに、クラミーと会話して時間稼ぎしている空の背中が、そう、語りかけていた。

（…やはりあなた方は無類のゲーマーですね。）

そう思っただけで立ち上がり観衆を後ろから見渡す。どこかにいるはずだ、森^{エルフ}精種が！

…

いた!! 恐らくアイツだ!! 観衆席一番前の左端に位置する席にいる、皆他国の力を話題に話してるのに一人だけ、誰とも喋らずクラミーの方を見つけてるアイツだ!!

さあ、ヤマ張ってしまったが確証を得る時間がねえ。覚悟を決めていこうぜ!!

さあ、説^{ゲーム}得を始めよう。

（クラミー。動揺してはいけませんよ。私の方は大丈夫なのですよ。）

（ええ。わかってるわフィー。でも、こいつらに尻尾捕まれている可能性は高いわ。お互

い慎重にね。」

「わかつてるのですよ。いざとなったら魔法の支援を……」

「もし。その森エルフ種フ殿。隣失礼しますよ。」

「!!?クラミー!!一旦魔法を解くのですよ!!」

「え!?!なんで!?!」

「訳は後!それとこつちを見てはいけないのですよ!!」

「えっ!?!ちよつと、フィー!!……ブツツ」

そうしてクラミーとの通信魔法を解いて、話し掛けてきた男の方を見る。そこにいたのは執事服を着た青年だった。

「おや?お話はもうよろしいので?」

「なんのことだかわからんな。私はおしゃべりが苦手だね。さつきから誰とも話してはおらんが?」

そう、イマニテ人類種イの中年男性に外見の認識を偽装する魔法を使ったフィーは答える。対する執事は、

「いえいえ、お話の相手はあのクラミーという女性とですよ。ま、いま魔法を解いたようですが。」

「……こちらの魔法がバレているのですか!?!そ、そんなはず……も、もしかしてこの人

「はあの三人と手を組んだ他国の間者なのですか!？」

「…… 貴様。どこのものだ。」

「申し訳ありませんが私はどこの者の間者でもありません。」

「そ、そうか。」

「ですがあの二人は獣人種ワイルドの間者だと吐いておりました。」

「な!!？」

（ほ、本当なのですか!?)

驚くフィーに執事は考える暇を与えないように次々と捲し立ててくる。

「あの少女の持つている機械。あれは獣人種ワイルドが開発した生物にかかる魔法を察知する魔法検知器。それに加え機凱種エクスマキナの模倣機能すら搭載したものとかな。さらにそこまですんならと地精種ドワーフに頼んであの形の機械を作ったとか。ま、分解して地精語があったので、そうではないかと想像したまてですが。」

（な!?!そんなものを隠して!?!）

あまりの衝撃に思考が溢れ、あらゆる事態を想定し始める。だが、その前に最大の謎を解かないといけない。

「…… なぜそれを私にいうのかね？」

そう、このこちら側になぜメリットしかない情報を渡してきたのが不可解だった。

私たちに負けてほしいなら、なにも言わない方が得策だが、なぜ？まさか全部嘘のハツタリ？でも言う目的がわからない。

そこまで考えたところで執事。

「私は強い方の間に勝つてほしいのです。これは先王の我が儘であり私の我が儘だ。どうせ勝つなら……ね。そもそも私は王城に潜入したスパイです。どちらが勝とうが知ったことではない。だが、一方的にあちらが勝ってしまうのは少々面白くないと判断したまでです。さあ、どうしますか？あの少女がこちらにアレを向けますよ？」

それを聞いてあの少女の方を見ると、ゆつくりと観客席を見回そうと……いや、こちらを振り向こうとしていた。

（くっ……！今は信憑性を確かめている余裕はないのですよ！！いまイツらに私の存在がバレるのは痛いんですけど……）

（あの地精種^{モグッラ}どもの作った機械に、私の魔法を晒すのなんて、反吐^{ヘド}が出るのですよっ！！）

（どうだ……？）

台詞を言い終えたシユウは、沈黙した中年を見て祈る。

（どうか、間に合ってくれっ!!）

そう信じ、白がこちらに向きそうになったとき……

金髪で長耳の、ふわりとした雰囲気を身に纏った森精種^{エルフ}が、姿を表した。

（……いた!!）

白は森精種^{エルフ}を見つけた瞬間、空の腰辺りの服を引つ張る。それが、『いた』の合図である。

（やっときたか!!）

空は今まで適当に話を伸ばしていた、そのヘラヘラした顔を獰猛な笑みに変え、用意していた台詞を吐く。

「だからさあ、例えばそこの森精種^{エルフ}と結託して勝とうとしてるやつに、この国は渡せないよなあ!」

と、台詞と同時に指差したその先には、姿を表した森精種^{エルフ}がいた。
（な、なんで偽装魔法が解けてるの!!?）

表情は無表情を保つも、内心は全く穏やかではなかった。

（くっ……!!いまは原因を考えている余裕はないっ!!）

「……へえ。適当な森精種^{エルフ}と結託して、私を他国の間者に仕立て上げようって訳？」

「ほー。とっさについた言い訳にしては良くできてんじゃん。」

「じゃ、あの森精種^{エルフ}、追い出してもいいよな？」

「ええ。もちろん。さ、とつとと出ていきなさい！」

（ごめん。フィー……）

（気にしなくていいのですよ！むしろ最善手なのですよ！）

一瞬の表情変化で意思疎通をはかった後、フィーは立ち去っていった。

「んじゃ、ゲーム開始といきますか？」

「ええそうね。でも、せつかくの最終戦よ。なんなら、国王になるにふさわしいゲームの方がいいんじゃない？」

「ふーん。十の盟約その五『ゲーム内容は、挑まれた方が決定権を有する』か……。いいぜ。受けてやる。」

「ま、ここでポーカー勝負について言及しなかった俺ってば、優し♥？」パシヤ
「……。」

「んー。おたく映り悪いね。少し笑ったら？」

「それは私の『巨乳になるまでの成長記録』の一枚目を取って置いていいわよ。」

「ここでポケんのかよ!? 氣イ抜けちまうだろが!!」

「じゃ、ゲームに使う物持ってくるわ。夜になる前には戻るからそれまで待つてなさい。」

「そうやって、最後に会話の主導権を握ったクラミーは言い放って、足早に去っていった。」

少しの沈黙の後、はあーっ……と一息ついて。

「くっそー。会話の誘導は俺の役割なのにーっ!!」

「……よかった……」

「あ、危なかったですわ……。」

「こ、これでよかったのでしょうか……。」

それぞれの思いを吐いたのであった。

脳内解説トークショー

ご無沙汰してます。シユウです。

今は、前回の話し合いを終え、クラミーが戻ってくるまでの間、式典会場の外のベンチで休もうというわけで、空が座ってその膝に白、その隣にステフが座ってその膝を枕にしたい私は直立姿勢ですハイ。

とまあ、そんな感じの休憩なので、世間話に花を咲かせようと話題を降ろうとしたところ、

「なあ執事さん？どうやってあの森^{エル}精^フ種の魔法暴いたのか教えてよ。」

「…… 教え、ろ!!」

「シ、シユウ。が、頑張ったのはわかるんですけど、森^{エル}精^フ種の魔法をどうにかできるのは、その、凄いですけど…… 怖いですの。だから…… その……」

「あーはい！わかりました！皆さん順番に答えますので、お手柔らかに……。」

「いや、聞いている内容皆一緒なんだが……。」

とまあ、前回のことが気になっていようですね。やはりゲーマー。世間話の内容なんてゲームしかありませんよね……。確かに魔法で姿偽装していた森^{エル}精^フ種の魔法を解除

させちゃったたら、そら注目されるよな……。

「と、いうわけで、まずは空殿からどうぞ。」

「あ、はいはい。そんな感じでやってくのね。」

「んじやまずは、なぜ森精種^{エルフ}の存在を察知できたのか。これは簡単だよなあ？」ニヤニヤ
「おつしやる通りでございませう。これは空様が『他国の力』という話題を聴衆に提供して
もらったからこそ、できたことにございませう。」

「それにより、民衆の会話から外れている人物を特定して鎌かけた…… そんなとこかな
？」

「正解にございませう。」

「…… 次は、しろの…… 番……」

「どうぞ。」

「…… どうやって、魔法…… 解いた、の？」

「それは、森精種^{エルフ}にあなた方を他国の間者であると吹き込んだからです。」

「…… どんな、内容？」

「それは次の方の質問にしましょう。では、お嬢様。」

「じゃあ白の質問内容を聞きますわ。」

「は。あちらは森精種^{エルフ}の間者であるなら、こちらもどこかの種族の間者に仕立てあげれ

ば、相手も警戒するようになると踏み、そのような虚偽を申したのです。「だがそれだけじゃ足りんだろ。もっと決定的な文言があったはずだぜ?」
「その通りにございます。然らば、その時の文言を再現しましょう。」

「なるほど。俺らを隣国の種族、ワイビースト 獣人種の間者に仕立てあげたつて訳だ。」

「……そして、このタブPCを……その種族の、開発品に、見立て、た……」

「そしてその機能が、生物にかかっている魔法を検知する物で、しかも持ち主がその魔法を使えるようになると警告したと。」

「ご明察にございます。」

「え!? その四角いのつてそんな機能持つてるんですの!? なら、魔法を抑制しつつ有利にゲームができるじゃないですかの!!」

「お前頭お花畑か!?!んな機能ねえよ!!」

「え!? 無いんですの!?!」

「あ。無いんですね。」

「……ステフは当然として、執事さんも知らなかったのか?」

「ああいえ。本をお読みになつてゐる際に使つてゐるのをみた程度ですので、機能全体のことは存じてませんでした。」

「ま、そんなとこだらうな。で、きつきの文言だとこのタブPCに妨害魔法かなんかかけられたら詰んでたんじゃね？」

「残念ながら、そうは絶対になりません。」

「ほお……。たいした自信じゃねえか。根拠は？」

「簡単ですよ。では、白様に問題です。森精種^{エルフ}がもつとも嫌いそうな種族と言えば？」

「……!!……。地精種^{ドワーフ}、っ!!」

「正解にございます。」

「なあるほど。嫌つてる種族が作ったものに、魔法を見られたくはないし、かけたくもないと思うと踏んだわけだ。」

「左様ですね。」

「……。執事さん、すごい……。」

「ああ。不測の事態によく対応してくれた。誉めてつかわす！」

「ははーっ。」（ノ——）ノ

「え？でも、森精種^{エルフ}が偽装魔法を使うことくらい予想できたんじゃないのですの？」

「ぐっ……。痛いところを突いてくるなステフよ……。」

「……ここは、次の、改善点……」

「あー。いっとくと俺らは一定以上離れると人と話すこともままならん状態なんの。」

「そ、そうなんですか?」

「そ。だから二手に別れての行動ができないわけ。」

「で、ステフがああクラミーってやつとゲームしてるときに奥の席に目深にフードか

ぶつた森精種エルフがいたもんだから……。」

「……偽装魔法……かけて、無い方に、賭け、た……」

「それが失敗だったなく白。今日は反省会だな。」

「……うん……」

「というわけで、不測の事態になったらテンパるであろうステフは俺たちがくる理由となる置物になっていただいて……」

「なっ!?!」

「そのの執事さんに森精種エルフ搜索を頼んでたつて訳。」

「ぐぬぬ……。でも、シユウでよかったですわ。なんとか乗りきれましたもの。」

「役割を全うできて光栄でございます。」

トツトツトツ…

「お、ようやくお出ましか。」

「では私はこれで…。」

「ほいほーい。」

「また…後で…。」

「え!? シュウ! どこ行くんですの!？」

「どこと言われましても…。」

「あーステフ。お前ほんと人の話聞いてないのな。」

「な!?! き、きちんと聞いてますわよ!!」

「じゃあ、なんで呼び止めた? 聴いてるなら呼び止めはしないはずだぞ?」

「え? そうなんですの?」

「よし、わかってないな。アイツがくるから手短かに言うぞ。」

「執事さんは今、俺たちの味方でもアイツらの味方でもない立場にいる。だからここにいちやまずいってことだ…。」

それを言い終え、ステフがその事実を飲み込んだと同時にクラミーが目の前にくる。

「お待たせしたわね。獣の奴隷たち。」

「ああ待ったよ。エルフに尻の穴売った売女さん？」

「あ、あなたたち……」

「で？それが俺らにふさわしいゲームかい？」

「ええそうよ。じゃ、行きましようか。」

「ああ。ゲームを始めようか……」

どうも、ステフの隣に這い寄る執事、シユルラトホテプウです。

……無理がありますね。

はい。いま私は観客席にて、クラミーと『くわはく』が行っているゲーム”駒が意思を持つチエス”を眺めております。

あ、このチエスは普通の机の上にボードをおいて行っている。いわば書籍ver.です。まあアニメのようにしてしまおうと『クラミーが一時間でやった』という状況になって、あんな甲冑姿の駒運び込めるわけ無いのに運んだことになって、『私、森精種エルフと

結託してます!』と、宣言してるのと変わらんからな。

あ、でも馬車で移動してたっけ……?

……。

……こまけえこたあいんだよ!!

で、私は特に役割もなく、ここに座つてこのなり行きを見ていたわけですが……。

(ちよつとお話ししませんかあ?)

(こいつ……直接脳内につ!?)

……と、クラミーの主人である森^{エル}精^フ種、フィーに話しかけられています。なんでや……。

(な、なんのご用でしょうか?)

(んー。それはですねー。あなたのおかげで魔法がばれなくなったのは助かったのですけど……。)

そう。いま行っているチエスでは魔法がバンバン使われている。意思を持つ駒がある時点でそれ自体魔法なのだが、いまステフが持っているタブPCになんの反応もな

い。

なぜなら生物にかかる魔法のみ検知すると嘘を言ったからである。ま、ステフはあからさまな魔法による不正を防ぐための置物としての役割だろうが。

(でも、それによつて私がそちらに近づけなくてえ〜とおくつても、退屈なですよ。)
(と、言うわけで私に話し相手になれと?)

(その通り、なのですよ。)

(ハア。あなた方二人はなぜ奇襲的に話しかけるのが得意なのでしょうか……。)

(それはわからないですけど、あなたも退屈してたのは事実なのでしょう?)

(はいはい。話し相手になればよろしいのでしょうか?でも、何を話すか話題くらいくないと、なにも話さずに寝てしまいますよ?)

(それは困るのですよ……。あ。なら、クラミーのかわいいお胸の変化について話すのですよ。)

(……それは男性である私と話すのに適した話題とは考えづらいのですが。)

(とぼけるのはやめた方がいいのですよ。もうあなたの顔はわれているのですよ。)

(……え?ほんど?)

(本当なのですよ。もうクラミーの中でのあなたは『豊胸の神の使徒』として崇められてくるくらいなのですよ。)

(え!!そんなことになってんの!!?なんだ『豊胸の神の使徒』って!!クラミーの胸。まさか、大きくなったってののか!?)

(そうなのですよ!!1. 5cm大きくなってるとですよ!!)

(は!!?教えたの昨日の夜だぞ!!しかも丸々嘘のやつ!!なんでそんなことになってんの!!?)

(それはこつちが聞きたいのですよ!!クラミーのあんなにかわいかったお胸が、日に日に大きくなっていくんだと思うと夜も眠れないのですよ!!)

(いやそこは喜んであげろよ!!?なんでクラミーが喜びそんな事をお前が悲しむんだよ!!?)

(だって、クラミーのあのお胸は...あのペツタンでまな板並みのかわいい、イマニティでも希少価値のあのお胸が!!適当な大きさに膨らむのは嫌なのですよ!!)

(いや友の胸の評価辛辣すぎんだろお!!?)

(ち、違うのですよ!!最大限に良いのですよ!!クラミーのお胸は世界一なのですよ!!)

(いや確かに凸凹コンビとしてはかなり噛み合っているとは思うけども!)

(クラミーは凹んでなんかいないのですよ!!真っ平らなのですよ!!)

(フォローになってねえよ!!)

(それをあなたは適当に膨らませる方法を教えてクラミーのお胸に与えた神の作りし芸

術品を汚したのですよ!!)

(いや、だから俺の教えたのは嘘だっつってんだろ!!あのメイドの話も全部嘘!あの人
中学二年からあのサイズ!!)

(で、でも、現に大きくなってるのですよ!!……はっ。まさか!人に撫でられると大き
くなるというイマニテイの古記に伝わる方法を……!!?)

(触ってねえしあとお前は何度も触ってんだろが!!)

(異性に触らせたことはないのですよ!!……はっ!!なっ……まさか!!妊娠!!?)

ドン!!エンツ……!!

(だあああああああ!!ちげえよお!!俺じゃねえよお!!)

(シ、シユウ。なんでそんなに険しい顔をしてるんですの?)

(チツ!!そんな顔されなくてもヤベエのはわかってるつつの!!)

そう、空は思う。敵のクイーンをこちらに率いれたはいいものの、クラミーがあこの行動をとってくれるかの保証がないことに、焦りを感じていた。

だが、その疑念はすぐに氷解した。

「……にい……」

「!!」

「…… だいじょう……ぶ……」

(…… ああ。そうだよな。白。俺たち『くうはく』なら……。)

(ならこうしよう!!俺が貧乳にさせる方法を伝授してやる!!)

(でもさつきあなたは全部嘘だったのですよ!!)

(だがその嘘が本当になってんだ!!なんだ?いまからつく嘘を聞かないのか!?)
(き、聞くのですよ!!)

(ようし、わかった。ならお前は貧乳のクラミーを思い浮かべながらサイズを測れ。)

(で、でもそれだと相殺しちゃうのですよ!!)

(だから、ここで一手間加える。それは……)

(嘘のバストサイズを言わないことだ!!嘘をつかないことで現実をしつかり許容しろ!!例えクラミーの胸が大きくなっていようと目を背けるな!!それがいずれ徳となり、神が貴様の徳を美徳と認め、願いを叶えるだろうっ!!)

(わ、わかったのですよ!!ありがとうなのですよ執事さん!!今日はぐっすり眠れそうですねですよ!!)

…… そういつて魔法を解除したのだろう。フィーの声が聞こえなくなったのを確認し、うなだれてこう言った。

「どうしてこうなった……。」

それと同時に、『』の勝利が決まったのであった。

神様緊急発進（ゴッド・スクランブル）!!

「ご無沙汰してます。シユウです。」

「ついに次期国王選定戦において、クラミーに勝利し、国王の座を奪った『くわはく』であつたが、この後何が起ころか知っているだろうか。」

「……そう。『くわはく』同士の対決である。」

「さて、見事空様と白様が国王候補になることになりましたが……。」

「ああ、そうだな。で、何か問題？」

「ええ。代々全権代理者は一名という決まりなので、どちらかに国王兼全権代理者になつてもらふ必要があります。」

「へ？じゃあなんだ？俺と白のどっちかしか国王になれないの？」

「そういうことになりますな。」

「えーマジか。じゃあこゝは俺が形上国王になるつてことでいいよ。」

「そうですか。ならば、この次期国王選定戦において盟約の名の元に、空殿を次期国王に

「……異義あり!!」な、なんですかな!」

「……にいが王様になったら、ハーレム、つくれる。」

「なっ!?この鋼の理性を疑うというのか妹よ!」

「……だから、しろが王に、なる……これでいい……」

「わ、わかりました。では白殿を「待った!!」ちよ……」

「おいおいリトルマイシスター。これはどういう見かな?兄を差し置いて王になるならんぞ認めんぞ?」

「……にいにハーレムは、つくらせない!!」

「オーケー。譲る気はないんだな。じゃあ先に二連勝した方が勝ち。ゲーム内容は一方が提示し一方が同意するものとする。これでいいな?」

「……うん。しろ、負けない……」

「ああ。兄ちゃんもだ。じゃ、始めつか。」

「^{アツ}盟約に誓ってっ!!」

「あの二人、勝負始めましたけど大丈夫なんですか？」

「ええ。まあ、その……もし彼らの言うことが本当なら、互いのことは知り尽くしていると思われませう。」

「た、確かにあの信頼関係を築くほどでしょうから、そうなんでしょうけど。」

と、いつの間にか隣に座っていたステフの心配に、苦笑いを作って答える。

「だからこそ、この勝負。決着がつかない可能性がありますね。」

「へ？」

「つまり、空様が勝てば次は白様、その次は空様と、その繰り返しになってしまおうのではと予想されます。」

「な!?!それじゃいつまでたっても終わらないじゃないですか!!?!」

「ええ。まあ、終わらせる方法はあることにはありますが、今は彼らの实力を見てもらういい機会になるでしょう。」

そういつて5戦目が終わり、次のゲームを開始しようとする二人を見て観衆は、この

二人の意地の悪さを痛感していた。

最初の一戦目こそ、あっさり勝敗が決まったものの、負けた側の空が長考にふけり、トランプを使ったオリジナルのゲームを提示した。それに白がルールの確認をして空が解説すること三十分。ようやくゲームが始まるという事態になった。

これを見て悟ったのだろう。いくらかの観衆が帰っていった。

そして、空のペテンにまんまとかかって負けた白がチェスと将棋を組み合わせたようなゲームを提示。空は流石に勝てないとハンデを要求。そしてなんやかんやでまた三十分。そしてゲーム開始。

また観衆が帰っていく。これを繰り返すこと後二回。

はい、もう痛感した観衆は私と司祭だけです。なぜならクラミーとゲームを始めたのが19時頃。終わったのがまあ一時間として20時。こつから上記のゲーム時間を合わせて今何時かというともう午前2時です。

そりや皆帰るわ。

まあ、私はまだ起きていられるし、空と白は五徹するくらい寝ないことには慣れているだろうからいいけど、司祭さんがヤバイ。いつ国王が決まるかわからんから、ずっと起きていなくちゃならん状態になってる。

必死に目を開けてどちらが勝つかを見守り、寝ないよう頬をひっぱたいて真っ赤の顔

めて祈り、感謝を捧げている。ああ、神様ト様マジ感謝。

個人的にはもう半世紀くらいこうしていたいんだが、司祭さんがもう限界そうだし、何よりこのままステフを寝かすと首を痛めてしまうから、空達の勝負を終わらせようか……。

そう思つて、まずはステフを起こそうと両肩をつかんで揺さぶる。

「お嬢様、起きてください。」

「う……うん……？どうしたん……ですのっ!!」バツ

「うわっ!!?」

起きたステフはこちらを見たかと思つたら突然顔を背けて、私から一席分離れた。

「も、申し訳ありません。お嬢様。勝手ながら起こしてしまつて。」

（そうか、今は空に惚れてるんだよな。そりや警戒されるか……あまり触つたりするのはやめておこう。）

「だ、大丈夫ですわ……大丈夫……。」

（か、顔が近かつたですわ!!両肩捕まれててビックリしましたわ!!ドキドキしましたわ!!）

「お嬢様?」

「は、はい!なんですの!!」

「……いまから二人のゲームを終わらせに行きますので、お戻りになられる準備をなさっててください。」

そう言って去っていくシユウの瞳には夜空のせいにか、真つ赤になったステフの顔は映らなかった。

おはようございます。メインシステムは起動しているシユウです。

と、いつても、もう午前11時頃ですが。

先ほど国王の戴冠式が行われ、空達の演説により、エルキアは一時の盛り上がりを見せています。

今空達は大臣様たちに今後の政策を捲し立てるように言っています。なお、ステフはその隣で口開けて二人の行政を啞然として見えています。まあ、所々アドバイスしてるか

ら、話には着いていつてはいるようです。

かくいう私はお茶汲みを担当させられています。もう、空達の専属執事みたいになってます。まあ、お嬢様の近くにいいのでいいのですが。

と、お茶汲みに奔走している最中に、空間が胎動する。魔法を検知できない我々人類種ですら感じる圧倒的存在感を宿した者……神が降臨した。

「やあやあ！元気にやってる!？」

「ああ。おかげさまでな。自称神様？」

「自称じゃなくてホントに神様なんだけどね……。というか、僕の場合はテトつて読んでいいよ。そっちの方がいいでしょ？」

「そうだな。自称テトさん♪」

「そこまで僕のことを疑うのかい!？」

と、久しぶりに会った友達感覚で話をする三人をよそに、ステフと大臣達は戦慄していた。

(ゆ、唯一神テト!!?)

あまりの衝撃に声が出ない状態で、三人のやり取りを固唾を飲んで見ているしかなかった。

その会話を聞くと、他種族が動き出すだのこの世界に呼んだだの、そして何より驚い

たのは、王が神に一度ゲームで勝ったということ。

現実離れた内容に目眩が起きそうになるのをこらえ、様子を見てみると、一人の執事が近づいていった。

「テト様、お茶はいかがですか？」

「ん？ありがとうございます。……ふう。うん。美味しいよ。」

「ありがたきお言葉。」

ふっふっふー。恐らくこの世界に俺を呼んだのはテトだろうからな。お礼っぽいこととしておこう。

「うーん。でも僕の気は休まっても、他の皆の気は休まる暇無さそうだし、そろそろ僕は帰るね。」

「ああ。じゃあな。今度会うときはチェス盤で……ってか？」

「……次も、負かすから、覚悟する、の!!」

「あははっ!!その時を楽しみにしてるよ。じゃあね。」

そういつてテトは虚空へと消えていった。それと同時に、長らく息をした気がしてなかった大臣達は、ゆっくりと深呼吸して、空達の尋問を始めたのであった。

(うーん。原作知識持ちの転生者、これがバレるだけで物語が急変しちゃうからな。テトはそれを避けるために、俺に何も触れなかったのか?)

そうして、自室のベッドに横になりながら考えていた。

(普通なら自身が転生させた人間には、少なからずアプローチをとってくるだろうに……。それがなかった。)

(唯一あつたとするなら、お茶の水面越しにこちらを見ていたことぐらいか?)

うーん。と、唸って考えてみるも答えは出ずに悶々としているうちに、眠気が襲ってきた。

(ま、なにか考えでもあるんだろ。俺の預かり知らぬところで……。な……。)

そうして暗闇に意識を沈めていくのであった。

ーもし？

ん？なんだ？なんか呼ばれた気が……

ーちよつと起きてもらえます？

は？起きる？ああ。寝てたのか。ハイハイ。いま起きますよつと……

そうして目を開けたその先には……

「はじめまして……ですかね？シユウ。会えて嬉しいです。」

そこにはアクアマリンの色をした長髪の、前髪で目元が隠れているが赤い瞳を持ち、いかにも天使のような風貌をした女性がいた。

「やあやあーさつきは無視してごめんね？このここにきつつく話すなって言われちゃつてささ。」

それとおまけに唯一神（笑）がいた。

「なんか皆僕の扱いひどくないかい!？」

「あ、心を読んだんですね？いきなり叫ぶから驚きましたよ。」

「あ、ごめんね。こんな近くで大声だしちゃつて。」

「あ、え、えーつと……どういう状況？」

「あ、まだ君、自己紹介してないよ？僕はきつきしたから問題ないけど。」

「おい。人の話を……」

「それもそうですね。では改めて……」「ちよ……」

「はじめまして。シユウ。私の名はフォルメリア。種族は神靈種^{オールドデウス}。神靈種^{オールドデウス}とえば、最

強厨や改造厨、質問厨など、少し尖った特徴があるけれど……」

（おいやめろ！他の神靈種^{オールドデウス}に殺されんぞ?!）

「私の場合は、恋愛厨……でしょうか♪」ニコツ

（…… あ、なんか尻軽女に見えてきたわこの神靈種^{オールドデウス}。）

「つて、彼思ってるよ？メリーちゃん♪」

と、シユウの心を読んでケラケラ笑う唯一神と

「し、失礼ですよ!!」

と、臀部を両手で抱えるように押さえ、顔を赤くして怒る神靈種^{オールドデウス}

「心読むのマジでやめてもらえませんかテト様あ!!」

そしてその二柱の神を前にしたシユウは、頭を抱えるしかなかったのであった。

神達の部屋

ご無沙汰しております。シユウです。

前回、二柱の神と出会いまして、これから話が始まるのですが、その前にやっておかなければならないことがあります。それは……

「ん？どうしたんだい？あぐらかいて目をつむって……。」

ぶつせつまかはんにやはらみつたしんぎよう
仏説摩訶般若波羅蜜多心經

「な、なんなのこれ？」

「あら？どうかしました？」

かんじでいほでつぎようじんはんにはやはらみつたじ
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時

「ちよ、なんか頭に染み付いてくるんだけど……!!」

「？」

しょうけんごおんかいくうといつきいくやく
照見五蘊皆空度一切苦厄

「ちよ!?ボリユーム大きくしないで!!」

舎利子色しゃりししき不異空空ふいくうくう不異色ふいしき

「あ、あばば……。」

「心を読むのをやめては？」

「そ、そうだよね!! 最初からそうすれば……。」

色即是空空即是色!!
しきそくぜくくうくうそくぜしき

「ぎゃああ!!? 心読むのをやめたのにまだ聞こえてるよ!!?」

「あ、唯一神様。これは般若心経というものです。」

受想行識亦復如是!!
じゆそうぎようしきやくふによぜ

「わ、わかったから!! 心読むのをやめるから!! お願いだからやめて!!」

「…… 本当に?」

「ほ、本当に!!」

「神に誓って?」

「か、神に誓って……。」

「はい、言質とりましたよ♪」

「…… つて、ちよつと待ってよ!! 正確に言うとお神は僕一人だからね唯一神だからね!!?」

「あら? では神オールドデウス靈種はどのような扱いに?」

「え、えーつと…… 君の世界でいう英霊かな? そんな感じ。」

「なるほどつまり唯一神も神靈種オールドデウスも大体一緒なわけだ。」

「いやそれだと僕の立場なくない!!？」

「ならボツチ神でいることを許容するんだなボツチ神。」

「……なんで心を読んだだけでここまで言われなきやいけないのかな……。」

「そりやそうだろ。神様だって聞かれたくない恥ずかしい秘密のひとつやふたつあるだろ？それを簡単に暴かれるんだったら警戒して離れるだろが。」

「そ、そうかな……？」

「なら、ゲームで相手を驚かそうと暖めておいた考えを、すぐさま相手にバレるようなゲームをしたいか？」

「……したく……ないです……。」

「だろう？なら人の心なんて易々と読んでいいものではないのだ。」

「……はい。肝に命じます……。」

「人類種イマニテイが神に説教する日が来るとは……。」

「それで？なんで俺をここに？」

「そうそれ、もとはというところ、君がここに來れた理由の話をしようと思つてここにつれてきたの。」

「では改めて。シユウ。あなたをこの世界に呼んだのはこの私です。」

「え？ そうなの？ てつきりテトかと思つてた。」

「普通に考えて、僕が君を呼ぶと思うかい？」

「確かに。俺はゲーマーですらないからな。」

「そうそう。なぐんでゲーマーではない君がここに來れたのかというと、メリーちゃんがここにつれてきたつて訳。」

「なるほど…… つてあれ？ 神靈種オールドデウスの力つて異世界転移することは可能かもしれないけど、維持は難しいんじゃないか？」

「おや？ どうしてそこまで知つてるんだい？」

「それはあとで答えるとして、さっきの質問の答えは、今も私があなたの存在をここに繋ぎ止めるために力の9割ほど使つてゐるんです。」

「は!?! そんなことして大丈夫なのか!?!」

「心配ご無用。力尽きるくらいならあなたを手放すし、そうならないようにしてるわ。」

「そ、そうか…… つて、力の供給なくなつたらどうなんの!?!」

「魂が体にいられなくなつて出ていき、宙を舞つて精霊回廊に溶け込みますわ。」

「…… つまり?」

「死にます。」

「死ぬね。」

「死ぬの!？」

「だから私がここまでして、あなたをここに留めてるんです。」

「その苦勞も知らずに唯一神様は転生者と和氣あいあいと話して……。」

「と、唯一神の特權を自分の力じや会いに行けないことをいいことに羨ましがられて、普段話し相手になつてもらつてるから、そのお札として特別に僕がここに招待しろつてせがまれたつて訳。」

「な、なるほど。つまりテトはポツチ神ではなかつたのか…… チツ」

「ねえなんで舌打ちしたのかな!? 場合によつてはただじやおかないよ!？」

「まあまあ唯一神様。落ち着いてください。もう。シユウも唯一神様をいじめちゃダメよ?。」

「はあくい。」

「……。」

「シユウ。あなたはここに来てよかつたですか?」

「あーそうだな。すんごく幸せだな。毎日が刺激的で、何よりステフに合えたことが何よりも嬉しいな。」

「ふふ♪そうですか。」

「ん？あの少女のことを前から知ってたのかい？」

「あ、その事については、先ほどの質問の答えになってるので一緒に話しましょう。」

「彼はこの盤上^{デイスボード}の世界がライトノベル『ノーゲーム・ノーライフ』という書籍で世に普及している世界からやって来たんです。」

「は？え、何？まさか、原作知識持ちの転生者ってこと!？」

「そういうことになりますね。」

「じゃあ、いまの状況はどのぐらい書籍と一緒になんだい？」

「多少の違いはありますが大体一緒です。」

「うわー。ゲーム上手くないのが救いだっかね……。。」

「無双するシウちゃん見てみたい♡?」

「少なくとも、そのつもりで呼んじやいまいでしょう……。。」

「まあ、そんなだけだね。でも、もうあなたはここに連れてこられた理由位察してるわよね?。」

「ええ。恋愛厨の神から呼ばれたのならやることはただひとつ!!ステフを幸せにするこ
とだっ!!」

「ひゅーひゅー♡?」

「あーなるほど。そう言うことね。君が執心するのもわかるよ。」

「でしよう？ふふふ♪」

「さあ、では私に何かヒントをくれるんですかね？攻略のヒントとか。」

「んー。ごめんなさい。まだまだエルキア国内が安定してないから、もう少し空達に付き合うことになりそうよ。」

「だからその間は、なるべくあの子の近くにいればいいんじゃないかしら。」

「は。承知しました。」

「じゃ、そろそろお別れといこうか。ここに長いこといると城に居ないことがバレるかもしれないからね。」

「シユウ。頑張ってくださいね。」

「は。この身を賭してでも。」

そうして意識はまどろんでいった。

「……君は意地悪だね。自分から本当の目的を言っていないじゃないか。」

「ふふ。自分で目的を決めている人に、いちやもんをつける気も縛る気もないですから。」

「で？本当の目的は？」

「嫌です。教えませ〜ん！」

「え〜。少し位は教えてよ〜。」

「では少しだけ。本来この世界が元の書籍で登場する若い男性は空しかいなかったんです。」

「へえ。つまり男性向けの書籍ってこと？」

「そうです。で、そこに他の男性を登場させるとどうなるでしょう？」

「そういわれて少し考えるそぶりをして……苦笑いで返した。」

「……ああなるほど。君も中々の性格だね。」

「伊達に恋愛厨カミサマやってませんから。」

「ふーん。ま、これ以上は深入りしないで置くから、こっちの邪魔はしちやダメだよ？」

「それはお互いですよ？」

「あははー。あ、そうだ。」

と、いつてテトは虚空から本と羽ペンを取り出して、一頁目を開いて見せた。

「僕も彼らの観察記をつけたいんだけど、どういう出だしにしたらいいと思う？」

「ふむふむ。これは唯一神様からの視点で綴られるのですか？」

「ま、そのつもりかな。」

「うーん。でしたら自分で考えていたきたいですね。せつかくの手引きですし。」

「そう？ま、君がそういうならそうかもね。じゃ、さらさらさら〜と…。」

と、特に何も考えずに綴った神の書を、覗いたメリーは小悪魔めいた笑みをさせて小さく呟いた。

『こんな神話はなしをきいたことがあるだろうか』…と。

2巻

ジブリールは不満があるようです

ご無沙汰しております。シユウです。

神様降臨のイベントが終わり、原作の第一巻辺りが終わった頃でしょうか？第二巻では王となった『くうはく』が知識集めに奔走したり、先王の秘密を知ったり、東部連合に喧嘩吹っ掛けたりなどを主な行動としていきますね。まだまだエルキアに余裕がなく、最低限の安定を目指すべく『くうはく』なりに動き出すしかない状況。原作通りに進めなきゃいけないのは続きそうですね……。

で、原作通りだとステフが空に対してゲームで勝って真人間にしようと奮闘し、犬になったり、白にパンツ取られるなど散々な結果になるわけですが、

そんなことにはさせないと!!ブラックジャックの親になってステフに有利な勝負を仕掛けたり、来る人通りをステフの発言に合わせて変えたり、鳩に向かって石を投げようとする空に『ディーフェンス!ディーフェンス!』と邪魔をしたり……

…… したかったんだが私は今ステフの隣にいません!何なら王城にもいません!!何故でしょうか!?正解はこの方っ!!

「……では次の質問です。森^{エルフ}精^フ種の最上位とされる封印魔法『久遠^{クウ・リ・アンセ}第四加護』ですが、この魔法の基礎配列の記述がないので考察できないのですが、どうしたらよいのでしょうか？」

「知るかつ!？」

「はあ……もつとまともな回答はないのですか？その答えを聞きすぎて、私の耳が腐つてしまいます。」

「あー……じゃああれだ。適当な森^{エルフ}精^フ種引つ捕らえてくるってのは？」

「盟約の条件下でそれは不可能だということを念頭にすら入れれない頭をしているのでしようか？」

「ん……ならあれだ！魔法の基礎からやって、擬似『久遠^{クウ・リ・アンセ}第四加護』をやればいいんだよー。」

「我々天翼種^{フリーユージェル}は細かい精霊操作はできません。そもそも、私が知りたいのは魔法の習得ではなく構造の知識の会得にございますれば、あの雑草の天撃を防げない魔法などに手をかける気はございませんゆえ。」

「あーはいはい。そうですか……。」

はい。正解はジブリールでした。

相変わらずの質問に肩を竦めつつ答えていく。なんともまあ、作業を繰り返すように

俺の口も回るようになったものだよ。

はい。ではなぜここ、ジブリールの図書館に居るかの解説をしましょう。まあ、簡単なので一気に捲し立てましょうか……。

説明しよう！この小説第一巻に一度も登場することのなかったジブリールは、シユウが執事になってからというもの、王城に住み込むようになって図書館に来ることがないことを全く気にせず、いつものように本を読み、質問したいことをひたすら書き留めていくという行為を重ねていった結果、遂に質問数が千を超えてしまった!!この時点でちようど『^{くはく}』がエルキア国王となり、区切りが良くなったのではないかと、シユウ

の個室に転移空間を作って「質問が千を超えました。早く消化しないと……死にますよ?」という謎の脅迫を残して消え、それを尻目に見たシユウは次の休日の早朝、執事姿のまま図書館に特攻した!!「久しぶりだなジブリール。」と、努めて紳士的笑顔で挨拶したシユウに対し、「お待ちしておりましたよ。また会えて嬉しゅうございます」と、目以外で笑った天使悪魔は返し、「では、始めましょうか?」と、口火を切った質問攻めは翌日の現在まで続き、家はおろか王城に行くことすら盟約（第五話『執事なる刺客』を参照）によって許されない状況になっていたのであった!!

とまあ、こんな理由でここにいるわけだが、ほんとは昨日のうちに全部の質問に答える気だったのよ?しかし、質問に答えればまた新たな質問が増えることは良くあるこ

と。もう実質答えた質問は当初の予定の千を軽く越えちゃっている。

あー。まさかの無断欠勤である。こりや明日は大目玉食らうな……明日職場に行ければだけど。

「……なあ？ジブリール。」

「そこで……はい？なんででしょうか？」

ジブリールの質問を遮って、ふと思ひ浮かんだ疑問を聞いた。

「俺らつてさ、10年以上ここでこんなことやつて来たんだよな？」

「……ええ。そうでございますね。」

「……ジブリールつてここ10年でなにか変わったか？」

「……そうですね……質問を集めて答えを編み出し、それを考察する。その行為が定着したことくらいでしょうか？」

そうか、それだけしか変わらなかったか。なら、原作通りに進めるのに好都合だな。

「……そ。んじや、続きやつていきましようか。さっさと家に帰つて、仕事しなきゃならんからな。」

「……そう、で……でございますね。続けましようか。」

そういつて互いの目を本に向け、ひたすら意見を載せていくのであった……。

そうして数時間がたち、日が傾き始めた頃。

(コンコン……)

「おや? どなたかいらしたのでしょうか?」

(…… あっ!! もしやつ!!?)

珍しく…… それこそ十年ぶりほどになるノツクの音に訝しげな表情を示すジブリーと、遂に彼らが来たのだと察したシユウは、努めて平静を取り繕い、答える。

「んじゃ、ここらの住人に俺がここにいとバレると色々面倒だから、身を隠しておくな。」

「わかりました。では行って参ります。」

そういつて互いに別方向へ歩み出すのであった……。

(さて、今回はどのようなお客様でしょうか……)

と、なんの警戒心も持たず、ただの好奇心により、出入り口の扉に吸い込まれるように飛んでいき、その扉を開けた。その先にいたのは……

黒髪黒目の青年と頭にパンツを被った白髪赤目の少女、そして、首に紐を垂らしワビースト獣人種の格好をした赤髪青目の女性が立っていた。

はい。シユウです。今は奥の書斎の机の下に隠れております。

あー、来ちゃったか空白の二人。せめて一緒に来てステフを守りながらの具現化しりとりをしたかったが、どうやらそれは叶わない模様。

え？今すぐ行って一緒にゲームすればいいじゃんだったって？

いや、それはできない。なぜなら『くわく』がジブリールをてにいれる必要がなくなってしまうからだ。俺という間者がいれば、本を読める確率はグンと上がり、面倒なゲームをしなくても図書館の知識を得てしまうかもしれないし、ジブリールⅡ識者というチツプも手に入れないかもしれない。

俺という存在が、面倒を起こす要因となるなら、今はゲームが終わるまで隠れるのが

吉だろ。

そうしているうちに奥へと歩いていく足音が聞こえた。

(ふう。これでジブリーと『くくはく』の具象化しりとりが始まるのか……)

書斎の机から身を出し、パツパツと膝についた埃を落として出入り口の扉を見つめた。

(お嬢様。この度私は力になれませぬが、どうかご健闘を……)

そう、今回シユウが手助けできることはなにもない。下手に出場すればゲームが行われない可能性が出てくるからだ。だから……

(それではまた王城にて会いましょう。さらばです。)

そう、恭しく頭を下げ出入り口の扉に向かって歩きだしたシユウであったが、突如後頭部を握られ、景色の転移を経験した。

「じゃ、その具象化しりとりとやらを始めようか？」

ルールのある程度の確認を終え、ゲーム開始を促す空。

「ええ。ですが、あなたたちには従者が一人いるようですが…… よろしいので？」

「ああ。問題ない。」

「いや問題有りまくりですわ死にたくないですわあ!!」

「では私からも一人従者をつれて参りましょう。そちらだけというのは、少し不平等ですからね。」

「え？まさか天翼種？」

「いえいえ。条件はそちらと同じく、人類種にございます。」

「……へ？」

空は天翼種フリユージェルの従者というから、少なくとも人類種イマニテイより上の位階序列の種族の従者をつけて来るのかと警戒していたが、まさかの人類種イマニテイという従者に、より困惑の表情を浮かべた。

と、こちらの返事も聞かず、空間に穴開けて、そこに手を突っ込み、まるで道具を取り出すかのように出てきた人類種イマニテイは……

「ど、どうも……ご無沙汰しております…… シュウです。」

あの執事だった。

在籍者（ジブリール） v s. 挑戦者（『 』）

「なっ!？」

「……え?」

「シ、シユウ!? どうしてここに!？」

「いや〜ホントにどうして呼んだのかにや〜ジブにやん?」（キレ顔）

「その呼び方はやめろと何度となく言っているのが分かりませんか猿頭?」（殺意の波動放つ笑顔）

「もうその顔は慣れたにや〜!! そんなものではこのシユウは気圧されないにや〜!!」（余裕の表情）

「……。」（無言の殺意）

「マジごめんなさい許してくださいなんでもはしないけどやれる範囲でやりますだから殺さないでえ!!」（土下座）

「はあ…… 最初からそうしていればよいものを……。」（呆れ顔）

と、目の前の茶番劇に呆気にとられていた三人は、ようやく目の前の状況を飲み込み口を開いた。

「え？なに？執事さんって天翼種フリーゲルの従者だったのか!？」

「あ、いえ。従者などではありませんが……」

「やはり、敬語を使うあなたを見ると気色悪うございますね。」（ウプツ）

「あゝあゝん？」（ギロリ）

「……。」（ニコツ）

「……。」（土下座）

「うん。上下関係がすっかりしているのはよく分かった。」

「ど、どれだけ頭下げてるんですの……?」

「さ、最近は下げてなかったのですが、どうしても本能部分でそうしろと告げられるもの
ですから……。」

「うええ……。」（吐き気）

「オイコラ」（ツッコミ）

「ふふ。」（含み笑い）

「……。」（土下座）

「……に……に……なにこれ、漫才?」

「ま、ちと天井しすぎてる気もするがな……。」

（ジ、ジブリール。今だけは敬語で話すことを許容してくれないか？王様の前だと仕事

柄こうなるんだよ。お前と話すときは普通に話すからさ……。」

（はあ…… わかました。この吐き気を催す気色悪さのせいで負けたらただじゃおきませんからね？）

（イ…… イエスマム……。）

と、お互いにヒソヒソと仲良さそうに話す二人をみて、ステフは心の奥で少しだけモヤつとした感情を抱いた。

「さて、それではゲームを始めるとしましょうか。」

「いや待って待て。執事さんはなんでそっちの陣営につくんだよ？うちの執事だぞ？」

装置を起動しようと手をかざしたジブリールを慌てて空が止める。

「それは私と親交のある人類種イマニエが彼しかいないからでございませう。」

「いや。そもそもお前に同伴者なんて要らないだろ。」

「おや？従者に早くご退場されてお困りになるのはどちらか…… お分かりだと思いませんが？」

「…… チツ。」

そう舌打ちしてジブリールを睨む空。確かにステフに囿役になってもらわなければ、集中してゲームに挑めない可能性が高い。

それを読まれているのが癪に触った。

「……なんで、シユウは、そっちにつくの？」

苦悶の表情を浮かべる空にかわって、白が応対し始める。

「……」

だが、なにも答えない。恭しく頭を下げるだけ。

（……むう……）

白が爪を噛みだす。それと同時に自身の頭をくしやりと搔く空。

そう。今回もつとも不可解な存在は、ジブリールではなくシユウなのだ。

単なる執事がなぜここにいる？なぜ親交がある？なぜ敵側に着こうとしている？な

ぜ何も語ろうとしない!?

「シユウ……どうして……」

そうステフがこぼすと同時、シユウが口を開く。『どうして……』の先を言わせないために。

「お嬢様。ご安心を。私はゲストであるあなたをお守りするためにここにいます。プレイヤーである御三方の邪魔はいたしませんので。」

（ジブリール。コールを。）

（命令しないでもらえますか？）

(今がいいタイミングなの!!は・や・く!!)

(……どきどきに紛れて殺して差し上げます。)

(やめて!お願いだから!)

ハア…… とため息をついて装置に手をかざし、起動する。

「それではこれより具象化しりとりを開始いたします。プレイヤーの方は手をかざしてください。」

そう、機械音声のように坦々と告げるジブリアルに対し、

「…… あんま納得いってねえが…… やるしかねえか。行くぞ白!」

「…… うん!」

そうして『くうはく』が手をかざす。それを見届け、頭を下げたまま告げる。

「このようなご無礼を承諾していただき、ありがとうございます。」

「いや、承諾したわけではないんだが…… ま、そっちがその気なら、乗ってやらなくもないと思ったまでだ。」

「…… でも、勝つのは、私達……」

「そう、俺ら『くうはく』に、敗北の二文字はねえ。」

「…… かかって、くるのっ!!」

そういつて獰猛な笑みを浮かべて睨む『くうはく』。

「……左様でございますか。ならば私も、あなた方の寛大な心に身を預けて、こちら側で全力を尽くすとしましよう。」

「それでは、エルキアのニューキング&クイーン、空様と白様、無力な人の身でありながら私天翼種フリユージェルに挑まれることに、敬意を表して一言。」

「どうか、死なない程度で……」

「楽しんで下さいませ♪」

「お楽しみ下さいませ。」

そういつて二人は獰猛な笑みを浮かべ、睨み返すのであった。

そんな中、ステフは四人を見つめながら、一人思い悩んでいた。

（どうしてシユウは、あちらについたんですの……？）

そして、『どうして……』のあとの言葉を思う。

（なんで……裏切ったんですの!!？）

その問いも答えも聞けぬまま、ゲームへと意識を奪われていった。

???????

「これで完成だっ! 『女性服』 っ!!」

「ひっ?! きゃあああああ!!」

「…… にい…… オメガぐつじよぶ……!」

空が高らかに叫んだと同時に。ステフ、白、ジブリールの服がなくなり、世にも有名な『超健全空間』が展開する。

「ぬはははは!! ここなら湯気さんも謎の光先生も働かなくていい超健全空間!! ほらどうだ執事さん!! いい眺め…… だ…… ろ……?」

そういつて、シユウに同意を求める空であつたが、シユウの様子がおかしいことに気付く。

「つておい!! ありや大丈夫か!! 首が180度しつかり回ってんぞ!!」

「…… そこの、ホラゲーより、怖い……」

「え!! シユウ!! な、なんでそこまでして……」

（こ、こんなことで裸体を見てしまったら、鼻が伸びて俺の顔が大変なことになるからだよっ!!）

そう、煩惱を物理という名の理性で無理矢理抑えることに成功したシユウは、ここで

重大な事実気付く。

（くっ、首が戻らねえ!!?）

あまりに無理に回したために筋肉が一時的に機能しなくなっていた。

（や、やばっ!!?息が……っ!!た、助けてっ!!）

息をするのも難しくなったため、手をじたばたさせて助けを求めろ。

「ハア……世話が焼けますね……。」

そういつてジブリールがシウウの頭に手をかけ、優しく（ゴリツ）丁寧に（グキヤツ）首を戻した。

「ふう……これで大丈夫でございませぬ♪」

「いや大丈夫じゃねえだろ!!?執事さん白目向いてんぞ!!?首間違えて360度回してねえだろっうな!!?」

「……く、首は大丈夫、だけどっ!!?」

「わ、わ……シウウ!!だ、大丈夫ですよ!!?ほ、ほら!はやく目を開けてっ!!」ペチペチステフがきつけに頬を叩いて必死にシウウを起こそうとする。

「……ハッ!!?お、お嬢様なんでこんなところに……ぐはっ!!?」

「きゃあああ!!?また倒れましたわ!!?どうなってるんですの!!?」

「……お、お嬢様……こ、これを……」

そういつてシユウは自分の上着とカッターシャツ、ネクタイをステフに渡した。

「……す、少なくともこれで……前だけは隠せると思いま……ガクツ」

「ちよ!!シユウ!!ま、また気絶しましたわ!!どうすればいいんですのお!!」

「と、取り敢えず服着てそつとしとけばいいんじゃないかな……？」

「……しろも、そう思う……」

「ハア……女性の裸体を見ただけで卒倒するとは情けのうございますね。」

そういわれて服を着てみたはいいものの、余計に扇情的な姿になったステフに、シャッターの音は鳴り止まなかった。

???????

「あべばブルベアあくらかチャルキュエラああ!!」

どうも。起きたらステフが発狂してクトウルフチックな奴らから逃げ回っていて、食われる寸前に私が背負って逃げ回っている、先程まで意識がご無沙汰していたシユウです!

まあ、今も結構食われる寸前なんですけどね!?!というか、しりとりで何言ったのか知らないが武器がわんさか落ちてるけど何一つ効きやしねえ!もつといいやつ置いてよ

！殺せなくて殺されちゃうう！！

しかも今度はステフが安心して気絶してるから姿勢が安定しなくて負担がでかい！！でも下ろせない！！何このジレンマ？

誰だよこんな鬼ごっこ企画したやつは！！「はいタッチ！お前餌な！」つつて食われる鬼ごっこなんざ誰がやるかあ！！

と、必死に逃げ道を探すシユウの目に飛び込んだジブリールの、こちらをみてニヤついている表情に直感する。

（お前がやりやがったな！！マジで殺しにかかっているんじゃないやねえよ！！そんなに命令されるのが嫌だったのか!?今すぐ土下座したいけど後ろのやつ先にどうにかしてくれお願います!!つつてヤバイ!!マジで食われる五秒前や!!は、はやく空さんあの言葉をお!!）

「…… さつきから無力だ脆弱だって、ちと癩に障るな。クリーチャー。」
（あ、やつといつてくれた!!助かったあ……。）

ステフを床に下ろし、肩で息をして体を休める。

（だけど、はやく空達のもとへ戻らないと……。）

「お嬢様…… お嬢様!!起きてください!!」

「…… はっ!!な、何ですの!?あの化け物はもういないんですの!?」

「それは後に！今は彼らのもとへ急ぎますよ！」

そういつてステフの手をつかみ、走り出す。

「え!?ちよっ!?シユウ!?どうしたんですのお!」

???????

「じゃ、そろそろ教育してやるよ……てめえの弱さを。たっぷり痛感しろ。」

そういわれて、ジブリールは顔をしかめて空を睨む。

「白、いいか?」

「……ん……」

二人の同意が終わったちようどにシユウとステフが息を切らしてやって来た。

「おくステフお疲れ!執事さんも護衛、頑張ってくれたみたいだな。」

「ぜえ……ぜえ……何で……こんな目に……。」

「お褒めに預かり光栄にございます。」

「いや〜お前らがヤバイもん引き付けてくれなきや、勝てなかった。」

キョトンとするステフと目を丸くする(ふりをする)シユウ。そして勝利宣言をした

空を睨むジブリールを前に、空。

「だからちよっど死ぬけど我慢してね♪」

「は!?!それってどういう...」

そういつて振り返り、階段へ駆けて行った『くうはく』を尻目に、シユウは空が使つていたであろう、テーブルに置かれた紙とペンをとり、2、3個の単語を書きなぐった。

「ジブリール。」

「何でしょうか?」

「やばくなつたらこれ使え。」

「私があなたの浅知恵を使うとでも?」

「まあまあ、本気でヤバくなつた時にヒントになればと思つてな。」

「使うことはありませんが、従者からの頼みなので受け取っておきましょう。」

「従者になつた覚えはないけどな。」

そんな二人の会話を聞いて、ステフはシユウがやはり裏切り者ではないかと、話しかけようとしたとき。

「なあステフ。何で俺がこつちについたかわかるか?」

「へ?」(い、今名前で...)

『あいつら』に一矢報いてみたいと思つてな。ちよつとした俺の我が儘だ。」

「原作知識持ちが『くうはく』に勝てるのか」

「まあ、それが届くか……。そもそも、使われるかもわからんが。」

「絶対に使われる。自身が考えた切り札がどこまで通用するか」

「でも、せつかく挑めるんだ。やってみたくなるだろ？」

「例え、この一手で原作が壊れるかもしれないけども」

「……。」

そう言っていたずらを企む子供のように、楽しそうなシユウの顔を、ただ黙ってステフは見上げていた。

その時、大きく跳び上がった『くうはく』から、幕開けの宣言コールが木霊した。

さあ、耐久ゲームの始まりだっ!!

「『リソスフェア』!!!」

転生者（『 』） v s . 転生者（シユウ）

『リソスフェア』… 岩石圏、岩圏とも呼ばれ、地球の地殻とマントル最上部の固い岩盤を併せた部分の総称である。（[Wikipedia](#)より引用）

… あれ？ マントルの一部復活すんじゃない？

… 細けえこたあいんだよ!!

「へ？ ひやああああ!!? 地面が！ 地面が！ 地面が！ すわああ!!?」

「うお!!? 吸い寄せられるっ!!?」

ステフはシユウの腕を握って、シユウは足をバタつかせて必死に姿勢を安定されようとしていた。

「ほう。 まだ殺す気でいらっしやいましたか…。」

地面がなくなり、引力に身を任せるしかなかった三人に対し、空が笑みを見せた。

だが、そんなことでは殺せないとジブリールは焦りの表情ひとつ見せず、余裕を保っていた。

「ふふ、 あと少しで終わらせようとしているようですが… そうはさせませんよ？

『朝』

(お嬢様!! 思いつきり息を吸って下さい!!)

(は、はいですわ!!)

おそらく次に来る言葉に先んじて、ステフに思いつきり息を吸わせ、自分も吸っておく。そして空が最小限の言葉で紡ぐは……

「……『酸素』っ」

その瞬間、全員に頭痛がはしる。

(あっ…… があっ!!? け、結構痛いな…… っ!!)

(…… っ…… 頭が…… 割れそうに…… っ…… !!)

激しい頭痛に呻く二人を尻目に、ジブリールはなお、余裕であった。『なんかした?』という表情でまるで空達をを煽っているかのように。

「はあ…… どこまであなたがたの命が続くかはわかりませんが、せつかくなのでもう少し楽しませてもらいましょう。『ソナタ』」

「……『種植え』」

(ほう? 意外と素直でございますね。なんとか足場も戻して続けたいところですが、ひとまず……)

「……では、『空^{エア}気』」

(フンッ!!)

（ふえっ!!）

その言葉と同時にステフの肩を抱き、顔を合わせる。減圧により更に頭痛が酷くなるが、そのシュウの顔は別の意味でものごく険しくなっていた。

（じ、循環呼吸しないとステフが死ぬ……い、今から行うのは救命活動!!だ、だから迷うなシュウ!!け、決して下心が有るわけではあばばば!!）

だが先程の表情はどこへやら。いきなり頭を左右にブンブン振るシュウ。

（こ、これは空達も躊躇なくやってたこと……お、俺もやらね……ば……?）

そうして取り敢えずお手本をみようとして空達の方に顔を向けたシュウの目に、驚きの光景があった。

「ふううう……」

お互いに息を吐き合う空達の姿があった。

（な!!循環呼吸していないっ!!?なんで!?時間短縮かなにかか!?)

循環呼吸していない空達に疑念を抱き、真意を推し量るが結局わからず……

（そ、それよりもっ!!）

そう思つてシュウはステフのほうに顔を向け、

(は、早く息を吐いてっ!!)

(え!? な、なん……)

「……『アトモスフェア』っ!!」

(くっそお!!) ガシッ

(シユウ!? …… かはっ!?)

いきなり抱き締めてきたシユウに驚きの感情を抱くも、同時に起こった口内の空気の膨張による危険信号に書き消され、口を開けて回避する。それと同時に気付く。息ができないと。

空間の空気が無くなったことではない。肺が膨張し、破裂して機能しなくなったという物理的要因からだ。胸に激痛が走り、尚も残った空気が内部から体を壊そうと膨張を続けていた。

(ぐ…… ぐおっ!!)

それをシユウが無理矢理抱き締めて、力で抑える。

(死なせちゃダメだ!!絶対につ!!)

その思いひとつで、ゲームルールの『ゲーム終了時に元通りになる』事を完全に忘れたシユウが、循環呼吸を読み違えたことに申し訳なさを覚え、その罪滅ぼしか、それとも別の思いか…… 必死にステフの体を、命を繋げようとしていた。

そんな、吐ききれずに肺に僅かに残った空気の膨張によって、背中が崩壊し、血が溢れていても、それでもと力を緩めないシユウの頬に、手が添えられた。
はつと目を開けたシユウの前には……

（もう、いいんですの。）

（お……お嬢様……？）

ステフがこちらを見て、口を動かしてなにかを伝えていた。

（あなたが守ろうとしてくれて私、嬉しいですわ。）

（でもそれで、あなたが傷つくのは違うと思うんですの。）

（だから……今はこれしかお返しできないですけど……）

（ありがとうございませす。ですわ♪）

そう慈愛に満ちた笑顔を向け、目を閉じて……

ーキスをしたー

(…!!)

その瞬間、シユウの全身から力が雪のように溶け、二人は体内に宿した空気の膨張という、物理的暴力に為す術も無いまま屈し…爆発した。

???????

(…リア充、爆発って、ホントにするんだ…っ!!)

…と、先程のラブシーンを台無しにするかのような感想を浮かべた白は、これを見た空がどんな顔をしているか見てみようか様子伺うと…

(…むう…)

そこにはジブリーの方を向いて動向をしつかり観察し、勝つことしか考えていない空の姿があった。

(…:… そんなんだから、18年、童貞なのっ!!)

そんな明らかに極論な理論を頭に浮かべ、空の腕の中に収まり直り、静かにゲームの決着を待つことにした。

???????

(なっ?!?!このままじゃ守ることもっ…:…)

空が見せた最後の切り札。『クーロン力』。それがもたらす『ハイパー・ノックアウト極超新星爆発』という後ろから迫る死に、このゲーム中で初めて焦りの表情を見せた。

(これに耐えられるもんなら耐えてみろよフリーユージェル天翼種っ!!)

その空の獰猛な笑みに、悔しさと同時に畏怖、ましてや尊敬の念を抱きつつ、死に背を乗せて眠ろうとしたとき…:

『まあまあ、本気でヤバくなった時にヒントになればと思つてな。』

(!!)

そう。あの男の言葉を思いだし、咄嗟にその紙を取り出す。そして、三つある単語の

内の一つに、『く』から始まるものを見つけ……

(本当に凄まじい種族ですね……)

そう微笑をたたえて、その走り書きを空へ突きつけた。

(なっ!!?まだ何かやるってのか!?)

先程までの、勝利を確信した表情は消え失せ、一気に焦りへと転じた。

(さあ、幕引きショーダウンといきましょうか♪)

そのメモにかかれていた言葉は……

『空虚』くうきょ

それにより、ジブルールと空の間の空間が消える。無いものが現れ、有るものが消える。このルールで、空気も何も無い空虚な空間は消え失せ、二人の距離を零にした。

(いらっしやいませえ♪)

そして空の目と鼻の先に、死をもたらす天使悪魔が現れた。

（ま、まずい!! 距離を詰められたら…: つ!!）

（私が後ろへ投げれば、終了にございます。）

そう。距離さえ詰められれば、ある程度自由に動けるジブルールは、空達との位置関係を変えられるのだ。

（私をここまで追い詰めたのは誉めて差し上げます。ですが、ここまでなのでしょうね。）

（なんでだ…: なぜお前がメモなんか持つてる!!? いつ、どこで書きやがったつ!!?）

そう。未知とは世にも珍しい、素晴らしきものであると同時に、恐怖を携えた物であると。

そう教えてやろうとした空が、逆に教えられるということに衝撃を受け、なにもできずに、ただ背に手をまわされ、死の炎に放られる…:

…: かに思えた

（背中が無い!!）

そう。お互いの体は既に半分以上消滅していた。

（な、なんで…: つ!!?）

そうして辺りを見ようと顔をあげたとき、意識は白い光に葬られた…:。

???????

「はあっ…… かはっ…… な、何が起こったんだ!!?」

ゲームから現実に戻り、生き返った空がそうこぼす。

「…… しろは、ずっとうつむいてて、分からなかった……」

「はて? 距離を詰める言葉だったはずに…… いますか……?」

そう、勝敗の結果も見ずに、不可解な現象に三人はそれぞれの感想を述べる。限界まで思考していた頭は、疲労のためか今は空回りをする。

そんな彼らを見て、落ち着かせようと一人の執事が歩み寄る。

「ど、どうなさったのですか?」

「どうもこうも、俺達が勝った理由がわからねえんだよ。」

そう空が指し示す先にあるゲーム盤に表示された勝者は…… 『くうはく』 だった。

「…… なるほど。ジブルールは最後、どの言葉を使ったのでしょうか?」

「どの…… ってことは、あのメモお前が書いたのか!?!」

「ええ。そうですが?」

「うわー。マジか……。え? でも、いつ渡したの?」

「あなた方が振り向いて走り出したときに。距離を離そうとするなら近づけばなんとか

なるのではないかと思ひまして、いくつかそれに関するものを……」

「あー…… あん時かよ。というかよくジブリール使ったな。他人の知識だろ？」

「…… ええ。まあ、少し…… いえ、かなり癪でしたが、「おい。」こちら側の陣営でしたし、ルールに知識の受け渡しは設定してなかったのです。」

「かあーっ！マジで観客席から乱入してくるとはな！してやられたぜ……。」

「…… 話を戻しましょう。どの言葉をご使用で？」

「『空虚』だ。」

「…… あー…… それになりましたか……。」

と、必ず切ると踏んだカードを、さも偶然切られたと言うように台詞を吐いて、回答を示す。

「それなら何も無い空間が消えてなくなりますから…… 他に何かがあつて近づいたのでは？」

そういわれて考え込む三人。そして全員が答えにたどり着く。そして、なぜ空達が勝つたのかを。

「…… ま、まさか……。」

「『ハイパーノヴァ極超新星爆発』の距離まで零ゼロになつて？」

「私と空様の間にいた白様が最後まで生き残っていたということに……。」

そう、何も消えた空間は空とジブリーの間だけではない。空とジブリーの背後の空間まで消えてしまう。つまり、極超新星爆発ハイパーノヴァは二人の背後に回り込み、包み込むようにして爆ぜたのだ。

答えにたどり着き、はあーと息を深く吐いた三人はそれぞれに感想を述べる。

「まつさか、最後の最後でシユウにしてやられるとはな！」

「……シユウ、凄い……」

「しかし、結局は敗けにございますけどね。」ハア

「だが最後に全てをかっさらう、まさに弱者らしい戦い方!! 気に入ったよ!! シユウもこつちに来ないか!？」

そう、新しい遊び相手を見つけたかのように、無邪気に笑う空を前に、恭しく頭を下げ、

「お褒めに預かり光栄にございます。あなたがたの執事として、尽力いたしましょう。」

「オエエ……」(吐き気)

「オイコラそこお!! せつかくのシリアスを台無しにすんじやねえよお!!」(土下座)

結局は天井に笑って終わるのであった。

馬鹿と天才の関係

ご無沙汰しております。チュウです。

……失礼しました。シユウです。

前回、ジブリアルとの具象化しりとりに巻き込まれ、やるんだつたら昔考えた『こうしたら勝てたんじゃね?』と、作品に突っ込んでいた頃の方法を試してみたのですが、結果は敗北。

まあ、これで空達は無事ジブリアルというチップを手に入れ、東部連合に挑む為の識者を手に入れたわけだが……

まあまあ、落ち着きたまえ。皆が聞きたいのはシナリオ通りにいったことではないだろう。

そう。ステフとの関係の変化のことであろう。

ふふふ。前回のシリアス(笑)回で唯一のラブシーンであるステフとキッスした私ならこの先もう、何も怖くない。

と、思っていたのだが……

『お、お嬢様？大丈夫ですか？』

『へ？あ、いつの間に終わってたんのですの？それでどちらが勝ちましたの？』

『……ん？』

『ど、どうしたんですのそんな脂汗流して!?!』

『えっ…… えーつと…… どこまで覚えておいで？』

『じ、地面がなくなった辺りから記憶がないですわ……』

『……』 『ボタン』

『シ、シユウ!?だ、大丈夫ですの!?!』

はい。覚えてませんでした。

あれですね。極度の恐怖や痛みが起こると記憶を忘却したり封印したりして、意識しないようにする防衛規制ってやつ。それが働いちちゃった感じですね。
……。

防衛規制なにしてくれちゃってんの!?!

いや確かにあの接吻はつり橋効果ならぬつり橋降下効果だったけど!!自分も予想してなかったけど!!良いじゃん。棚ぼた的な感じで良いじゃん!!良かったじゃん。記憶残してくれても良かったじゃん!!なんて事してくれてんだよステフの本能!!あれか？

『まだ貴様にステフは渡せん。』って本能やら背後霊やらが言ってるのか!? 絶対その背後霊先王だろ!!

ああフォルメリア様よ。どうして我らが愛を救ってくださらないのですか…:

『救つてもいいけど、力を別に注ぐことになるから、魂維持できず解放されて死にますが、よろしいですか?』

あ、じゃあいいです。まあ、偶然の惨物だし? 仕方無いつちや仕方無いだらうけどさ…:

「なあ、シユウが物凄く悲しそうな顔しながらお茶汲みしてんだが…:。」

「はて? 思い当たる節はございせんか?」ニコッ

「…♪」

はい。現在、私はエルキア大図書館に引きこもって本を読み漁る空達のお茶汲み係をやらされています。原作ではステフのポジションですね。まあ原作ステフは王城の政治とお茶汲み両方をこなすという重労働を課せられていたんだけど…:。それ思うと尊敬に値するレベルだわ。

んで、以前もステフのポジションに着いちまって『ステフもつと出せやあ!!』と、お怒りの方もいると思うが、言い訳を少しだけ聞いて考えてほしい。

原作でも思わなかったらうか?

『それジブリールでよくね?』と。

原作ならステフを物語に介入させるために、この政治家兼御茶汲師として仕事してたんでしようが、今回は完全にサイドになっちまつてる。ステフを描写するなら俺を補佐としてあつちにおいて、お茶汲みをジブリールにさせればいいじゃん。

じゃあなぜそうしないのかという人もいるだろうが、まあ待つて下さい。これには訳があるんです。

時を遡ることステフが王政を任せられジブリールに転移させられた時になる。

???????

「……ん?なぜ私はここに残るのですか?」

「なぜって……じゃあ、食事の用意は誰がしてくれるんだ?」

「いえ、てつきり私は、お嬢様の補佐を任せられるのかと思ひまして……お食事はジブリールで事足りるか?……」

「……あ、それもそうだな。んじゃ、シユウもあつちに送つてくれないか?ステフだけじゃ頭や首は回つても、体が持たんだろうし。」

「……いえ。申し訳ありませんがマスター。それはできません。」

「「へ？」」

予想外の台詞に疑問が声に出てしまった三人に向け、ジブリールがカップを渡した。

「これは私が先程飲んでいたものと同じ物ですが、一度味見をしてもらってもよろしいでしょうか？」

「…… あっ……。」（察し）

何かを事前に察知した空と白は、握ったティーカップを口に近づけずに硬直していた。

「どれどれ味は…… ブフウ!!?につがっ!!?なんですかこれえ!!?」

何も察せなかったシユウが、飲んだお茶を勢いよく吹き出す。

「それはお茶というものにございます。」

「こんなのをお茶とは言わねえよ!!?って空様これを飲むのは危険…… っで飲んでいらっしやらねえ!!?なぜそのような悟った顔をしておられるのですか!!?」

「あ、いや、ジブリールと勝負する前の賭ける物で異世界の書四万冊を提示したときに、お茶吹っ掛けられたんだよ。」

「その時はご褒美だと思っただがな?少し味見をし「…… ギロリ。」…… てないんだが、香りがやけにきつくて、もしかしたらと思っただけでシユウに毒味してもらったら案の定だったって訳。」

「そ、それなら早く言っていただけなかつたのでしょいか……。」

ああなるほど、そういうことか。いや、薄々は気づいてただけだね。おそらくジブ
 リールは料理などができないわけではないが、味覚が異なっているのだろう。過去に出
 した俺の料理への感想が、大体食感に偏っていたのによく納得がいった。

「我々天翼種^{フリュウケル}は、食事を必要としないゆえに、味覚が人類種^{イマニテイ}ほど発達してありません。」
 「だからってこんな刺激の強いやつ飲まなくていいだろ……。」

「え？以前から親交のあるシウウなら知ってたと思つたんだが……。」

「あ、私ジブリールからお茶をいただいたことはございません。」

「図書館を勝手に使う図々しい猿に、もてなしの提供など致しておりません故。」

「……なあ、なんでお前ら十年もこの関係続いてんの？」

「ジブにやんが解放してくれないからにや。」

「ほう？よっぽど死にたいようでございますね♥？」

「そそそ、そうにや!!空様がジブにやんにうちに対する盟約解除の宣言を命令してくれ
 にや!そうすれば晴れて自由の身にや!!さあ早くするにや!!こんな天使か悪魔かとも
 呼べない天翼種^{フリュウケル}の盟約の元で縛られるのはもうごめんにや!!」

「え?盟約で縛られてんの!?それただの奴隷じゃね?」

「相互同意の元で決めたものでございますれば、奴隷とは程遠いでございますね。」

「いいやーもう図書館に寄る必要のないのに、どんなに頼んでも盟約破棄が許されないにゃ!!これ無理矢理縛られてるにゃ!!あれにゃ!必要ないっていつてるのに生活用品送りつけて金払えって言うってくるやつらと一緒にゃ!!」

そう言われて、ほんの少しだけジブリールの表情に陰が射す。土下座しているシユウはもとより、空もそういう感情はわからないのか気付いてない様子。だがやはり、女の子同士なのか、それともそういう感情を理解しているからなのか…… 白は、シユウの前に歩み寄り、

「し、白様!白様が叶えてくれるのですか!?!」

「……ジブリールの、盟約破棄は……」

「……」ゴクリ

「……だ……めっ♪」

「……」(↑顔面蒼白)

そう言われ地面に突っ伏したシユウ。それを慰めるように空。

「うん。その、なんだ。盟約の詳しい内容は後で聞くから…… あれだ。女心はわかんねえけど、わ、悪いようにはならんからさ……」

そんな二人を遠目で眺めている白に、ジブリールが恭しく頭を下げ、

「ありがとうございます。白様。」

「……これくらい、別に……」

「そうでございませうか。」

少しだけ二人の間に沈黙が走る……が、白がそれを破る。

「……ジブリールは、シユウとの関係を、変えたくなかったんでしょ？」

「はて？ そのように思った覚えは……」

「……うそ……」

「……。」

白の言葉に目を見開き、自身の心情を振り返つてみるが……

「……申し訳ありません白様。我々天翼種フリーユージェルは人類種イマニテイのように心の機敏をとらえられる

ようにできてはいないので……うまく伝えることができません。」

「……そう……」

ジブリールには先程の心情が、よくわからなかったと表現することしかできなかった。

でも、白はそういうことだと確信する。なぜなら自分も同じ状況になっても、あんな悲しそうな顔をするだろうか。

なんだかんだで十年間も一緒に居てくれた。孤独から救ってくれた人が、どんな理由

であれ、離れていくのは辛いことだろうから。

二年少ないけど、自分もこの八年という時間が、にいが一緒に居てくれたという時間が、かけがえのない物であるように、それは悠久の時を生きてきたジブリールにとつても……

「ですが、それではマスターや白様以外の人物にも気を寄せているということになります。やはり盟約を破棄すべきでは……」

と、先程白に盟約の破棄を禁止させられたため、奴隸としての示しとして、暗に盟約破棄の許可をもらおうとするが、

「……ジブリールの、好きにするといひ……」

と、あっさり許可を出した白に驚くジブリール。

「……別に、”誰か”とジブリールの關係を、変えるために、こんなことした訳じゃないから……」

「……ありがとうございます。白様。」

そう言つて動かないジブリールを見て満足した白は、適当な思出話を聞きだして、会話を花を咲かすのであつた。

???????

一方エルキア王城。国王が留守を決め込んだため、ステフが代理人として王政をこなしていた。

「な、なんでこんなことをやらされてるんですの……。」

そんなふうには、目の前の山積みの書類を捌きながら王の行為に悪態をついていた。

「で、でも、天翼種フリーゲルを手に入れるという偉業を成し遂げたのですから、ゲームの腕は確か
 なんでしようけど……はあ……。」

と、クラミーやジブリアルとのゲームを思い出しながら、どうにもやるせない気持ち
 になっていた。

「あら？なんですかこの記憶？」

ふと、ジブリアルとのゲームで終盤に差し掛かった辺りの記憶を掘り起こしてた際、
 シュウの頬を掴んで顔を近づけるシーンが想起された。

（ふ…… え!!? な、なんなんですかこの記憶!!? こ、これじゃまるで私から……!!?)

そういつてなお、近づくと感覚に頭を支配され、

（ひゃあつ!!? いけないですわ!!? 危ないですわ!!? と、というかこんなことをするなん
 て…… しかも自分から迫ってるなんて!!? ちよ、いけないいけないいですわあ!!?)

ゴス！ゴス！

「きゃあ!? お、お嬢様!? どうなさったのですか!!?」

「お、お嬢様が気をお触れにい!!?」

「た、担架だ!! 担架と軟膏持ってこい!!」

妄想(?) から逃れようと机に頭突きをかますステフと、狂乱に陥った彼女に混乱する執事やメイドの叫びが王城に木霊した。

乱入クエスト（中断不可）！！

こんにちは。私ステファニー・ドーラですわ。

今は、あの鬼畜王空と白に代わって、このエルキアの政治の舵取りをしていますの。あの兄妹はこのくらい何なくこなせそうなんですけど、自分達の欲望のために丸投げしたに違いないありませんわ！

まあ、家系との繋がりとかは私がよく知っているのは自負できるんですけど、それも、王になったからにはキッチンと仕事をしてほしいですわ！！

…… そう思いながら周りを見渡すと、自身の利権を得ようとする貴族と、二人の間を右往左往する執事やメイドがいた。

この光景を見て少し表情を暗くするステフ。

（なんだか独りでやつてるようで、寂しいですね……。どうして、シユウが居てくれなのか、あの二人になにか考えがあるんでしょうけど……。）

そんな、自分と仲のいい人と一緒にいれないことに、心の底で不満をにじませていた。

「…… ではこの取り決めで宜しいでしょうか？」

「ええ。ではそのようにしてもらえよう、期待しておりますぞ。ドーラ公爵。」

「はあ……。」

貴族との会談を円満に済ませ、次の来客に備える。空達の改革により、利権を求める貴族たちがこぞってやって来ているのだ。

しかもゲーム最強の王がいらないなら、余計に話が通りやすいと踏んでいるものだから、話は長いわ高圧的だわで、ストレスが半端ではないが、人間関係の対応は耐性がある自分がやるしかない、気を張ってやっていった。

「次の方どうぞ。」

また来る貴族たちとの長話に備えて、気を立てて待ち人を呼び寄せると……

「……さて、じゃあ要求とこうかしら。」

「なっ!? 貴女は……!!」

そう言いながら扉を開けてやってきたのは、黒装束のような服を身に纏った少女。クラミー・ツエルだった。

???????

はい。ご無沙汰しております。シユウです。

前回はジブリーールとのゲームによる後始末回のものになり、今回はおそらく東部連

合に乗り込むまでの話になるのではないかと思われれます。

まあ、あくまで予想ですけど。

そんなこんなで今日も今日とて、お茶汲みをやっていたのですが……とある事実
気づいて空を訪ねてみる。

「あの…… 申し上げにくいのですが空様。」

「ん？どしたのシユウ？」

「いえ…… その、この図書館に泊まり込んで二日経つたではありませんか。」

「そうだな。」

「それで、空様がお食事した回数？」

「2回だな。」

「それを踏まえて申します。私ここに必要ですか!？」

そう。この二日間、ジブルールは当然として、この兄妹、必要最低限の食事しかして
ないのである。となれば、私がここにいる大きな理由は、言葉通りのお茶汲みしかない
わけで？そんな頻繁にお茶なんて飲むもんでもないため、かなりの間が暇となってい
る。まあ、空たちの質問にも答えることはあるが、大半はジブルールが答えるし、その
暇を潰すのが主に……

「おや？私のストックしている質問に答えるのが億劫になりましたか？」

「いんや。そう言うわけではないんだが……。」

「ならいいではございませんか。さあ、次は妖魔種デモニアの生態系についての……。」

「はあ……。」

そう。お茶汲みよりもジブリールの抱えた質問大全集に答えるのが主な暇潰しになっている。大全集とはいえ、この前溜まりに溜まった質問は、この二日間で答えあげたんだが、やはり数週間で千の質問をぶん投げてくる天使あくまなもんだから、一日に十や二十の質問なんてざらに出てくるらしく、今日の午前十時くらいまでにもう十五の質問を受けてるよ……。あの質問厨オールドデウスの神霊種の子供かなにかになってんぞ……。

というわけで、自分の仕事もそんなになさそうなので、ステフのところへ行こうと空に提案する。

「失礼ながら空様。お嬢様のことが気になってまして……。お嬢様のところへ向かってもよろしいでしょうか?」

「あ、そういや任せたまんまだったな。」

思い出すかのように言うのね空……。

「お茶ならとっている分をジブリールに注がせて、お食事などのご用があればお呼びいただく形で、私の仕事とさせてもらいたいのです。」

「あ、ああ。構わねえが……。そんなに心配か?」

「何事にも人は多い方がよろしいです。そちらは数を補える程の質を持つておられるので、その心配は無いのですが、あちらは政治の事となつて舵を取れるのはお嬢様だけので……。」

「んー。ま、そうかもしれないな。白もそれでいいか？」

「……うん……だいじょうぶ……。」

「ならジブリアル。シユウをステフの所に飛ばしてくれ。」

「……かしこまりました。」

「な〜んでそんな嫌そうな顔してるのかにや〜？な〜んで〜かにや〜。」

「マスター♥？この猿の首だけ撥ね飛ばしてもよろしいでしょうか♥？」

「怖えからやめとけ……。あ、そうだ。これ渡しとく。」

そういつて空はシユウにタブレットPCを渡してくる。

「これの操作方法は俺たちの使つてるところ見たからわかんたろ？」

「え、ええ。少しは。」

「じゃ、政治に役立ちそうなのはこれ。農業はこれ。文字の学習とかの教育はこのあたりの資料を参考にしてくれ。」

「あ、あの……申し上げにくいのですが……。」

「ん？なに？」

「この文字読めないのですが……」

「あ！そうだった!!これ日本語だった!!」

そう、タブPC内の資料は全て日本語で書かれている。この国で使われるのは発音は同じでも^{イマニテイ}人類種語だ。まあ読めはするんだけど、バレる訳にもいかんしな。ここはとぼけておこう。

「ど、どうするかな……ジブリールは付いていて欲しいし……」

「……に……」

「ん?どうした白?」

「……この前作ったアプリ、使わせるといい……」

「ああ、あれか!よし、シユウ。このアイコンを押しだな……」

そういつてアプリを立ち上げ、日本語の文章をコピーしたものを張り付けて『変換』のボタンを押すと……

「あ、^{イマニテイ}人類種語になりましたね。」

「そうこれ、発音が同じってことを利用して、日本語の読みの部分を抽出して^{イマニテイ}人類種語に変換できるアプリを作ってたんだよ。」

「……ちなみに、しろがつくった……」

「……でもどうしてそんなものを?あなた方はもう十分なくらい^{イマニテイ}人類種語を習得して

いるのでは？」

「あー。お褒めに預かり光栄なんだが、白はそうでも、俺はそうでもないの。やつぱ慣れが必要なんだよな。知識のすり合わせとか、割とすつきり出来る訳でもないからな。その為に白が作ってくれたんだよなー♪」

そういつて、わしやわしやと白の頭を撫で、猫のように目を細めて幸せそうな顔をす
る白。

それを見て羨ましく思ったのか、シユウがジブリアルにの頭に手を伸ばしてみる。
するとジブリアルが膝をついて頭を向けてくるではないか!!

(え!? いいの!?ほんとに触るよ!?何の心境の変化か知らんが、これはチャンス!!)
と、おそるおそる手を近づけて、光輪の辺りまで来たところで……

手が止まる。

それも盟約で触らせないかのように『ピタアツ!!』つととまる。

「ん?」

「おや?撫でていただけなのでしょうか?」

そういつてグイグイ頭を寄せてくるが、手は触れようとしない。

「むう……意地悪にございますね。」

そう頬を膨らませてジト目するジブリアルだが、でも手は触れない。

（あつれー？相互同意ならよかつたんじゃないっけ？）

なぜ触れないのか思考し、ある仮説にたどり着く。

「なあジブリアル。その頭の輪っかに触れるとどうなるのかな？」

それを聞いた瞬間。ジブリアルの恍惚としていた表情が、いたずらな笑みに豹変し、「高濃度の精霊に触れたことにより手が蒸発しますが、それでもよいなら、どうぞ撫でてくださいませ♥？」

そういつて、光輪をまるで草刈り機のようにグルグル回転させ尚も近づけるジブリアル。

「害意しかないじゃないですかやだー!!？」

そんな二人を見かねて空が切り出す。

「……ほれ。ステフん所いくんだろ？ジブリアル送ってやれ。」

「はあ……。では。」

不服そうな顔をしてジブリアルはシュウの服の襟を掴み、まるで粗大ごみを扱うように転移の穴に放り込んだ。

???????

「な…… 何であなたがここにっ…… !!?」

「なぜって…… ここを制圧しようと思っっているからに決まっっているじゃない。」

「せ…… 制圧!?!」

予想外の来客に、ステフの思考が一瞬とまる。しかも制圧という、まさしく侵略行為を行ってきたクラミーの意図をわかりかねていた。

「そ、制圧。今この王城の指揮権を持つ貴女を押さえれば、少しの時間でもうこの国は私の手に落ちるわ。」

「あ、あなた…… まだ諦めていなかったんですの!?!」

「そうよ? 諦めるわけじゃないじゃない。他の種族はあなた達のバックには気付いてないけど、私たちはもう知ってるもの。気負う必要がないわね。」

「ま、あなた達の行動は監視させてもらっていたけど、ここまで無防備の状態をさらしておくなんて危険よ?」

そうニヤリと笑ってステフをみやるクラミー。まるでもう勝っているような態度でいる彼女に、ステフは冷静に一つの札を切る。

「でも、私とその権利をかけた勝負を受けなければいいだけですわ!」

そう。貴族との会談でも同じように、ゲームの腕がそれほどでもないステフは、ゲームでの挑戦を拒否すればいいだけである。だが……

「わたしがその穴を埋めてないとも？」

そういつてクラミーが指を鳴らすと同時に、目の光を失った大臣たちが入ってきた。

「勝負を受けないとこの国の政治は滞るわよ？それでもいいならいいけど？」

「なっ……!!? あ、あなた一体何を……」

「大臣達にゲーム吹っ掛けて負かしたただけけど？こいつらもそこらの貴族と一緒にね。勝ったら甘い汁吸わせてあげるって言つてやったら、簡単にゲームにのつてくれたわよ？浅ましい事この上無いわね。」

「くっ……。」

歯を食い縛り、今の状況を整理する。だが、どうしても解決策が思い付かない。

（このままじゃ、ここは乗っ取られて……）

以前空に教えてもらったシナリオ通りに、クラミーが手を組んでいる森^エ精^ル種^フの傀儡政
府になってしまって、エルキアが終わってしまうと思つたその時、

ズザアーツ!!

つと、床に顔面を引きずらせながら部屋に乱入者がやって来た。

「え!?!だ、誰ですの!?!」

「あら？あなたは……」

「いたた……少しは接客術教えるべきかな……」

素晴らしいながら立ち上がったのは、執事服のシユウであった。

素晴らしい執念だ…

「シ、シユウ!? どうしてここに……」

「へえ、こんな時に来るなんて、まるで救世主か何かかしら?」

「へ? 救世主? 一体何の事…… って、何でクラミーがいるんだ!?!」

「それは、かくかくしかじか。」

「まるまるうまうま、ってやつか……」

「何で通じてるんですの……」

「とまあ、そういう訳でここにいるんだけど、その反応を見るに、偶然ここに来たということかしら?」

「あ、ああ。その通りだ…… ウオツホン! その通りでございます。」

「あら? 気を使わなくていいのに。」

「では、クラミー様はこれよりお嬢様に、この王城での政治的指揮権を奪う為のゲームを行うと?」

「ええ、そうよ。でもその前に用事ができちゃったわ。」

「よ、用事って何ですの……？」

ステフの質問にクラミーは何も答えず、シユウの方へ歩み寄る。その顔は、何かを企み微笑む表情をしていた。

……が、一変。

「私の胸、あれから5cmも大きくなったの!!」

「……は!？」

嬉しくって無邪気に笑う子どものような表情に早変わりした。

「(ぎゅ)、5cmって……え?マジ?」

「本当よ!教えてもらったあの日から、毎日欠かさずしていたらここまで膨らんだのよ!!」

それを聞いて、クラミーの胸をチラ見すると、本当に若干だけだが、胸に影ができていた。

「え?あれからって……え?一月前から?」

「そう!通算ですよ!!毎日メモだつてとつてるんだから間違いないわ!!」

「お、おいおい……流石にそれは……。」

(本当なのですよー)

(こ、この声は、あの時の森精種^{エルフ}!?)

(そうなのですよー。あれから毎日、嘘もつかずに『小さくなれー小さくなれー』って念じながら、クラミーのお胸のサイズをはかる、フィール・ニルヴァレン、なのですよー♪)

(相変わらず友の胸に対して辛辣だな…)

「ふふん。疑うのも無理ないわ。でも、私の親友が嘘なんてつくはず無いし、この目で確認できてるから。」

「た、確かにな。」

「でもここ最近、妙に大きくなるのよね。どうしてかしら?あなたならわかるかしら?」

「アー。ソレハチョットワカラナイナー。」

「そう…。」

(それはー。私が教えてもらったのをしっかり守ってやってるからなのですよー)

(どうして貴女についた嘘もホントになってるんですかね?)

(知らないのですよ。でも…クラミーの成長率が下がっただけで、まだ成長を続けているのですよ!!;忌まわしき脂肪を全く落とせていないのですよ!!)

（少しは友の夢を阻害するという事に罪悪感を持つかと期待したけど、無駄だったようですわね!!）

（あ、あのつるぺたの魅力を知らないから、そんなことが言えるのですよ!!あのまな板みたいにはスベスベな胸が織り成すさわり心地は上質な絹を撫でるようで、それがもたらす余韻は天にも昇るものなのですよ!!顔なんてあてようものなら、心地よい心音と体温を直に感じられて、生命の神秘を感じられる神の芸術品が、無駄についた脂肪に邪魔されるなんてそんなこと……）

（だあああああ!!やかましいし知らんわあ!!そんなクラミーの胸のさわり心地を誰がレポートしろつつつたよ!?!とにかく……）

「そうだわ!!人類種に伝わる豊胸術、『誰かに揉んでもらう』を試せば効果が上がるかもしれないわ!!」

―そのとき、惑星の自転が止まった―

「ふあ!?!な、何言つて……」

「さあ、善は急げよ!!さっさと揉みなさい!!」ガシッ

「うわっ!?!腕掴むなっ!!ちよっ、やめっ……ヤメロオオオオオ!!」ブンブン!!

「え?どうして拒否するのよ!?私の夢の応援くらいしてくれてもいいじゃない!!」グググ…

「やり方が色々問題だろ!?何でそんな伝承信じてんだ!!そんなんで胸が大きくなるわけないだろ!!」ギギギ…

「胸のサイズ測るだけでここまで効果があったのよ!!巨乳どころか爆乳目指せるわ!!」グイグイ!!

「そ、そうだ!!他人に揉まれると胸を取られるんだぞ!!お前の夢を奪ってしまおうかしらんぞ!!」プルプル…

「親友の場合はそうかもしれないけど、異性の場合はまだ試してないわ!!しかも、『豊胸の使徒』様に揉んでもらえるのよ!?試す価値は十分にあるわ!!」ワツシヨイ!!

「ねえよ!!」

(とかいうかいつまで寝てんだフィー!!?は、早く起きてなんとかしろ!!)

(クロス: : はっ!!?な、何があったのですか!!?)

(クラミーが胸揉ませようとしてくるんだよ早く止めてくれ!!)

(な、何してるのですかクラミー!?ま、まさかあなたがけしかけて…)

(ちっげえから!!そんなことしねえから!!)

(なっ!!?クラミーのお胸の魅力が無いというのですか!!)

(触って欲しいの!?! 触って欲しくないの!?! どっちなんだよ!?!)

(触って欲しくないに決まってるのですよ!! さあ、あの猿を駆除するのですよ!!)

それと同時に大臣達の目に火が灯り、シユウを殺そうと迫ってくる。まあ、盟約によつて動きは止められるが……。

(本当に殺しにかかつてどうすんだ!?)

(ク、クラミーの胸は私のもの…… 私のものですよつ!!)

「えへへ…… ゆ、夢いっぱい胸がやつと…… やつと……」サキツポタマデ……

「二人とも発狂していらつしやるう!!」アトチョット……

「お、男に触られるのは癪だけど、あんたになら…… / / /」

バアンツ!!

「(?!?)」

突如として起きた破裂音に思考の停止を余儀なくされた三人は、生命の危機を感じ、咄嗟に根源の方へ顔を向けると……

「さ、ゲームを始めましょう? これが目的で来たんですのよね?」ゴゴゴ……

トランプを見せつつはにかむステフは、天翼種フリーユージェルすらも凌駕しているのではと思える程の、途方もない量のどす黒い殺意を放っていた。

(「あ、死んだわコレ。」)

そうして三人は意識を手放した。

???????

ご無沙汰してます。シユウです。

あの後ステフとクラミーがポーカー勝負をしたのですが、ステフの圧勝に終わりました。

え？魔法？クラミーが勝利報酬に”胸揉み”を要求した時点で察してください。

「い、いつか胸揉んでもらうんだからあ!!」

と、端から聞けば痴女にしか思えない捨て台詞を残して、王城を後にしたクラミーを見送ったんだが…

「♪」ゴゴゴ…

ステフはご機嫌斜めのようにです。顔は笑っているが目が全然笑っていない。対面し

た貴族が腰抜かして涙目で出ていくんだもん。仕事どころじゃないよ。恐怖政治になっちゃってるよ。ゲーム仕掛けられたときに切るトランプの音が山姥の包丁研ぎの音にしか聞こえないもん。そりゃ逃げろわ。

ど、どうしようか。空に惚れさせられる前に調子にのって好感度あげたのがいけなかったのか!?だ、抱き締めたりしたらあるいはあばばば……!!

「ねえシユウ?」

「は、はい!!?」

「何でシユウはクラミーとあんなに仲良いんですの?」

「へ?いや、仲良く見えてなんて……」

「何ですの?」

「……は、話しやすいからかなあ……? (主に胸の話で)」

「へー。ふーん。ほー。私を差し置いてですの?」

「ヒイツ!」

「シユウ。これから私のこと、名前で呼んでくれたら……その……ゆ、許してあげなくもない……ですわよ……?」

「…へ？」

「だ、だから…名前…うう…」

… あ、自分で言ってる恥ずかしくなったな！フフン。これはチャンスだ！ステフをステフと呼ぶことなぞ私にとって容易たやすなことよ！！

「わ、わかりました… えーっと、す、ステファニーお嬢様？」

「お、お嬢様は要らないですわ！！」

… あ、あれ？ いざ本人を前にして言うときメチャメチャ恥ずかしいぞ？

「そ、それでは… す、ステファニー？」

「ーっ！！ な、なんか違う気がしますの！！ もつとこう、親しみを込めた呼び方で…」

え!? あれ!? もう心臓がヤバイんだけど!? こ、ここここれ以上は…

「す… す… す… す…」

「…」ゴクリ

「す、ステファアあああああああごめんなさいお嬢様あああああ!!!」ダツ!!

「あっ!! シ、シュウ!!?」

す、すみませぬお嬢様あ!!こ、この執事めはまだそのような度胸はござりませぬううわああああああんっ!!

???????

「い、行っちゃいましたわ……」

あまりの恥ずかしさに逃げ出したシユウを眺めていたステフは、伸ばした手を自分の頬へと当てる。

(で、でも、後少しで言ってくれそうでしたわね……)

そう頬を赤らめながら、互いの関係の進展を噛み締めていた。

(……早く、お互いに名前で呼び合えるような仲になりたいですわね……)
そう空想を膨らませているステフの前に、空間の亀裂が入り、穴が開く。

「おや? ドラちゃんだけでございますか?」

「へ? ジブリール!」

「……はあ。あの猿を探すのが少々手間ですが、まあいいでしょう。ドラちゃん。これ

に掴まっておいってください。」

「え？は、はいですの。」

そうして服の一部であろうか、それを手渡してきたジブリールは別の穴を開けて、シュウの頭を引っ張りだし、告げる。

「どうか手をおはなしにならないで下さいませ。それでは、失礼致します。」

そういうと同時に、王城から彼らの姿は消えていった…

布石は打ちつ打たれつ

「なあ。お前のじいさんアル中か何かなの？」

「失礼ですわねっ!!」

「いやだって、負けるとわかっている勝負に自国の領地を八回も賭けるだあ？アル中よりマトモな解釈が有るんなら、是非ご教授願いたいね。」

「ーっ!!た、確かにおじいさまはゲームは弱かったですけど、自国のことを何とも思わない異常者では無かったですわ!!」

「あのなあ……異常者じゃなかったらこんなことにはなんねえよ。あれか？数打ちや当たると思ってたんかねえ……。はあくあつ!!先王さえマトモだったら、今より農林水産できたつてのによっ!!やっぱステフのじいさんだな。そりゃ愚王と呼ばれても仕方ねえよなっ!!」

「……もういいですわっ!!空の馬鹿!鬼畜!変態!!」

「はあ。もうそんなん聞き慣れてるわ……。」

「アホ!間抜け!小心者!!」

「いやだから……」

「非モテ！非リア充！一生童貞彼女無し!!」

「ちよつとやめてステフさん!?俺のライフはもうゼロよ!」(涙目)

「魔法使いとか自称して、『テ○ノ・ブレ○ク』とか詠唱して、白に羞恥晒しながら死ぬばいいんですわあ!!もう知らないですわあああああつ!!」ダツ

「ゴハツ」(吐血)

「……にい!?死んじや嫌だよ……!!」(↑とか言いながら抱き付く白)

「会話と全く関係の無い言葉でマスターをここまで追い詰めるとは……」

(はあ……またこの展開か……)

先程、ジブリアルによるルー○によって、東部連合建造『在エルキア大使館』付近に転移した私達。先王がやらかした事実を知ってしまった空が、図書館に帰還した後、先王への愚痴を溢してしまい、ステフが図書館から出ていくというシーンをご覧にいたいたわけですが……

なに?なんなの?事有る毎にステフが目の前から消えていくんだけど!?また読者さんに『ステフもつと出せやあ!!何度言ったら分かるんじやボケエ!!』って怒られちゃう!?

……ふふふ。だが、原作知識のある私には無意味!ステフが空達と離れるタイミン

グなど知っているのだよ!!

もう三度も間違えんぞ!! いざ行かん!! ステフの元へ!!

「すみません。空様。お嬢様をお送りしてきます。」

ふふん♪これでステフのところに行く口実が出来た! あとは走って追いかけるだけ……

「なあ、シユウ。この先王の行為は、何かの布石なのか? 本当に真面目な理由あつての行為なのか?」

その言葉に、後ろ髪を引かれた。

…… というか、物理的に後ろ髪を掴まれています。なんでや!?

「☆HAN☆NA☆SE☆」

「おやあ? マスターの質問に答えず、どこへ行くおつもりで♥?」

「あのなジブルール。人の髪は掴むためにあるんじゃないのは知ってるよね?」

「質問に質問を返しては相手に対して失礼だと、その頭に刻んだ方がよろしいでしょうか♥?」

「お前の場合は物理になっちゃうわ!!」

ハイ。二度あることは三度ありました。この図書館内において俺はジブルールの下にいるからね。逆らえないね! (泣)

「……それで、空様は先王様の意図がわからないと?」

「ああ。ハッキリ言つて自国をここまで追い詰めるのは、よつぽどイカれた奴くらいしかやらねえんだよ。ステフの言う通り、先王が頭のネジとんでねえマトモな人間だったら、ここまでしないはずなんだ。」

「ふおつふおつふおつ。未だ先王の意図を掴みかねているのかね? 定命の者達よ。」(↑
付け髭撫でながら)

「なんかいきなり偉そうになつてんぞ?!」

「……というか、シユウも定命の者、だけどね……」

「私は寿命が無いに等しいので、あてはまらないかと♪」

「なんだか辛辣じゃのう……。まあよい続けるぞ。」

「あ、そのキャラまだ続けるのね……。それで? 何が目的か教えてくれよ……。」

「……教えてもよろしいかの?」

「ああ。それを知らなきやこの絶望的状况を受け入れらんねえよ……。」

それを聞いたシユウは付け髭をはずし、神妙な顔をつくつて再度尋ねる。

「……本当に教えてもよろしいのですか?」

「……何が言いたい?」

「いえ、先王がなぜ次期国王に『人類最強のギャンブラー』を望んだのか……それは、この状況を打破できる……いや、利用し尽くせる存在に、自分のできる限りの知恵を絞って打った布石を、継いでもらうためなのです。」

「コレが布石い？どう考えてもこんなん……」

「一見そう思わせるのが先王の狙いだとしたら？」

「……。」

空が長考に入ったのを確認して告げる。

「私から出せるヒントはこれまでです。このようなことを考えるのは空様の仕事ですし。あなた方がこの国にふさわしい王か否か、その賭けの結果はまだ出ていません。ここで教えるのは反則になりかねません。そして何より……」

「RPGゲームや推理ゲームで重要な事ネタバレなんて、ゲーマーであるあなた方は認めないでしょう？」

??????

軽く一礼して去っていくシユウの背中を見て、空。

「なあ……白。やれると思うか？」

明らかに挑発ととれるシユウの言葉を聞いて、絶望的状况から可能性を見いだせるか、一抹の不安を覚える空に対し、白。

「……にいが、そう思うなら、なんだってできる……よ♪」

『くっはく』の二人なら……と、続けた白に微笑みを返した空が、吠える。

「……じゃ、いっちょやってやるかあ!!」

それを合図に、図書館の本をひっくり返し始めた空達を見たジブリールは、

「本当に、面白い種族にございますね……。」

人類の可能性を垣間見た気がした。

???????

ひやつはあ!!シャバの空気うんまあ〜い!!

と、なんやかんやで外に出てきました。ご無沙汰しております。シユウです。

今は図書館から命からがら抜け出し、王城に向かって走っております。ま、理由はステフに追い付いて励ましの言葉とかかければ、少しは気が楽になるだろうと思っただけなんだが……

全然追いつけない。というか影も形も見えん。

何事かと聴き込みをしたら、どうやらステフは泣きながら全力疾走で王城に向かっていったとの事。陸上選手か何かか？というかなぜ走ったし。

まあ、というわけで、追いつくのを諦めて商店街を眺めながら歩いて帰っています。ここらの様子はというと、空達が王様になってから、農業の効率が上がり、人々に活気が戻って今の商店街は賑わいを取り戻しつつあるぐらいでしょうか。ま、回復傾向にあるだけマシですね。

「よお！シユウ！元気にやってるかい？」

「ええ。おかげさまで。」

「やあ！シユウ！こつちに來て飲まねえか？」

「まだ未成年なので無理です！」

「シユウ！彼女と仲良くやってるかい？」

「か、彼女なんていねえし!!？」

「おつ。シユウじゃん！童貞卒業したか？」

「よし。お前表に出ろ♪久しぶりに……キレちまったよ……」

……とまあ、軽口を聞かれるくらいにはなつたな。以前は愚痴ばかりで、ここに買出しに行くのも億劫になつたしね。

……久々に明るい雰囲気を取り戻した人達にあてられて、つい話し込んでしまつた……もう日が落ち始めてんじやん。そろそろ帰るか。

「すこし話が長くなりましたね。そろそろおいとまします。」

「おう。また来いよ！」

「……あつちやー。何のために出てきたのかわからんな。」

夕日を眺めながら（メロスってどんな感じで夕日見てたんだろうな）と、全然関係ない事を頭に浮かべながら歩いていたシユウに、声がかかる。

「お初にお目にかかります。シユウ殿。」

「!？」

突然の呼び掛けと、聞いたことのある声色に驚愕を覚えながら、その主の方を見た。

そこには……

「私の名は初瀬いの。獣人種ワビビーストの長『巫女』様の補佐を勤めているものにごさいます。」

筋肉もりもりマッチョマンの変態がいた。

「……とんでもなく失礼な考えをお持ちのようですが、今は言及しないで置きましょう。」

（こ、こいつ……本当に心を……!!?）

自分の考えを凶らずも当てられて身構えるシユウ。

（へーい。筋肉だ。悪かねえぜ……）

「そこまで身構えなさらなくてよろしいですぞ。今回は言伝てに参っただけにございませぬ故。」

（あ、第六感働いてないね。知ってたら余裕だな。（↑勝てるとは言っていない））

頭の中で続けざまにバカにされているのには気付かないまま、いのは懐から手紙を出し、シユウに差し出す。

「これを王に渡せ。それだけでいい。」

「……怪しいな。もし断ったら？」

「こちらには人質がおりますが、そいつがどうなってもよいと言うのなら構いませぬぞ……連れて来きなさい。」

そうして他の獣人種に抱えられて出てきたのは、目を閉じて動かないステフだった。
「なっ!!? どうしてっ!!」

「どうしても何も、こちらに滞在する我が同胞の耳に、宣戦布告をほのめかす声が入った
ものですからな。先に手を打たせて貰いましたぞ。」

「そうじゃねえ!! 何でステフが捕まってんのか聞いてんだ!!」

「愚王の孫娘と言うのは調査済み。挑発すれば簡単に乗ってくれましたぞ?」

「くっ…… やりやがったな……」

「それで? 手紙は渡してもらえますか?」

「…… そうすればステフは返してもらえんのか?」

「ええ。もちろん。ですがその手紙が確実に渡されるとは限りませんからな。その確認
が済んでから……」

「今すぐだ。返せ。」

「…… それはできかねますな。今までこちらから送った書状に返事をしなかったあな
た方を、信用できませんなあ……」

（いやそれ、お前らの部下のせいだよ!）

突っ込みを飲み込んで、上手くステフを返してもらおうよう交渉する。

「なら……俺を盟約で縛って渡すよう誘導してくれ。それならそちらの好きなタイミングで渡せるぞ。これでいいか？」

「……まあ。それでいいでしょう。では、八百長ではありませんが、私が勝てば明日の十時頃に、この手紙を王に渡すことを命令する。あなたが勝っても何も得ない。これでもろしいですか？」

「ああ。さっさと済ませよう。」

「ですな。それでは……」

「^{アツシエンテ}盟約に誓って」

???????

「はっ!!?こ、ここは!!?」

「あ、お嬢様!お目覚めになりましたか?」

「え!!?あ、はい。大丈夫ですよ。」

目を覚ますと、そこは自室のベッドの上で、隣には王城のメイドが、濡れたタオルを持って佇んでいた。だが、今はそんなことよりも……

「そ、それより！何で私はここにいますの！？私はゲームに負けて獣人種に捕まっていたはずですよ！！」

「お、お嬢様落ちてきてください！わ、私はお嬢様が病気で倒れたと聞いただけでそんな話は何も…。」

「へ？病気？私どこも悪くないですよ？」

「え？でも、執事のシユウからそんな風に聞いていたので…。」

「シ、シユウが！？」

「ええ。お嬢様を背に抱えて、『突然倒れなされた！』って、言っただけですよ？」

「…。」

「お、お嬢様？」

「ち、ちよつと行つてきますわ！！」 ダツ！！

「あつ！ちよつ！？お嬢様あ！！」

そうして部屋を飛び出し、シユウの部屋へ真っ先に駆け、ドアを開ける。

「シユウ！！」 バァン！！

「お、お嬢様あ！！一体なに…と…？」 ドン！！

「怖かったですわあ！もう…もう駄目かと…うっ…ぐすつ…。」

突然の事に驚いて振り向いたシユウの胸には、涙を流しながら抱き付くステフの姿があった。

「お、お嬢様。もう大丈夫ですから……。」オロオロ

「……ありがとうシユウ。あなたがいなくなったら私は……。」

「も、もしかしたらの話なんてよしてくださいます。運が良かったんですよ。お互いに……。」

「そ、そんなことないですわ!!あなたがいなかったら……。」

「そ、それよりお嬢様……。」

「な、なんですか?」

「そ、そろそろ離れてもらえないでしょうか……?」

「……。」

「お、お嬢様?」

「も、もう少し……。」

「へ?」

「もう少し……このままで……。」

「……。」ギユッ

「んっ……。」

「お、落ち着きましたか？」

「え、ええ。ありがとうございますわ。」

そう言つて名残惜しそうにシユウから離れ、ゆつくりとあげたその顔には、どこか覚悟を決めたような顔をしていた。

「シユウに……渡したいものがありますわ。」

親愛の証

「シユウ…… 渡したいものがありますの……。」

そういつて髪飾りの中から鍵を取り出し、続ける。

「これは、おじいさまが私に託した鍵ですわ。どこの鍵かはわからないけど、心から人類種を任せられる人物に渡して欲しいって言つてましたわ。」

「…… それを、私に？」

「ええ。そうですわ。」

よーし。『心理学』ロールだ。コロコロ…… うん。誰でもわかる。ステフの目は本気だ。嘘などいはずもない。

「…… ですが私には、この国をどうこうする力は持ち合わせてはいませんか？ 空様達
が、よほど適任かと思えるのですが……。」

「…… 確かにあの兄弟なら、エルキアを変えてくれるほどの力を持っていると思います
わ。」

「でも、人としての心は、王の器はおろか一般人にも満たない酷さの人間に、おじいさま
の遺志を託したくはありませんわ!!」

「……左様でございますか……。」

そう言つてステフの手から鍵を―受け取らずに―ステフの手に握らせた。

「え？」

「お嬢様は少し勘違いをしておられます。それを正す為、暫しお待ちを。」

そう言つて立ち上がり、大きく息を吸い、明後日の方向に叫ぶ。

「おおい！ジブリール！来てくれたら俺を一発殴る権利をや……。」

「はあーい♪お待たせしましたあ♪これより猿の粉碎シヨ―を開催しまあす♪ようやく腹をくくつた猿の首がくくられる間もなく死散する光景をとくとご覧くださいませ
♪」

突然シウウの目の前に現れ拳を振るうと同時に、あまりの拳速に大気が押されて発生した真空状態の圧倒的破壊空間は、まさに歯車的砂嵐の小宇宙！

そしてステフは恐怖した！種族間にたたずむ壁はあまりにも大きく、自分達はなす術もなく蹂躪される運命さだめなのだということを！

だが、現実を直視できたのは不幸中の幸いだらう。

「……やらないから、そのガチで楽しんでる顔をやめてくれないかな？」

「…… チツ で、要件はなんでございましょう？」

「うん。ここまで純粹に殺意のこもった舌打ちは初めてだな……。じゃなくて、空様の様子はどう？」

「それででしたら、実際に見てもらった方が早いかと。ドラちゃんも是非。」

「では参りましょうか。」

「…… 私は、ソラのことを信用する気はないですわ……。」

「ええ。でも、それを確かめていただくためにも、私と共に来てはいただけませんか？」

???????

「だから俺は、『人類』を信じない。」

「だがその『可能性』を信じる。」

「ならば、”まずは信じなきや”はじまらないんだよ。先王も、さ」

図書館の入り口のドアの前で、隠れて聞いていたステフの目が熱くなる。

おじいさまを信じて、必死に資料をひっくり返して、眠気が来ようが隣で疑われようが、可能性を否定せずに探し続ける空の姿は、とても……

「どうですか？お嬢様。」

シユウはステフに温かく語りかけ、説得に持ち込んだ。

「確かに空様は、人としては少々足りないところもあるかもしれませんが。」

「でも空様なりに、自分の信じるものを背負って必死に考えて生きています。」

「お嬢様の仰られたことを信じ、先王様の遺志を可能性を信じて動く空様は…… 私は決して、人としての器がないようには思えません…… いかがでしょうか？」

その言葉を聞いて、何か納得したような仕草をとった後、シユウのことをじっと見て、ステフ。

「…… シユウはこの事を、知ってたんですの？」

「そうです。そうするよう仕向けたのは私ですから。」

「じゃあ、やっぱりシユウの方が……」

そこまですることができるならと、シユウに託した方がいいと言わせる前に、シユウは遮って話す。

「ですが、その意図を汲んで空様が動いてなさるのは紛れもない事実です。」

「それに先王様との約束事は、お嬢様のみでなく私にもあるんですよ。」

その言葉にハツとして、ステフ。

「それはどんな約束ですか？」

「次期王に相応しい存在を王にする。という約束ですよ。」

「……。」

「その約束達成のためにも、是非空様達を信じてもらえませんか？」

その言葉を聞いて、今までのシユウの行動に納得がいったのか、どこか満足げに、そしていたずらな笑みを浮かべて、空の方へ足を向けていった。

???????

「うわー……。こんなん国内に立てられちゃエルキアも立つ瀬がねえな……。」

「ほ、本当に来て大丈夫なんですか!？」

「大丈夫さ。朝もらった手紙とアポもとつといたからな。ほれ、見てみる。」

「…… 御初に御目にかかります。現エルキア国王空殿、白殿。並びにその他従者様。」

そうやって深々と頭を下げ、続ける。

「私は東部連合・在エルキア次席大使「初瀬いの」です。」

「ほいほい。自己紹介どうも。んじゃ、さっさと案内してくれる？」

「ええ。ではこちらに……。」

「えっ!? ゆ、床が動いてますわあ!？」

「それで? 今日の行事は大使の「初瀬いづな」との面会と、その他話し合い、つてことでいいんだよな?」

急上昇するエレベーターに、なんの感慨もない空がステフを無視していのに問う。

「ええ。手紙の通りの事柄をこなすだけの、形式的なものでございますので、どうかご安心を……ですが、空殿はそれだけのつもりはなさそうです。」

「あれ? バレちゃった? ま、きちんと話すから後でな♪」

「とうか入る前に心を読んでしまえば、我々の目的など解るでしょうし、そこで済ませてもよろしかったのに、マスター達にここまで徒勞をさせる犬風情の心は、第六感の無い私には解りかねます♪」

「はっはっは。御呼びしたお客陣を中へ招かずに、文字通り門前払いを希望とは、まして、言葉を交わさず一方的にことを進めるのがいかに愚かなことか、この鳥頭には理解が及ばぬようですな。」

「おやあ? 十の盟約以前にその言葉を言える覚悟がないのなら、今すぐ取り消した方が賢明だと思われまますよ。狼害^{ろうがい}。」

「はは。この鳥の頭には脳が入ってないようですな。この世界の理を無視して過去にす

がり付くとは、何とも情けない羞恥。羽をむしられて丸焼になった方が、世のためではないですか？」

「口だけは達者なようでごいませぬ♪」

「いやはや、そちらこそ。」

フフフフ……

ハッハッハ……

「なあ。何でこの二人ここまで仲悪いの？」

「それは、^{イクシード}十六種族の血の気の多さでは一二を争う種族ですから、一方が煽ったら途端にこうなるのは必然ですわ。」

「そうなんだ……つか、よくこんなとタイマンはれたな、シユウ。」

「……。」ガタガタガタ

「…… あれ？どしたのシユウ？」

「…… あ！す、すいません空様。ななな、何ででしょうか！」ガタガタガタ

「…… シユウ、だいじょうぶ……？」ポンポン

そこには床にうずくまってガタガタ震えてるシユウと、安心させるためか頭を撫でて

いる白の姿があった。

「ど、どうしたんですの!?!」

「あ、いえ、ちよーつと高いところが苦手というか、高いところに行くとき息があがって目眩を起こすだけなので大丈夫ですハイ!!」

「空元からげんき気もいとこじやねえか!!というか、ジブリールの空間転移のときは…」

「あ、そのときの記憶無いんです。」

「重症じゃねえか!?!おい、じいさんちよつと下に…」

チーン!

「さ、着きましたぞ。どうぞこちらに。」スタスタ

「はあーん…これはいいことを知れました。これだけは獣人種ワイルドに感謝するとしましようか♥?」ピューン

「…いくか。」

「…ええ。」

「それでは早速ご挨拶を。こちらが東部連合・在エルキア大使、初瀬いづなにございま……」

キング・クリムゾン!!!

その言葉と同時に、王様兄妹はいづなに一瞬にして近づき、撫で回していた。その動きたるや、フレイブリスト獣人種フリュージェルのいのはおろか、天翼種のジブリールの目で追えないほどの速さであった。

「……なんなんですかあの兄妹……」

「さすがは、マスター達にございますね。」

「ジブリールはそういうところも関心があるんですね……」

「もちろんですが…… おや?あの猿もいないようですが?」

「え!? シュウ!? どこに行っただんですの!?!」

そこには、先程まで一緒にいた執事の姿は、消えていたのだった。

???????

ご無沙汰しております。シユウです。

いや〜。さつきはエレベーターの存在を知っていることを誤魔化すために、高所恐怖症のフリをしました。どうやら怪しまれずに済んだようですね（白目）。

さて、物語も二巻の終盤にまで差し掛かり、あの兄妹ならもうチエックメイトまで持つてってくれるので、この件はもう安心できますね。はあ〜長かった。ここを突破すれば気ままに動き出すだろうし、エルキアが滅ぶ心配もほぼなくなるし、ステフと一緒にいれる時間も増えるってもんだぜ！

ジュー……

「お、いい頃合いだな…… おーい！ そのリス族の獣人種ワービーストさん！ 盛り付け宜しく！」

「はあーい!! 任せるっすよ…… って何やらせるんすか!?! というかなんでここにいらっすかあ!!！」

「えー。ノリ良くやってくれないと、いづな様の機嫌が斜めになるよー。」

「そ、そうっすか!?! 早くしないと…… って！ 騙されなかつすよ！ そんな命令聞いてねえっす！」

「ノリツツコミは上物だな。コンビ組む？」

「エへへくそこまで言われちゃ仕方なく…：…くないっすよお!!?」
「うかんでうちの食材使つて料理できてるんすか!？」

そう。今料理をやってます。あれ？デジャヴ?…：…気にしな—い。

まあ、空達と一緒にキンクリして調理場まで直行したんだよ。過程は知らん。気づいたらここにいたもん！

あれだ。いづなたんを撫で回すのが空達の愛情表現なのだとしたら、料理で餌付けするのが俺のやり方だ！幼女には優しくするのは当然だろう？

見たところ冷蔵庫には魚が大量に保管されていましたし？これは天使いづなの為に料理するしかないじゃない！

「なぜ料理できているのかって？それは完全な善意から行っているからだよ!!」

「善意だけならなんでもできる訳ねえっすよ!？」

（いや森精種のおっぱいを善意というか、完全におっぱい単体としか見ていなくて揉めた地精種はいるんだがな…：…）

そう獣人種が言つたと同時に料理の腕が止まる。どうやら、悪意ある行動と見なされてしまったようだ。

「ちえ—。さっきまでできていたのが善意しかない行為であることの証明なのに…：…。」

「いや、他人の倉庫から勝手に食材とって料理するのは流石に権利違反だと思いつすけどねえ……。」

「それは獣人種ワビーストのきまりでしょ？」

「人類種イマニテイはこんなことされても怒らないっすか!？」

「……いや、怒るな。」

「怒るんかい! なら尚更ダメっす!! さっさと出ていくっす!!」

「へーい……。」

そうして部屋を後にしようとしたとき、扉が開き、フェネックのような耳と、愛らしい瞳がこちらを覗き込んで……

「旨そうな匂いしてやがる、です。はやく食わせろや、です!」

けも耳幼女がよだれを垂らして、今か今かと料理を待っていた……。

この世界の摂理

「これでチェックメイトだ。この手は読めたかい？じいさん。」

そう言つて、不遜な笑みを浮かべたまま、卓上に人類種イマニテイの尊厳すべてが具現化した『種のコマ』を叩きつけ、自信満々に獣人種ワリーブストの敗北を宣言した空。

（な……なぜこいつには一切の不安がないのだ!?他の二人は疑念や恐怖……一部好奇心が混ざつておりますが、知らなかったからこそその反応。白殿も始めは空殿の意図を図りかねていたのにも関わらず、今では何の不安もない……つまりこれは空殿が誰にも知らせずに行つたこと。国民にすら知らせていない。身勝手な行動になる。そんなことを、一国の王が決めて良いものではあるまいに……。）

そう、頭の中で必死に状況整理してきたいのに、空が追い討ちをかけるように捲し立てる。

「そうそう、こっちは四人でゲームに挑むから、いづなたんによろしく言つておいて♪それと、種のコマかけてんだ。人類種イマニテイ全員に観戦権がある。それを込みで舞台を用意しておいてくれよな♪ま、こんな大それた事はお前の一存じゃあ決めんの無理だろうから、色々話し合つて後日連絡チャイム♪」

軽く手を振って立ち上がり、エレベーターの方に向かおうとする空。それに続くように白やジブリールが立ち上がる。

「ちよっ!?なんで私がゲームやるんですの!?やるならシユウの方が適任だと思えますわ!あと、シユウを探さないと...!!」

と、シユウのことを話すステフを無視して、エレベーターのボタンを押し、箱が来るのを待っていた。

(なんなのだ... どうしてこいつらはここまでっ...!!)

そんな空達の後ろ姿を見て、焦りの表情を隠しきれなくなり、苦悶の形相を浮かべるいの。否定も肯定も、何もかもがボロを出してしまうような状況に為す術もなく、口を閉じて居座るしかできないいの。

(こ、こは一旦巫女様に相談を...)

そう思っていたいのの耳に、かすかな喋り声が聞こえた。

「はやく出せや、です!もう我慢できねえぞ、です!」

「い、いづな様、結構激しいですね...」

「...これなんだ?です。」

「飲んでみればわかるかと。」

「ん...グクッ...うめえ、です!もつとよこせ、です!」

「ふむ……では次はもつと大量に……」

「シユウさん……こ、これを揉めばいいんすか？」

「そうですね。お願いします。」

「おめえ手つきうめえ、です。もつとやってみせろ、です。」

「は、はいいづな様！了解つす！！うおおおおつ！！」

「さあーって、そろそろいづな様の腹、俺ので満たしてやるぜ！」

（……）

その会話を聞いていたいのの額に青筋が立った。それと同時にどてつも無い怒気を放ち、立ち上がる。

「おわ!?なんだ!?!」

「……なにが……ひいつ?!!」

「……ブクブクブク」(↑白目)

「っ!!?」

その殺気に気づいた空と白の前にジブリアルが仁王立ちになる。ちなみにステフは白目を向いて気絶している。

彼らの前には、息を荒くし、全身から赤い蒸気をあげながら、纏められていた白髪を逆立て、はだけた袴から脈動する筋肉を見せつける、まさに怪物と呼ぶにふさわしい姿になったのがいた。

そして、吠える。

あんのクソザルウウウウウウウウウ!!

そして飛び上がり、床と天井を貫いていのはどこかへ向かって消えていった。

???????

「ハグツ：：：ムグムグ：：：うめえ、です！もつとよこせ、です！」

「こ、これじゃあ腕がいくつあつても足んないっすよお!!」ジュー：：：

「だからといって、今更援軍が来るわけもない：：：一つずつこなす、現実このくらいよ。」グツグツ：：：

「チツ：：：やるだけやるしか：：：ってやつつか：：：」トントン：：：

「あなたならやれる。急いで！クールに確実によ！」ザックバラン！

「注文が多いっすね、俺っちが答えられるとでも？」（涙目）シャリッ！

「もちろん。幾つもの（調理場の）戦場を渡り歩いた君の頭脳：：：そして、この機械（↑

調理器具)……これが負けるとは思えないけどね？」ボツ！

「優しいのね……」s

「口ばつか動かしてねえで、さっさと用意しろや、です!!」カンカン！

「はーい!! ただいまあー!!」

(言葉は不要っすか……)

(もういい。言葉など既に意味をなさない。)

(みせてみる、です！おめえらの本当の料理を……です!!)

(ち、直接脳内!!)

……とまあ、茶番は置いていて、

ご無沙汰してます。シユウです。

今はいづな様とたまたま出会ってしまい、完成していた料理を食べさせてみたところ、かなり気に入ってもらえたらしく、前回、突如登場したリス族の獣人種ワビーストに無理矢理手伝ってもらって、いづなの流れる滝のように降り注ぐ料理要求の嵐に必死になって応えています。

しっかし、あの体のどこに冷蔵庫半分分の食料が入るんだ？体のどこにも変化はないし……エネルギーとして蓄えるつつつても……ねえ？ま、これが種族の違いと言われ

ればそれまでなんだけども。

とりあえず作っておいた練乳吸わせて時間稼ぎだ！…と、思ったんだが、
ボギユツ！！…ゴクン

と、まさかの一気飲み。ま、まあ、今日のために持つてきた手持ちチューブですし？
量は少なかつたけどさ、そんな飲み方されるとは思わなかつたよ！？

と、時間稼ぎも秒単位なので役に立たず、結局は死に物狂いで料理するしなくなつたのだが…

Bannon!!

…!!?

おいそこのハゲクソゴミザルウ… よくもうちの孫に手えだしてくれやがつたな…

振り向くとそこには、ボキツ、バキツ、つと、拳から音を鳴らしながら首を捻り、筋肉をはち切れんばかりに脈動と胎動を繰り返す兵器を見せ近づくのがいた。

「ひ、ひいつ!!?い、いの次席大使!？」

あまりの変容に驚きを隠せずにいるリス族の獣人種^{ワビーリスト}… めんどいのでここではチユリスと呼ぶことにしよう。チユリスは料理の手を止め、後ろにたじろいだ。

「え？手を出した？なにを仰って…。」

ナニイ^{???}てやがんのはてめえだよクスザルウ!! てめえうちのいづなに^{???}して^{???}させて^{???}????
 して^{???}したあげく^{???}して^{???}して^{???}させようとしたじゃねえかあ!!
 「ふあ^{???}の^{???}ボントにナニ^{???}仰^{???}てんの!!」

しらばつくてんじやねえ!! 我が孫に^{???}とかうらやまげフンゲフンけしからんことをしたことはこの耳にしかと聴こえてい^{???}たんだよお!!

「いやそんなことしてねえし!? だよなダチツコ!!」

「そうつすよボツさん!!… つてなにやらすんすか!?!ととと、ともかく俺つちらはナニもやってないつすよ!」

ナニぬかしてやがんだアアン!!? てめえもうちのいづなの胸揉んでたじゃねえかア!!

「えあ!?!そ、そんな畏れ多いこと出来ねえつすよ!」

黙れえ!!我が孫の胸板を… これからの成長が非常に… ひつじよーうに楽しんでみな我が孫の胸を!! 貴様ごときが勝手に汚しおつてからにい!!

「ほほほ、ホントにちが…。」

「じいじ、うるせえ、です。次の料理が出来ねえじゃねえか、です。少し黙ってるや、です。」

「な、何を言うかいづな!!私はお前のことをおも... って...?」

「ん?どうしたん... だあ!」

「な、ななな、何が起こってるっすかあ!!」

「?いづなに何かついてる... ですか?」

そこには、ぽよん、たゆゆんと呼吸する度に胸を揺らす、巨乳になったいづながいた。「なんだこれ?です。じゃまだぞ、です。」

そういいながら胸を邪魔そうに触るいづなであったが、

「ああ、ああああああああ!!!いづなが懐妊したああああああ!!!」

あまりに残酷な現実には、慟哭したいの。

「ゆるぎん... ゆるぎんぞお!!」

「いやいやいやいや!!妊娠させるようなこととしてねえし!?そもそも妊娠したとしてもこんな早くなるわけねえだろ!?って危なあ!?怖い怖い!!ツメ立てんなあ!!!」

「そそそ、そうっすよ!!こんなことになるのがおかし... ヒイツ!」

貴様は最後に殺してやる。

「うわああん!! いいいい、いづな様あ!! なんてそうなたんですかあ!!?」

「わかんねえ、です。けど、シユウからの白い液飲んだら胸がムズムズしたのは覚えてる、です。」

「てめえのせいじゃねえかあ!!」

「ちげえよお!! 俺じゃねえよお!!? なんだ!!? 俺に関わった貧乳は巨乳になる定めでもあんのか!!?」

そうして頭を抱えようとしたとき、あるものが目に入った。それは……

(……このジジイ…… 孫にすら欲情すんのかよ!!?)

そう、血壊状態のいののイチモツは…… その、なんだろう、例えるなら大根並みになっていた。

(ふざけやがってえ…… 表では正統派ヅラしといて、裏では魅力的な女なら誰でもぶっぱなす色欲魔ってかあ!?)

と、血壊の血液循環機能が異常になり、物理限界を越えた大きさになったイチモツの原因を盛大に勘違いしたシユウは、

「いづな様あ!!このジジイのイチモツをご覧ください!!この異常な膨張率、病気でしかございせん!!これを直すにはいづな様の最大限の力で握る必要があるでしょう!!もし、この病気を直せた暁には、ここにある材料すべてを使って、最上のフルコースを提供しましょう!!」

「む、合点、です!!」

そう言つて血壊状態に突入したいづながいのの前に割り込み、いののイチモツに手をかけた。

「むあつ!?!いづな様何を……!?!」

「触らせたな!?!いつけえ!ぶつこわせやあ!!」

「じいじの病気、今治してやる、です!!」

そうして、思いつきり力を込めて、まるで雑巾を絞るように捻りを加えた圧倒的破壊治療は……

「あ”あ!!!?”」

……一人の男の悲痛な叫び声で幕を閉じた。

???????

「あ、あつちから聞こえましたわ!!」

「んたく… ステフゝ迷子になるなよ。」

「わかつてますわあゝ」

そう言つてステフを見送る空に、ジブリールが話しかける。

「マスター、ひとつお伺いしたいことが…」

「ん?なに?」

「なぜ、私たち四人でゲームに挑むのでしょうか?あの猿も入れれば、少なくともドラちゃん以上の戦力は見込めると思いますが…」

そう、ジブリールは獣人種ワイルドとのゲームで、空がシユウをゲームに参加させなかったことに疑問を抱いていた。それに対し、空。

「あく、それなんだけどな、あいつは多分、王様からこの事を聞いてたんじやないかなと、思つてさ。」

「!?なら早くこれをマスター達に知らせておけばもつと早くここに…」

「シユウはまだ俺達のことを人類種ヒューマンの王に相応ふさわしいか、試してる節がある。しかも、あいつはゲームの詳細も少なからず知つていそうだしな。お助けキャラなんだろうが、同時に助けを必要としない王を求めてるんだよ。あいつは。例え、相応ふさわしくない王がこのゲームに挑んでも勝てるように、な。」

「…… だから、使わない。」くうはく「にはそんなもん使わなくつても勝てるつてことを、あいつに見せてやるんだよ！な、白。」

「…… うん。やってやるう〜♪」

「…… 左様でございしましたか。」

そうして安堵したジブリールを尻目に、空は思う。

（ま、それだけじゃないんだけどな……）

（俺らがキンクリしたときのあいつの行動…… まるで俺たちがそうするのを知っているかのようだった……）

（もしかして、俺達のことを知っている人物？）

そう。空は気づいていた。シユウが普通の人類種イマニテイとは違うことに。

（まさか、俺達のように異世界から来たつてののか？）

その答えにたどり着き、ジブリールに問う。

「なあ、ジブリール。」

「はい。なんでもございしましょう？」

「シユウの精霊つて調べたことあるか？」

そう、異世界からきたのなら、空達同様にジブリールにとって未知の物となっているはずと、思った空。それに対しジブリール。

「ええ。出会って最初の頃に、他の種族の変装でないかと疑い、確認しましたが、魂はいたって普通の人類種イマニテイのものでした。」

「……そうか。わかった。ありがとな。」

「マスターのお役にたてて光栄です。」

心底嬉しそうに頭を下げ、感謝の意を示すジブリールを尻目にみながら

（だとしたら、シユウはただの人類種イマニテイ？だが……チツ、まだ確証がとれねえし、結論はあとでいいか。どうせ今回はゲームには出さねえし。それに……）

（もし、敵側に着くようなことが予測されるゲームなら……一番敵に着いてヤバイのはおそらく……）

（シユウだ。）

「あ！ここにいたんですのね！心配したん……ですの……よ？」

そこで空の思考はステフの声に中断された。

「お、ここにいたのかシユウ。いづなたんもいるじゃないか……つてなんじゃこりやあ
!？」

そこには青ざめた表情で皿を洗うリスの耳と尻尾を持つ獣人種ワイビーストと、股間の辺りが悲惨

なことになって床に倒れて気絶しているの。練乳の入った袋を両手に抱えて飲み干そうとしている巨乳になったいづなと、その様子を見て頭を抱えているシュウの姿があった。

「な……なんでいづなたんが巨乳になってんだ!？」

「あ……空様。いらっしやいましたか……申し訳ありません。どうやら私がこのようにしてしまっただようです。」

「え!?!なんで!?!」

「どうやらこの練乳を飲むといづな様の胸に重点的に脂肪が集まるようになるのか、巨乳になるようです。」

「で、先ほどエネルギーを大量消費したおかげでもとに戻ったのですが……いづな様、説明を。」

「ふはあ!ん、わかった、です!さっきいづなあすげえ力使った、です。でもそのあとの疲れとか、全く無かった、です!だから、また貰っておいてやる、です!」

「……というわけです。」

「なにその空想科学!?!聞いたことねえよ!?!」

「……シュウ、それ、しろにも頂戴っ!!」

「はて、このようなことは私の知る限りは無いのですが……?」

「とうか、いの様のことは誰も心配しないんすねえ……」

「ひやつ?! い、いのさん!? 大丈夫ですの!?!」

「こ、この初瀬いの…… 我が生涯に一片の悔い無し…… ですぞ。」ガクツ

「いのさあああん!!!」

「おかしい人を亡くしたな。」

???????

それからというもの、エルキアはデモが発生。連日昼夜問わずに飛び交う罵倒の嵐は、子供の睡眠を妨げる程であったが、そんなこと気にならないほどの未曾有の事態に、国民はおののいていた。

そんな中、いつものように起きて辺りを見てみると……

「にい…… にい、どこお…… しろ、が…… わるか…… からあ…… もう…… ベッ

ド…… おちない、からあ…… でて、きて…… ひうつ……」

…… 妹が、ベッドの上で泣いていた……。

ステータスの割り振り方

※この話は第二巻の最終話『この世界の摂理』の最後の部分を、投稿当時急遽変えたことに対しての謝罪とともに送った小話です。

???????

番外編（ただの1000文字稼ぎ）

「あーっ！暇だっ!!」

「…… もう、このゲーム飽きた……」

「確かに、音沙汰もないと言うのはいかなものでしょうか……」

「暇ならこの暴動を止めてもらえませんかっ!?!」

「いや、暴動自体はどうでもいい。」

「よくないですわよっ!?!」

「なあ、シユウ。ちよっとゲームしようぜ。」

「……？ええ。よろしいですよ。」

そうして暇潰しに始まった空とシユウのトランプ五回勝負。

??結果

ポーカー 空の勝ち

スピード 空の勝ち

七並べ 空の勝ち

ババ抜き 空の勝ち

神経衰弱 空の勝ち

追加のブラックジャック 空の勝ち

…… 結果、空の完勝

「よっわっ!!いくらなんでも弱すぎんだろ!!これならステフの方がまだいい勝負すんぞ!!」

「いやーそれほどでも……。」

「褒めてねえよ!!白があまりの退屈さに寝息立てるほどなんてそうそうねえよ!!お前この世界をどう生き抜くつもりだったの!!」

「あー……(王城)にいればなんとかなるかなあ……と。」

「…… はあ…… ジブリールとゲームしたときのあれはマグレなのか？」

「マグレになりますね。私はゲームに関してはこちらからつきですので……。」

「…… まあ、ゲームの説明しなきゃならん時点で察してはいたけどさ……。」

「えへへへ」

「だから褒めてねえよっ!!」

そう。シユウのゲームの腕は全くない。対人ゲームなんて、画面上でしかやったことのないシユウにとって、乱数調整とかやつてるならばともかく、カードカウティングの力の字もやってない程の、ポケ○ンで言うなら『努力値？種族値？なにそれ美味しいの?』と、真顔で言うほどの『楽しめれば何でもいい』スタンスのプレイヤーなのである。

「嘘だろ…… こんなやつに負けかけたのかよ……。」

「確かに、自分からゲームを挑んでるところは見たことはありませんね……。」

「シユウ！一緒に特訓しますわよ！」グイーツ

「あ〜れ〜……」ズルズルズル……

引きずられるシユウを眺めながら、用意されていた紅茶と菓子をつまむ空。

「…… つたく。料理に努力値振りすぎだろ…… 何でここまで一点突破型なんだ？」

その声を聞いた白が思う。

(…誰かと一緒にいたいから、頑張れる…にいだって…)

鈍感な兄の困ったような顔を見上げて、どうやら気づいているのは自分だけだと、どこか得をしたような気持ちに浸りながら、スヤスヤと眠りにつく白なのであった…。

3巻

記憶の操作説明書

『……ううつ……に……会いたい……会いたいよお……』

『……白様……』

『……ううつ、ううー……つ、ぐすつ……うええ……ん……』

『……白様、空に会いたいですか?』

『……!?し、知ってるの?!空を……にいを、知ってるの?!』

『ええ。知っております。何故なら私は、あなた方』くわはく『をよく知っている転生者ですから。』

『……ならっ!どうすればにいに会えるの?!』

『……神に勝つんです。白様。あなた方をこんな運命に陥れた、このゲームですべてが決まる盤上デイス・ボードの世界で。そうすれば、願いは叶えることができます。』

『……でも……』くわはく『は、にいと白……二人で一人のゲームなの……わたしひとりじゃ……何も……』

『……ならば私が……』

『……うつ……ぐすつ……』

『俺がつ……空になって、白を神の元まで飛ばしてやるっ!!!』

□□□

エルキア王城。最後の人類種イマニテイの国であるエルキアの中心に立つ城には、大勢の人々で囲まれていた。それは王を称えるものではなく、罵声を城に浴びせかけるものであったが……

そんな城の異変は、外だけでなく、内部でも起こっていた。

「し、白っ?!?どうしたんだっ?!?お、俺ならここにいるぞ!?!」

そういつて白の前に出て、自分の存在を示すシユウに対し、白は困惑した表情で、

「……なに……言ってるの? シユウは……にいじゃないっ!」

「え!?! あ、あれっ?!? なに言ってるんだ白っ!?!」

「……そっち……こそ、なに言ってるのっ!! には空でっ……」

「え? おかしいだろ? だって……」

出す。

「あの……何が起こっているのでしょうか？」

「あく。端的に言うると、白が部屋から出ようとしないんだ。」

「白様がですか？お言葉ですが、マスターと白様が部屋に籠ることなど不思議なことでは……」

「まあ、そう思うだろう？でも今回は俺を外に追い出したんだ。」

「……どこにも問題が見当たりませんか？」

「あー……ジブリールは知らないかもしれないけど、白は俺から、正確に言うると空って言う兄と一緒にいないと、マトモに会話できないくらいまで病むらしいんだ。」

「正確に……というと、マスターが『俺はこれから空って名前で過ごすから。』と言ったことの理由になるのですか？」

「そうだな。俺が空の代わりになって色々やってきたんだが……」

そう言うシユウは、紫の下着に、『I♥？人類』と、ロゴの入ったシャツを来て、ジーンズ、リストバンドまで揃えて、髪型や目の隈まで再現し、空になりきった服装をしていた。

「……どうやら、元の世界の兄に会えてないストレスが限界に達したんじゃないのかな……」

シユウがそう言ったとき、扉のしたからすーっとタブPCが差し出される。

「ん？白？どうしたんだ？」

「……」

シユウの呼び掛けに白はなにも答えなかったが、代わりに液晶画面が変化した。

「おや？『質問』と書かれてございますね。」

「続きはなんて書いてあるんですの？」

「えーつと……『1：ジブリールと対戦した人物の名は？』か……」

「それは……空と白……正確には、シユウと白ですけど……」

「んー。俺が返信を入力する……って、どうやら聞こえてるみたいだな。」

そう言ったときには、追加の質問が液晶画面に載せられていた。

「さようでございますね……『2：ジブリールとのゲームの詳細提示要求。』」

「それは、シユウがどこか無理しながらぶざけてジブリールを油断させて、白が練った作戦で勝ったはずですよ。」

「最後の言葉は『クローン力』でございましたね。おかげでこの猿をマスターと呼ぶようになつてしまいました……」

「いや、自分から言い出しといてそれはないだろ……」

「あのときは感極まっただけにございます。本当はご主人様などと粉微塵にも思ってい

ないので悪しからず。」

「そう言うなら呼ばなきやいいじゃん…… っと、次か、『3：ステフに惚れろと要求した人物は』？」

『…… え？ そんなこと、されてないはずですよ？』

「だよな…… 特にそんなことなかったと思うが……」

『…… 次の質問にございますね。』4：東部連合のゲーム内容を暴いたのは誰か』ですか。」

「それはお爺様の遺品と、シユウと白ですわ。」

「まあ、俺はほとんど活躍できなかったけどな。」

その言葉を最後に、液晶画面から変化がなくなる。次の質問が来るまで待つていたが、白が何か考えているのではないかと言う一同の思いが、彼らの口を閉ざしていた。

…… そして、最後の質問が投げ掛けられた。

『5：どうしてシユウは、白の”に”になっているの？』

その質問は、するなら最初にすべきものであっただろうが…… 質問を通して、いまだに一番不可解で、謎となっている部分を、ようやく聞く気になった白に、シユウが答

える。

「……それは…… 私が東部連合に書簡を届けたときなのですが、ちようどその帰りに白様がいて…… その、会話ができる様子じゃなかったの、ひとまず城にお連れしました。」

「そして話しているうちに、白様の兄、空なる人物が白様がもといた世界に取り残され、白様だけが、この世界に来てしまったのだと言うことがわかりました。」

「そこで、私が代わりに兄、空になって取り敢えず正気に戻ってもらおうと姿形を似せたり、色々励ましたりして、なんとか意志疎通が普通にとれるくらいにまで回復した白様が、唯一神テトに挑んで、この世界に空を連れてくると、そう言う目的で私と白様は今までやって来ましたが……」

と、空を取り繕っていた口調を、執事であったときのものに戻して、恭しく告げた。

…… それから、液晶画面に告げられた言葉は……

『みんなの記憶から、にいの存在、消されてる。』

…… それはもはや、根拠の無い、懇願に近い結論であった。

???????

ご無沙汰してます。シユウです。

率直に言う。私は完全に空の記憶を忘れています。

ま、正確に言うとは原作知識の中の空を覚えてるってだけで、この世界に来た空の存在はからつきしなだけです。

……多分、原作知識なかったら、なにも疑うことなく白が壊れたと思ってますね……。

あ、読者の皆さん！私は好きで空の格好をしてる訳じゃないからね！し、白のためにやってるんだからね！！

というわけで、私はこれから白を空の存在に気付かせなきゃいけないわけだ。今あるのはゲームによって植え付けられた架空の記憶と、原作知識。

……しっかし、架空の記憶とはいえ、リアルだなく。白の頭を撫でたときとか、膝の上に乗つけたときとか、一緒に寝たときの記憶まで、自分が体験したかのように再生できる。

……うおっ!?!白の太ももやわら……

「マスター、いかがなさいましょうか。」

「ふえっ!? あ、うん。そうだね! 何とかしなきゃね!」

「…… なに考えてたんですの?」

「いやっ! これからどうするかをねっ! しーっかり考えていたんだよっ!」

「いや、鼻の下伸び……」

「さあつてっ!! 白っ!! 俺とゲームしよう!!」

これ以上指摘を受けないように、盛大に声をあげて宣言したシウウの目には、ステフのジト目は映らなかった。

「……。」

その声に白からの反応はないが、勝手に肯定だと決めつけて続ける。

「そう、ゲーム。俺が勝てば、俺のことを今まで通りに空と思いつけてもらう。いいな?」

そういったシウウの始めるゲームの結果がどうなるか、その意図を汲みとったのだから、液晶画面には『^{アツシエン}盟約に誓って』と打たれていた。

???????

(まるで幽霊だな。白。)

そう思いながら、次々とチエスの駒を移動させていく。シユウは空の真似事をしてい
るだけなので、そのコマは悪手にばかりなってしまう。が、まるでそれを利用して自殺
でも目論むかのように、白の駒がやられていく。

(これじゃ接待ゲームだな……。)

そう思つて顔をあげると、涙や鼻水で顔がぐしゃぐしゃになりながらも、絶望の色を
した瞳を浮かべ、無表情のまま駒を動かす白の姿があつた。

時折、ヘラつと笑う場面があつたが、おそらく自分のことを嘲笑でもしているのだろ
う。自分が狂っているのだと。

それから同じペースでゲームが進む。このままいけばシユウが勝つのが濃厚であ
る。

(でも、このまま勝つてはいけない。)

そう、白が空に関する何かに気づかなきゃいけない。

そうなることを望みながらチエスを打っていく……

しかし、気づかない。

(チツ…… 原作では途中で気づいたのに…… どうしちまつたんだ！ 白っ!!)

もう、誰の目から見ても、二、三手でシユウの勝利となる盤面を見ながら、ただシユウ一人だけが焦っていた。

白はもう諦めたのか、死人のような、でもどこかこのままでもいいと言うような顔を
して……

(そんな…… そんなもんなのかよっ!? てめえらの関係は、この程度で諦めきれもんなのかよっ!?)

そう、心の中の怒りを押さえ、気を引き締める。

(これでもにも思わなかったらっ! 兄妹失格だぜっ!)
手元のポーンを動かして、切り札を放つ。

「…… 白様が空と最後に別れるとき、空はなんといつていたか…… 覚えていますか?」

「な、なにいつてるんですの!」

「マスター…… それは……」

そう、端から聞けば、ゲームの主旨を鑑みない発言…… だが……

(…… にいが、最後に言った…… 言葉…… ?)

そう、白には…… 白にだけは、違う意味になる!!

(…… 最後に…… 言ったこと…… なんだっけ…… ?)

そう思つて、シユウの顔を見た白の目が……見開く
そこには……

『覚えてるよな。白。』

白をしつかり見てはにかむ、空の姿が見えた

(…… そうだ…… そうだ そうだ そうだ そうだ そうだ!!!)

そうして急速に脳の歯車が回り出す。その脳裏に浮かぶのは

『白、俺らは、いつでも二人で一人だ』

『白、俺らは、約束で結ばれてる』

『白、俺らは、少年漫画の主人公じゃない』

『白、俺らは、常にゲームを始める前に勝ってる』

『東部連合を飲み込む為の、最後のピースを手に入れて来ようぜ』

そして：： 白の目に光が戻る。溢れだす涙をぐしぐしと拭いて、息を整えて：：。
シユウの方をじっと見る。そして、

「：： ありがとう：： シユウ：：」

そういつて置いた白のコマは、今までの劣勢を覆し、勝利を掴む一手となった。

（：： まったく、遅いですよ。）

驚く演技をしながらも、心のなかでそう思うシユウの瞳には、可能性を表す白い翼を大きく広げた少女が映っていた。

閲覧履歴はパンドラの箱

「…シユウありがと、にいがこの世界にいるってことが、分かったから…。」

「…信じてもよろしいですか？」

「…うん。しろは、もう大丈夫だから…。」

「左様にございますか…。」

その言葉を最後に、チエスは白の勝利に終わった。

「…勝たせてよろしかったのですか？マスタ―？」

当初の予定と違う結果になってしまったことに、先のことを読めない不安からか、顔をしかめてジブリールがシユウに問う。

「…白が何かを掴んだって言うんなら、その意見を尊重しないとイケないよな♪んじゃ、白の兄ちゃんの実事もここで終わりだ。いつもの執事服に着替えてくるわ。」

「…うん。わかった。それじゃステフ、ジブリール、手伝って…」

それらがまるで予定調和であったかのように、飄々とした態度のシユウと瞳に生気が戻った白を見て、

「白様のご命令とあらば、喜んでお受けいたします。」

大丈夫なのだ、そう思うことにした。

「よ、よくわかりませんけど！はいですわっ！」

若干一名、追い付いていないようではあったが…



ご無沙汰してます。シユウです。

今回のゲームはまあ、冷や冷やものでしたね。途中で気づくものと思って適当にコマとつてたら、割と早い段階で白が詰みそうになるから、ちよつと危なっかしい発言しちゃったけど…大丈夫だよね？

まあしかし、俺が空になるなんて思いもしなかったな。というか、原作知識もろに使って白のメンタル支えてたみたいだし、もし白がプレイヤーじゃなかったら転生者だつてバレてたろうな。

…。

とりあえず、ここまで来たらもう俺の仕事はないからな。お茶でも用意して置くかね…。

???????

「……さあ、にい…… 帰って、来てーっ!!」

そうして打った最後の一手に、世界は元の形を取り戻す。

エルキア全土に張られた膨大な結界が割れ、維持できなくなった幻想が夢の記憶と改編され、今までの自分を取り戻す。

だが、そんなことなどどうでもいいと、白が真つ先に飛び付いた先にいたのは……

「よし白っ、殴っていいぞっ！蹴ってもいいぞっ!! さあ何でもかかってーっ」

「…… にいつ!!」

長年会えていないかのような、グツとこらえた気持ちをぶつけるように、空のもとへと抱きついた。

「うっ…… ううっ…… にい…… にい…… !!」

「…… しろ、よく頑張ったな。全く、こんなことしたつてのによ…… にいちゃん冥利に尽きるぜ……。」

「な、何が起こつてるんですの!? ソラが…… あれ?」

「あ…… ああっ!!? 私はなんてことを…… あのト畜生猿をあまつさえ…… マママ、マスターなどと!!」

「そ、そこまでショックを受けなくても……」

「クラミーっ!! ねえクラミーっ!! 起きてなのですよっ!!」

と、今までの会話を貫く慟哭が轟くと同時に、ステフ達の目に入ったのは、まるで死体のように横たわるクラミーと、泣きながら必死に体を揺すってクラミーを起こそうとしている森精種エルフの姿があつた。

そこに、追い討ちをかけるように、空が森精種エルフに告げる。

「……さて、俺らの勝ちだな。んじや、予定通りの第一要求といこうか……」

と、ゲームの勝利報酬である二つの要求のうち、ひとつを切り出そうとする……が、「待っ……」そんなことでもするのですよっ!! だから……クラミーだけは……クラミーだけは助けてほしいのですよっ……!!!」

……ピクッ

「ん? 今”なんでも”つて?」

ここで、空の頭脳は白をも越える回転速度で思考を開始するっ!!

(待て、森精種に何でも言うことを聞かせることができれば、あんなことやこんなことができるわけで? いやでも、こんな形の関係でするって言うのは…… いやっ!! 相手も同意の上のことだっ!! 問題なのは俺の倫理観だっ!! 俺が新しい扉を開けばそこに樂園が……)

……と、要求のことなどすっかり忘れて、目の前のドデカイ釣り針に引っ掛かろうと
していた。

「……に……何、考えてるの……?」

そこに、池に石を投げ入れるようにして、釣り針と魚を引き剥がす一言を白が投じる。
「え? あーし、白っ!! いや、俺のパーフェクトプランを、プランBに改良しようとなっ……!!」

指摘されてあわてふためく空を、ジト目で見る白。

「……に……に、真面目にやって。」

「に、にいちやんはこの上無く真面目だぞっ!! 今だってあの森精種エルプをどうしようかシミュレーションをだな……」

「……に……にいさつき、白に『何でもかかってこい』って言った……その内容に、さつきの要求を提示する……」

「なっ…… それはあんまりだあ白オ!!?」

白の言うことに逆らえない空は、うなだれて涙していた。そんな空にステフ、

「そ、それで、予定通りの要求ってなんですか?」

「あ、うん。そうだな。では…… ゴホン!!じゃあ要求その一♪」

咳払いひとつで、先程のおちやらけた顔はどこへやら。まるで獲物をじわじわといたぶるような、悪魔のような笑みを浮かべた空を見て、クラミーを守るように抱き締めて、目を閉じ祈る森精種に一言、

「互いに奪い合った全ての記憶の定着と、奪い合った全ての返還。」

「…………… かはっ!!…………… はっ…………… はあっ……………」

それと同時に、クラミーが息を吹き返す。

「クラミーっ!!大丈夫なのですか!?自分がわかるのですか!?!」

「ええ、大丈夫よフィー。なんとたって……………」

「異世界のバストアップ術をインストールできたから!!」

……………
へ?

先程までの、はりつめた雰囲気をぶち壊すかのような台詞を放ってきた。

「おまつ……なんでそんなこと記憶に巡らしてんだよっ!!?」

「仕方ないじゃないっ!!意識とか飛んでから暇で暇でしようがなくて、あんたの記憶除いてたら、『たゆん☆妹巨乳化計画!!』とか言う物見つけて、（これは見る価値があるわ!!）と、漁ってて……」

「だああ!?やめろお!!俺はそんなことは断じてしてな……」

「妹に手を出すとか、兄以前に人間として最低ですわね。」

「……に、いな、まな板の白の胸……そんなに、嫌だった……?」

「い、いやいや違うぞ白!!?あれはただの健全な本のタイトルであってだな……」

「え?頑張つて調べて紙に書いて……」

「シヤラアアアアツプウ!!クラミーさん、お願いだから黙ってて!!」

「……ごめんねに……にいの好きなおっぱいになれなくて……」

「な、泣くな白!!つつくかクラミーっ!!俺をいじってそんなに楽しいかっ!!」

「ええ、楽しいわよ♪ファイをこんなにしてくれた報いくらいは受けてもらおうわ♪」

そんな、ノリノリのクラミー顔を見て、

「……今回の作戦^{ゲーム}ミスったかな……」

と、ゲームを見事、目論見通りに完遂した割には、どうもしてやられた感が拭えない

空なのであった。

???????

「とまあ、すったもんだあったが、俺らはこれから共闘をする。まずは自己紹介といこう。」

そういつて空はまずはクラミーに自己紹介させようと促す。

「そうね。じゃあ私から。クラミー・ツエルよ。よろしく。」

.....

「え!?それだけなんですの!?!もったこう、何か...」

「自己紹介なんてこんなもんでいいでしょ?次はフィーの番かしら?」

「えー。歳は俺と同じ年の十八歳。身長は158cm、スリーサイズは上からあ...」

と、空が普通の女の子なら周りに聞かれて困るであろう話題を吹っ掛け、口を割ろうとしたが、案の定口を割って入ってくる。

「バストは計8cm増えて78よ。その他は伏せて頂戴。」

そう言うクラミーの胸は……どこか色気をまとった膨らみを帯びていた。

「なんでそこだけ言うんだよ!?」というか、ホントに言われたことしかやってねえのに、どうしてそうなるんだ!?! 白の為にした俺の努力を返せえ!!」

「あ、自首しましたわね。」

「……に……い……」(↑ジト目)

そんな自ら墓穴を掘った空に、痛々しい物を見るかのような目を向けた二人。そんな二人に乗っかって追撃をしようとしたクラミー。

「それはもうあの……」ガチャ

しかし、その言葉は最後まで紡がれることはなく……

「お茶をお持ちしました。」スタスタ……

一人の男によって有耶無耶になった。

「豊胸神様ああああ♥?」ダキッ

「へ？」

「うわつとおつ!？」

シウが現れると同時に、クラミーは喜びのあまりに抱きついた。突然の勢いに倒されるが、しつかり抱きついて離さない。

「あーっ♥? 私の永遠に続くと思つてた悩みを解消するどころか、日々満足感を与えてくれるまでしてくれた神様あ♥? ちゃんとお礼を言えてなかった分は、私の成長記録で返すわ! さあ、見て! 私の胸をつ♥?」

……そのクラミーの表情は、実に恍惚としていた。

「ちよおつ!?! クラミーさん!?! は、☆H A ☆N A ☆S E ☆」

「いやーん♥? もう照れちゃって〜♥? 神様も一応男だからね〜♥? 嬉しいんでしょ! でしょでしょ!?!」

（い、いかん!! クラミーの俺への好感度が、カンスト通り越して転生してるレベルになつてるう!?!）

やんやんと、ニッコニコの笑顔を浮かべるクラミーを見て、一同

「…… チツ。爆ぜちまえ……」

「…… いいなあ……」

「く、クラミーっ!?! 何してるのですか!?!」

「なにつて、神様への参拝に決まってるじゃない!! さあ! 私の成果を... 胸と言う名の青果の成果を... 覧くださいっ♥?」

「あ、あかん!! 完全にトリップしていらっしやるう!!」

「さあ! さあ!... あ、次の神の啓示は何かしら!! 胸のためなら何でも言うこと聞くわよ♥?」

「何でも」とか女の子が軽々といつていい言葉ではありません!!」

「何なら私の成長記録見る!? ちょっと恥ずかしいけど、これからの参考になると思うわ!!」

「そんなピンクな黒歴史を簡単に晒してはいけません!!」

「そうね!! そんなの必要ないわよね!!... あっ! また成長が少し減ったのだけど、どうすればいい? 何かあるなら教えてほしいわ!!」

「元々ねえよ!」

「何なら教典貰えるかしら!! 熟読して暗記できるくらい、本に穴が開くまで読むわ!! 何なら教典暗唱してテストしても満点取ってあげるわ!!」

「聞いちゃいねえ!? ちよっ!! 誰か助け!」

「... チツ、爆ぜちまえ... チツ、爆ぜちまえ... チツ、爆ぜちまえ...」

「空様が同じ台詞繰り返すNPCみたく壊れてるう!」

スタスタスタ……

「し、白様!!今ある良心はあなただけ……」

「…… シュウに、胸…… 見せたりしたら…… 報われますか……?」ギユツ

「白様あ!?!な、涙目になりながら、服を捲り上げてはなりません!!女の子がそんな扇情的なこととしてはいけません!!私の新たな扉が鉄球振り子で無理矢理こじ開けられちゃう!!?」

「クラミーっ!!そんな男のグズから離れるのですよ!!クラミーの胸の魅力を上げるどころか指数関数累乗的に下げて、マイナスの天元突破に導いた悪魔神から離れるのですよっ!!」

「だからごんだけクラミーの胸の成長を恨んでんだよ!?!少しは…… 雀の涙くらいは応援してあげてえ!?!というか…… お嬢様!!違うんですこれは……」

「……………」

「立ったまま気絶してらっしやるう!?!ジ、ジブリー……ルツ!!!」

「あの猿をマスターなどと…… 私は…… ああつ、マスター…… こんなことをしてしまつて申し訳ありません…… あ、でも少し快感が…… これが…… 恋なのですか!?!」

「ジブリーまだそのこと引きずってんのかよ!?!戻つてこおい!!もしくはその新たな扉の先に連れてってえ!!俺だけ!!」

「んもう!!焦れたいわねえ!!……焦れたい?……あ、そうかあ♥?うんうんわかつたわよ♥?初夜を迎えたいのね!!……そういつてくれればいいのに、女の子に言わせるなんて、神様のい・け・ず♥?」

「ちよつと待つて!?!今幾つお前との関係過程すつ飛ばしたあ!?!」

「も、もう私の胸は完全に巨乳になりましたのよ♥?さあ、愛でてください♥?」

「脱ごうとするなあ!!お前の中で何があつたあ!?!」

♪ パパパパーン♪パパパパーン♪パパパパーン♪パパパパーン♪パパパパーン♪

♪ 『新婦、健やかなる時も病める時も、新郎を敬い、愛し、その命あるかぎり、夫と共に過

ぐすことを誓いますか?』

『ええ。誓うわ。だつて……』

たゆゆん♪

『……までしてもらつたもの……あなたになら、私の心、預けて……いえ、預けたいの。』

い・い・か・し・ら・ん♪

『ああ。もちろんだ。この先何があつたつて……』

「この先はありませええん!!!」

(どうする!!?このままだと童貞卒業しちまうっ!!いや、それだけ聞けば喜ばしいことだけど後が怖すぎるっ!!か、かくなる上は……っ!!)

「く、クラミーツ!!」

「はいなんでしよう旦那様♥?あ、お腹の子の蹴ってる音聴きたいんですね?いいですよお♥?」

「想像妊娠してんじゃねえよ!!?お、俺にはな……」

「もう本妻が居るんだよ!!」

「……へ?」

(ここで……博打の嘘をついてやるッ!!)

「お前を巨乳にするために協力してくれた、俺の妻……つまり女神が居るんだよ!!」

「……え?そ、そうなの?だ、誰よそれ……?」

(よしっ!腕の拘束が解けたッ!これで……)

そうして、シュウが立ち上がって手に取ったのは……

「そう、彼女が俺の妻だ。この胸を見たら、納得するだろう?」

……
ステフの手を取っていた。

「あ、嘘……? 私の…… 私達の関係…… は? この子供…… は……?」

感極まった顔から一変、涙を流し、瞳から光を無くし、絶望に染まった表情になった。
(うっ…… なんかとんでもなく悪いことしてる気がしてきたぞ……)

「そっかあ…… 私とは遊びだったんだあ…… でも、私はそれでも…… よかつ……」
タン

あまりの出来事にキャパオーバーとなったクラミーは、静かに気絶していった。

「ふ、ふう…… 取り敢えず終わ……」

「……ハッ!? 何が起こったんですの!?!…… ってシユウ!? なんで私の手を握つて…… っ!! ち、近いっ!! 近いですわあっ!!!」

「わわっ!?! お嬢様すみま……」

「……シユウ…… しろ、諦めないから…… お、お尻からでもいいから、おつきく…… オッキク…… シテエ……」

「白様ストオオオオップ!!! スカートまずいショーツまずい!! R——18行きかねないか

その後、ステフの精神分析により、みんな正気に戻りました。

???????

一息ついてみんなで大浴場に行く際、空が白にに声をかける。

「なあ、白。」

「……なに？」

「兄ちゃんがいない間、大丈夫だったか？」

自分が何も伝えずに始めてしまったゲーム、それにほぼ巻き込んだ形になった白を心配そうに見つめる空に対し、白。

「……大丈夫じゃなかった。」

「……そつか。悪かったな……」

予想通りの言葉に苦い顔をする空に、あわてて白が言葉を繋ぐ。

「……でも、シユウがにいの格好してたから、にいと重ね合わせて耐えることできた。」

だが、そんな白の言葉に疑念を抱く。

「……ん？ちよつと待て。シユウが俺の格好を？」

「……うん。そう。」

「……なんでだ？俺の存在は消えてたはずだろ？シユウが俺の格好なんて出来るわけが……」

「……白はプレイヤーだったから、詳細は分からないけど、にいが元の世界に取り残されているっていう設定だったみたいだ……よ……？」

そういつて見上げた空の顔は、かなり真剣な表情で考えていた。

「ということは、ゲーム上の過去の白はシユウに俺の格好をさせるように頼んだ？白、そんなことをあの世界でするか？」

「……白なら、しないと思う。多分、心折れて……」

「……。」

ポンポン

「すまない白。嫌なこと考えさせちまったな。」

「……ううん。大丈夫……」

「じゃあジブリールは知ってるか？」

「はい。シユウが道端で白を拾い、それから、シユウは空としてやっていくと、記憶上のシユウは言っておりました。」

……

「……にいい？」

「マ、マスター？」

「なあジブリール。あの装置、直せねえか？」

「……いえ、形は元に戻せても、力の源である精霊は、もう宙に溶けて精霊回廊に流れ
てしまっていると思われます。」

「……そうか。わかった。」

「失礼ながらマスター。どうしてそのようなことを？」

「いや、あの装置の履歴探って、どんな風に記憶をいじったのか気になってな。それで、
なんでシユウが俺の格好をしたのか、その経緯を知るためだったんだが……」

「……にいい、シユウがどうかした？」

「ああ……怪しいとは思ってるよ……」

「申し訳ございません。お役に立てずに……」

「いや、大丈夫だ。これは俺の個人的な疑念だしな。そこまで重要じゃない。」

「そうでございませうか。」

「……。」

「じゃ！気を取り直して、お風呂へ出発だ！シユウたちが必死に沸かしてるお風呂を、無

駄にするではないぞっ!!」

そう言って意気揚々と、浴場へ向かう空達なのであった。

異空間物質転送機能

「あーっ!! 暇だっ!!」

「…… 暇、すぎるう……」

そういつて、ゲーム機を放り投げる仕草をするゲームー兄妹。クラミーとフィーとのゲームから数日が経ち、東部連合からゲーム開始の書簡を、暇を潰しながら待つてるのだが……

「流石に飽きたな…… 遠慮無用組手で吹っ飛ばしのみ画面外撃墜縛り1000人もクリアしたし…… どうするよ白? まだ縛ってみるか?」

「…… 面倒、時間が無駄なだけ……」

「だくよなく。もう持つてきてるゲームはほとんど極めちゃってるしなあ…… どんな縛りゲームも作業にしかなんねえ……」

ゲームー兄妹は、今日も今日とて暇を潰すのに多大な労力を使っていた。そんな二人を見かねて、ステフが声をあげる。

「そんなに暇なら暴動の鎮圧を手伝ってくれませんか?! 貴族ではドーラ家以外もう味方してくれないし、ドーラ家の中でも私以外猛反発ですよ?! これ以上押さえることはで

きませんの!!」

怒号と共に目の下の隈から多忙さがうかがえる顔を向けるステフに、空はヘラツとした顔で答える。

「あーあー、聞こえなあーい。政治なんてクソゲーがスタートコール鳴らしてるのなんて聞こえなあーい。」

「この…っ!!」

「まあまあ、お嬢様どうぞ。」

「私は馬じゃないですわ!馬車馬ですわ!!…っ、それも違いますわあっ!!」

そういつてステフをなだめるシユウの目の下にも、ステフと同様に隈を作っていた。政治関係の仕事が火の車になった事もあり、夜通し仕事をする事が多くなったからだろう。そんなシユウは空に向き直って話しかける。

「それで、東部連合の件なのですが…。」

「ん?なに?進展あったの?」

「ええ。というか…。」『もう進展していた』が、正しゆうございますが♪」

「のわっ?!ジブリール!?!」

シユウのセリフを遮って、ジブリールが虚空からコンニチワ♪そのままノリノリで続ける。

「ええ♪ジブリールめにございます♪それでこちらが、マスターが待ちに待った東部連合からの書簡になります♪」

「え!?来てたの!?!」

「ええ。どうやらゲームをさせまいと、エルキア王城の中で封殺されていたようでございますね♪まあ、その方から丁寧に頂きましたがぁ…。えへへえ♪久しぶりに興奮しましたぁ♪」

どうやらいつもよりノリノリのジブリール。その様子に、まさかと空が青ざめる。

「お、おいジブリール。まさか殺…。」

「あ、いえ。その方には叱るかわりに目をじっと覗き込んであげたら、下半身を濡らして泣き喚いた挙げ句、洗いざらい話して頂きました。」

「あ?そうなの?た、大変だったな。(主に相手が)」

「マスターの心配には及びません。」

と、素面で言ってくるジブリールには、先程までのノリが見れない。

(ん?久しぶりに人類種イマニテイの屈服する姿見れて嬉しいんじゃないのか?)

空の予想ではノリの原因はそれだと思っていたのだが、どうやら違うようで…。と、そこにシユウが

「で、その方の後始末を私に任せたのは、どこの誰ですかねえ?」

と、その言葉に、ジブリールの表情にノリが戻る。

「いやあく♪あの方のうろたえる姿も良かったですけどお♪その時に居合わせてしまった貴方が、散々文句を言われて、しかも、苦い顔をしながら床掃除している姿を見たら、もう笑いが止まらぬうございまして♪」

体をクネクネさせるジブリールに、空が納得する。

(あ、そう言うことね。)

そう、ジブリールはシユウの苦しむ姿を見て、テンションが上がっているだけなのであった。

「ジブリール!? 覗いてたんなら手伝ってくれても……」

「…… はいいい?」ニタア

「……。」(↑土下座)

「そこは相変わらずなんですのね……」

覆せない関係性を見てため息をつくステフを尻目に、空が書簡を開いていく。

「んで、これが例の書簡ね。どれどれ…… なあ、白? 今日って何日だ?」

「…… 27……!?!」

空と一緒に読んでいた白が声を上ずらせて言う。

「じゃあ今日じゃねえか!! よーし全員急いで支度しろっ!!」

「わ、わかりま……」

「不肖ジブリール、いつでも準備は出来てございます。」

「……しろ……準備、ばん、たん……」

「その兄、空もいつでも準備オールクリアだっ！さあみんな行くぞっ!!」

「えっ!?えっ!?も、もう準備できてるんですの!?!」

「お嬢様は、式典でもその様なお姿なので大丈夫かと。」

「た、確かにそうですけど……化粧とか……」

「大丈夫です。お嬢様専用化粧セットはここにございますので、お持ちください。」

「あ、それなら安心……ってなんで持ってるんですの!?!」

「書簡を先に拝見しておりましたので。」

「じ、準備万端ですわね……。シユウは行かないんですの?」

「ええ、私は参加しないので、民衆の方々と共に参ります。」

「そ、そうなんですのね……。」

少し残念な表情のステフを見やり、ジブリールが翼を広げて、精霊回廊で空間の精霊を取り込み、跳躍シフトの準備を開始する。

「ちよっ!?!羽こっちに向けんな!!」

翼を広げた先にシユウが居るのは、おそらく故意だろうが。

「おやおや、失礼しました♪」ベシベシ!!

「ちよつ、やめろこのっ!!」グイグイ

「……何やってるんですの……」

「それではマスター、白様にドラちゃん。私に捕まってくださいませ。大使館まで
跳躍……」

「あ、ジブリールそれ却下。」

「え?」

発動する気満々だったのか、ジブリールの周りの空間が少しだけ胎動して、ステフが
持ってきていた仕事の書類が少し舞い散った。

「んじやステフ、城の正面に馬車を用意させろ。ド正門から堂々とするから。」

「なっ!!……ぼ、暴動中ですわよっ!!」

「だからこそ……さ。さあ、みんないくぞー!」

「ち……ちよつと待って……」

そう高らかに声をあげて行進していく空達を尻目に、ステフは風圧によって飛び散つた資料を片付けようと、手に取っていくと……

「……あれ? ページ数が足りないような……?」

ざらつと見てみると、書類の枚数が少ないような気がしたが……

「おーいステフ！何やってんだ早く行くぞ!!」

「あつ!!はい！今行きますわ!!」

取り敢えず書類を机の上に置いて、空の後を追うのであった。

???????

ご無沙汰しております。シユウです。

えー、ただ今……

「んう?なんでシユウがここにいんだ、です?」

いづなたんの前にいます。

んー、周りに資料がちらほら落ちていることから、多分ジブリールの跳躍が発した分のエネルギーが変に作用して跳ばされたってことだろうか?

「んー私にとつても不測の事態なんですよねえ……」

「そうなのか、です?」

「はい。まあ原因は予測がつくので問題ありませんけどね。」

「む、わかった、です。でも今は忙しい、です。観客席にでもいろや、です。」

そうやって目を閉じ、精神統一を始めるいづなたん。うーん。確かにここに跳ばされたとはいえ、何かできることがあるわけでも……ん？

「……う」

「どうかなさいましたか？ いづな様。表情が優れていませんが……」
「……いいからあつち行つてろや、です。」

まあ、ゲームの賭けの内容だけに心の負荷は大きいだろうなあ……でも、人類種に変な同情されたくもなさそうだし……

ん、なら。

「……なら、これはいかがですか？」

「なんだ？これは、です？」クンクン

「これは果汁や砂糖などを固めて作った飴玉というものです。大丈夫です。害になるものは入ってませんから。」

「……ん、嘘は言つてねえ、です……もらつてやつてもいいぞ、です。」

言葉に若干の棘があるものの、甘い匂いと初めての食べ物に好奇心を抑えられないのか、尻尾をブンブン振り、口を開けて待っていた。

「では。」コロン

「ん。甘え、です♪」

「それはよかった。」

「……。」

「……。」

「シユウ。」

「はい、なんでございましょうか?」

「……シユウは、このゲームに勝ったら、いづなたちをどうするつもりだ……です?」

「……どうもこうも、私はゲームに参加しないので、私にそんな権利はありませんよ。」

「そうか、です。」

「……いづな様はゲームは好きですか?」

「ゲームはあんまり好きじゃねえ、です。ずっとこんな、勝って当たり前のゲームしてきて、今はそのカラクリがバレてゲームに負けて、皆ひどい目に合うんじゃないかと不安で仕方ねえ、です……。」

……はあ、原作でステフが言ってた通り、いづなは幼いながらも本当に利発だと思う。先の事もしつかり考えられるというかなんというか……

「……では、一つゲームをしませんか?」

「ん?なんでだ、です?」

「まあまあ、ちよつたしたおせっかいですよ。で、まだ時間はありますから……やりま

せんか？」

「……む、合点……です。」

「これからやるゲームはトランプゲームの一種、『スピード』っていうゲームなんだけど、知ってるかな？」

「知らねえ、です。」

「そうなのですか？なら、場には二つのカードを……」

「……」ジーツ

執事説明中……

「どうです？わかりましたか？」

「む、わかったぞ、です！」

「では早速やってみましょう……では、スター……」

シユバババババババババツババババ!!

「!!?」

「早くカードだせや、です。」

「は、はい……」スツ

シュババババババ!!!

「遅え、です。やる気あんのか、です?」

「……フッフ」

「?」

「やってやろうじゃねえk」

結果・シュウ完敗

「……シュウ、弱すぎだろ、です。」

「あ、あの速さは卑怯ですってえ……」

「……ふふ♪」

まあ、こんなもんかねえ……

「……さて、そろそろ時間ですね。」

「あつ、もうこんな時間か、です。」

「……ゲーム、どうでしたか？」

「シユウが弱すぎてつまんねえ、です。」

「そうでしたか？それは申し訳ありませんでした。ですが、私は楽しんでゲームをできましたよ。」

「負けたのにか、です？」

「ええ、私は私なりにいづな様に勝てるように工夫したり、いづな様の手さばきに驚きながらも、見とれてしまったりと、ゲームの結果よりも過程が楽しかったものだから。」

「過程……です？」

「そうです。ゲームに勝ち負けはつくもの、ですが、やはり楽しいのは過程なのではないでしょうか？」

「……」

「まあ、私では説得力に欠けるでしょうから、そこは空様達に任せますよ。」

「でも空達とのゲームは……負けちやいけねえん……です。楽しくなんて……」

「絶対に負けられない勝負……ですか。」

「そうです。負けちゃいけねえん……です。」

……空達は負けないことを絶対のルールとし、勝つために様々な思考を巡らすことを楽しんでるが、こういう負けないって縛りは結構つらいものがあるよなあ……

「……では私と約束をしませんか？」

「いきなりなんだ、です？」

「例えいづな様が負けてしまったとしても、決して不幸にはさせませんので、勝敗の結果など考えずにゲームを楽しんでもらえませんか？」

「……そんな約束守れんのか、です？」

「ええ。私は執事ですよ。しかも王様の側近にいる従者です。土下座でもゲームでもしてやりますよー！」

「ゲームよわつちいだろ、です。」

「でもやらないとわからないのですよ？ 私の弱さに同情を得られるやもしれませんが……？」

「……なんでそこまでいづなの為にするん、です？」

「なんで……それはですね……」

「不安でいっぱいなのいづな様より、笑顔のいづな様の方がいいに決まってるからですよ。」

「…… 訳わかんねえ、です。」

「まあ、勝敗なんて気にしなくていいって言いたかっただけです。では……」

「……」

「約束、忘れんじゃねえぞ、です。」

ギヤルゲーの神様は中途半端がお嫌いなようです

ゲーム開始時刻、飄々とゲームルールを述べていくのに対し、細かな、しかし見逃してはならないルールの穴を軽快にふさいでいく空、『ゲームが始まる前から既にゲームは始まっている』その言葉を体现するかのような王のやり取りに関心を覚えつつも、^{イマニテイ}人類種の王がこのゲームに賭けた『種の駒』すなわち自身の威厳はおろか生命にかかわるものを平然とかけた王の挙動を一部たりとも見逃すまいという意思を宿した視線が、ゲーム会場を包む。

「では、ルールの説明および確認は以上、ということではよろしいですか？」

「ああ、特に問題ないぜ爺さん。んじゃ、始めようか？」

「では、同意したということ…… 盟約の宣言を願います。」

その言葉に合わせて空、白、ジブリール、ステフ、いづなが手を挙げ、

「【盟約^{アツシエンテ}に誓^テって】」

「【盟約^{アツシエンテ}に誓^テって】、です。」

その言葉を合図にゲームの起動を開始したのか、徐々に意識が薄れていく感覚を覚えながら、空はふと隣の席にいるいづなの表情をうかがってみた。

その表情は人懐っこさなど微塵もない、これからのゲームに真摯に取り組むという姿勢を表したような表情、その表情を見て何か思うところがあつたのか、つい口をこぼす。

「なあ、いづなさ」

「……なんだ、です？」

「最後にゲームを”楽しい”って感じたの、いつ？」

その言葉を聞きたいづなはハツとした表情を見せるが、なぜかニコツと笑ってこう答えた。

「それをおめえらが教えてくれんだろ、です。」

その言葉に空が何かを思うよりも早く、スクリーンは黒く染まり。そして。

―空達の意識は、スクリーンの中に飲み込まれた―



「ようやく始まりましたか……」

いやーうん。ようやくここまで来ましたね。

先王の託した人類種唯一の勝ち筋にして生存権を得る戦い。加えてそれを利用し尽

くし、さらにはエルキアの安定をもたらすという空達の策略がこれを期に展開している。

そう考えると中々頑張ったなあ俺。ほめてもいいのよん？

『果たしてそれは、ほめられるほどの事かしら？』

「へ？」

???????

「フィー？大丈夫？」

（はい。ちゃんとかラミーのおめめをバッチリ……っ!!?）

「えっ、どうしたのフィー!？」

（だ、大丈夫なのですよ……ただ、ここ周辺の精霊が大きく揺れたのですよ……）

「な、なんですって!?!もしかして他の種族が魔法を……」

（わ、わからないのですよ……突然の事だったし、何より精霊が安定……というよりも、現象が起きる前の状態に戻ってしまったのですよ。）

「くっ、証拠をもう消したって感じかしら……」

（クラミー、そちらに変化は無いのですか?）

「うーん。そうねえ…… あっ!!」

(えっ!何か分かったのですか?!)

「豊胸神が居ないのっ!!どこえ消えたの!?!さっきまで12―55席に座ってたのにつ
!!?」

(やったのですよお!!サタニスト豊胸神が死んだのですよお!!これからクラミーの胸は元の神

乳……いえ!水も垂直降下する胸神胸板への復活なのですよお!!)

「いやあああああ!!!神が死んだあああああ!!!バストが……バストが縮んでる気
がするううう!!」

そこには地にうなだれて号泣するクラミーと、天を仰いでこの幸福に酔いしれる
フイーの姿があつた……

???????

(シユウ……起きなさいシユウ……)

(ん?どこかで聞いたことのある声だな……)

「……ふあい……おはようございます。」

「はい♪おはようございます♪また会えて嬉しいわ♪」

「ふえ!? あっ…：へあっ!? あれ? え? 何でここに!?!」

「あはは。ごめんね? 突然呼び出しちゃって。メリーちゃんがシユウをよべー、シユウをよべー、今すぐシユウをよべーって言って聞かないからさー。ついに根負けしちゃったって訳♪」

「えっ!? ボツチ神!?!」

「またそれ蒸し返すの!?! いい加減にしないと元の世界に戻しちゃうよ!?!」

「あつ、シユウの魂は私の所有物のようなものなので、それをやってしまうと剥奪行為…：つまり、盟約に反する行為になってしまいますよ?」

「そうだぞ。身の程を知るがいい!」

「身の程唯一神なんだけどね!?!」

「俺の魂を剥奪したらフォルメリア様に唯一神テト、盟約違反ついにやらかすって全種族に炎上報道してやるから覚悟しろ!」

「何で神に対してこうも敬意がないのかなあ…：」

「ところで、俺になにか用が?」

「そうそう! そろそろ『』が東部連合とのゲームに…：」

「ち、ちよつと待ったあ!!!」

「え？どうしたのですか？唯一神様？」

「なに？自分の友達の数でも報告したいんですかテト様？」

「シユウとゲームするときは完膚なきまでにいじめるからそのつもりでいてね♪…じゃなくて、ほら！これ見てよこれ!!」

そう言つてテトが差し出してきたのは一冊のノート。そこには東部連合とのゲーム内容が事細かに記されていた。まさにそれは、原作のような書き方で書かれていたのは不思議ではあったが…

「ああ、なるほど、今の『』が行つてるゲームのネタバレをして欲しくないって事ですわね？」

「そうだよっ!!まあ、確かに『』がこんなところで負けるとは思わないけど、僕は未
来予知とかネタバレの類いはしない主義だからね！」

「それでは… 申し訳ありませんが、席を少しだけ外してはもらえないでしょうか？」

「僕はシユウの運び屋じゃないんだけどなあ…」

「お礼と言つてはなんです、フォルメリア様が今度テト様とゲームをしてもよいと…」

「やったあ!!覚悟しておいてよ!!今は彼らの観察で忙しいけど暇ができたらずぐにゲー

ムしよう!! あつ、そのときに世界の10分の1が消し飛んだとしても十六種族は大丈夫だから安心してね!! じゃあまたっ!!」

「……」

「案外テト様つてアホなんでしょう? いつするかも、そもそもしても『よい』とまで言つてなかつたのに……」

「唯一神様もかなりお暇だったのでしようね…… おいたわしや……」

と、二人して暇神^{テト}を哀れみつつ、この会話に反応していないところから、どうやらテトは会話を聞き取ることをしていないという確認がとれたところで……

「さて、シユウ。よくここまで来ましたね。」

「まあ、空達に巻き込まれてる感じが否めないけども……」

「そう、あなたはまだ巻き込まれてる側よ。エルキアの再興のために『』の成す事に巻き込まれてるだけ。あなたは巻き込む側にまだ立っていないわ。」

「あー、確かにそうかも。最近は空達にくつついていくのでやつとだったからなあ。少しは進展あつたかもだけど、仲良くなつたかと言われればそうでもない気がする。」

「まあ、今の状況をギャルゲーで例えるなら……」

「ギャルゲー!?!」

「今はまだ、共通ルートよ。そしてエルキアの再興、回復の兆しが見えたとき、個別ルー

トに入るの。」

「……ギャルゲーマーにはわかりやすいから困る。」

「でしょ♪それで共通ルートは、あなたがこの世界に来て、どんなことに巻き込まれていくのか、どのようにヒロイン達と出会うか、どんな関係性が生まれたのか、そして、その巻き込みが一息つくまでが共通ルート。はつきり言えば、どんなヒロインが居るかを
知るためのルートね」

「そして、個別ルートは、それから攻略キャラを決めて、物事に挑んでいく。その過程で新たな関係性が生まれたり、信頼を深めたりしていく。そう、もうすぐあなたには分岐点
が到来するわ。」

「だが、原作にはそんなシーンは無いような……」

「それはそうよ。だって原作の目的はゲームの世界で神に挑むって目的でやってるもの。女の子に愛されるのは副次結果であって主目的ではないわ。だから個別ルートは
強調されず、共通ルートを進んでるように見えるの。強いて言えば『』がテトルート
を目指してるって感じかしらね。」

「強いて言い過ぎのような気がしないでもない。」

「でも、あなたは違う。目的は『ステフを幸せにすること』決して『』のゲームに巻き込まれていくのが目的では無いことを覚えておいてね？今の状況に慣れてしまつて

は、当初の目的が消えてしまうわ。あなたがそれでいいなら良いけど、私はそうなった場合によつては魂を手放すかもしれないわね。」

「……要するに、こつから先はメリハリをつけるって事か？」

「そうね。でも……」

「何もステファニーを愛しなさいとは言つてないわ。」

「へ？」

意外な意見を言われ、呆気にとられるシユウに素つ気なく続ける。

「いや、もちろん元の世界に居たときの気持ちはずつと残つて居るのなら全然いいんだけど、共通ルートは彼女達の事をリアルに知るための期間。読んで知るのは比べ物にならないほどの魅力を感じてきたはずよ。」

「……まあ、想像と違つてた面も多くあつたよ。」

「だから、もしステフちゃんを選ばなくつても構わないわ。人の心は移ろうこともあるのは事実だし、それを否定する気もないわ。でも、私の気紛れとあなたの思いが今の状

況を型どった。その結果を、私は最後まで見届けてみたいわ。」

「ま、その意見に同意するよ。」

「ふふ♪嬉しいわね。でも、口だけならなんとでも言えるわ。これからの行動で示すのが信頼を勝ち取るのよ。さあ、選びなさい。」

「あなたは誰といっしょにいたいのかしら……？」



「しかし、楽しそうにやりおるのお。今までのやつらはそんな余裕持ち合わせてはおりやせんやったのに……」

ゲームの様子が映し出されている液晶テレビを見ながら、からからと笑い声を放つ彼女に、どこからか声が木霊する。

【問 なぜ貴公は笑う？】

その問いに驚く様子もなく、さも当然のように空虚に向かって彼女は返す。

「ん〜？そりやおもしろい事が起きとるからや♪」

【国の危機に値する事項であるのに何故か？】

「そうやねえ……」

眩きを、目の前の液晶テレビに向かってではなく、見上げた天井にこぼす。

「あての目指した定石の……果てを垣間見たんよ……」

【……汝の希求する事項を、か？】

「いんや、正確には諦めてたんやけど……そやなあ……」

視線を液晶テレビに戻して、まるで言い聞かせるように、少しからからと笑いながら狐の獣人種ワービーストは言った。

「あやつらが勝ち上がってきたら、きっと果てが見つかるやもしれへんなあ……」

その視線の先に映っていたのは、実に楽しそうに、無邪気な笑顔で遊ぶ、いづなの姿があった

「ほな、そろそろ行こか。」



「うおおおおおおおおお!!!」

「やりやがったぜ!!! 我らが王は!!!」

「信じてたぞー!!!」

「今日は祝杯だあ!!!」

東部連合とのゲームに勝利し、意識を現に戻した空達を迎えたのは多くの人類種の歓声であった。

「はあ、さつきまで俺らのことを寸分の狂いもなく疑ってたくせによ……笑えるぜ。」

「手首、ポリキャップかよお……!!」

「マスターの癪に障るのであれば、今すぐ声帯を切り裂いて黙らせましょうか♡」

「そ、そこまでしなくてもいいですわよっ!!」

歓声に対する言葉をそれぞれに述べた後、空はいのに向いて

「んじゃ、後始末は任せとくわじーさん。あとで迎えに行くからよろしく♪」

「……承知いたしました。」

「空、空! シュウはどこだ、です? お礼言ってる、です!」

「んあ? シュウか…… 観客席のどっかにいるんじゃねーの?」

「合点、です!!」 シュウタタツ

「あれだけのゲームをやったのにも関わらず元気ですわね……」

「さ、俺たちも一足先にエルキアに戻って風呂でも……」

「空!!大変よ!!シユウが消えたの!!」

「はあ?消えたあ!!?」



ギヤルゲー。それは電算システムが作り出した究極のゲーム。

ギヤルゲー。それは絵師が描く魅惑の人物が織りなすゲーム。

ギヤルゲー。それは作曲家が奏でる幻想の音色が木霊するゲーム。

ギヤルゲー。それは脚本家が放つ人生の1ページを刻んだゲーム。

ギヤルゲー。それは人の理想を、人が創り上げた最高のゲームジャンルなのである。

我々はキャラクターに魅せられ、心躍らせ、時間を費やす。そこに、我々では経験できなくとも、知ることのできる恋愛談を、真摯として刮目する。

……ここに、一つの物語がある。

「まったく、私の質問を15489個残してどこかに行くとは…… 見つけたら質問で埋め殺して差し上げましょう♡」

空を舞い、空間を転移して、10年という付き合いを重ねた質問の回答者を探す
フリーゲル
天翼種、『ジブリアル』

「このままじゃ…… 私の胸が…… しぼんで…… しぼんで…… ああ……」

コンプレックスの塊を、胸という形で出現させた豊胸神を肩を落としながら探す
イマニティ
人類種、『クラミー・ツエル』

「いづなが悪かったん…… です？ いづなが楽しんだのがいけなかったん…… です？」

人生で最高のゲームをした後に、そのヒントを与えてくれた人を、席番号12―54に座って待つ獣人種、『ワビースト』

「おいじいさん!! てめえなにかしたのか!？」

「な、何もしておりませぬ!! 私にも何が何だか!!」

「にい!! 落ち着いて!! まずは情報を…… っ!!」

「シュウ…… シュウ…… シュウ……!! どこにいるんですのお!!」

観客席、倉庫、装置の裏、会場の外を必死に走り、自身の支えとなってくれた人を探
イマニティ
す人類種、『ステファニー・ドロー』

この物語の『共通ルート』の残り一ページが今、一人の男の手によって開かれる
 「俺は……っ!!」



「どう?もう終わったかな?」

虚空からさも当然のように現れる唯一神に、もう慣れたものだと言口を開く。

「はい、もう終わりましたよ♪」

「そうかい!じゃあ今すぐゲームしよう!!どう?異世界からテーブルゲームや古代の心理戦ゲームまで色々ど…!!」

「んー、ちよーつと用事を思い出したので行ってきますねえ♪」ピヨーン

「あつ!?!ちよつと!?!敵前逃亡は卑怯だつてばあ!?!約束と違うじゃないかあ!?!」

「さて、これからどうなることやら…私も恋愛^{カミサマ}厨として、見守らせていただきますよ

♪」

余韻は常に消えゆく

あなたは迷ったことがあるだろうか？

唐突な質問で済まないが、急を要するんだ。想像してみてくれ。

今、あなたの目の前に五人の女性がいます。特徴を挙げるなら…そうだな、

一人は包容力のある、ふわふわ雰囲気的女性

一人は知的好奇心旺盛で、物静かなメガネ属性持ちの女性

一人は姉御肌で頼りがいのある、お酒好きの女性

一人は花より団子な、活気のある女性

一人はちよつと背伸びしがちのレディ（笑）な女性

それぞれに魅力があり、あなたはその五人から熱烈な愛情を示されている。

なぜか？それはあなたが攻略したいキャラが決めきれず、とりあえず友達以上恋人未満の関係を持ち、彼女たち全員に猛烈にアピールを繰り返した末の出来事である。え？無理がある設定だって？

：

ゲームじゃ当然の話だよなあ???

兎にも角にも、ラノベ小説みたきゲームの世界に入って冒険したり超能力授かったり現代文化持ち込んで『お前スゲー!』って言われたり都合よく友達が女性ばっかの学園生活送ったりだのしている中でっ!!そーゆー関係になったあなたと五人の彼女たちなのですがっ!!あなたは選択を迫られましたっ!!

『どの人と結婚したいですか?』

えーつまり何が言いたいのかというと、ゲーム内の友達以上恋人未満の関係が終わり、それぞれの個別ルートも粗方終わって、最終的に誰か一人を選ぶというような質問ですな!

例えるならギャルゲーで全員のヒロイン攻略した上で一人だけ、アフターストーリーを見るなら誰ですか? 的な質問だ。

え? 全員分あとから見れるでしょだつて? そんな1人限定とかしたら製作会社に罵倒のシユプレヒコール鳴り響くつて?

∴

そういう問題じゃないのっ!!初めては誰にするのかが大事なのっ!!

おめーらファーストキッスを大事にしたいと思わんのか!?電車とかですれ違う赤の他人にファーストキッスあげたいですか!?あ、お母さんが最初ですっていう、家族が最初ってのは無しな!!

もつと言うなら童貞をそこらの適当な女性にあげたいですか!?初エッチを特に感慨もない女性で済ませちやつていいんですか!?

童貞にもつと誇りを持ってやあ!!童貞万歳!!童帝万歳!!初エッチは二次元の美少女にあげたああいつ!!

…なんか虚しくなってきたな…。

はい、脱線しすぎましたね。要は五人から一人、生涯を共にする伴侶を選んでほしいということだ。もつと具体性が欲しいなら上記の五人に当てはまるキヤラクターを挙げてみて、その中から選んでほしい。

…決まったかな?

ちなみに私は決めきれなかった。こんなことで悶々と悩んでいる私を見かねて、友達

はこう言った。

『最初から誰か一人に絞って攻略してれば、迷う必要なかったのに』

：ああ、その通りだよ。でもな、私には全員が魅力的に見えて仕方なかったんだよ：最初っからコイントスしたりサイコロ転がしたりY e s / N o 枕で寝てみたりして決めようと思ったけど、できなかつたんだよ畜生がつ!!

『なんだ？お前好みとかないのか？』

友達は怪訝そうな目でこちらを見つめてくる。

何でそんな顔すんだよ!!好みとかそういう問題じゃ：：： つ!!

『はあ：：：だからお前は：：：』

片手を額に当ててため息を吐き、半目開きの瞳を私に向けながらこう言った。

『初めの第一歩を踏み出せないんだよ。自分のエゴもないやつに、彼女たちが惚れてくれるとも思ってたんのか？漫画のふらふら系ハーレム主人公がなぜハーレムを維持できるのか知ってるか？それはな：：：』

『他人のエゴに染まつてるからだよ。』

：

私は…男の夢を…目指していたようだ…

□□□

「はあ…はあ… シュウ… 一体どこにいるんですの…？」

東部連合エルキア大使館の裏手に、走り回って探し続けたせいかな肩で息をする少女、『ステファニー・ドローラ』。

東部連合とのゲームが終了してから、二時間が経過。ほとんどの人類種イマニテイはとうの昔に帰宅しており、夕陽が海に消え去ろうとしていた。

そんな中でも懸命に探し続けたが、先ほど行つたいづなどのゲームの影響もあつてか、体力はどうに限界にきており、ステフはその場にしがみこんでしまう。

そして…

「シュウ、もう会えないんですの？ そんな… 嫌ですわ。認めないですわっ!! シュウがいたから、ここまで来れたっていうのに… せっかくエルキアの… おじいさまの願いをかなえたっていうのに… あなたがいないんじゃないや…」

「シユウがいなくなってしまうたら、何の意味も無いじゃありませんのっ!!」

いつの間にか涙を流し、地面に向かって慟哭する。やりきれない感情が、嗚咽となつてしか出ていかない。

「こんなことになるくらいなら… いっそ… つ!!」

こんな結末になるとわかっていたならと、どうしようもないことにもかかわらず後悔の念に押しつぶされそうになるステフの耳に、一人の男の声が響く。

「お嬢様?」

「っ!!?」

勢いよく声の主の方へと顔を上げ、見つめる視線の先にいたのは… エルキア王城専属執事、シユウであった。

「ど、どうなさったのですか!?! そんなに泣いて… ま、まさか、東部連合とのゲームに敗北なさったのですか!?! ごごご、ご安心ください!! 今すぐ再戦を申し込んで… つてもう人類種十六種族外!!? 再戦する権利どころか獣人種ワイルドビーストの家畜になつて!!? わ、わ、いい今すぐここを離れましょう!! 私と一緒にどこかへ… つ!!?」

「シユウっ!!」ダキッ!!

「What!?!」

感極まったのか、ステフは言葉を遮ってシユウのもとへ駆け、抱き着いた。

「よかったですわ!! 本当に無事で… よかったですわああああん!!」

「へ!?! いいいい、一体何が…!?!」

(え? 何? 何が起こってるの!?! いきなりステフに抱きしめられてるんですけど!?! フォルメリア様から転移^{シフト}してもらった途端これってなんのイベントですか!?! というか感触がヤバいっ!! 一旦離れて… って力つよおい!?! うおおおお!! 耐えるんだ私の煩惱ううう!!)

シユウが己の煩惱に苦悶している中、二つの人影が近づいてくる。その人影はシユウたちを見つけるとすぐさま駆け寄ってきて言葉をかける。

「お! よかった、見つかったのか。探したんだぞーシユウ。今までどこに行つてたんだ?」

「あ、空様に白様。申し訳ございません。ご心配をおかけしました。」

「…ん、よかった… 無事で何より…」

「え!?! 空に白っ!?! いつの間に… って、きゃあああああああああああああああつ!!」ド
ンツ!!

「どわっぷ!!」 バターン!!

今の状況を空達に見られて羞恥心に駆られたのか、思いつきり俺を突き飛ばして猛ダツシユで物陰に隠れていった。

「あー、シユウ、今すぐ… 死んどく?」

「… リア充、死すべし、慈悲は… なあ〜いつ!!」

「いやいやいや!! 私にも何が何だか!!」

手を振って今の状況を理解できていないことを空達に伝えるも、どうやらリア充シーンが与えたシヨックは二人の逆鱗に触れてしまったらしく、聞く耳を持たない。

(… え? めめめ、盟約で守られているとはいえこの空気はヤバいつ!! 早く何とかしないと… そうだっ!!)

「白様っ!! ちよーっとお体に触りますよっ!!」

シユウは体勢を整えると、咄嗟に白の脇あたりに手を入れて掴み上げる。

(… って軽う!!? なんだか発泡スチロール持つてる気分なんだけど大丈夫なのかこの体!!?)

あまりの白の軽さに驚愕したシユウであったが、空と白も別の意味で驚愕していた。

「… ふえっ!!」

「あーっ!! 俺の白にまで手を出そうってのか!!? 許さんっ!!」

「……『俺の』……」ポツ

（はいはい惚気惚気……だが、惚気るにはまだ早いっ!!）

「受け取れえ!!」

シユウは空の胸板に白をシユーーーーーッ!!

「うおっ!!?」

「……ッ!!」

予想外の出来事に硬直する二人であったが、先に状況を理解した白が行動を起こす。

ガッシーーン!!!

「お、おい白?何で兄ちゃんの胴体に腕と足を回してるのかな?」

「ふふ……『俺の白』……ふふ……♡」

それを聞いた空の顔が動揺の色を見せる。

「えっ!!あつ、それはだな、二人で一人の『くうはく』って意味で……ってあれ?なんで俺あんな事……」

「……」

「……」

（説明しよう!!普段遠慮がちな白の為に空から白を奪うように見せかけ、鈍感空野郎の

白に対する本音を吐き出させつつ、空の胸に飛び込ませるといふ白にとつては願ったり叶ったりの作戦なのだっ!! 危害を加えようとしているわけではなく、完全に善意の行爲だったからなせた事だな!! フハハハ!!… ふ、これで一安心…)

「おやおやおやあ? てつきり地獄にでも迷い込んだのかと思いましたが、しぶとく生きていたとは… さすがにございますねえ♪」

(… うわ、悪魔が来た。)

一息つこうとしたシユウの眼前に、^{シフト}転移してきたのか、ふわりと優雅に降り立ったジブリール。

「地獄にいたほうがよかったかな?」

「いえ? たとえそうであつたとしても、地獄まで迎えに行きますのでご心配なく。」

(へ? それつて俺とどこまでも一緒にいるつていう告白…)

「私の質問を残して消えるなど神が許しても私が許しませんので。たとえどこかへ逃げようとも地の果てまで追いかけ、死んだとしてもありとあらゆる手段を尽くして復活させるのでご心配なく♪」

「ウワーソレハウレシーナー」(白目)

(うん。なんかもう、ジブリールからは一生逃げられないんじゃないかと思えてきたよ…)

若干の諦めを抱きつつ、夕陽に視線を向けようとしたシユウの耳に、小さな足音が聞こえてくる。

「シユウ、ここに居やがったか、です!!」

「あ、いづな様。ご心配をおかけしたようで、申し訳ございません。」

「無事ならいいんだ、です。あ、それとシユウ、ありがとう、です!!おかげですげー楽しいゲームができた、です!!感謝してやる、です!!」

「光栄の至りにございます。」

(…いづなが笑ってるってことは無事に空達が勝利したってことなのかな?…そうなんだろな。うん。みんな楽しめてるんだったらきつとな。)

それぞれの表情を見て、どうやら原作通りに行っているのだと確信し、ようやく休息が得られると思ったのだが…。どうやらそれは、もう少し先のように…

「ほお?いつまで経っても来やせんから、何かあったんか?思てわざわざ足運んできたつちゆうに、遊んでたんかあんたら?ほんまのんきなもんやねえ♪」

…と、シユウが脳内で状況を整理していたところに突如、アニメで聞きなれた人物の最後の一人の声が聞こえた。

(ん?この声はまさか.:.)

カラカラと鈴の音を鳴らし、下駄を石畳に軽快に打ち付けながらシユウたちの前に颯爽と現れたのは、

「ほんまにようやってくれたのう、ハゲ猿。ただでは死なんぞ?」

獣人種ワビーストの長、巫女であつた。

あなたの心に神理学☆

「お？あんたが噂の巫女さん？」

突如として現れたにもかかわらず、むしろ来ることを知っていたかのように飄々と対応する空に、流石というべきか、巫女も特に気取った様子を見せることもなく応対する。

「そうや、あてが巫女。ワリーブスト 獣人種の長をやつとるもんや。よろしゅうなあ♪」

「そうかいそうかい。でさ？写真撮つてもいい？いや撮る!!こんな美しい女人を取らずにいられるだろうか、いやいられないっ!!」

言葉とは裏腹に巫女の表情は獲物を狩る猛獣の双眸をたたえて笑っていたのだが、そんなのお構いなしにシャッターを切り続ける空。

「おや、口は結構うまいやねえ。でも、その口が二度と開けんようにしたるさかい、覚悟しいや？」

「ねえ、なあんでそんなに敵意剥き出しなのかなあ？俺そんなに悪いことしたっけか？」

「自覚無い！言うんは流石に無理があると思うで？あての腸煮えくり返ってるんがこの顔見てわからんかえ？」

「んゝその表情は表情で結構映えるから特に気にしないけどなあ……で、何かこの領土

に忘れ物でもしたのかな巫女さん♡」

あからさまに巫女を煽っていく言動を放つ空に、ついに堪忍袋の緒が切れたのか、風を切るように一瞬で空に近づき、巫女は宣言した。

「これからあてら東部連合はエルキアに対して報復させてもらうわ。」



どうも、ご無沙汰しております。 シユウです。

いよいよ原作三巻最後のゲーム、『世界一物騒なコイントス』が始まろうとしています。ま、結果は原作を知っている人なら、結局は空の手の平の上ってことに変わりはないんですけどね。

場所は東部連合エルキア大使館前なのですが、道が石畳のようになっていたので原作と同様にする様子。もし草原とかだったらコイントスにならずに別のゲームが見れたかも？

「シユウ、巫女様は報復なんて言っていましたけど、コイントスなんかで決めて本当に大丈夫なんですの？」

運の要素が強いコイントスを選んだことになんかの不安を覚えているステフ。まあ、気持ちにはわからなくてもないがな。

「大丈夫ですよ。空様が何の策もなしにゲームをしたことがありますか？」

「ないですわね」

即答とは…。ま、その意地悪であり用意周到な空の面は、ステフの中でちゃんと認められているということなのでしょう。

「だからこそ、大丈夫なはずですから。安心して見ていてください。」

「わ、わかりましたわ…。」

うん、そんな空の面を知っていてもなお、不安な表情はぬぐえないみたい。理解はできても納得はいかないってこういうことを言うんだろうなあ。

「まったく、我がマスターを信頼できないとは、それでもマスターの奴隷ですか？ ドラちゃん？」

「奴隷になったつもりはこれっぽっちもございませんわよっ!!？」

「空は誰も犠牲にならねえって言ってた、です。空の言葉に嘘のにおいしなかった、です。だから少しは信じろや、です。」

「うゝ!! わかりましたわよっ!! 覚悟を決めますわっ!!」

頬をパンツと叩いて一喝入れたステフの表情は肝が据わったかのように堂々として

いた。

「な、なんですの？ そんなに見られると… は、恥ずかしいですわ…」

「あ、し、失礼しましたっ！」

やばい、ついステフの顔をじろじろを見つめてしまった。やっぱり女性って人の視線に敏感なんだなあ…。ま、あとは見守るだけで事は済みそうですし、静かにしていま…

【汝、本当に良いのか？】

ん？

【汝に利用された身とはいえ、築き上げた国を天運に任すような遊戯で決めなくともよいのではないか？】

なんだこの、脳内に直接語り掛ける…。いや、流れてきているような言葉は？

【む、必然… か、汝程度の力ならそれも容易かろう… 少し眠る。】

あつ、これって帆楼の言葉か!! アニメに帆楼出てなかったから声色で判断つかなかったけど多分そうだわ!!… つか声色まんま幼女… ゲフンゲフン!! といつかなんて帆楼の声が聞こえてるんだろ?… あーあれだ!! フォルメリアが神霊種で、その力で俺の魂をこの世界に繋ぎ止めてるって言ってたから、オールドデウス神霊種パワーのシンパシー的何か

起こっているんだな!!

【… ？ ？ ？ 同じ神霊種の気配を感じる… ？】

あつー！感づかれた!? いや、ここであればても… いや結構やばいぞ!? ほぼ完全に異世界転生者だつてバレルじゃん!!? どうする? どうする? どうする? どうする? どうする!!? (にや、にやくん…)

【なんじや猫か…】

ふう、何とかごまかせ…

【つて、有り得んじやろ!? 猫の神霊種なぞ…!!】

だよなあ… さすがにバレ…

【いや、おつたか…】

(いるの!? それつて獣人種の神か何かか!?)

あつやべつ!! 思わず突つ込んだあつ!! うおおー俺の芸人魂が勝手にい!!

【いや、獣人種の神ではなく、吸血種の創造主じゃったか…】

(吸血種!?)

【なんでも、猫の獣人種に魅入られた? とかで自身を猫に擬態させたという記録があつてのう…】

(暇だなその神様!?)

(身体性能を疑似的に再現することで種の性能を上げるのが目的だったのかの…)

(それが理由なら、意外な行動の割には理にかなっていったんだな…)

【む、ところでおぬし、なぜ人類種であるのに神靈種であるのに神靈種である我と意思の疎通ができておるのだ?】

(へっ!!?、それはだな…)

どうする!!?このままでと最悪盤上の世界追放になりかねん!!?それは嫌だ!!元の世界に戻るのには元より、せつかくステフの元へ、夢にまでに見た二次元の世界に入れたのに帰ってたまるかあっ!!

…はっ!!確か帆楼は質問厨と恋愛厨に言われるくらいに概念的なことに関して質問したり思考したりする特徴がある!!ならばっ!!

(お、俺にもわからないんだよ…)

【そうなのか?しかしおぬしの魂には強大な魔力がかかっておるのは事実じゃ… 程度の魔力量を保有できるのは神靈種オールドトアスの他には有り得ん… おぬし、本当に何も知らぬのか?】

そう、今の帆楼に人の嘘を見抜くことはできない…はず。だが今の段階で巫女様にバレたら嘘をつくことができずにすべて筒抜けになってしまっ!!俺のことを巫女様に知られたらアウトだっ!!ここは…っ!!

(あ、すみませんさっきのは嘘なんです。)

【嘘?どういふことじゃ?】

よし、ここで最強の一手っ!!

(私は異世界から来たんです。)

【異世界：…じゃと?】

秘技!! 『正直に言う』だっ!!… え? さつきから嘘とかなんとか言って適当言って帆楼を騙す方針かと思っただけ? いや、下手なこと言っただけで勘ぐられて巫女様と帆楼のコンビネーションで畳掛けられたらそれこそジ・エンドだからな…それに、俺の出自は帆楼の興味を引く内容ではあるし、物語終盤まで帆楼は出て来やしないだろうから、それまで後悔の無いように過ごせればいいかな… うん。

【異世界：…それはまことか? ここ以外の世界があるというのか?】

お、やつぱり聞いたことのない知識には興味を持つてくれるようだ。流石質問厨。食いつきはジブブール以上だなあ。

(そうですよ。)

【これは… その世界とは何ぞ? この世界とどう繋がっておるのじゃ? おぬしはどうやってここに来たのじゃ!?!】

あつ、質問厨の片鱗が見え始めたな。質問厨っていうより定義厨だけでも… けど質問しまくってる点が強調されまくってたからね、間違っではないだろう。

(えつと… フォルメリアっていう^{オールドデウス}神霊種は知ってるか?)

【知っておる。あやつが元凶なのか？】

(まあそうですね…。あ、私のことは誰にも話さないでもらえませんか？)

【む？なぜじゃ？】

(いずれバレるのは分かっているんですが、もし今バレたら俺この世界にいられなくなるんです。)

【ほう、そうなのか…。】

あれ？案外聞き分けがいいのか？キレたときは人類種イマニテイのことを下等種族とか言ってたけど…。まあ下手に探りを入れて消えられるよりはこのままの状態が帆楼にとっても利があると判断されたのかもな。

【ならお前のことは他の個体に伝えんことにしよう。】

(ありがとうございます。)

【その代わり、お前の知識を話してもらおう。よいか？】

(それでお願います。)

交渉成立ツ!!いやー、前世の知識があつて助かった…。いや、神霊種オールドデウスの加護でこの世界にとどまっていられるから、バレそうになったのはフォルメリア様のせいではあるのだけど、逆に餌にできたし良かったとするか…。

【む、そろそろ遊戯が終わりそうじゃの、しばし別れじゃ…。】

(ではまた。)

……む、脳に違和感がなくなつたな。こちらとの干渉を断つたみたい。ま、巫女に悟られないようにするには一番の方法ではある……か。

「シユウ? シユウ? どうしたんですの?」

「ふえ? あつ!! すいませんお嬢様!!」

「どうしたんですの? さつきから呼びかけても返事がなかつたし、何かあつたんですの?」

あ、帆楼とのテレパシーに集中しすぎて周りが全然見えてなかつたか……これは不覚。

「い、いえ、少々考え事をしていたんですよ。」

「考え事……ですの?」

「ええ、これから私たちに起こる何かを予想して……ほら、空様がこちらを向かれますよ。」

「はい?」

と、二人同時に空の方に意識を向ける。すると同時に空もこちらをくるつと向いてニヤニヤした顔でステフに向かって言い放つ。

「あ、ステフ。これからの事なんだけど、俺らは獣人種ワビビーストをモフリに行くから、エルキアと

東部連合の『連邦』の構築は任せるわ〜♪」

「は、え!?!それは空たちの仕事じゃ…っ!!」

「あ、じいさんとシユウもオマケでつけるから、よろピク♪」

「いやだから…っ!!」

「っー訳でジブリアル、シフト転移させちゃって♪」

「はい。かしこまりました♪」

「ちよっ!!?話を聞きなさいなああああ!!!」

「あ、ジブリアル、質問の回答はまた今度な〜♪」

「あ、マスター。このクソザルの口と耳だけ残して飛ばしてしまってもよろしいでしょうか?」

「だから怖えて…シユウはあつちに必要だから、ちゃんと送つとけよ。」

「…かしこまりました…。」

ジブリアルよ。いくら俺をあつちに飛ばすのが嫌だからって唇をそんなに噛んで睨まなくつてもいいだろうに…。

そんなこんなで東部連合とのゲームは見事勝利を収めたが、これから起こる大仕事に頭を悩まさずにはいられないシユウなのであった。

4巻

お茶会はゲームの後で

「んあーもうっ!!あのバカ王達は何やってるんですのーっ!!!」

エルキア王城のとある一室で、一人の少女が絶叫をあげる。その声の主は、先王の孫にあたり、今では東部連合に残ってモフリの限りを尽くしている現王くわはく』の代理として、エルキア王国の実権を握っている、赤い髪とアクアマリンの瞳を持った少女、ステファニー・ドーラである。

「まったくですなあ…。あれから二週間、何の音沙汰もないとは…。本当に人類種イマニテイの王である自覚があんのかあのクソ猿どもお…」

そう、ステフの絶叫に應えるも、セリフの後半はもはや紳士の欠片もなくなっってしまったているのは、白髪で筋肉モリモリモリマッチョマンの獣人種ワビースト、初瀬いの。

「まあ、まだ捌かねばならない仕事はまだありますから、下手に動かれて仕事を増やされるよりはいいのですけど…」

「これまで無駄に貴族が余力を残しているがために、ここぞとばかりに餌に寄ってきておりますからなあ…」

「それは今までの人類種イマニヒテイの政治が悪かったとおっしゃりたいんですの?」

「いえいえ、それはこちら側の政治でも起きたこと故、どこの国の政治も代り映えしないことを謳ったままでです。」

と、二人が皮肉を込めた会話をしていると、向かい側に座っている貴族たちがイラついた態度で話しかけてくる。

「私たちを嘲笑するとはいい度胸ですな!!愚王の孫と負け犬種族の分際でっ!!」

「我らを侮るなど笑止千万。今点数で勝っているのはこちらなのですぞ!!最後のターンで貴様らが勝つことなど不可能!!後でお前たちを地に伏せさせてくれよう!!」

貴族たちが皮肉に返すように、二人に罵声を与える。貴族たちの言う通り、今、土地の利権をかけて行われているゲームでは、点差は貴族のほうが上である。

……が、ステフといのは煽られたにもかかわらず、冷静な態度を崩すことはない。

「はあ、もうそのセリフ、五十回くらい聞きましたわ。もつと他に言うことはありませんの?」

「貴族とはいえ、今となつては七光りの者が多いようで、嘆かわしいことでございますなあ……。」

「なっ!!口が過ぎるぞ!!慎めっ!!」

「早く札を明かすのだっ!!勝利した後でその口を二度と開けぬようにしてくれるっ!!」

「… はあ、ここまで同じだと、脳髓まで一緒のようですね。」

「権力に洗脳されたものの末路がこれほどとは、嘆かわしい限りにございますなあ…。
それではお二方、札を提示してください。」

いのの采配によつて開かれた札を見て貴族たちは戦慄する。

「なつ…： ファイブオブアカインド!!？」

「そんな…： そんなはず!!？」

貴族たちが狼狽するのも無理はない。これにより自身の持ち点は完全に喪失し、ステフの勝利へと終つてしまったからだ。

「あなたたちを有利な側に仕立て上げて、慢心せずにどこまで慎重に事を運ぶのか見させてもらつてましたけど…： 案の定でしたわね。」

そう、ステフが冷たく言い放つたと同時に、いのが無慈悲に告げる。

「それでは盟約に基づき、ゲーム内容の記憶消去と掛け金をいただきますのであしからず…。」



「ふう、これで今日の分は終わりですか？」

「ええ、おそらくは。」

先ほどまで貴族たちが出入りしていた部屋は一変。ステフといのだけの静かな空間に変わり、用意したお茶を数杯飲み干して落ち着く。

「しかし朝から夕刻を過ぎるまで休みなしで働いております故、早くおやすみになられたほうがよろしいかと。」

そう、溢れ返るほどに湧いて出る貴族たちの要求に、『愚王の孫娘が王の代理をしてい
る。』という、いのが提案した罫を張った以上、空達がいないうちにできるだけ多く応え、
狩り潰さねばならない為、連日休む暇が無く疲労はたまる一方であった。付き添いであ
るいは持ち前の体力があるものの、ステフはそうではない。そのことを案じていたの
だが…

「確かにそうですけどまだ…」

と、何かを待つように扉を眺めていると…

コンコン

「…っ!!いいですわよ!!」

待ちに待った扉のノック音に、少し声色を挙げて返事をする。

「はっ、失礼いたします。」

丁寧な口調で入ってきたのはエルキア王城専属執事、異世界からの転生者で原作知識持ちの人類種^{イマニテイ}、シユウである。

「今日もお勤めご苦労様です。お嬢様、いの様。」

「そんなことはないですわ。もつと大変なのはシユウの方ですもの。シユウこそお疲れ様ですわ。」

「まったくですな。あの愚者どもの罵詈雑言を一身に受け続けるのは、流石に身に応えましようぞ。」

「ええ、ですがお嬢様の疲労を考慮すれば、このことなど軽いものです。」

「ーっ!!!ととと、とにかく、今は座ってお茶でも飲んでくださいな!!今日はリラックス効果のある茶葉をご用意いたしましたの!!」

「ありがとうございます。ではいただきますね。」

「ほう、どおりで血流の流れがよいのですな。いやはや御見それいたしましたぞ。」

「そんなことまでわかるんですのね...」

若干のあきれを零すステフに、いのがいたずらな笑みで話題を提供する。

「しかし、あのときシユウ殿が言ってお下さらねば、このように休息を挟むことなく今もゲームをしておったでしょうなあ...」

「そ、それはもういいじゃありませんの!!?」

「あー、確かにお嬢様はやれるだけの体力があれば無理を平気でしますからねえ…」

「あーもうっ!!今は私をいじめる時間じゃありませんのよお!!?」

だが断る。というわけでステフの黒歴史の回想どぞ。

□□□

ご無沙汰しております。過去にご住まいのシユウです。

空の命令によってエルキアに戻った我々は、エルキア王城内に転移されたのですが、その時は王城周りはお祭り騒ぎで、なけなしの食料すら投げうって酒が飛び交っている状態でした。かくいう王城内でも執事やメイドが来訪してきた貴族たちの相手をしていおり、王城内もパーティ状態。

そんな状態を見た私たち三人は初日こそそれを見逃して休んだものの、流石にいつまで経つてもやめそうにないため、東部連合との連邦構成の話を公に流すとあら不思議、貴族たちが過去に先王に巻き上げられたことを理由にこぞって意見してくるではありませんか。それに乗じて先ほどの罠を張って狩りつぶしを開始したのですが…

「あんな貴族たちにおじいさまが舐められていたのが許せせんわっ!!こうなったら貴

族やギルドから何でもかんでも奪いに奪ってこちらで全部決めてしまったほうがいいですわ!! あんなクズどもの意見なんてこれっぽっちも聞く必要ありませんもの!!」

「おおお、お気を確かに!! それではもはや粛清!! 恐怖政治ですぞっ!!」

「そうはいつても、あんな『甘い水を吸いに来ました〜♪』って顔して寄ってくる人たちに何の同情を寄せればいいって言うんですの!?! 回りくどいことをやるくらいならいっそ…っ!!」

「ステファニー殿!! 休みましょう、一旦落ち着いて…。」

「冷静ですわ落ち着いてますわっ!! だからこそこんな激情に駆られてるんじゃないんですのっ!!」

「矛盾しておられるのがわかっていないではありませんか!?!」

あくはいい、やっぱりこうなったというべきか、原作同様一週間ほど寝る間も無のまま貴族その他有権者との面談↓ゲームが続いております。上記の通り罠にあっさりかかったはいいものの、貴族たちの愚態っぷりに呆れを通り越して、一人でも多くの貴族を焼き殺さんとばかりにゲームに應對し続けるバーサーカー状態のステフに、いのも気圧されている様子。

というわけで一週間お茶汲みをしていたんですが、なにやら空に期待されちゃったようですし? 少し頑張ってみますか…。

「全^{オール}得^ルか全^{オア}て失^ナうか!!破滅する覚悟くらい決めてからおいでなさいな!」

という、貴族たちにとってあまりに無慈悲な言動を告げると同時に、

「次の方、早く入って来なさいな!!」

もはや次から次へと肅清する暴君のように、乱暴な言動で次の罪人を招き入れようとしていた。

「…?」

だが、いくら待っても貴族たちは入ってこない。いつもなら間抜け面をさらし、大股で歩み寄ってくるはずなのだが…

と、その時、

コンコン

「ようやく来たようですわね。さあ、さつさと身包みを剥がせてもらおうじゃありません

んの。」

もはや悪役令嬢も真っ青の女帝っぷりに、いのも

(女性とは恐ろしいものですな…)

と、冷や汗をかくほどにまでに戦慄し、その場にたたずむことしかできなかった。そんな二人の前に現れたのは…

「お嬢様、今日はここまでにごさいます。」

「え？ シュウ？ 終わりって、どういうことなんですの!？」

「終わりは終わりです。さ、お茶会にでもいたしましょう。」

そういうシュウの右手には銀のトレイの上にティーセットが載せられ、後ろ手にはアフタヌーンティーに使われるケーキスタンドなどが載せられたサーブスワゴンをメイドが押してきていた。

シュウが丁寧にティーカップを並べていると、急なことで回ってなかった頭がようやく覚醒しはじめ、ステフが机をたたいて立ち上がる。

「ま、まだですわ!! まだ鉄槌を下してないやつらが沢山…」

「お待ちください。」ガシッ

「のっぴよおおお!!？」

廊下へ向かつてずかずかと、淑女の気品の欠片もなく、まるで残兵を狩りつぶしに行

く軍人のように行進するステフの手首を掴んで制止する。

「お嬢様。どうか今晚はお休みください。お願いでございます。」

その言葉に、ステフは少しの動揺を見せるも、

「いえ、一刻も早くおじいさまをなめ腐ったあの連中をつ!!」

シユウの言葉すら届かなくなりつつあったステフに、シユウは怖気づくことなく言葉を紡ぐ。

「先王様は、今のお嬢様を見てお喜びになるでしょうか？」

「へ?おじいさま...が...?」

シユウの言葉に、明らかに動揺するステフ。

「あの貴族たちが先王様を愚弄した事実は確かですし、許しがたい気持ちもよくわかります。ですが、その報復を目的として狂乱しているお嬢様を見て、果たして先王様はお喜びにはなるのでしょうか？」

「あつ...。そ、それは...」

「やっとの思いで成し遂げた先王の遺志の果てに狂乱した孫娘が誕生してしまつては、先王もさぞ悲しみに暮れることでしょう。」

「...うう...」

シユウの言葉を聞き、だんだんとしおれていくステフ、どうやら先ほどまでの狂勢は

消えたようだ。

「ごめんなさい。シユウ… おじいさ… ま…」フラツ

「おっと」

気が抜けてしまったのか、倒れそうになるステフをシユウは抱き支える。

「あく、ひどい熱ですね。やれるところまで無理するから…」

そう言つて事前に用意しておいた担架にステフを載せて、他のメイドにベッドで寝かせるように頼んで、シユウは椅子に腰かけてお茶をすすする。

「… 見事ですな。」

男二人のお茶会で、称賛の言葉で口火を切つたのは初瀬いのであつた。

「それほどでも。ま、こうでもしないとお嬢様は休んでくれないでしょうから。」

「ステファニー殿のことを良く知つていますよ。流石は専属執事といったところですか？」

「空様たちの面倒を押し付けられてるだけのようには思いますかね。」

「私もその気持ちは今しかと噛み締めております。」

「でしよう？」

けらけらと笑いながら、皮肉を言い合う。そしていのが少し多めにお茶を飲むと同時に、話題を切り替えてくる。

「さて、ところで今日はいったい何をしていたのですかな？いつもは私とシュウの二人でステファニー殿のサポートを行っていたというのに、同席なさらなかった理由とは？」

「それは、貴族たちの言い分を粗方聞いて、話させるだけで気が済む者たちはその場でいったん帰ってもらったり、順番を遅らせたりして、よほど聞き分けの無いものはさらに回させていたいただいでもらつたんです。ま、あとは一日の人数制限を盟約で決めさせただけでしょうか。」

「ほう、そんなことをやっていたのですか。いやはや、助かりましたな。こちらは連邦構成の片棒を担ぐ獣人種^{ワイルド}として、この場になければなりませんからな。ステファニー殿の状態を近くで知りながら、何もできなかつた非礼、お詫びしますぞ。」

「いえ、まさかここまでお嬢様が無理なさるとは予想もできなかつたものですから、お互い様ですよ。」

そう言い終わると同時に、部屋の扉が開いてステフが入ってくる。

「も、申し訳ありませんわ。シュウ… あんな姿を見せてしまつて…」

まるで叱られた子供のようにしよんぼり顔で謝るステフ。よく見ると目の下のクマがやけに目立って悲壮感がより際立っている。

「いえ、わたしは一週間もお嬢様に無理をさせてしまったのです。行動が遅くなった私

にも責任がありますから、そう謝らないでください。さ、一緒にお茶、いかがですか？」

「あ…： ありがとうございますわ!!」

□□□

と、こんなことがございましたとさつと。え？やけに俺がキザっぽく見えるって？こんな時にしかかっこつけられないからな!!存分にキラッ☆としてやったぜ!!

「しかし、あの時のステフ殿もステフ殿でしたが、シユウ殿も相当に緊張しておられましたぞ。」

「ふえ？」

「ブツ!!」

「あの時のシユウ殿の心音といったら、それはもう早いこと早いこと。よほど緊張なさってたんでしょうなあ。あの時セリフを囁まなかったのが不思議なほどに。」

「そ、それは本当ですよ!!?」

「へ!?!あ、いやその、そそそ、そうなんですよ実は!!本当はお嬢様をちゃんと休ませることができるとか気が気でなくてすね…。」

いや、本当はステフの手首を咄嗟に握ったはいいものの、ステフの手首めっちゃ柔い

わ脈が伝わってくるわで理性がヤバかったただけなんですけどね!!?

「：．． おや？ シュウ殿、先ほどのセリフは嘘のようですな。 もしや：．．」

あつ!! そうだった!! この筋肉変態嘘見抜けるんだつたあつ!!

「やつ、やめろおおおお!! それ以上言ったら：．． つ!!」

「ステフ殿の手首を握っていることに緊張したのを、悟られないようにするためだったのですかな？」

「かつ!!?」

「へっ!!?」

言つたあああああああ!!

「いや、シュウ殿はかなり初心うぶのようで：．． まだ青いですなあ：．．」

こ、このジジイいいいいいい!!

バン!!

「ほ、ほほほ、本当なんですの!!」

「へっ!!?」

ち、近い近い近い!!? ステフさん顔近い!!? つーかジジイぜつてー言つたこと後悔させてやる!!! そのにんまりした顔やめろやあああああああ!!!

「嘘：．． なんですの?」

「はひ!?」

「さっきのいのさんのセリフ… 嘘なんですか?」

なんだ… これはまるで原作七巻で空が白に追い詰められた時のような感覚… いや、別にステフは俺を追い詰めてるわけではないんだが、今、ここで「イエス」と答えたら己のうちにある何かが悪れてしまいそうな気が… 気が… 気がががががが!!!

「へ…」

「へ?」

「Help me!!えーr…」

「ジジイイイ話は聞かせて貰ったア貴様は死ぬ運命さだめにあるツ!!」

救世主キタコレエエエエ!!!

ビーチサイドの暑い余暇（前編）

夏!!海!!砂浜ア!!ビーチサイドオオ!!

夢にまで見たリア充フィールドが今ここにっ!!半引きこもり生活10年っ!!『友達』という存在がいなくなつて外に出る機会などあるわけもなく!!ただ暑くて恐らく来たとしても海の家でヌボーっと過ごすのがオチだと容易に想像できるレジャースポットであるがしかしっ!!

絶世の美女たちが肌を表し!!キャツキヤ、キャツキヤと騒ぐ姿を見れるのなら話は別だあっ!!

日照り?肌が焼けていいじゃないか!!砂浜?砂のお城が作れるじゃないか!!海?透き通る青色だリゾートだっ!!

さあこいつ!!

…え?なんで海に來ているか?ならば、原作を知らない方に短く説明しよう!!

前回私とステフといのの仕事終わりのお茶会に乱入した空たちがもつて帰つてきたお土産は、何と吸血種ダンピールと海棲種セイレーンが絶滅の危機に貧しているため、それを回避すべく海産資源を得る事を条件に海棲種セイレーンの全権代理者であり眠り姫である、ライラ・ローレライを

起こしに海棲種都市、オーシエンドへ向かうという吉報だった。そのついでに、海に行くと言うことでキヤルゲには欠かせない水着イベントを回収すべく、東部連合の技術力を駆使して作られた水着を持って、せっかくの海を満喫しようじゃないか!!という理由で来ております。

え?なんでそのシーン書かないのかって?書いててあんまり面白くなかったそうです。てへ♪（↑作者）

それで今は女性陣の着替えを待っているところですね。

「ふう…しゃーわせ♪」

海を眺めつつ、そんな思考を巡らせていると、後方から感嘆の声を漏らしているのは、複数の水着姿獣人種ワビーストに扇がれつつ、グラスに注がれた液体をストローで飲みながら寛いでいる空である。

「おくつろぎいただけてるようで何よりです。」

その言葉で気がついたのか、獣人種ワビーストの肢体を眺めていた空の視線がこちらに向く。

「お、シユウ。お疲れさん。今日はせっかくの海だ。楽しんでくれ♪」

「はい。お言葉に甘えさせていただきます。」

空は返事を聞くとすぐに獣人種ワビーストの方に向き直り、鼻の下を伸ばすことにいそしむ。さすが童貞。いや、それは俺も一緒か…

「おや？空殿とシユウ殿。着替えがお早いことで。」

「ちよつと待てつ!!なんでじいさん禪ふんじなんだよ!？」

遅れてやって来たいのの姿を見てすかさずツツコミをいれる空。そりやそうだよな。相撲をとるわけでもないのに海で禪する人いたら怖えよな。

「おや？これが獣人種ワビーストに伝わる水着でございませうが、何か間違っておりますかな?」

「何もかもが間違つてるよつ!!」

「それより空殿の方が余程変に思われますぞ?シユウ殿や私のように下だけに着衣するのが、肌を見せ合う礼儀だと思われませうが?」

「畜生!!二人ともいい体つきしてつから堂々としてられんだろうが!!」

「はっはっは。空殿は自身のボディにそんなに自信がないのですかな?男は筋肉こそ命ですぞ?」

「くっそお:。山ほど女娶つてるだけ説得力がありやがる:。つか何でシユウまで細マッチョなんだよ!？」

「あ、空様ご要望の沸騰風呂の薪割りを私が担当しておりますので、随分と鍛えられました。」

「マジかあ:。俺の周りの男が魅力値を上げているというのに、俺は何やってんだあつ!!」

いや、空は白からの好感度カンストしてつから大丈夫だと思うよ？今の世は物理的力はほとんど必要ないしな…。あ、東部連合の時は必要だったか。ま、逆手に取る方法なんていっぱいあるんだし、そのままの空でいいと思うよ？むしろ空が筋肉モリモリマツチヨマンの変態に物語が進むほどなっていったら…。それはそれでありかも？

「あ、あの…。着替え終わりましたわ。」

「おう!!ステフお疲れさ…。ま…。」

「ほう、さすがの着こなしというべきですかな？」

「そ、そうですの？それはよかつ…。」

「なんだって!?89、58、89…。戦闘力、50万だどっ!?」

「な、何で知って…。って違いますわよっ!!何の話ですよよっ!!」

ステフは身をよじって自身の体を隠そうとするが、余計に扇情的に映ってしまったているのに気が付いていないらしい。

「ぐぬぬ…。ステフのくせに、生意気な…。っ!!」

思わずタブPCを起動して連写するほど、空の中でステフの体に対する評価は上がっているようだ。

「そ、そうなんですか？え、あ、と、とここで、シユウは何か言うことありません…。の…?」

いつもは罵倒したり無理難題を押し付けてくる空だか、意外なことに素直に褒めて（？）きたので、ステフはシユウの方に話題を逸らそうとしたのだが：

「
」

シユウは、その場で停止していた…

「シユ：： シユウ？どうしたんですの？」

ステフがシユウの目の前までやってきて、ようやく意識が戻ったのか焦点の合っていない、なかつた視線をステフに戻して、

「はっ!!お、お嬢様：： 申し訳ありません。一目惚れゲフンゲフン!!見惚れてしまっておりました。執事としてあらぬことをしてしまい、本当に申し訳ありませんでしたっ：：!!」

深々と頭を下げて謝罪するシユウ。

「い、いえっ!!じゅ、十分伝わったからいいですわ：： うん!!そうですわっ♪」

どこか嬉しそうなステフにシユウは一安心して姿勢を正す。

うん… その… なんだ。挿絵でわかっていた通りの姿だったんだが、目の前にしてみるとやばいな。表情、ボディラインが暴力的な魅力となって脳を揺さぶってくる… ただ単にリアル水着女性を見る経験が少なかつただけかもしれないが、それに上乘せして二次元のわがままスタイルっ!! それでこの性格とかもうノックアウトされないほうがおかしいって…

「チツ、上手いこと言いやがって…」

「シユウ殿は女性の扱いに多少の心得があるようですね。関心関心。」

「俺にはねえってのかよ!？」

「女性のスリーサイズを本人の前で暴露するのはあり得ないと思いますわね…」

「ステフまんざらでもなかったじゃん!!」

「ちよっ!! それは盟約によるもので…っ!!」

と、ステフが言い訳を始めようとした時、

「ようよう、やけに楽しそうやないの。あても混ぜてくれへんか?」

「申し訳ありませんマスター。少々手間取ってしまいました。」

着替えを終えたジブリーと巫女が空達の元へやってきた。

「お、巫女さんにジブリーがご到着…か…」ガクツ

「巫女様、お待ちなどしておりませんぞ。私も今来たばかりでございま…す…」ガクツ

と、二人を見つめるや、空といのはその場に倒れこみ、天を仰いでこの世に生を受けたことを神に感謝してむせび泣いていた。あまりの二人の美しさに感動の境地に陥ったのか、ふう…と小さくため息を漏らすと同時に、

「ああ、なんかもう満足しちゃったな…」

「奇遇ですな。私もそう思っていた次第にございます。」

「帰ろっか。」

「ええ、そうしましょうぞ。」

お互いに賢者モードに入ってしまったていた。

「ちよっ!!待ってくださいいっ!!今帰られたらとつても困りますう!!」

もはや感極まって当初の目的を忘れているらしい二人に、慌てた様子で制止をかけるのは、吸血種^{ダンピール}プラム・ストーカー。空視点をかなりすっぱ抜いたせいで今回が初登場である。よくある吸血鬼と同様に日光を浴びることが最大の弱点であるため、魔法で日光を屈折させ、木箱の中で安静にしているという何ともコンパクトな姿である。

「あ、プラムいたの?つか水着イベント中なのに箱の中からピーピングってどんだけ覗き見好きなんだよ…」

「やりたくてやってる訳ないですよ!!日光浴びたら死ぬんですよ!!」

顔が見えていたら涙を流していると容易に想像できる程の悲鳴を上げながら空に訴えるプラムだが、当の空は特に気にせず崇拜という名のカメラ撮影を行っていた。

「… 何で泣いてやがんだ、です? 砂でも目に入ったか、です?」

と、プラムの憐みの声を聴いて近づいてきたのは、スク水に半纏を羽織り、露出控え目でかわいらしさを前面に出した姿のいづなである。

「まあ!!いづなさんとってもかわいいですわよ!!」

「ええ、とても似合ってますね。」

遠巻きに空達を眺めていたためか、いづなの存在にいち早く気づいたステフとシユウがいづなに称賛の言葉をかける。

「… んう? 可愛いとかよくわかんねえだろ、です。それに着づらくて苦労したんだぞ、です。」

どうやらいづなはスク水を着るのに少々難儀したご様子。

「そうなんですか? 今は大丈夫ですか?」

「む、大丈夫に決まってるだろ、です。」

しゃがんでスク水のふちの部分に指を通してきちんと着用できているかを確認し始めるステフに対し、若干くすぐったさを感じるも、いづなは笑顔で答えた。

「それならよかったですわ♪」

「…世話焼きな奴だな…です。」

若干の照れくささを感じながら空の方に向かっていくいづな。

「さて、あとは白様だけですかね？」

「そうですわね。空く!!白は大丈夫ですよ〜?」

「んあ?あ、すっかり忘れてなんていないぞっ!!ちよつと御神体を撮影して永久保存しようとしていただけ…だ…」

と、林のほうを向いて言い訳をしようとした空の前に現れたのは

「…………遅くなってごめんなさい、待った…?」

「……………」

こくんと首を傾げる白に、何も答えることができない空。

「おやおや、よう似合うてるやないの。」

「しろ、めつちやきれい、です。」

「…ほう、これはこれは。」

「さすがはマスター、勿体ないほどの眼福にございます♪」

「か、かわいい…はっ!!つい見惚れてしまいましたわっ!?!」

「ふむ、文句なしの満点でございますね。」

と、それぞれに白に対する称賛を述べた。団扇を仰いでいた獣人種ワービーストすらも釘付けになっ
ていているようである。

……だが、

「……にいい？どうしたの？やっぱり白には似合わない……かな？」

そんな周りの称賛など白にとってはどうでもよく、目の前で微動だにせず自分を見つめる空の感想をただひたすらに待っていた。その懇願にも近い白の視線と言葉がようやく空に届いたのか、

「はっ、えっ、あっはい!!いや、違う!!似合ってる!!似合ってるんだが……あれ？白が完全無欠の美人さんってことはわかってるんだが……」

ようやく正気に戻ったのか、しどろもどろになりながらも告げた空の言葉に安堵したのか、白はうつすらと笑みを浮かべ、

「……そ……よかつ……た……」

トコトコと空の方へ歩み寄る。

「さ、さて、せっかくの海だ！ちよつとそれらしく遊んでみますか!!」

ビーチサイドの暑い余暇（中編）

「いづなさん、パスですわ！」

「む、次は負けねえ、ですっ!!」

「ふふ、ゲームで俺達に勝とうだあ…っ!!」

「… ゆめゆめ思わない…でっ!!」

雲一つない炎天下の中、海の浅瀬でビーチバレーを楽しむ空達御一行。1回戦で見事『くうはく』の策略にはまって負けてしまったいづなが、今度は勝つと力加減を考慮しながら器用にボールを返していく。

その様子を遠巻きに見ているのは…

「いやー、あんな風に元気に遊んでいる姿を見ると何だか癒されますねえ…」

「そのようすなあ… いづながあんなに心から楽しそうにしているのを見るのは久しぶりでしようかなあ…」

どこか感慨深く孫を見つめるいのは、とても暖かい目であった。

「かっかっか。こどもは元気にはしゃぐんが一番やて。」

それに同意を示す巫女。杯をあおいで楽しそうに笑に笑っている姿に、思うところが

あったのか、

「そういえば巫女様はご結婚されていないので？」

シユウが流れに任せて巫女に質問してみる。

「あてか？あては物心ついた頃からずっと東部連合の再興のことしか頭にあらへんかったからなあ……恋愛とかそういうのは、よーわからへんのよ。」

少し乾いた笑顔でそう答えた巫女。

五十年以上、常に東部連合の再興に心血を絶えず注いできたせいか、そんな余裕は何処にもなかったのだろうと、シユウはそんな事を考えながら、気まずさをジューズを飲んで紛らわす。

だが巫女は何かを思い付いたのか、いたずらな笑みをシユウに向ける。

「そや。あんさん、ちよつとあてと付き合ってみんか？」

「ぶっ!!」

「んなああつ!!」

唐突な巫女の申し出にシユウは口に含んでいた液体を盛大に吹き出す。同時にいのもあんぐり口を開けて巫女の方を向く。

「空や白は恋愛のいろははわからん言うし、その吸血種ダモンピールの魔法で試してもろたんけど、恋愛というよりはただの刷り込みや〜つちゅう話やし、あんさんは恋愛のいろは、何か

と知つとるとちやうん？」

にんまりと笑つて問いかける巫女に、シユウは慌てた様子で返す。

「あつ、あーいや、多少は心得がありますが自信のほどは……」

何故なら俺の恋愛のいろはは二次元のラブコメでしか知らんからなつ!!リアルで恋愛してたらもつと自信持ててただろうけど、そんなシナリオ何処にもなかつたんですう!!

「ほくん?あてより心得ある言うとのに、手引きもでけへんのか?それとも、あてはあんなさんのお眼鏡には合わへんのかえ?」

「そそそつ、そんなことはつ!!」

巫女がシユウにぐつと身を寄せ、顔を近づけてくる。

色気すげえつ!!?じゃなくて近い近い近い!!遠くで見ただけでも妖艶さが際立っていて目を奪われそうになるのを必死にそらしていたのに、こうも近いとおつ!!?

「みみみ、巫女様あつ!!?私という男がいながら、何故そのようなヒョロ猿をお選びになるのですか!?!恐れながら、私ならば女性の喜びをお教えできる自信が……つ!!」

突如、巫女の男として立候補してきたの。理由は聞く限りアウトコースギリギリだが……それを聞いて興が覚めたのか、巫女がシユウから身を引いて……

「かつかつか!冗談や。なんや?本気にしてもうたんか?ほんならあても、まだまだ女

としての余生を楽しめそうやなあ♪」

「み、巫女様あ…」

からからと笑う巫女に、何も言及されなかったのがシヨックだったのか、がつくりと肩を落とすいの。

「か、からからうのはほどほどにお願いしますよ?」

何とか息を整えて巫女に懇願するシユウに、巫女は明るい表情で告げる。

「ん? あてはまんざらでもなかったんやで? 恋愛の『れ』の字も知らんもん同士なら、手探りで何か見つかると思つてなあ?」

「あ、それなりに考えてはいらしたんですね。」

なんだ、そういう考えか。と、シユウが納得しかけたところで、巫女。

「でもまあ、あてはちいと興味はあるんやけどねえ♪」

「またまた冗談…を…へ?」

そう告げる巫女の顔を見た瞬間、シユウは絶句した。何故なら…

巫女の顔が、まるで獲物を見て舌なめずりする獣のような、獯猛な笑みをしていたからだ。

意味深な意味ならまだ救いはあったのだろうが、全く違う。シユウは現に全身総毛立ち、冷や汗を流し、口から息をすることを忘れ、動悸がどうしようもなく速くなつてい

るのを感じているからだ。

まさしくこれから命を狩られる者の心理状態に一気に持つていかれた。そしてシユウは確信する。巫女が、自身の胸の中心、心臓部を狙っていることに。

(ヤバイっ!!俺何か悪いことしたかなあ…っ!!)

巫女のありふれんばかりの殺気に、辺りにいた獣人種ワイルドベストは腰を抜かし、いのですら一筋の汗を流してただ黙って様子を伺っている。

(あー、なんか走馬灯が見える…俺死ぬのかなあ?)

死を体が直感してしまったせいかわ走馬灯まで見える始末。

(とういかなんで巫女さんが俺を狙うん?つてか俺の心臓ばっか見てない?…ん?心臓?確かあのときも心臓の近くから…あっ!!)

若干涙が流れ始めたところであるとある結論にたどり着き、シユウはその場に立ち上がる。

「ちちち、ちよつと失礼しますねっ!!」

そういうやいなや、駆け足で更衣室の方へ走り去るシユウを見て、からからと巫女が笑った。今の笑顔は先ほどの猟奇的な笑顔ではなく、心から遊んでいる子どものように屈託のないものだ。

「くくっ、これでええやろ。これで退屈もせんやろて。」

「失礼ながら巫女様。なぜシユウ殿にあのような殺気を？」

巫女の意図を図りかねたのか、いのが恭しく尋ねると、

「あれか？ そうやなあ…： 言うなれば、『氣いつけときや』って意味や♪」

巫女が嘘を言っていないのは確かだった。が、それを理解した上でも、いには巫女の意図を理解する事はできなかった。

一方、空たちはというと

「うん？ シユウと巫女様、すげえちけえ、です。」ポーン

丁度、砂浜側を向いてボールを空にパスしていたいづながそう言うと、他三人が一斉にその方を向いて、

「えっ!? シユウと巫女様ってそんな関係だったの!? なっっちゃうの!? そこを代わりやがれえっ!!」ポーン

視線をそらしながらも、器用に白の方へトスし、巫女の方へ走ろうとする空に対し、

「…： にい、他人の恋路の邪魔は…： めっ！」ポーン
と、白は白で、空の方を見ながら、ステフが取りづらいであろう位置にわざとボールを放りつつ、ジト目で続ける。

「…： それに、にいが離れたら、ゲーム続けられなくて負けになる。』^{くはく}として、許さ

れないこと…」

「くうつ!! どうして海に来てるつてのに、リア充イベントがあつちで起きてるんだつ!!」
と、空が天を仰ぎ、嘆く素振りをとろうとした瞬間。

Bannon!!

「へ?」

「… んう?」

ビーチバレーではあり得ないような炸裂音に、耳を疑いながらも発生源の方を見る。
するとそこには、

「す、ステ公? なにやってんだ、です?」

と、そこには尻餅をついて水浸しのいづなと、

「フフフ、ちよつと力んでしまったようですわ。ごめんなさいね、いづなさん。」

そう言っつていづなに向けて手を差し伸べているステフは、努めて笑顔を保っているよ
うだったが…

「す、ステ公? 目が全く笑つてねえ… です!?」

「へ? そんなことないですわよ? さあ、もう一戦、始めましょう?」

先程いづなに対してスパイクを容赦無く打って、いづなが明後日の方向へ打ったはずのボールが、いつの間にかステフの手に有ることに違和感を感じた三人であったが：

「ステフが本気を出したか：： 気合い入れて行くぞ白っ!!」

「：： にい、鈍感すぎ：：」

「へ？」

若干あきれた様子の子の白、その理由を図りかねた空は間抜けな声で返事をする。

「お、おう、次こそ勝ってやる、ですっ!!」

それはいづなも同様だったのか、ステフが豹変した理由がわからなかったが、次こそは勝つと、三回戦開始ののサーブを受けるのであった。

???????

ところ変わって更衣室前。シユウが走って来て、とりあえず動悸が収まるのを待つこと数分。ようやく息をしているという感覚を取り戻す。

「はあっ、はあっ、し、死ぬかと思つたああああ!!」

あまりの威圧感に圧倒され、出せなかった思いをこれでもかと叫ぶ。

「リアルで死ぬかと思つた：： ヤ○ザとかにガンとばされたことないから比べようもな

いけど、ガチで心臓抉られるかと思ったあ……って、そうだった！」

と、ここでようやく冷静になったのか、巫女達から離れた理由を思いだす。

（おいっ!!おいこら帆楼!!…… あっ!違うっ!!巫女様ん中の神霊種オールドデウスさん起きろっ!!）

恐らく巫女様がいるであろう方を向いて、思念をとばす。すると、

「ん?なんじゃ帆楼とは?何かの個称かの?…… まあよい。して、何の用じゃ?異世界の者よ。」

案の定、帆楼が返事を返してくる。どうやら少し位は離れていても思念は遅れるらしい…… じゃなくてっ!!

（おい神霊種オールドデウス様っ!!なんで巫女さん俺の事狙ってるんだよっ!!）

「わ、我は…… し、知らぬなあ……」

シウウの追及に何故か答に戸惑いが現れた帆楼の台詞を聞き取って、シウウの予想は確信へと変わる。

（てめえ俺の事を巫女さんに話しちまいやがったなあ!?!）

「わ、私の落ち度ではないっ!!これは…… その…… あやつの勘が卓越しておったのじゃっ!!」

（巫女様を理由にしてんじゃねえよ!?!）

責任を巫女に転嫁させようとする帆楼の言動にシウウはすかさずツツコミをいれる。

「あ、あやつがいけないのじゃっ!! 異世界の知識を早急に聴取する故に、おぬしにはよう
会わせろと要求を提示した刹那、全て明るみに出てもうて。」

（やつぱりオメーのせいじゃねえか!! おかげで死ぬ思いしたんだぞどうしてくれるっ
!?)

「お、おぬしっ!! 人類種イマニテイごときが神靈種オウルビドクスに向かつてなんとという口の聞き方を。」

（逆ギレしてんじやねえよっ!! これで要注意人物に格上げされちゃってこの世界から抹
殺でもされたら異世界の呪術で呪い殺してやるからなっ!!）

「か、仮にも神に何と無礼な。」

（先に無礼を働いたのはそっちじゃねえかっ!! … はあ… … つで、巫女さんは俺をど
うするつもりなのさ… ?そこは知ってるのか?）

若干の口論の末、怒りにうち震えて激を交わし合うことの意味のなさを悟ったのか、
ため息をついてシユウは帆楼に、巫女の自身に対する姿勢の事を聞く。

「あ、ああ、あやつはおぬしに興味はあるようじゃが、それ以上でもそれ以下でもないら
しい。ただ目をかけている程度じやろう。それに、我からも他言無用と伝えておる。」

（… : そう。ならいいんだけどな。）

厄介なことになっちやっとなあと頭を抱えつつも、現状を把握し腑に落として落ち着
く。

【その… なんじゃ、我以外に秘密を知られたら、おぬしとの交渉は破談となるのかの？】

そんなシユウに帆楼が問いかける。その帆楼の声色はどこか寂しげで、シユウは諦めたように返す。

（あー、まあ、これ以上はさすがに不味いけど、不味くなつたらもう話せなくなるだろうからな。俺がこの世界にいる間くらいなら、異世界の話をしてやるさ。）

【真か!?嘘ではないな!?謀りではないな!?偽証でもないな!?】

さすが孤疑の神髄と言うべきか、嘘とかには過敏なのね。と、シユウが呆れながらも答える。

（まあね、じゃあここで一つ。異世界の知識だ。異世界にいる人類種は空を飛べるんだぜ?。）

【なんじゃと!?翼や魔法もないおぬしらが飛ぶというのか!?】

やはり帆楼にとつては意外な事なのか、興味津々で聞いてくる。

（そうなんだ。しかも飛べない体のまま飛ぶんだぜ?不思議だろ?）

【不思議というよりは不可解じゃな。ではどうやって飛ぶと言うのじゃ?】

（それはだな…）

「おやあ?更衣室に何のご用なのでしょうか?」

「うおおっ!？」

…… 相変わらず最高に（二つの意味で）間の悪い天使、ジブリールのご登場である。（す、すまないがこの話はまた後で。客人…… というより押しかけ人が来たからな。）

【よ、よく解からぬが承知した。ではまたな。】

聞き分けのいい帆楼に心で感謝しつつ、ジブリールに向かい合う。

「けっけ、決して覗こうとしてたり盗もうとなんてしてないぞっ!!」

とつきの嘘の言い訳にしてはかなり聞き苦しいものとなってしまうが、そんなことはどうでもいい様子のジブリール。

「そんなことより、二元の世界の知識の一つに、このような海の砂浜で頻繁に見られる光景、男女のかけっこや水の掛け合いのシーンがあるのですが、」

うん、空の欲した知識の詰まったタブPCならそんなシーンが大半だろうけどもっ!!

「それで、これが本当に楽しいのか検証するため、少々付き合ってもらいます。」

「……………へっ!？」

ビーチサイドの暑い余暇（後編）

暑い砂浜。カンカンと照りつける太陽。吹き抜ける潮風。そんな中、海の沿岸沿いを走り抜ける二つの影があった。

「ふふっ♪捕まえてごらんなさあ〜い♪」

一つは、光を乱反射し色を変える長い髪を優雅になびかせ、見るものを虜にするような造形美を放つ体を、思うがままに動かし、天真爛漫に砂浜を駆ける女性。何よりも、彼に向けた、はにかんでいる表情はどんな美術家や写真家も、形に残して後世に残さずにはいられないほど、愛らしい表情であった。

「はははっ♪待て待てえ〜♪」

一つは黒髪を綺麗にまとめあげ、日々の勤務によつて鍛えられた肉体を悠々と使い、彼女に追い付かないよう速度に加減をしつつ、明るく笑いながら追いかける…

「待て〜♪…ま、待て〜、ん？待てっ、待ってっ!？」

男があわてて走る速度をあげるも、なかなか追い付かない。というか、恐ろしい勢いで突き放される。

「ふふふっ♪捕まえてごらんなさ〜い♪」

「ちよつと待つてジブリールさん!? 走るの早すぎてもう点にしか見えないっ!!」

ジブリールは例えるなら、重力が地球より弱い月でスキップして移動する宇宙飛行士のように軽やかに地面を蹴っていく。宇宙飛行士と違う点をあげるとするならば、

「1スキップの距離が100m単位なんて追い付ける訳ねえよっ!!」

比べるのすらおこがましい程の速度で離されるので、シユウは諦めて立ち止まって息を整える。

「おや? もう捕まえてはくださらないので?」

空間に開いた穴からひよこつと顔を出すジブリールに、

「は、走る? というか、速度が桁違い過ぎて追い付けねえよっ!!」

息も絶え絶えに言い訳するシユウに、少し考える素振りを見せるジブリール。

「そうですね、では速度を合わせてみましょうか?」

「へ?」

（なんだ? こいつ本当にジブリールかっ!）

普段の口からは決して、断じて出ない台詞に違和感を覚えたシユウは、

「ね、熱とかなないよな?」

と、ジブリールの額と自分の額に手を当て、熱を測る仕草を取る。

「はいい? 私はそこらの人類種イマニヒトとは違って、脆弱ではございませんので。というか、病氣

などという状態になることは有り得ません。」

と、特にシユウの行動に関心を示すこともなく、ジト目でシユウを見つめてくる。

「そ、そうか、それならいいんだが。」

「では、もう一度やってみましょうか♪」

暑い砂浜。カンカンと照りつける太陽。吹き抜ける潮風。そんな中、海の沿岸沿いを走り抜ける二つの影があつた。

「ふふふ、捕まえてごらんなさい♪」

砂浜を駆けるのは、天使を体現したような美しさと神々しさを放つ天翼種^{フリーゲル}、ジブリール。心の底から楽しそうに笑う表情は、見た人全てを救えるほどであつた。そしてそれを追いかけるのは…

「ちよつ、とまつ、止まってジブリールさん!!とまつ、止まってください
いいいいいいああああ!!!?」

腰を曲げ、イナバウアーのように華麗な姿を見せているのは、エルキア王城専属執事、シユウ。

「地の文さん!そんなポジティブな情景じゃないよ!?!つかジブリール止まれえええ!!」

え?なんでさつきから止まれて言ってるのかだつて?

俺がジブリールに引つ張られてF1並みの速度で砂浜駆けてるからだよおっ!!

「さっきの言葉の意味ってジブリールの速度に合わせるって意味だったのかよお!」

お互いの腰に巻き付けられた太い蔓によりジブリールになされるがままの状態で、ころうじて動く口で必死に訴える。

「はあ、では逆に問わせて貰いますが、わざわざあなたの速度に合わせる必要がどこにあるので?」

心底理解できないといった様子で、シユウを引つ張ることをやめないジブリール。

「お願い!!お願いしますジブリールさん!!止まってください!!死んじやう!!このままだと死んじやう!!」

もはや懇願というべき訴えに、ようやく聞き入れてくれたのか、

「はあ、仕方ありませんね。」

ジブリールが跳躍したままふわりと飛び上がると、先ほどまで腰にかかっていた負担は幾分か楽になり、ようやく原始的イナバウアーをやめることができた。

「な、なあ、ジブリール。もしかして俺をいじめたかったただけなんじやないのか?」

ふと思いついた予想、というか確信を告げるシユウに、ジブリールは、これ迄に見せ

たことは無いだろう笑顔で告げる。

「はい♡とても満足いたしました♡」

「……まったく……」

あまりの笑顔に、反抗する気も失せてしまったシュウは、そのまま空中散歩を楽しむことにした。

一方、空たちはというと

「おいっ!?今度はジブリアルとリア充イベント発生してんぞ!?」ポーン

端から見ても目立ちまくっているジブリアルとシュウの行動に、ゲーム中にも関わらず釘付けになっている空たち。

「……あんなおいかけっこは、経験したくない……かなっ!?」ポーン

「……………」スッ

パァン!!

「へあ!?!」

「……んう!?!」

「な、何が起こった、です!?!」

またも起こった炸裂音に、意識を強制的に向けさせられる空たち、そこにはトスを受

け取る姿勢を取ったままのステフと、海面に散らばるボールの残骸しかなかった。

「ま、まさかステフの覇気がボールを触れることなく破裂させたというのかっ!」

「… ステフ…。」

どこか思い当たるのだろう、恋する乙女同士として、白はステフの今の気持ち容易に想像できていた。

「ステフなんか怖え、です?!」

どうやらそんなことに気づいてない二人は、ただただステフを眺めるだけにとどまっていた。

（なんだかとても負けている気分ですわっ!?!）

そんなステフの心中は、もちろん荒れていた。

（こ、このままではシユウとの関係が深まるどころか浅くなつてく気がしてならないですわっ!?!）

最初の水着御披露目イベントから特に進展もなく、懸命にボールを跳ねさせ続けてきた結果、周りがリア充イベントを起こしまくっている（ように見えて）仕方がないステフは大いに焦っていた。

そんなステフの様子を見かねたのか、

「… ジブリール。」

「はい、お呼びでしょうか白様♪」

空間の穴から即座に現れた、事の一端を担っている元凶を呼び出すと、

「ジブリール、仕事…」

「ハッ!?この猿をいじめる事にすっかり夢中になっておりましたっ!!申し訳ございません!!」

と、全身を穴から出して頭を下げるジブリール。それと同時にシユウも出てくるのだが、不安定な姿勢で空を飛んでいたためか、それとも無理やり蔓を引つ張られて穴に通されたためか、海に自然な流れでダイブする。

「ぶぼっ!?なんで海っ!?鼻に海水があっ!?」

「へ?し、シユウ!?だだだ、大丈夫ですよの!」

海で悶絶するシユウの声に正気を取り戻したのか、シユウの元へ駆け寄るステフ。

「… 仕事の前にしてほしいことがある。耳をこっちに…」

「あ、はい… ふむふむ… あんっ♪くすぐるとうございます♪… はい、かしこまりました。それでしたら…」

と、ジブリールが空間の穴に手を突っ込んで取り出したのは、壺。それを白に手渡すと、波に逆らいながらゆっくりとステフに近づき、

「… ステフ、ちよつといい?」

「え？ど、どうしたんですの？」

キョトンとした様子で、白の方を見るステフ。傍らにいるシユウとある程度距離を離して、

「：： ちよつとこつち、耳をかして」

「は、はい……。」

???????

「ぐおお、まだ痛い……。」

突き抜ける塩の刺激にまだ悶えているシユウ。砂浜に上がり、回復まで休憩を取るよ
うだ。

「災難でしたね……。」

そんなシユウに同情を示したのは、これまでのイベントに関わりたくても関われない、木箱というなのブラックボックスに匿われた吸血種^{ダンピール}、プラム。

「ああ、プラムさん。お気遣いありがとうございます。」

鼻を押さえつつ感謝の意を示すシユウ。

「お気遣いというなら、こつちに日除けを寄越してもらえませんかあ？さつきから直射

日光が激しくて、もう魔力カツカツで死にそうなんですぅ〜。…」

どうやらずっと魔法の展開をしていたようで、息づかいからも体力がドンドン削られてるのがわかる。が、

(これ、空の策略なんだよなあ。：プラムの体力を削っておくつてのは。：でも確かにこう、悲壮感を演出されると助けたくなる欲求にかられるなあ。：)

と、思うところがあつたのか、自身が持つてきていた予備の日傘を時間が経てば日の傾きで日光が当たるように調整して置く。

「あ、あ〜っ。： シュウさん。： でしたっけ？ お優しいんですねえ〜。：)」

魔法の威力を弱めて、休憩が出来るようになったのか、ため息をつけて感嘆の声を漏らす。

(まあこれがプラムの処世術なんだろうけど、ホント上手く立ち回ってんなあ。：)

利用できる場所は利用する。盤上の世界で弱者となつてしまい、そんな立場に理不尽になつた今でも、吸血種^{ダンピール}再興のために戦っている。

「すげえなあ。：)」

意志の強さ、吸血種^{ダンピール}としての誇り、利用し尽くす覚悟、そういう空や白にもある誇りが、元の世界に居たときの自分と比べて出た称賛に、

「はい？ どうしたんですぅ〜？」

素朴に、もしくは感づかれたと思つて探りを入れにきたのかわからないが、プラムの言葉に、

「あつ、申し訳ありません。声に出してしまいましたか。」

「ええ。それはもうはつきりと。それで、ボクのどこがすごいんですう？ それとも、目の前で起こっている惨状のことですかあ？」

と、プラムの言葉につられて海の水平線の方を眺めてみると、どうやら巫女が手ブラをしながら血壊状態で海の上を走り、そうなる原因を作ったのであろうジブリールが、巫女のブラジャーを垂らしながら優雅に空を滑っていく。その余波か津波っぽい大波が砂浜を覆っていくのが見てとれた。

「あつ、いや、あれもあれですごいですけど、プラムさんの行動から感じる自分の種族に誇りをもって、どんな手段も使い尽くす。その覚悟の片鱗を見たというか。そんな感じですね。」

（まあ、すごいと思つたのは正直なことだし、言つてもいいか。）

そんな心情で語つた言葉に、プラムは意外な反応を示す。

「そんな面見せましたっけ？ 今がほぼ初対面ですよね？」

原作知識があるせいか、プラムとの関係から得る知識量が釣り合つてないことに違和感を持ったプラムが、聞き込んでくる。

「あはは。じゃあさっきの私を『優しい』と言ったのは本心からですか？」
「…… どういう意味ですう〜？」

シユウの言葉に、プラムは警戒を込めて話を続ける。

「プラムさんはおそらく、『人類種下等種族を利用してやった』と、思っているんじゃないかなあ
と、思っただけですよ。」

「……………」

「どうやら凶星だったのか、特に言い訳をしないプラム。少しの間荒波をBGMに待っ
ていると、

「あんまり勘がいいと、最初に食べられちゃうかも知れませんよお〜？」

顔が見えなくてもわかる獰猛な笑みを感じとり、シユウも内心怯えるが、取り繕って
答える。

「私をあまり高く評価しても意味はないですよ？ 私はただの執事です。ですがこれだ
け……」

「人類種下等種族をなめると、最後に痛い目を見ますよ？」

「へえ〜？ 言うじゃないですかあ〜？」

「ま、最初に食べられたくはないので、私の無能さを証明すべく、汗の味を感じてみては
？」

と、腕を木箱の隙間の前に差し出すと、一切の躊躇もなく舐め始めたプラム。

（男の汗でもお構いなしとは、それほど危なかったのか…）

そんなことを悠長に思っていると…

「うんまああああああいつ?!?!?」

「ええっ!!」

突然の叫び声に腕を引つ込め数歩下がってプラムの様子を見つめると…

「なんですかこれえ!?!汗の大部分はそこらの人類種イマニテイと同じなのに極僅かに感じられる舌を刺すような旨味とコクっ!!微かな隠し味が汗の味全体の調律をとって…まさ
に中毒になる味っ!!さあもつと汗をくださいっ!!何なら血液でもいいですよっ!?!」

と、木箱から身を乗り出す勢いで腕を狙ってくるプラム。

「えっ、ダメダメっ!!なんか皮膚まで舐めとられそうで嫌だっ!!」

なんだこのがつつき様。まさか心臓にかかっているフォルメリアの力の残留が血液に巡っちゃってるのか?それだとすると…多分、本当にプラムの舌溶けてるんじやなからうか?天翼種フリュウゲルのジブリールの体液だとプラムが蒸発するっていつてたし、オールドデウス神霊種ならなおのことだろう。

…ほんと、変なところで活躍するなあフォルメリアの加護…

「くっ、断られたら盟約でどうしようもないですう。でもかなり回復させてもらった

のでよしとします。また舐めさせてくださいねえ♪」

「そ、そりやどうも…」

うゝん、どうやら回復させてしまったらしい。これはちよつと不味いかもなあ…

と、頭を抱えたその時、

「その… シュウ？今、大丈夫ですか？」

と、ステフが近寄ってきた。

「あつ、はい。大丈夫ですが…」

ステフは後ろに腕を回し、少しかがんでシュウを見つめている。

(綺麗だ…)

素直な感想を脳に巡らせながらも、ステフの表情を読み取るのを忘れない。そして少し顔を赤らめ、シュウの視線から目をそらしつつ、ステフが告げる。

「その… シュウにサンオイルを塗ってほしいんです…」

(……………)

「そ、その、白が日焼けに効く油だっていって、その、男性が女性に塗るのが元の世界の

習慣だつて言うから… そ、その… シュウに…」

「行きましよう!!」

「へ？あ、は、はいですわっ!!」

白様、超グツジヨブ!!この前のだいしゆきホールド（健全）のお礼かもしれないが、これはお釣りが出すぎるレベルだっ!!これはまた白にきつかけを提供するとしますか!!

と、暗に白とシュウの恋愛協定が結ばれたのを感じとり、意気揚々と立ち上がるシュウ。

「あつ、でも日傘がもうないですわね…」

ふと空たちのいる方を見ると、荒波のせいか砂浜に上がってみんな休んでおり、日傘のあまりが無いようだが、

「行きましよう!!」

そう言うシュウの手には日傘が一つ握られていた。

「よ、よかったですわね… それじゃあ、お願いいたしますわ。」

そうして歩き出すシュウとステフの後ろで、何かしら白煙が上がっている。

「ああああ!!焼けるう!!燃えますう!!魔法出力全快!!!」

いきなり日傘を取られてしまったため、日光が強くなってしまい、弱くしていたものの張っていた魔法で辛うじて致命傷は避けたものの、大ダメージを受けたことに代わりはなく、シユウから得たエネルギーもほとんどを消費してしまった。

「く、くっそおっ…シユウは必ず殺してやりますう!!!」

…
盤上デイス・ボードの世界でも、上げて落とすの効果は顕在のようであった。

ビーチサイドの暑い余暇（終編）

「そ、それじゃあ… お願いいたしますわ…。」

と、俺の前で横になつて寝そべるステフ。

… ふつ、ついにこの時がやってきてしまつたか…。 長かつたな…。 いや、今までの苦勞が報われたというべきか…。 こういう元の世界では一生味わえなかつただらうりア充イベントを、この世界に来て経験することができるとは…。 思つてもみなかつたな…。 くつ、皆、皆、すまない。 ついに私は大人の階段を…。 リア充としての階段を駆け上がらせてもらおう!!

いざ行かん!! 理想の大地^{ステフ}へとつ!!

じーっ…

「…。」

じーっ…

「…。」

なんだ？この後ろから何かが背中に突き刺さっているような感覚は…？

じじーっ…

くっ！なんだか数が増えた気が…？気のせいだろうか？

じじじーっ…

なんだ？画面の前の紳士たちの視線なのかっ!!? やめろ… やめてくれっ!!俺は何も悪いことはしてないはずだっ!!… って、

じじじじーっ…

「あれ？シユウ、どうしたんで…」

「何見てるんですか皆様アア!!?」

「うおっ!!?ば、馬鹿なっ!!?俺の《隠れる》技能が失敗しただどっ!!?」

「…に、い、そわそわしすぎ。バレて当然…」

「やはりいらしたんですね…」

案の定、振り返った先の草むらからカメラを向けていたのは空と呆れ顔で兄について

きた白だった。

「だだだ、だつて目の前でリア充イベントが起きてるんですよっ!!? 事件ですよっ!!? 今撮らないでいつ撮るって言うんですか監督う!!?」

「…今、でしょっ…!!?」

「あああ、あなたたちっ!!? いつからそこにつ!!?」

「愚問だな… 最初からだっ!!?」

「どうしてそんなに堂々としていられるんですの!!? 覗きですわ変態ですわっ!!?」

「覗きは紳士の嗜み、そこにエロがあるというのならば、カメラを止めるわけにはいかな
いっ!!?」

「そんなの紳士じゃないですわ!!? 紳士の面を被ったただの変態ですわよっ!!?」

「何と言われようとカメラを止めはしないっ!!? さあ続けろっ!!? 何なら俺も混ざっ…!」

ガサガサ…

「なんだ? またゲームヤンのか、です? いづなも混ぜろや、です!」

「駄目ですぞいづな。もう少し大きくなつてから経験することですぞ。」

「む、ゲームじゃねえのか、です?」

「なっ!?! いづなさん達までっ!?!」

「おやあ? こんなところで何をしておられるので? セツかくの海ですから、景色でも眺めながら私の質問に答え続けるというのはいかがでございましょう?」

「何で海にまで来てそれやらにやいけないのかにやー!?! ふざけるのも大概に:」

「質問数が2万を超えましたが、本当に答えなくてよろしいので?」

…
え?

「:… はっ?!? 2万?!? 20000じゃなくて?!?」

「はい。20000でございます。早くしないと、残りの寿命を全て費やしてもらいます。よろしいので?」 ニコッ

「何その脅迫!?! 言葉の裏に『殺しますよ♡』ってあるのが見え見えなんだが!?!」

「そう思うのなら、今すぐ答えたほうが利口だと思いませんか?」 ニコッ

「ハイ、ワカリマシタ」

くっそう:… 2万とか頭おかしいだろ、あ、元からか。でも一週間とちよつとで2万とか:… 何かあったのか?

スタスタスタ…

「あれ？なんだ、止めちゃうのか。せつかくのリア充イベントが…。」ブツブツ
「…ごめんね、ステフ…。」

スタスタスタ…

「あ、あれ？置いてけぼり…。ですの？」



どうも、ご無沙汰しております。シユウです。

空たちの計画により、夕刻まで巫女さんの血壊による疲労を白のモフリテクで回復し

つつ、日光によってプラムの体力を消耗させる。その間、ジブリールの持つてきた質問大全集に答えているのですが…

「では、エレメンタル精霊種の個体差の形態変化についてですが…。」

「火の玉のような姿を想像していたのですが…。」

「あてもそれはわからへんなあ。話したこともあらへんし。」

「つーかさ、エレメンタル精霊種つて魔法の源なんだよな？それならファイーとかジブリールとかプラムとか、魔法を使うときに精霊、つまりエレメンタル精霊種を使うんだろ？その時に消費するつてのはエレメンタル精霊種の命を奪うつてことになって、本当は盟約違反で魔法を使えないんじゃないのか？」

「それについてはボクがお答えします。大戦前は確かにそうでしたがあ、今は『運用』、つまり力を借りているようなものです。大戦以前、エクスマキナ機凱種はエレメンタル精霊種を消費して生きていたのですがあ…。」

とまあこんな感じで、さすがに皆ゲームで遊ぶのも飽きたのか、質問に答え続ける俺に慈悲を与えてくださってるのか、それぞれの考察を述べあってくれております。いや、これ一つ一つの質問にこんな感じでやっていたら逆に時間がかかってしまうつて終わんなくない!?!と、思いきや、割と芋づる式に解決しているようで、質問の数がものすごい勢いで減っております。いやー、識者つて貴重ですね〜（白目）

「いづなよ、これは後にいい教育となろう。よく聞いておくのだぞ。」
「合点、ですつ!!」

「とうか、毎回こんなことを聞かれて答えてるんですの?…もしかして、シユウつて知識量なら私よりも上なんじゃ?…」

「あ、いえ、お嬢様。今回は皆様も加わつて考察を披露してただけける為、聞き応えのあるものになっておりますが、普段は聞くに堪えないものですよ?」

「その聞くに堪えない返答を聞き続ける私の耳がかわいそうで、涙が零れる次第にございます。」オヨヨ…

「なら、そのシユウにかけてる盟約を破棄したらどうなんですの?…」

「それはできません。図書館の本を利用するのは私の命を利用することに等しいことでございますれば、この程度の責務はこなしていただかないと♪」

「そ、そんなんですのね…。」

「今はあんまり利用してないのですがねえ…。」

「私の命を利用した場合、一生をかけて償っていただかないと♪」

「そのようなこと盟約に決めてないんですが…。」

「うっ…やはりあなたの口調がそれだと気持ち悪うございますね。潮風が翼に絡みつく嫌悪感に加えて二倍増しでございます…うぶっ。」

いやー、普段ジブリーと喋るときの口調だと空達の前で失礼だし、メタ的な意味で言う空の口調とほぼ一緒だから見分けがつかないのよね。台本形式ならやれたんだけども……。と、なんやかんや過ごしているうちに夕焼けが差したようで、

「……にいい、夕陽が綺麗……」

「ん？おお……なかなかのもんだな……。」

「綺麗ですわね……。」

おまきれ

「ま、こういうんは海でしか見れへんやろねえ。」

「ほう、これを綺麗だと思ふ感性……。新しい発見にございます。」

少しの間、海の境界線に消える夕陽を眺めて……

「よし、もう日も暮れるし……帰るか！」

「……うん。」

「そうですね。いづな。帰りの支度を始めますぞ。」

「む、やっと海から帰れんのか、です？」

「そやね、帰るか。はよ風呂にでも浸こうてさっぱりしたいわあ……。」

「はあ……あと少しでしたのに……残念にございます……。」

「さて、^{ワビビースト}獣人種の皆様！今日は誠にありがとうございました。それでは片付けの手順

を…」

「ちよつと待ちなさいなあっ!!?」

「ちよつと待つてくださいいよおっ!!?」

「あなたたち何のためにここまで来たんですのよっ!!?」

「え? 海イベントを回収するためだろ?」

「当然のように言われるとそんな気もしてきますがぁ… オーシエンド行きの迎いの船に乗るためにここに來てるんですからねえ!!?」

「え? やだ。今じゃないともう帰る。いい子は陽が沈む前におうちに帰んなきゃいけないの。」

「そ、そんなぁ…」

「空が “いい子” だつてことに突っ込んだ方がいいんですのっ!!?」

「と、いうわけで今から未来のおうちの一つになるオーシエンドへ向かう。んじゃ、ジブリール、やっちやつて♪」

「はい… うへへ♪力を出すのはいつぶりでしょうか♡あ、そのアホ猿、ここに立っただけですか?」

「はいはい。なに?」

「シユウ?あなたが平然とアホ猿って呼ばれて返事していることに疑問を持つ私の頭はおかしいんですの!!!」

「といますか、ジブリールから名前で呼ばれたことは一度もありませんよ?」

「どれだけ扱い酷いんですの...?」

いや、さすがに10年も付き合ってたらかこの扱いにも慣れるって。

「ところでジブリール。この立ち位置の意味...」

「それでは『天撃』... 全力の5%ほどで行きますね♪」

その言葉と同時に、空間が胎動し、ジブリールの手に光が集まり、拡散と凝縮を繰り返しながら、一本の光の矢と形を変えた... って、ん?

「ちよちよちよ、ちよつと待ってジブリールさん!?それ俺に当てるつもりじゃ... っ!!!」

「では、死んでくださいませ♡」

「俺がお前に何をしたらっていうんだっ...」

次の瞬間、光の束が体スレスレの位置を振り、圧力で体とともに意識まで吹き飛んでいった...。

「なあ、海を綺麗に割ると同時にシユウも華麗に吹き飛んでいったんだが、何で『天撃』撃てたんだ？」

「直撃はしておりませんので、風圧によるコラテラルダメージと捉えていただければと

」♡

「やだこの子怖い」

強引な魅了は全てを惹き寄せるのか？

(うーん？ここは…？何があつたんだっけ？確かジブリールの5%天撃に吹き飛ばされて…)

朦朧とする意識の中、混濁する記憶を繋ぎ合わせ目を覚ます。すると視線の先にあつたのは…

「おお、なんて綺麗な街だ…」

そんな言葉を零してしまうほどの幻想的な光で彩られた海底都市、『オーシエンド』。さすがは海棲…じゃなかった吸血種。今は海棲種に半強制的に従わされているとはいえ、同盟を組み始めたころはこんな風に街を改造して、吸血種も暮らしやすいようにしてたのかもしれない…。まあ、これが例の事件の後に行われたというのなら、もう乾いた笑みしか浮かばないのだが…

「おや？お目覚めですかなシユウ殿？」

と、そんなことを考えていると、耳元で白髪老人の禪マツチヨマン、初瀬いのが声をかけてきた。

「あつ、これはいの様、申し訳ございません。ここまで運んできてもらつて。」

「いえいえ、お安い御用ですぞ。さすがにあの害鳥の砲撃に吹き飛ばされた後の状態で、この海の中を意識の無いまま泳いでいけというのは酷こすぎますからな。」

「まったくその通りで…。」

そう、俺は今いのに担がれて、緑の豊かな髪を揺らしながら尾ひれを打っている海棲種セイレイシ、アミラの先導で女王の間へと向かっている最中であつた。

「しかし、空殿の不能が判明して、私は嘆かわしゆうございます。」

「はいい?」

と、変な声を漏らしてしまつたが…：…そうか。俺が寝ている間にアミラと空の会話があつたのか。その二人の様子を見ていたのは、アミラに欲情したにもかかわらず空はアミラの言葉がまるつきり嘘だとわかつてたから、何も感じなかつたわけで…：それを不能と勘違いしてるのか。

「見てくだされ、あの緑色の美しい髪をなびかせ海を舞う海棲種セイレイシの姿を、体型といい服装といい、何から何までむさぼり…：ゴホン…：いただきたくありませんかな?」

「言い直してそれですかいの様…：…そうですね…：…」

どうやら海棲種セイレイシに天の快樂をもらい昇天することしか頭に無いのの言葉に連れられ、改めてアミラの方へ視線を向けると…：…

(これは… ちよつとヤバそうですね…)



「到——ツ！着ううウウツ!!お待たせ〜♪ここが女王様の間ダヨ〜」

程なくして女王の間へと到着した俺たちに、間髪入れずにアミラが扉を開く。その先にいたのは…

「ご紹介します——海棲種セイレーンの女王さま… ライラ・ローレライ陛下ヘーカでござい… ですよー」

巨大な水晶の中で安らかな顔で眠っている、盟約によつて吸血種ダンピールは吸血を、海棲種セイレーンは他種族の男性を搾取することを禁じられた現在、吸血種ダンピールと海棲種セイレーンの共生を可能にする力を持ちながら、自分を惚れさせる王子を見つけるため、とある童話のお話になぞらえて眠りこけてしまったがために、とんでもない迷惑を吸血種ダンピールに与えちゃつてる、真実の愛を求めて夢見る海棲種セイレーンの女王、ライラ・ローレライの前に来ている。

「な、なんて綺麗な方ですの…」

「これは… なんとまた…」

「む、すげーきれー、です。」

それぞれライラに対する感嘆の息を零していく中、

「うーん…？ そんな言うほど美人か、白？」

「…よく、わからない…」

「はあああつ!!？」

空と白の発言に、思わず目を剥く一同。さすが海棲種セイレイシの女王というべきか、海棲種セイレイシの特性、『海にある限りすべてを惹き付ける魅力』の元となる『水精』の保有量がアミラなどの他の海棲種セイレイシと比べて別格の為、同性であるステフやジブリールまでも魅了するその力を前に、平然としている空と白を見て、驚かない方がおかしいだろう。

「ねえ、シユウだつてあの方が綺麗だと思えますわよね!？」

自分の目がおかしくないことを確かめようとするステフの言葉に、

「……………」

「あ、あれ？ シュウ？ い、一体どうしたんですの？」

俺はステフの言葉に答えられずにいた。いや、応えることすら叶わないほど、息をきる事さえ忘れ、あらゆる感覚全てを視力に総動員し、ライラの姿を余すことなく脳に焼き付けていた。

（これは… ま、まずいつ!!）

そうかろうじて思考し、唇を噛んで正気を取り戻そうと試みるも、顎に全く力が入らず見事失敗に終わる。そもそもその思考すら一瞬でかき消されてしまうほどの勢いで濁流してくるライラの外見以上の情報を処理することで、脳は精一杯のようだった。

（くっ、アミラを見たときに妙に色っぽく感じると思ったら、やっぱりあの時アミラの『水精』に当てられてたか…）

アミラを見たときに気づいてはいた。もしかしたら俺は空や白とは違って『水精』の影響を受けるんじゃないか?と。そこでライラを見る前に手で視界を塞いでみたのだが…

(胸から押しあがる『見たいっ!!』って感情にどうしても逆らえなかつたなあ。:)

あくまで体内に宿している精霊が強引に引き寄せられているため、もはや視界を塞いだところで本能レベルの所でトリガーはとづくに引かれており、全くと言っていいほど意味をなさなかつた。

(しっかし、この感情は… 赤ん坊のステフを見た時や、王城で初めて対面したときと同じ感情。:)

初恋の感情と同レベルの勢いで魅了してくるライラに、頭の中で激しく葛藤を繰り返している…

「シュウ!!いつまで見とれてるんですのっ!?!」

ステフが肩を掴み、恐ろしい勢いで前後に揺らしながら、見た目放心している俺の意識を取り戻そうとしていた。

「はっ!?お、お嬢様、ど、どうかしたの!?」

「どうもこうもありませんわっ!!そ、その、ライラさんに魅了されるのは…まだ、分かるんですけど…な、長すぎませんか!?もうゲームが始まりますわよ!?」

と、どこか不機嫌な様子で迫ってくるステフ。

「すすす、すみませんお嬢様っ!!お嬢様とライラさんが頭の中で葛藤しております…」

「ふ、ふえっ!?くくく、比べられる程だなんて…そんな…」

そんな俺の言葉に、みるみるうちに顔が赤くなっていくステフ。

（よ、よしっ!何とか機嫌を取り戻せたっ!!よくやった俺の二枚舌アツ!!!…いや、本音だったけども。）

結果論でうまくいったものの、下手に何か言ったら今まで頑張って立てたフラグが全折れしかねなかつた未来を、一瞬だけ想像して身震いする。

「つて、今から自身の全権をかけたゲームが始まりますの!!お、おかしいですわよね!?!私達助ける側だつていうのに…っ!!」

どうやら女王を起こすゲームに挑戦権があること事態に不満があるステフ。まあ、おかしなのは空たちも承知の上でわざとやっているんだが……と、ステフの手を握ってシユウが告げる

「確におかしいと私も思います。が、それは空様もわかっておられるはず。きつと何かしら考えがあるのでしよう。だから……大丈夫です。」

「は……はいですわ……」

と、握られた手に意識を持ってかれたせいかわ、勢いがしゆるしゆると抜けていくステフを見て、

「では、ゲームを起動しますねえ？？では空様、シチュエーションを思い描いてください。そして……宣言をお願いいたしますうう。」

『ゲーム』というその言葉に、ステフも気を取り戻したのか、皆と同じようにライラの方へ視線を向ける。

(これは……今まで以上に大変なゲームになりそうだ……っ!!)

視線をライラに向けたせいで、またも魅了されそうになるのを振り切り、ステフの手を今までより強く握って宣言する。

「
「【盟約アツに誓シエつてン】
！！
「
「

開校！海棲種（セイレーン）学園！

意識をゲームに没入させ、シチュエーションが構成されると同時、視界が開けた先にあったのは、海の中に学校と呼ぶにふさわしい形状をした建築物があり、なんとも美しい光景が広がっていた。

「うむ、うまく俺のイメージと同じシチュエーションを構築してくれたようで何よりだっ！」

と、満足気にうなづく空に対し、

「あ、あの、まず海棲種^{セイレーン}であるはずの女王様が学校を知っていたことに一番驚いたのですが……これ、どこの知識ですかあ？」

プラムが一層やつれた顔をしながら、視界に映る奇妙なコマンド選択画面の知識の出所を探る……が、

「よし、ユーザーインターフェース U I までちゃんと実装されてるようで何よりだ。」

それを華麗に無視して空は自分の服装を確かめる。

「ふむ、いつものシャツにブレザーか……ま、悪くないかな？学生服にいい思い出なんて一つもないが……」

軽くトラウマに触れてしまったのか、空は暗くなる表情を振り払って、

「よ、よしっ!他のやつらはどうなってるかなっと!」

と、何気に女性用の制服を着ているプラムをスルーして、辺りを見渡す空の目に一番に飛び込んできたのは…

「むう、なかなか窮屈でございますな…!」

空と同じブレザーを含めた男性用の学生服に身を纏っているいのであった。だが学生服はいのの持ち前の筋肉によってパツパツに張ってしまっている。

「何でじいさんが最初に現れんだよ!」

「い、イメージの反映が簡単だったので先に来てもらっただけですう…!」

「はて?私のたくましい姿に惚れでもしましたかな?」

「んなわけあるかっ!」

と、ツツコミを入れる空の回りに、次々とイメージが反映された者たちが現れる

「…どう、かな…?」

「うむ、よく似合ってるぞ白。」

少し遅れて現れたのは、もともと身に付けていたセーラー服より色鮮やかで、女王が持つ服装に対するイメージが混在したのか、少々露出度が高めのセーラー服を身に纏った白だった。

「ほう、なかなか似合うとるやないの。精々、精進するこっちゃやな、いの。」
「お褒めに預り光栄にございます巫女様。」

いのが頭を下げる先にいるのは白と同じセーラー服を着ている巫女。

「ふむ、これもなかなか動きやすい服装でございますね♪」

「む、なんだかスースーするぞ、です。」

同じセーラー服を来たジブリールといづなが現れて、

「ふむ、なんだか懐か…。おっと、執事服と似たような服ですね。」

「そ、その…。なんで私だけ、いのさんやシユウと同じ男性服なんですか?」

男性用の学生服に身を包んだシユウとステフが現れる。

「それは女王がそもそも男が好きじゃないって可能性を考慮し、男装女性というカテゴリを保管する為だ。」

「…女王は生殖能力のある男性を求めてるって言いましたよねえ…。?」

「信じるに足る根拠はない」

バツサリとプラムの言動を切り捨てたと同時に、ゲームのオープニングが始まった…

???????

… えー、ご無沙汰しております。シユウです。

今日の前で繰り広げられているのは、

「いや、ちよつ、放してっ!!」

「放しませぬっ!放しませぬぞ我が胸の高鳴り、我が股座の熱さを知って頂きたいっ!老いたる卑小な我が身なれど、命を賭して必ずや満足させてご覧に入れましようぞっ!!」

「いやあああああっ?!」

セクハラの犯行現場である。いや、セクハラの度を軽く越えている気さえするが、いのがライラに対して土下座をしたかと思いきや、おもむろに情交とか言いながら性行為を求めてライラの腕を掴んでいる犯行現場を見せられて何を思えばいいのかもわからないほどの勢いに、苦笑いしかできないんだけども。

「いやっ、ちよ、放して、放してっばあっ!!」

「お待ちくだされ女王よ!女王よおおおッ!!」

おお… おお… おお…

うん、なんだろう、『哀れ』という言葉しか思い付かない。というより同情を寄せるのすら間違っているような気さえするな…。

「ま、まあ、まだフラれてはいないんだよな、アレ?」

と、あまりの惨劇に絶句していた一同であったが、確かめるためにプラムに質問をする空。

「ええ、まあ、女王様が逃げ出したって感じですのでえ、ゲームシステム的にはフラれていないんですけどお…。アレを告白と言うには無理がありすぎるかとお…。」

そんなプラムの言葉にいの以外の全員がうなずいて同意を示す。

「じゃあ取り敢えずふつーにプレイするか。コマンド選択…。『下校』つと。」

「え?」

目を丸くする一同（白以外）に、空は首をかしげて、

「え?だって学校だぞ?めんどくせえじゃん。明日から頑張るよ。」

「…こくこく」

「…あんたら、なんでこの舞台指定したん?」

巫女の素朴な疑問に応える前に、空と白は一瞬にして姿を消した。

「…と、取りあえず行ってみますか?学校とやらに。」

そうシユウが促すと同意したのか、とぼとぼと校門の方へ歩みを進めるのであった。

???????

「はあーい☆校長のアミラだよーっ!みんな元気かなー?キャハッ☆」

唐突にマイクを通じた大声に耳をふさいで何とか耐える。

「今から開校式?つてのを始めまーす☆皆さん、校長であるこのアミラの話をよく聞いてね☆」

と、なんだかノリッノリのアミラ校長の話が始まった。

「えー、ぜんりやく?おつとめ?なにこれ?どーゆー意味なのかな?アミラわかんないなー☆」

どうやらアミラ自身が書いたわけではないらしい校長の言葉を読み上げきれないま、全く要領を得ない話が始まるや、

「鳥頭ならぬ魚頭がこれほどまでとは、聞いて呆れますね♪『下校』させていただきますよ♪」

「なんや長つたらしいわあ... あても帰らせてもらおか。『下校』」

「ねみい、です。家帰って寝る、です。『下校』、です。」

あまりの頭の悪さが露呈する話に耳を貸すのが馬鹿馬鹿しくなったのか、即座に下校コマンドを選択して帰っていくジブリール、巫女、いづな。

「まあ、気持ちはわからなくもないですけどお... 初日くらい我慢できないもんですか

ねえ？」

あまりの即決にがつくりと肩を落とすプラム。

「ま、まあそう落ち込まずに。空様方のペースがあるでしょうから、気にしすぎない方がいいかと。」

「そ、そうですね。まだゲームは始まったばかりですもの。」

そんなシユウとステフの言葉に何かしら思うところがあつたのか、顔を上げるプラム。

「お二方だけですわねえ。ちゃんとプレイしてくださるのはあ……なんだか救われた気分ですよはい……」

わざわざ術式編纂に30人もダンピールの吸血種の協力を得て作ったゲームに何かしらの思いがあるのか、二人の言葉を噛み締めるようにうなづくプラム。

「はぁーい!!今日の校長の言葉は終わりっ!!ついでに開校式もおわりっ!!皆教室に行つて沢山喋つて過ごしてね☆」

そんな空気をよそに今まで大音量で喋りまくつたアミラの話が終わり、いよいよ学園生活の幕が開けた。

【二日目】

「ようやく終わりましたわね…。耳が痛いですわ…。」

開校式のあった体育館を抜け教室に向かう。アミラの大発声に鼓膜をやられたのか、耳を押さえながら愚痴をこぼすステフ。

「さて、まずは何をするのでしようか?普通なら授業が行われるはずですが、海棲種セイレーンには学校はないんですね?」

ふとした疑問をプラムに向け聞くシユウ。

「ええ、海棲種セイレーンは食う、寝る、やる、遊ぶこと以外能がありませんので、学ぶものにもあつたもんじやないんですが、ステフさんやシユウさんのイメージする授業とやらはありませんよ?まあ中身はご想像にお任せしますが、聞くに耐えないと思いますけどね…。」

若干白目で応えるプラムの様子からしてマトモな授業でないことはわかる。

(まあ、大抵のギャルゲーに授業なんてまどろっこしいのないし、当然と言えば当然か。)

と、元の世界のギャルゲーのシナリオを思い出すシユウ。

「まあ、授業を受けることで何かしらのイベントが得られるかもしれませんし、受ける価値はあると思いますわ。」

「それでは受けてみましょうか。コマンド選択…。『授業』つと…。」

「それなら私も……」

「あ、ボクは他の皆さんの様子を見てきますねえ……では攻略頑張ってください。」

そうしてコマンドを選択すると、一瞬にして景色が教室へと移り変わり、いくつか並んだ机の中央2列のど真ん中の席にステフとシユウは座っていた。

「わあ、なんだか懐かしいですわー♪アカデミーに行つてた頃を思い出しますわね。」

と、学生時代を思い出して懐かしむステフ。

「おや？周りの席には海棲種セイレーンの方たちがいらつしやるんですね。」

と、シユウは辺りを見渡してみると、ステフとシユウ以外の生徒らしき人物はすべて海棲種であることを確認した。が、なんだろう、周りの海棲種セイレーンの様子がおかしい。

「まさか、男!？」

「そうよね、間違いないわよね!？」

「うっそ?!男がこんな近くにつ!？」

まじまじと見つめてくる視線に、どこか違和感を感じたシユウは、ステフに声をかける。

「お、お嬢様、なんだか辺りの様子がおかしくないですか?」

そんなシユウの言葉にステフは同意するように頷いて、

「そ、そうですね。なんだかすぐく見られている感じがして落ち着かないですわ

ね…」

「もしかして男性が私達だけなのが原因かも知れませんね。お嬢様も攻略のためか設定上男性とされていますし、海棲種セイレーンに男性は存在いたしませんので…」

「そ、それもそうですわね…」

(あれ?もしかしてこの学校つて俺ら以外全員女性?なにその女学園?ゲームで男が女装して入学するタイプのギャルゲーならそれなりにあるが、ここまでの女子率を誇る男女共学つて中々無いだろうな…。つて、待てよ?もし全員水精持ちなのだとしたらヤバいぞっ!!?)

と、そんなことを考えている間に辺りのざわめきは徐々にヒートアップしていき、遂に海棲種セイレーンが動き出す。

「あつ、あのっ!お名前は何て言うんですか!?!」

「へ?わ、私ですの!?!す、ステファニー・ドーラですわ!」

「で、お隣の方は!?!」

「はあ、シユウと申します。」

「きゃー!ー!ー!つ☆」

二人の名前を聞くや否や、黄色い声を上げて喜びだす海棲種セイレーンの生徒たち。

「じゃあじゃあ、お昼休みに一緒に食事しませんか?ステフさまっ♡」

「へ!？」

突然の申し出にたじろぐステフ。

「じゃあ私はシユウさまと一緒にするう♡」

「えっ!？」

同様に食事に誘われてたじろぐシユウ。

「ちよちよ、ちよつと待ちなさいなっ!?!いきなりなんなんですよのあなた方っ!?!」

あまりの勢いに圧されそうになるも、何とか断りを入れて落ち着こうとするステフだが、

「え?だって…」

「魅力的な男を見かけたら声をかけるのが普通だよねえ?」

「そっだよお? 私達間違ってないよねえ?」

(何そのフランス人男性の魅力的な女性を見かけたら口説かなきゃ失礼ってほどの行動力!?)

海棲種セイレーンとの性別に対する意識の違いが大きすぎてどこから突っ込んでいいものかと

頭を抱えるシユウ。

「(トトト)、これってどういうことなんですよお!?!」

とても自分じゃ対応できないと踏んだのか、シユウに助けを求めるかたちで話しかけ

てくるステフ。

「あー、おそらく海棲種セイレーンの女王であるライラ様と、空様の異性に対するイメージが混在した結果、このような見解を産み出したんだと思います。海棲種セイレーンは男を繁殖するための餌、もしくはやる為のものとしかどらえてないはずなのですが、空様の女性から男性に向ける意識というものがそれに混ざってしまって、女性女性は男性にアプローチをするもの、という意識付けがなされたのではないのでしょうか？」

「な、なんてことですかの……」

シユウの考察を聞いてがっくりと肩を落とすステフ。

「いえ、むしろ空様の意識が混ざってくれたからこそ、今の状況ができたんです。もし元の海棲種セイレーンの意識のままであつたら、私達は見つかつたら最後、繁殖のために取って食われるだけでしょうからね。」

「はあ……」

やるせない気持ちで頭が一杯になってしまい、文字通り頭を抱えるステフとシユウ。

「あれ？頭が痛いのか？保健室行きましょうか？」

「頭が痛いのはそっちの方だよっ!?!」

「熱があるかもしれないわ。冷やす道具を今すぐ持つてきて!」

「頭を冷やすべきはあなたの方のほうですわっ!?!」

と、言葉にせずに心の中でツツコミを入れる二人の前に、一人の人影が現れる。

「おやめなさい」

たったその一言で先程までの狂騒は止み、その声の主へ注意が集まる……いや、正確にいうなら、強制的に集められたと言わなければならない。

「初日から騒いでいては品が損なわれます。少し慎みなさい。」

彼女が発する一言一言に、まるで麻薬でも仕込まれているように、皆の目は陶醉したようにうつとりとしている。

ステフすらもその影響下に置かれ、考え事などすべて吹き飛んでその女性を見つめていた。

「さあ、皆席について！もうすぐ先生が来るはずだから、静かに待ちましょう！」

手を軽く叩いて皆を言葉で誘導していく。それに逆らう海棲種セイレイシはおらず、おとなしく席へ着いていく。

「よろしい♪」

そうやって満足した笑顔を見せるのは、海にいたただけで海に愛されつくし、皆を惹き付けさせる存在、海棲種^{セイレーン}の女王にして真実の愛を求める眠り姫、ライラ・ローレライであつた。

最初の授業は実習で☆

「はぁーい☆先生のご到着だよお☆皆待ったあ? ごめんねー教室がどこか忘れて迷っちゃった! キヤハツ☆」

と、陽気な声を出して教室の窓から乗り込んできたのは、先程開校式で校長として話をしていたアミラである。

「あ、あれ? あなた校長ではなかったんですの?」

ごもつともなツツコミをすかさず入れるステフに、アミラがいつもの笑顔で応える。

「えー? そんな細かいことは気にしなーい気にしなーい☆身分とか役職とかよくわからないカラ、適当でいいんだヨ! キヤハツ☆」

もはやウザさすら通り越すアミラの頭の足りなさに、呆れの表情を露骨に出すステフ。そんなことを気にも止めない様子でアミラはエンジンフルスロットルで続ける。

「さあ! 開校初日の授業内容はあ……『どうやって男を上手く惚れさせるか!』でーす☆」

「身も蓋もあつたもんじゃありませんわね……」

「穴があつたら入りたいですお嬢様。」

ステフは設定上男ではあるが、中身は完全に女性であるため、まだこの授業に耐性はあるだろうが、芯まで男のシユウは聞いてて恥ずかしいレベルの内容である。

「では、早速ご教授願えますか?」

馬鹿馬鹿しい限りの内容ではあったが、涼しい顔でアミラを授業へ促すライラ。

「わっかかりましたあ☆それではまず男性は女性のどこに魅了されるでしょーかつ!?はい
その海棲種さん!!」

ズビシツ!!という効果音が聞こえそうな位の勢いで指をさすアミラ。そしてさされた海棲種セイレーンが答える。

「顔!胸!股間です!」

「よく言えました女体の魅力三ヶ条!!大正解つ!!!」

(なんだこのやり取り?)

海棲種セイレーンの阿吽の呼吸とも言えるほどの問答っぷりに真顔にならざるを得ない。

「もちろん脇やお腹、へそや髪型、太股など、様々な部分が魅力としてとらえられるけどお、大部分はその三つであってよー☆」

「やったー♪」

「じゃあ次は男を惹き付ける為の仕草!!じゃあ次はその海棲種さん!!」

「はいっ!!えっと、話しかけるときはちよつと屈んで上目遣いで、腰をくねらせて体つき

をアピールします!!」

「うーオールオツケー☆もつと言うなら胸の上に手を当てたり、おしりに当てたりしてそことなーく意識させたりするのも効果的かな☆もつと攻めたいなら男の手を握ってみるのもいいかもよ☆」

(いや、なにこのリアルな知識!?海棲種セイレーンってこういうことに関してはかなり上手いのか!?)

あまりに的確なアピール方法を提示するアミラに驚愕するシユウ。そんな驚きも知らずになおも続けるアミラ。

「じゃあ次は、男に話し掛ける時の話術ね!どんな口説きかたが良いかしら!?はいそこセイレーンの海棲種さん☆」

「はいっ!積極的に褒め倒します!!そして自分が男性より立場が下だということをアピールします!!」

「バツチリだよ☆でも立場が逆転しているときがコーフンする男もいるから、そこは臨機応変にネ☆」

(なんだろう、こいつらに口説かれたら墮とされる気しかしないんだが?)

そんな海棲種セイレーンの問答に恐怖すら覚え始めているシユウの隣で、なにやら物音が聞こえる。

カリカリカリカリカリカリ………

(ステフめっちゃメモってるう!!?)

さつきから何のツツコミも発しなれないと思ったら、ステフはどうやら海棲種セイレーンの知恵に興味をもつて所持品にあったノートと鉛筆を取り出して、図解すら交えた詳細なメモを恐ろしい速度で作り上げていた。

(か、過去に何か思うことでもあったのだろうか……)

と、若干引き気味のシユウをよそに、アミラが大手を振って授業を続けている。

(だがなんだろう、この違和感。口説き方はまあいいとして、何か足りてないような……)

授業を聞いているうちに、そんな違和感を覚えたシユウの耳に、アミラの声が響く。

「よーし！じゃあ次は実践してみよー☆あ、そのときにちゃんと念頭に置くべきことがあるんだけど、それが何か分かるかなあ？」

と、耳に手を当てて生徒から聞き出す素振りを見せるアミラ先生。

それに答えるようにほぼ全員の海棲種セイレーンが手を上げて叫ぶ。

「ヤつて、搾り取る!!」

(それだああああ!!!)

(こいつら口説いた後がヤつて食べ尽くすだけだから、同棲するとう観念がまつたかないのか!!空の思想の混在で相手選びに慎重さが生まれたってだけで他は何も変わっちゃいねえっ!!そりゃ口説くだけで済む訳だわ!!その後の事は一切考慮してないからこそ、肉体と性的なアツピルだけしか考えてなかったのか!!)

と、その事実にはステフの思考も行き着いてしまったのか、高速で動かしていた鉛筆がピタリと止まる。

「じゃあ、ちょうどよく男がいるので、そこの人類種イマニテイと女王さまじよーおー!!さっきの事を実践しちゃって☆」

そうしてアミラからご指名を頂いたのは、ステフとライラだった。

「ふえっ!?!」

「はい、わかりました。」

突然の指名に驚くステフの前に、席を立つて堂々と歩み寄るライラ。

「さあ、お立ちになつて?」

そう言いながら差し出すライラの手を、水精の影響を受けたステフは反抗する気など起きるはずもなく、生唾を飲んで手を取り立ち上がる。そばにいる俺ですら魂が引き寄せられ、ライラから目をそらすことができずにいる。

「さあ、実践といきましょうか。」

「は、はいですわ…。」

もはやライラが視線を向けるだけで頬に熱を感じるステフ。そこにトドメと言わんばかりに告げる。

「あなたとひとつになりたいの」

姿勢を低くして上目遣いなのはもちろん、ボディタッチも抜け目なく、セーラー服の隙間から見える谷間や脇を見せつけつつ放った言葉、それらのあまりに暴力的な魅了に、同性であるにも関わらずステフは、

「は……………はい……………」

と、返すのがやつとだった。

「すつごーい☆」

「さすが女王さまあ♪」

ステフの口説きに成功したのを見て、海棲種^{セイレーン}たちは拍手喝采。だが、たとえ女王がどんなに下手な演技や言葉をかけたとしても、すべてを魅了する女王にとって、それは必然の現象であった。

「じゃー隣の男もついでにやつちやおー☆」

腰を抜かしたように席につくステフを見て、次の標的としてシユウを墮とすようライ

ラを促すアミラ。

(げっ!!?そそそ、それはまずいつ!!?)

ライラをボーっと見ていたためにアミラの言葉を理解するのに時間がかかったせいで、逃げる機会を失ってしまった。

「さあ、あなたも」

手を差しのべるライラの手を取って立ち上がる。だが内心焦りまくってるせいか表情が硬い。

「あら、熱でもあるのかしら?」

と、ライラは俺の体調を心配してか、額に手を当てて、お互いの顔の距離をわざと近づける。

(やめろおっ!!?頭がライラ色に染まるうっ!!?)

接近されただけでも快樂が溢れていたのに、肌に触れられるだけで脳内麻薬がこれでもかと言わんばかりに流れ、息があがる。この状況から逃げ出したいと心は思っても、体はむしろここに居たいと願うばかり。

「それなら... 私と一緒に休みましょうか♪」

と、もう一方の手を胸の方に当てて、上目遣いに加え、口をすぼめる。見事な包容力を見せるライラ...

(あつ、これは墮ちる…)

もはやライラ以外の事を思考することも許されない程の水精の洗脳により、完全にライラ一色に染まりそうになるシュウ。

ライラを独り占めしたい。自分のものにしたい。

もし、シュウが思考できていたのなら、こう思うだろう。

(他の男もこうなったに違いない)

と、だが、そんな些細なことはもう頭に無く、もはや獣のようにライラを貪るために、力強く抱き締め捕獲しようと手を伸ばそうとした…

が、

それは叶わない、いや、叶えてはいけなと判断したのだ。

なぜか？それは…

「……………」

鬼気迫る：． いや、文字通りの“鬼気”を放っている存在が、隣に居たからである。
そのあまりの気配にシユウは当然として、アミラを含む海棲種、果てはライラまでも
がその元凶に注意を向けさせられた。

『視線を向け、刮目せよ、警戒せよ… さもなくば、己にあるのは“死”のみである』

と、本能がそう告げなければならぬ程の怒気。唾然とする一同の中でただ一人、シユウはそれに身覚えがあった。ただ、以前よりも遥かに強力、かつ冷酷になっていることが、粟立つ肌が幻視できる程であることから容易に理解できた。

「お、お嬢さ… ま？」

体はまるで氷付けにされたように怯^{ひる}んで動かない。辛うじて視線だけステフの方へと向ける… と、

ガシツ!!

「!!？」

刹那、ライラへと向けていた腕が、いや、ライラに向かって端から見れば襲いかかるうとして前屈みになっていた姿勢が紳士らしい直立姿勢になり、右腕には、まるで恋人同士であることを主張するかのよう、ステフが腕を絡めて隣に立っていた… ライラ

を滅茶苦茶睨みながら。

そしてステフが右腕を上げ、ライラを指差すような仕草をとる。

「へっ!? な、何をするつもり!？」

明らかに動揺し、余裕の全く無い表情で警戒するライラ。だが、その言葉にステフは耳を貸さずに素早く視界に映るUIのコマンドを打っていき、

「それでは、少々私達二人は話し合わねばならないことが出来ましたので、ここで早退させてもらいます。アミラ先生、何卒ご配慮の方をよろしくお願いします。」

と、“社交辞令の笑顔”をベツタリ貼り付けた状態で謝罪を述べた後、ステフとシユウは教室から姿を消したのであった…。

???????

私は、何でも手に入れられる。

男はもちろん、女だって惚れさせて手にできた。

海の中に在るものならば、願うだけで手に入る。手に自然と収まるのだ。

想えば想ったものが自ら寄ってくる。どんなに遠い場所にあっても、どんなに困難な道だとしても、私の為に自分の身を捧げに来る。

母なる海を掌握する。それが私。

……
だけど、今回は違った。

いつものように、いつものように……
ただ人類種イマニテイの男を惚れさせ、特に欲しくもなかった愛を、代わり映えの無い愛を、私の水精の強さを証明するだけの愛を貰おうとしたのに……

奪われた

こんなことは初めて。私が愛の摂取をすることは、誰もが受け入れ、了承するのが海

の常だというのに、それを邪魔された。しかも、隣に居た男の格好した女の人類種イマニテイに！
「：： 私が手に入れられない愛なんて無いってことを、証明してあげるわ!!」

それは眠りについた理由とは矛盾しているようだけど、それよりも私のプライドが許さなかった。

未知の愛を欲しがるより、既知の愛全てを欲しがったのだ。

「さあ、あの男を女から引き剥がして、徹底的に惚れさせて、私の邪魔をしたことをあの女に後悔させてあげるんだからっ!!」

これより、ライラの行進攻略が始まる…

???????

一方その頃…

「なあ、何で学園のシチュになってんだろな？」

「：：： ーい が 決 め た こ と、 で し ゃ …… !?」

「マスターの意思では無かったのでごぎいますか!？」

「空が決めたことじゃなかったのか、です!？」

「あんたが決めたことやあらへんのん!？」

「空様が決めたことですよ!？」

空と白の寮の宿舎で、皆を集めてゲームしている最中に、空がつい溢した台詞に、全員突っ込まずにはいられなかった。

放課後スベクタクル

ご無沙汰してます。シユウです。

いやー、前回は海棲種達との交流授業^{セイレイン}？を受けてみて、互いの性に対する考えの違いを嫌と言うほど思い知りましたが、まあ、異文化交流という感じで楽しかったですねー
（小並み感）。

とはいええ、アミラの突貫授業がアレだったというだけで、特に問題なく終わってよかったです。さて、後は学園生活を過ごしていくだけなんだが、確か…。いのが土下座をやめてプラムのチート魔法を使うのって40日後位だったよな？

…え？この生活をあと40日も過ごすの!?!?! まあ、あのアミラ先生（笑）の授業の続きが、どう進展していくのかは気にならなくもないし、ステフと過ごせなかった学園生活を過ごせると思うと、貴重な体験のような気がするが…。空達は学園イベントをスキップしまくったから40日はあつという間に過ぎたんだが、40日かあ…。まあ、これを機会に色々やるのもアリか？この学園生活も原作では、いの以外は特に重要性無いし。

そうと決まったら、まず目の前の課題に取りかかるとしましうか!!

「〜♪〜♪」

… 怖いなあ。課題が殺気放ってるよお…

ハイ。只今、ステフに腕を絡め取られて、商店街と見られる道を徘徊しております。

あ、腕を『絡め取られてる』っていうのはかなり優しく表現していて、実際のところ『縛り上げられてる』から、腕が鬱血して感覚がないんですよねえ。胸が当てられてるけど全く何も感じないという、端から見ればリア充爆発案件なんだけど本人は地獄を味わってる感じか。

… どっちも救われんな。

と、まずは右腕解放作戦を執行しよう。大抵、何らかの要因でステフが鬼神化した場合は、ちよつと過激めに好意を伝えたら何とかなるけど、まずは普通に持ちかけてみるか。

「あの〜、お嬢様？」

「はい、なんですよ♪」

声はいつもより明るく高めだが、目はノゲノラ特有の流れるハイライトさんがどっかへ流れて遭難しちゃってます。はよ戻ってこい。

「申し訳無いのですが、腕の拘束を解い…。」

「却下ですわ♪」

「なぜえ!？」

あつさり却下されてしまった。というか若干拘束力が増したような？とりあえず對話は可能っぽいので続けましょう。

「理由をお聞かせ願えますか？」

「もし今腕を離したら、ライラさんの方へ行くかもしれないじゃないですの。そんなことにならないよう捕獲しているだけですわ♪」

『浮気、ダメ。絶対。(物理)』スタイルかあ。でも、それなら話は早いな。というわけ
でシユウ、こましモード発動ツ!!

「そんなことはありません。私は常にお嬢様の側にいますから。」

「…。」

決まり手、『従者の告白』。いや、元よりそのつもりではあったんだけど、口に普段出さないからな!こつちが恥ずかしきで狂いそうだけでも、これは効果抜群のはず…。

「いえ、そうゆうのを心配してるんじゃないやありませんわ?」

「へ?」

あ、あれ?違った?

「側にいるのは当然として、もしライラさんがシユウを取って食うような事があつたら、私はライラさんを???するかもしれないし、???にして???するかもしれないから、そんなことにならないように離さないだけですわ♪」
 ???

「リアルタイム検閲されてる!?!」

内容が酷過ぎたのか、ゲームの方から規制が入るレベルの発言…ステフは一体何を言っただんだ!

…と、ともかく理由はわかったが、ライラに食われる未来を回避する代わりに右腕が犠牲になる未来を回避できていない。ならば次なる手を…

「… ねえねえ、あの二人何であんなにくつついてるの?」

「さあ、何でだろ?」

「あれじゃない? 男って男同士で恋するものなのかもよ?」

「そっかー! 私達も女同士で恋愛するから、そういうのが常識なのかもね!」

なにい!?! 海棲種は百合属性持ちだとお!?!

確かに女性しかない海棲種なら、恋愛対称は同属に限って言えば女性に絞られるか
 もんだけど、それ大戦以後からできた考えなのかどうなのか、私、気になります!

じゃなくて、ステフの事に気を取られて忘れてたが、海棲種の皆様が私達の後をつけ

てきてます。なんでやねん。

横目で見た感じ、あの授業の時に一緒にいた海棲種セイレーンの面々が半数以上を占めてるから、おそらくアミラが授業のやる気を無くしてほっぽりだしたせいで、生徒が表に出て後をつけに来たということか…

となればあまり時間は残されていない。斯かくなる上はっ!!

「お嬢様っ!!失礼致します!!」

「ふえ?」

見よ、これぞ我が究極奥義ツ!!

ナデナデナデナデナデナデ…

究極奥義、撫でるツ!!これによりステフは嬉しさと恥ずかしさの極致で逆に正気を取り戻すに違いな…:

「〜♪」ギユウツ!!

ビキユツ!!

「いぎやあああああああ?!!」

今変な音したっ!!俺の右腕から鳴つちやいけない音がしたあっ!!一瞬感覚が戻ったと思つたら痛覚だけ戻ってきやがったあっ!!何だこの締め上げ技術!!ステフの両腕はアナコンダでも憑依してんのか!?

「あー!!撫でてるわ!!やっぱりそうよ!人類種イマニテイは同性同士で恋愛をするんだわ!!」

「へえ〜♪ちよつとゾクゾクしてきちやつた♪混ぜてもらおうかしら?」

「いいわね!異性との恋愛もコーフンするつてことをわからせてあげましょう!」

(しなくていいですう!!?)

アカン！状況が悪化したただけだわ！完全にホモ扱いされてるう！？いやまあ端から見れば仲良しこよしだろうけども、まさかステフが『じゃれつく』を使って攻撃（？）してくるとは想定外だよ！完全に発狂してるじゃないですかーやだあー！！

… つと、このままでは盟約の効かない夢の中だと、海棲種セイレイシに取って喰われかねないので、とりあえずステフが男性であるという誤解を晴らして、その未来を回避せねばならないが、どうしたものか…

「やつほく♪そこのイケてるお二人サン♪今日はなんと『本日開店セール』!!で、この洋服が99%引きで販売だよくぜひぜひ見ていつてネ♪ウフフ♪」

「へ？99%オフって幾らなんでも…って、アミラさん!？」

「あつ！シユウくん… だっけ？またまた登場のアミラちゃんだよくウフフ♪って、ナニナニ？『でーと』って奴なの？そうなの!？見せつけちゃってくれるねくウフフ♪」

「いや、正確には違うんですが… 今度は呉服屋やってるんですね…」

「そうなのく♪なんか面白い下着がいっぱいあったからつい… ね？キャハツ☆」

「いや、それブラウスって言って上着に値する物なんですが…」

「そーなの？でも可愛いなら上とか下とかどーでもイイんだよ！気にしない気にしない♪」

そういつてくるくと回ってみせるアミラ。持ち前の美貌と服のセンスが合わさって、色気が適度に抑えられてキュートさが全面に出ている。

「まあ、そうですね…。いっつ!？」

その姿に目を奪われていると、右腕にかかる負荷が強くなつて痛みが走る。

「どーしたの?」

「あつ、いえいえなんでも…。あつ!ちよつと服を見てもいいですか?」

「もっちゃん☆さあさ、どおーぞおー!」

???????

呉服屋『アミラこれくしよん☆』。天井は光る海月クラゲが漂い、貝殻や珊瑚で装飾されているところ以外は、一般の呉服屋とは特に変わつた様子はない。品揃えも元の世界の服が中心で、強いて特徴を挙げるなら、女性用の服がほぼ9割を占め、アクセサリーも豊富な点だろうか。

「あつ!そおーそおー!見て回るのもいいけど、ゆーあい?つてもものにかたろぐ…。と

かいうものがあるから使ってネって吸血種ダンピールの店員さんが教えてくれたよ♪」

「店長なのに店員に教えてもらっているのか…」

その言葉に同意を示すようにうなだれる女性の吸血種ダンピールが見えた。

「それじゃあ ユーザー・インターフェース U I を起動してつと…」

と、視界に映るアイコンを操作してカタログから目的の服を探す。そう、呉服屋に入ったのは今の状況を打破する為の作戦を思い付いたからであって、決して値段99%引きに惹かれたわけではない。

「お、あつたあつた。今の手持ち金で買えるな。即購入つと…」

会計ボタンを押すと、何やら奥でガサガサと音がして、吸血種ダンピールの店員が袋を持つてく

る。

「ご購入ありがとうございます… またのご利用をお待ちしますねえ…」

「あ、うん。ありがとうございます…」

普通だったら注意されてもおかしくない程の悲壮感漂う態度で品を差し出す女性の吸血種ダンピールに、若干の同情を覚えつつ品を受けとる。

「なにになに？何買ったの？」

「あー、これはですね… つと」

興味津々のアミラを尻目に、再び ユーザー・インターフェース U I を操作してコマンド：『プレゼント』を

選択。対象はもちろん…

「お嬢様。こちらを受け取ってもらえませんか？」

「へ？…… あつ、これって…… でも……」

「ライラさんは今いらつしやいませんから、攻略の範囲外。ですので大丈夫かと。」

「そうです？な、なら……」

と、右腕の拘束を解いて更衣室へと入っていくステフ。解放された右腕に血流が恐ろしい勢いで循環し始めるのを感じて胸をなでおろす。

「へえー♪何か服をプレゼントしたの？アミラ気になるう♪」

「何って…… 元々の服を渡しただけですよ。」

「？」

困惑するアミラと一緒に、少しの間待っていると…

「に、似合ってますの？シユウ…」

不安と期待が入り混じった様子で更衣室から顔を出したのは、女性服ならぬ女制服を身に纏ったステフだった。

「ええ、とてもお似合いですよ。」

これには思わず頬を緩めずにはいられない。いや〜眼福眼福。

「そ、そうです… の…… いえ、皆がこれを着てて羨ましくは思っていたんですけど、

実際に着てみると布の面積がかなり…。そのお：：／／／

と、前々から思ってた憧れの姿になったものの、流石のステフでもへそが丸見え&ミニスカの露出度高め制服はどこか抵抗心があるようで、顔を赤くするばかり。

ただ、ここで見た目やスタイルの事について誉め言葉を安易に言葉に出すと、アナコンダ通り越してウロボロス級の意味不明で理不尽な事態に発展しかねないので、ここは口に出さないでおく。いや、個人的には抜群なんだけどね？うん。

つと、言っておくがこれは私の趣味ではないぞ！決して原作でステフの女制服姿を拝めなかったからこれを着てもらったわけではない!!きつきから店のガラスに貼りつけてこちらを覗いている海棲種セイレーンに、ステフが女性だとわからせるためにやったんだ!!その証拠にほら、海棲種セイレーンの皆がざわめいているはずだ!!ステフが女性だったと…ッ!!

「わあー!ステフ様は女装しても美しいなんて!」

ん?!

「流石はステフ様あ♥?性別を越える美しさとはこの事なのね!」

あつるえく?おつかしいなあ?余計に勘違いが深まつてるぞお?

「もしかしたら今度はシユウ様が女装を…っ!?!」

「何ですって!?!私、これ以上二人の美しさを見せつけられたら失神しちゃうわ!」

何なの？こいつらバカなの？あ、馬鹿だったわ♪じゃなくてえ！何で気づかないんだよ！ステフを後ろから見たってわかるスベスベお肌の胸板についた豊満なソレを見ても男だっと思えるのかよ！どーやったらコイツらステフが女だっけ気づくの？生まれたまんまの姿にでもなれってかあ！？

と、頬をひくつかせながら額にうつすら青筋を立てていると、どうやら海棲種セイレーンの中では頭がキレル方のアミラが表情を察して奥へ進んでいき、

「シユウくんが困りのようだからアミラちゃんがお手伝いしてあげるよ〜キャハッ☆」

と、シユウに見せたのは…

「な、なんですかこれえ!？」

「商品名は『あぶないみずぎ』だよ〜♪これで皆メロメロだね♪」

ドラ○エかつ!?!というか…

「いやいやいや、危なすぎるにも程があるわ!？布面積がギリギリ過ぎるよ!？」

もはや紐レベルのマイクロビキニを持つてきやがったアミラ。なんか Uユーザー・インターフェイス Iインターフェイスに

は『防御+1 魅力+76』とかふざけたステータス載ってるし!？魅力を上げるというよりはさらけ出す感じなんだが!？何これ、学園ものに見立てた戦闘RPGなのか!？今まで遭遇してなかったのはステフの殺気のお陰だったのか!？

そんなことを思っていると、ステフがアミラの持つてきたビキニを見て、

「わ、わわわ、わあっ!? こここ、こんなの裸同然じゃないですの!? 着られるわけないですわあっ!?」

顔を熟れたトマト並みに真っ赤にして抗議してきた。

「えー? でもシユウくんはステフちゃんに着て欲しそうだけど?」

「ふえあっ!?」

「言つてませんししてま... (一瞬の熟考)... してませえん!! というか目的が公私混同しとるわ!! アミラさんわかつててやつてるよね!」

「えー? アミラわかんない♪ キヤハツ☆」

このクソアマーマイドオ...!!

「.....へ、」

「ん? お嬢様今何と...」

「変態ですわあ!! シユウのド変態いいいい!! もうシユウなんて知らないですわああああん!!」 ダカダカダカ!!

「ええええええええええ!! ちよつ、これは誤解ですお嬢様あああつてか、はやああいつ!?」

まるで光のように、泣きわめきながら地をおそろしい速さで駆けて行くステフに置い

てけぼりにされたシユウ。

「あの、とんでもない勘違いをさせちゃったんですけど、どうしてくれるんですかアミラさん？」

「アミラのせいじゃないよ？それとシユウくん…逃げないの？」

「へ？」

ガシッ！！

予想外の忠告に、気の抜けた返事を返すと同時、体の自由が一瞬にして掌握された。

「あちゃー、遅かったかあ♪でもでも、折角だから楽しんでっつてねー。ウフフ♪」

「は!?え!?何が起きて…っ!?」

気がついたら外にいたはずの海棲種セイレーンたちが体にまとわりついていて。何故か目をハートマークにして…っつて、ええっ!?

「あ、R-18的な展開はNGだぞっ!?いろんな意味でえっ!?」

と、いろんな方面へ予防線を張りつつ、身をよじって海棲種セイレーンの包囲網から抜けようとする。

「ウフフ☆そんなことは無いから安心して大丈夫だよ♪」

「あ、そうなの?」

そのアミラの言葉に、若干の抵抗を緩めたシユウ。

「……今思えば、この時抵抗を続けていればこの先の運命を変えられたのかもしれないが、そんなこと知らないのの後悔するしかない。」

「ねえシユウくん。海棲種セイレイシにとつて男性は性行為で取つて喰うだけ存在ではあるんだけど、男性が一人の状態だとどうしても一人しか楽しめないワケ♪で、ちよーつとだけ知識をもらつたこの夢の世界の私達が、皆で楽しむにはどうすると思う?」

え? 誰かが先手必勝で『天に召せつ!!』つてやると思つたけど?

「それはね……」

「男を女装させて百合百合パーティーしましょう!!」

「海棲種セイレイシの同種恋愛の形に無理矢理引きずり込んでくスタイルかよお!!? 何でそうなる……つて、マスカラ!? ファンデーションとかやめつ、あつちよつ!!? 服脱がすなあつ!!? つて、はあつ!!? ガーターとか、ちよつ、マジで勘弁………のわーーーーーつ!!?」

???????

一方、空達の様子はというと、

「よつしやあ!!また『俺ら』の勝ちいつ!!」

「卑怯だぞ!いづなばっかり狙いやがって、ですつ!!」

「フハハハ!!なんとでも言うがいい!!勝った者が強者ア!!卑怯の限りを尽くして行くのが俺たちなのだよ!!」

と、『くっはく』vs東部連コンビでチーム対戦の結果に不満を呈するいづなと、それを見てなお高笑いする空。

「しつかし、ここまで徹底するこたああらへんやろ?もう少し手加減して欲しいわあ。」

ゲーム操作機をつまんでプラプラさせながら、いづなの訴えに便乗する巫女。

「いや、巫女さん単独にしないとこつち負ける確率が急上昇待った無しなんだが?」

「それはいづなが弱えってことか、です!?!」

「いや、巫女さんには劣るけどコンビプレーの上手さが際だつてつかんな...やむ無くだよやむ無く。」

「そうか、次は巫女様より強く動いてやる、です!」

「んじゃ、もうひと勝負と行きますかあッ!!」

と、白はそんな兄の様子をいつものことだと気にも止めずに再戦のボタンをタッチしようとしたが、

コンコン

「おや?こんな夕時にどなたでございましょうか?」

「どうか本当に学園に行かなかったですねえ…。冗談かと思ってましたよはい…。」
落胆するプラムを余所に、ジブリーが玄関の扉を開けると、

「ああ、ジブリーか…。空様は?」

「え?ああ、あなたでプフウツ!!」

「あ?どしたのジブリー…。ブハッww」

「…。え?シユウ、どうかした…。ちよっwwそれは、卑怯…。ww」プククツ

「アハハ!!おもしろえ格好してやがる、です!!」

「んあ?なんやおもしろいもんでも…。クカカツwwあ、あんた、あてを笑い死にさせるつもりかえ?ww」

「ええ?何が…。プフウツ!!ちよっ、シユウさん、それはないですよww」

「笑われるのは承知してましたが、そこまで笑わなくともよいでしょおっ!!」

と、金髪両サイドドリルロールでピンクのリボンをつけ、マスカラやファンデーションが雑に塗られて片目につけまつげと黒目増量コンタクト、口紅はあちこちに塗られて顔面福笑い状態。それに加えてピンクのワンピース姿という何ともヘンテコリンな女装のシユウが叫ぶ。が、空達は腹を抱えるのに必死なように聞く耳を持たない。

なんでこんな状態なのかというと、好き放題に海棲種セイレイシに衣装やらなんやらをいじり回された結果、持ち物欄から学ランを探すのがとてつもなく難しくなってしまう、諦めてそのままの姿で報告に参った次第なのである。両手に持ち物欄にすら入らなかった衣装袋を大量に引っ提げて。

「シユウ、ちよ、ちよつとそのまま、ステイ!写真に撮って爆笑フォルダに永久保存するからw」パシヤ!!

「やめてください…。つてもう撮っておられるし…。はあ…。」

ガツクリと肩を落とすシユウ。その前で、一際お腹を抱えて震えている存在がいた。「ねえ、ジブリール。さすがに笑いきじやない?」

「いえ、ですが、あまりにも滑稽で…。フフフツ♪」

空達が笑い終えて息を整えている間も、ツボに入ってしまったのか苦しそうに笑うジブリール。そんな彼女を見てシユウはちよつとした思イダいつきをスラ実行する。

「：： あー、そうだ、ジブリールに良いものを上げよう。」

と言つて、持っていた紙袋の一つをジブリールに差し出す。

「クフフツ：： ま、まあ、今日は気分がよいので、猿からの貢ぎ物を寛大な心で受け取つて差し上げましょう♪」

と、笑い涙を指で拭いながら、笑いすぎて歪んだ笑顔のまま受けとるジブリール。

(え、涙：：？天翼種^{フリュウゲル}に涙を流す機構つて確か：：？)

ジブリールの意外な表情に戸惑いつつ、様子を伺うシユウ。

「ほう？これは衣装データ：：でしようか？」

「そうだな。折角だし着てみ？」

「ふむ。いいでしょう。」

と、プレゼントされた衣装を自身の衣装データに反映させ、現れたジブリールの姿

は：：

「：：？なんででしょう？吸血種^{ダンプビル}の衣装でしょうか？」

そこには角と尻尾を生やし、持ち前の羽と光輪を漆黒に染めたジブリールがいた。

「おお、予想したよりも似合ったな：：」

「ふむ。まあ、猿の賛辞にしてはまだまだですが、受け取っておきましょうか♪」

「うん。似合ってる似合ってる。可愛いなあジブリールは。ワハハ。」

と、どこかノリノリのジブリールに軽い誉め言葉を添えるシユウ。そのシユウのヘラツとした態度から何か気づいた空が口を出す。

「なあ、ジブリール。」

「はい♪なんでしょうかマスター？」

「それ… 悪魔の衣装だぞ？」

シユガアアアン!!

空の方からシユウの方へと向き直ると同時、振り向く勢いに任せてコスプレ道具のオモチャ悪魔モリをシユウの金髪ロールごと壁に食い込ませる。あまりの衝撃にシユウのつけまつげが部屋のどこかへ飛んでいった。

「これは一体どういうことぞ(ぎざいましよう♪)」

声はとてつもないほどいつも通りのだが、目がブラックホール並みに光を吸い込みまくってハイライトさん(本日二度目の出演)が殉職なされてる。

「あー、それは悪魔的に似合ってるって意味で、決してジブリールの事が昔から悪魔に見えたから渡したって訳じゃないぞ？」

「嘘だな。」

「嘘、です。」

「嘘やね。」

シユウの言い分に速攻で反論する空達。

「あつあー、空様。今日の学園での生活レポートを書きましたので、良かったら読んでください。プレゼントボックスに送付しておきますので……ではっ!!」

と、シユウはプレゼントコマンドを押し、瞬時に『帰宅』コマンドを打ってその場から瞬間回避した。ジブリールが壁に突き刺していたモリには金髪のカツラだけが残った。

「あつ!逃げるとは……いい度胸ですねぇ♪」

「あー、ジブリール、追っても無駄だと思っぞ?」

「へ?あつ、あのアホ猿の部屋に繋がらない!?なぜっ!?!」

空間に穴を開けてシユウを追跡しようとするジブリールに、空が説明する。

「このゲーム、よっぽどのイベントがない限り、個室は本人の許可がないと侵入不可にしてんだよ。盟約も夢の中じゃ効果無いっぽいし?一応のためな。」

「なっ!?!そ、そんなあ〜……」

ガツクリと崩れ落ちる悪魔っ娘姿のジブリールを漏れなく写真におさめつつ、テレビ画面の方に向き直って、

「さあ、まだまだゲームはこれからだっ!!」

そう叫んで、仕切り直しの再戦ボタンをタッチした。

□□□

空達がゲームに夢中になっている間、ジブリールは悪魔っ娘の衣装をいじりながら物思いにふけていた。

そんなジブリールの様子を横目で見ていた白は気づく。時折ジブリールの表情が柔らかくなっていることに。

それは、普段ジブリールが空に見せるような、神のような存在へ向ける恍惚とした表情、敬愛する表情ではない。それはまさしく…

「…よかった、ね♪」

「…ん?どうしたんだ、白?」

「… ううん。何も♪」

… それはまさしく、しろがいに向ける時の… 一緒の表情…。

???????

「あつたどお〜!!」

ようやく学ラン見つけたあ!! あーもう、私室のクローゼットが初日から満タンになるなんて誰が予想できようか? 持ち物多すぎでずっと整理しながら学ラン探してたならもう深夜だよ畜生!! まあ、整理し始めると夢中になるのはよくあることなんだが、まだ上着くらいしか整理できてないという現実、厳しいなあ… というか下着のプレゼント率おかしくない? 海棲種セイレーンはいくら下着中心の生活だからって今の持ち物の七割が下着ってどういふことなのさ…

と、整理で身も心も疲れきってしまったので、珊瑚の柱で支えられたベッドに飛び込むようにして入り込む。うむ。感触は良い方だな。

「… 初日からこんな感じかあ…。」

振り返ってみれば、かなりの出来事が初日から起こっていたことが、過去会話ログを見ていて気づいた。

「まあでも、大抵は初日がイベント増し増しで、後は小さなイベントがーつてのがゲームの常ではあるのかな？」

初日の登校時に『いけない！遅刻しちゃーう！』ってパンを啜えてくという、特大のテンプレイベントが起きなければ物語が始まらないように、そこを逃せば何も起きないように……物語の最初なんてそんなもんだと自分に言い聞かせつつ、

「ま、流石に今日はもう何も起きないでしょ。」

そういつて ユーザー・インターフェース U I 画面を基礎状態に戻す。すると、とあるアイコンに『↑』マークが表示されていた。

「ん？なんだこのアイコン…… あっ……」

そのアイコンはハートマークにゲージが溜まっていく様子を表したものだだった。

「これっていわゆる『好感度』がわかるもの…… だよなあ……」

ひとまず歯車の形をした『設定』のアイコンへ指を滑らせて確認すると、それは『相手からの好感度』を主要人物毎に表示するアイコンであった。まあ、よくある機能っちゃ機能だが……

「これを見るのはなんか…… うん。とある物語じゃあ好感度測定器なんてもん作って組

織内の人間関係がとんでもないことになったって話もあるし……見ないでおくか。」

と、好感度は気になりはするが、その閲覧したときのデメリットを考慮し、ひとまず先送りにして、目蓋を閉じて明日への逃避行を行おうとした……。が、

バァン!!

「ふあっ?!?!なんだなんだ?!」

突如、シユウの部屋の玄関の扉が開け放たれた。記憶には、しつかり施錠したと覚えてるのに!?

空いた扉の方から風が吹き荒れる……。とは違う、激しい水の流れがシユウを襲った。

そしてその先にいたのは、全身に激流をまとわせ、『水精』という海の中では魔法の域に届きうる力、現に絶対不可侵であったはずの自室すら、ゲームシステムごと扉を吹き飛ばし、強引に探索範囲外へ乗り込む。まさしくチートを使って進行してきたのは……

「こんばんは。突然で悪いけど、あなたをいただきに来たわ。」

海棲種女王、セイレーンライラ・ローレライであった。

恋は心を惑わせて

《ステフ side》

「はあ、またやってしまいましたわ……。」

昨日のシユウに対する暴走を思い出して溜め息が出る。もうこれで何度目だろうか？

「今日はどんな顔でシユウに会ったらいいのか見当もつきませんわ……。いつそのこと今日はシユウと会わなければ……。」

『いいのに。』と、言い切れずに口ごもってしまう。かける言葉や表情の見当はつかなくとも、『会いたい』と思ってしまう。現に今、学園に向かって歩を進めている。シユウに会わせる顔がないと言うのなら、学園を休んで自室に引きこもっていれば良いのだ。でも、そうしなかつたことは……。

「あーっつ、もうっ!!」

予想した答えを掻き消すように、顔を大きく左右に振る。

「と、とりあえず、ライラさん攻略の為に学園に行くんですわ、そうですわ!!」

と、建前の目的で学園に行くことを自分に言い聞かせ、納得させる。

「：：： こういう所で素直になれないから暴走するんじゃないのです。：：：」

さも平然と建前を立てたことに呆れながら、学園に向かっていると、見えてきたのは：：：

「へっ!?いい、いのさん!?まだ土下座を!?!」

昨日ライラさんに過激なセクハラをしたかと思つたら性交渉を申し込む態度を土下座で示し続けているいのさんだった。

「おや?ステファニー殿でしたか。おはようございます。」

「え、ええ。おはようございます?」

土下座の姿勢をミミリも変えないまま返事を返してくる。というか昨日そ騒動と全く同じ場所にいることに不思議に思つて聞いてみる。

「えつと：：： その：：： まさかとは思いますが、あのときからずっとその状態なんですか?」

「愚問ですな。男たるもの、一度懇願した身ならば、相手が応えてくれるまで何があるかと待ちますぞ。」

「アホじゃないのですの!?!」

瞬時に突つ込みを入れてしまう。喉から出かかるところですらなかつた。

「なんですと!?!この初瀬いのが経験に経験を重ねて導きだした最上の申し出の方法がア

ホの所業ですと!？」

「少なくとも私はひきますわよ!？」

「んなあつ!？そ、そんなはずはありません!!す、ステファニー殿が私を意識していないからそう思われるのです!!意識していたら必ずや私の気持ちに答えたくなるはずです!!」

「例えそうであつてもひききる自信がありますわ!？」

ちなみに、これだけの勢いで会話しているのに、いの方は微動だにしていない。

「そ、そんな… た、例えば、仮に私ではなく、シユウ殿がステファニー殿にこのようなことをしていたらどうでしょうか?」

「ふえつ!？し、シユウがっ!？」

『お嬢様っ!!どうか、どうかこの卑しき執事と一夜限りの情交を受け入れてくださいませんか…っ!!』

あ、あわわわわわわわわ!!?

「そそそ、そんな… まだお付き合いもしてないのにそんなこと…」

「お付き合い? そんなもの不要でございますぞ! 体の相性が良くなければ今後もし婚約なされたとしても上手くはいきませぬ!」

「そ、そんなんですの?」

「そうでございます。さすれば今!!私と情交を…っ!!」

「そ、そこまで言うのなら…っ。って、何でいのさんと情を交わすみたいなの流れになつてゐるんですの!!」

「むう、さすがに騙しきれませんか。ところで気になつていたので、今、ステファアの近くにシユウ殿はいらつしやらないのですか?少々無礼な態度でステファアニー殿に対応しても声が聞き取れなかつたので。」

「えっ!?そ、そういうええばまだシユウは来ていませんわ。」

「そうですか…。いや、常日頃シユウ殿はステファアニー殿と共にいらしたので、ステファアニー殿一人とは珍しいと思ひましてな。」

「そう言われると…。そうですね…。」

思い返してみれば、シユウとはいつも一緒だった気がする。私が事務作業をするときも、シユウは私の身の回りのことに気を配っていたり、逆にシユウが仕事をしているときは私から話しかけに行つたりと、空たちがこの世界にくるまではかなりの頻度で会つていたということを自覚する。昨日だつて、逃げ出したりしなかつたら自室に帰るまで一緒だつたらう。

「まあ、シユウ殿も男ですから、セイレーン海棲種のどなたかに惚れて今頃…。」

「そ、そんなはず… あ、ありませんわ!!」

「はっはっは!少々からかいすぎたようですな。」

年の功と言うべきか、いの方は余裕を持って話している。私なんて、少しからかわれたら焦って言葉に詰まるというのに。

「まあ、私はこの学園への通り道にこうして鎮座することで、ライラ殿にほぼ毎日思いを伝える所存でございますれば、必ずや情交を果たして見せませうぞ。」

「そ、そうなんですの… 頑張つて下さいな…。」

ライラさんにとつてこれほどは迷惑な公開セクハラは他に無いだろうと思いつつ、いの方のものごとを去ろうとしたとき、

「む!?これはライラ殿の匂いっ!!どうか、どうかこの卑しき獣と情交を…っ!!」

遂にスメハラまで手を伸ばしていることに、いつそ牢屋に勾留した方が世のためだと思いつつ、ライラさんの方へ視線を向ける。

「えっ… どうして… ですか?」

その視線の先にあつた光景を、私は信じたくなかつた。なぜなら…

「ふふっ♪シユウは料理が得意なの?」

「ええ。このシユウ、料理の腕には自信がありますよ。今度ライラに味わわせてあげま

しよう。」

「へえ… なら舌を肥やして待っているわね♪」

「へっ!? で、できれば肥やさずに待っていただけと助かるかなあ… なんて…。」

「あら? さつきまで胸張るほど自信満々だったのに、どうしてそこまで動揺するのかしら? もしかして、本当は口だけの料理人? 上手いのは口じゃなくて腕じゃないとダメでしょう?」

「ぐっ、そこまで言うなら、ライラの肥えた舌すら唸らせる絶品を振る舞ってやるから、覚悟しておくことだな!」

「ふふっ♪ それは楽しみね♪」

「あー、言ってしまった…。」

「何? 後悔してるの?」

「いや、男に二言はゴニョニョニョ…。」

「あははっ♪」

楽しそうに会話を交わしながら登校してくる、ライラさんと… シュウの姿があったから。

「な、何でシュウが… ライラさんと一緒にいるんですの…?」

「なつ、今ライラ殿の隣にはシユウ殿がいらつしやるのは本当なのですか!」

いさんの聴力と嗅覚をもってすれば、その確認は容易だろう。だが、それをもってしても信じられない気持ちは私にも理解できる。

あれだろうか、ライラさん攻略の為に、まずは自分から攻略されに行つて、新密度を高めようという、まさに逆手の手段を考じたのだろうか？

……いや、そんなことはどうでもいい。この際、この短い期間でここまで親密な仲間になった方法を知る気は無い。それよりも私の心を支配した感情は……。

(嫉妬……ですわね……)

自分がかつてから望んでいたシユウとの関係を、今ライラさんが目の前で実現している……。名前呼び会うなんて、どんな嬉しいだろうか、そう思いながら奥歯を噛み締める。

(でも……私だつて……っ!!)

胸の内のモヤモヤを掻き消ささんばかりにシユウの方へ駆け出す。

「シユウ! おはようございませわ!」

「え? あつ! お嬢様! おはようございませす。」

「あら、おはよう。あなたは確か……ステファニーだったかしら? 昨日は急用があつたみたいだけど、大丈夫だった?」

「えっ!? え、ええ、大丈夫でしたわ。」

「そう。まあ、あの後すぐに授業はおろか学園が校長の意向で休みになったから、授業の進行具合については心配しないで大丈夫よ。」

「そうなんですの!?!」

アミラさんがあの呉服屋にいたから不思議に思ってたけど、そういうことだったんですのね…。

「それにしても…あの時シユウが突然いなくなつて寂しかったわ…。」

「あー、ごめんなライラ。お嬢様の心配性が重くなると聞く耳を持たなくなるからさ、勘弁してくれ。」

ん?!

「まあまあ、シユウが無事でよかつた♪」

「俺もこうしてライラ登校できて嬉しいよ。」

んん?

「やあん♪シユウつたらあ♪」

「かわいいなあライラは♪」

な、なんなんですか? こののろけ具合…? というか、私完全に蚊帳の外じゃありませんの!?

「ちよ、ちよつと・・・」

「あ、そうだ。今日日直任されてるから職員室に行かないと。急ぎましょう！」

「そうなのか。それじゃ行くとするか・・・」

「それではごきげんよう♪ステファニーさん♪」

「それでは失礼いたしますね。お嬢様。」

「あつ・・・ちよつ・・・つ!!」

別れの挨拶を残し、玄関口まで駆けていく二人を呼び止めようとした・・・が・・・

(なんで・・・手まで繋いで・・・つ!!)

まるで満開に咲く花のように笑い合う二人を見て、制止の手を下げてしまう。

「どうして・・・」

どうしてあの二人は、いつの間にあそこまで仲良くなれたんだろう。どちらかが告白でもしたのだろうか。一目惚れとか?そんな感じに。シユウが告白した側ならライラさんの能力で強制的に可能でしょうけど、それにしてもライラさんのあの満面の笑みは・・・。

「考えるだけ無駄なのかもしれませんわね・・・」

そう、いずれにしても勇気を出し遅れた、あんな関係になることを望んでいたのに、臆病になった私が悪いんだから・・・後悔するしか・・・無いんですのね。もはや、『お嬢

様』と『執事』の関係のみでしか繋がることのできない現状を、直視するのは今の私には難しいですわね……。

「くう……っ!!」

ふと気づけば、頬に涙が伝つ……。

「なんたることだ……私の土下座を差し置いて、シユウ殿と交際を……!!? あり得ません、あり得ませんぞお!!? この初瀬いの、例え何があろうとも土下座を貫き、何年……いや、何千年も待ち続け、ライラ殿を貫き、私こそが相応しい男だと証明して見せましようぞ!!」

「……いや、その証明が果たされることは、未来永劫ないと思いますわ……。」

土下座の姿勢で咆哮するいのさんの姿に、私はそう答える事しかできなかつた……。

???????

《白side》

真つ暗な部屋の中、静かに寝息が木霊するこの空間。いつものように、にいの腕の中でくるまって眠っていると、カーテンをしつかり閉めていなかっただのか、外の街灯の光が目元に当たる。

「んう…ん。にいい、朝だよ？起きて？」

「んあ？朝だあ？んなもんゲーマーな俺らにとって関係ないだろ…もうちよつと…。」

「むう…。」

そうして私の身体を引き寄せて二度寝に入ろうとするにいい。正直、この心地よさをずつと味わっていたけれど、そうはいかない。ゲームの勝利を確実にするために、起きてもらわないといけない。ちよつと意地悪だけど、こうするしか…ない…っ！

「にいい…白のお腹に元氣なにのにいいが、当たってる…よ？」

「はああああああああつ!!?すまんっ！白っ!!マジすんませんでし…って、あれ？全く元氣じゃない？」

勢いよく飛び起きて土下座の姿勢を取ろうとしたにいいは、すぐにいのにいいに変化がないことに気づく。

「ん。にいのにいいは、ずつと小さかったよ？」

「あの一、白さん？冗談に加えて悲しい事実加えてくるのやめてくれませんか？兄ちゃんガチで泣きそうなんだけど？」

「そんなことより…。」

「そんなことよりいいいい!!?」

「今日、動くかもしれないから、ちゃんと見に行かないと…。」

「あ、そうだった。そのために起こしてくれたのか？」

「いや、起きたのは偶然… だけど、登校でほぼ確実にすれ違うから、用心の為。」

「まあ、それもそうなんだが、二日目にしてじいさんの土下座が功を奏するとは思えないけどな… つとー！」

そういつてには勢いよくベッドから起き上がった。

… そう、初瀬いのを連れてきたのはもちろん意味がある。それはチート魔法を使ってライラに告白してもらおうこと。もちろんそれによつてゲームクリアすることは無いとには確信しているけど、それによる副産物… 三種類の制覇を目的として動く。だから、チートが失敗する瞬間にできるだけ立ち会っておかなければならない。プラムと一緒にいるときに…。

「さつて、期待薄だけど行つてみますか！」

そう、にいが宣言すると同時に、床の方から声が聞こえてくる。

「んう？ こんな朝から騒がしいぞ… です。」

「んあ？ あんたら、さつきまで遊んどつたんのに、もうどこかへ行くんか？」

「ああ、巫女さん達はどうする？ 学園行くか？」

「いや、あては遠慮させてもらうわ。来るとしても昼頃になるやろねえ…。」

「いづなも、まだねみい……です。」

「そっかそっか。じゃあプラムは？」

と、当の昔に起きていたのであろう。台所の方で食事を済ませているプラムの方へにいが問いかける。

「あ、はい。それじゃあ着いていきますねえ……。」

食事をとつたにも関わらず、弱々しい素振りを見せながら近づいてくる。

「よし、んじや、ジブリールはどう？くるか？」

天井の方に向かってにいが軽く問いかけると、空間に穴が開いて、ひよこつとジブリールが顔を出してくる。

「はい。大丈夫にございます♪睡眠を必要としない私達フリュージェル天翼種は、いつでも完璧な状態でマスターのご要望にお答えしましょう♪」

「そういや、ジブリールって俺らが寝ている間何やってんの？」

「マスターの観察日記と、質問集の追記でしょうか。今日も疑問が多く集まったので満足にございます♪」

「少しはシユウに手加減してやれよ……？」

それから服装を学生服に着替えて、『登校』のアイコンを選択し、自室を後にした。

???????

「なに：： あれ？」

『登校』を選択して、一瞬にして校門付近にワープした白達の目の前に、一瞬では理解できない光景があつた。

「え？なんで：： なんでまだ土下座してんだよじいさん!？」

「いや突つ込むところそこじゃないでしょお!？」

「いや：： いやいやいや!!断じて認めんぞ!?!今玄関付近にお手て繋いで登校するとかいう非モテ野郎への間接的テロ行為が目の前で起こってるなんて断じて認めんぞ!!」

「にい：： 現実を見て：： つ!!」

「なんだ!?!どうやって登校初日からあんな仲になれるんだよ!?!あー、俺も登校しときやその辺のご教授受けれたつてののか!?!：： そうだ!おいステフ!昨日授業一緒に受けてただろ!?!なにか知つて：：」

そう叫びながらステフの顔を回り込んで見てみるに。白も離れないように着いていつてみると：：。

「え?ああ、空：： 来てたんですね：：。」

「えつ、あ、ああ、うん。おはようステフ：： その：： なんだ。元気出せよ：：。」

目尻に涙を少し浮かべて苦笑いで返すステフに動揺するにいい。どうやらにいはそれに氣をとられてステフに水を差すのを止めたようだ。

「ステフ、大丈夫？」

「ええ。大丈夫ですわ。それに……私が遅かっただけですもの……ね。」

「ステフ……」

ステフの後悔と、どこか吹っ切れたような……諦めたような……乾いた笑みを見て、心がざわつく。

（シユウが……ステフを置いていった？せつかくのシチュエーションなのにな？）

シユウの気持ちとステフの気持ち、両方の気持ちを理解しているはずだったのに、まさかの事態に困惑する。その事で思考を埋めっていると……

「なあ、白。なんかおかしくないか？」

「え？」

にいが何かに気づいたようで、小声で耳打ちしてくる。

「もし、シユウがライラの水精に当てられて惚れたとしてだ。もし告白を済ませているのなら、普通の『告白』コマンドにしろ、状況は変わるがチートコマンドにしろ、今はもうこのゲームはクリアしているはずだよな？」

「……あつ。」

そう。にいの言う通りであるもし、シユウが告白をしていたとしたら、ライラがそれを受け入れてゲームエンドのはずである。そうなっていないってことは…

「…シユウはまだ、『告白』していない？」

「ああ、それと後一つ。もし、シユウが告白をしてなかったにしろ、ライラがシユウを恋の相手と見なしたら、ゲームに関係なくライラは目覚めてEXエンドに持ち込めるはずなんだ。それなのに、ゲームは終わっていない。」

「なら、今のあの二人の関係は…。」

「ああ、少なくとも恋仲になりきってはいないだろうな…。」

にいの予想を聞いて、少し安心する。もちろんこの安心は、白のためじゃなく、ステフに対するものだけだ。

でも、なんだろう。端から見れば恋仲以外に見えないあの二人は、一体どんな歪な形で繋がっているのだろうか…。それとも、私達の考えすぎで、本当に純愛の延長線上なのだろうか？

「ま、今色々言っても仕方ねえ！とりあえずあいっらくつついて様子見だっ!!」

「…おー。」

まあ、初瀬いのよりは告白シーンを見る確率は高そうだし、ステフの事も気になるからね。

「つー訳でほら、行くぞステフ！俺ら昨日学園サボったから案内してくれよ？」
「あつ、はい！わかりましたわ！」

にいがステフを気遣ってか、すこし明るめで声をかける。こういう優しさは自然にできるのに、なんでもいはいは鈍感なのか……。

「あ、じいさんはどうするよ？」

「私は、私の意志を貫きますぞおっ!!」

「そうか、では海棲種セイレーンの学園へ、レッツゴー！」

「はあ……今日は学園に行ってくれるんですねえ……良かったですう……。」

???????

「……………」

グツ……グツ……。

「……あれ？ジブリアル、どうしたの？」

にい達と学園に向かって歩いていると、ジブリアルだけが着いてきていないことに気づいて振りかえる。すると……

「……………」

グツ…グツ…。

何やら手を握っては開いてを繰り返している。時には自分の右手に左手を重ねたりして…。

(…もしかして。)

ダツ!!

「うおっ!? どうしたんだ白!!」

思い至った答えを抱いて、にいの手を繋いだまま、ジブリールに駆け寄る。

「…ジブリール…行く?」

「え?」

そう声をかけると同時に、ジブリールの視線上にはつきりと映るように、にいと繋いでない方の右手を差し出す。

「あつ… 申し訳ありません。白様。少し、考え事をしていました。」

「ううん。大丈夫だから、ね?」

「…はい。では、お言葉に甘えて。」

ジブリールは少々戸惑いながら白の手を取る。最初はまるで腫れ物を扱う感じで力がこもってなかったけれど、白が力を込めて握ると、ジブリールは優しく、それでいてしっかりと手を握ってくれた。

「〜♪」

「お？なんだか白、ご機嫌だな？」

「白様がお喜びいただけで何よりにございます♪」

と、言葉にしたジブリールに心の中でそっと呟く。

（その手をいつか、さつき想像してた人と繋げるといいね、ジブリール♪）

恋路の敵は理性なり

えー、ご無沙汰しております。シユウです。

今日の前で起きたことを簡潔に話すと、完全密室で絶対追いかけてくると思っていたジブリアルも来れないくらいの防衛空間部屋をライラがあつきり破ってきて、私に放った言葉が「こんばんは。突然で悪いけど、あなたをいただきに来たわ。」である。ワケガワカラナイヨ。

「…っ!!?」

そんなあらずじを説明しているうちに、脳内にジャミングがかけられたように思考が鈍る。

「さて、このくらい水精を当てればもう私の奴隷になつてゐるわね。」

(奴隷? どういうことだ?)

脳全体の機能が混乱を生じているのか、まともに体を動かすことができないままライラのことを見上げる。特に感慨もないのか、ライラは無表情のまま言葉を続けた。

「ふふふ、明日が楽しみだわ♪」

そう言つてライラは机の上に便箋のようなものを置いたかと思うと、颯爽と部屋から

去っていった。

「んー？なんだったんだ？今の…？」

朦朧とする意識の中、なんとか意識が晴れるのを待つて活動を再開する。

「なんだろう、女の子が部屋に入ってくるっていう貴重な体験をした気がするのにこのモヤモヤ感は？」

意識が少しばかり回復したのを確認してゆっくり辺りを見渡すと、荒れ果てた部屋が見て取れるばかり。

「あー、きれいだったお部屋が一瞬で汚部屋に…ハア。」

持ち物整理の次は部屋の整理かい…と、物思いにふけていた矢先、先程置かれたライラの手紙が目にとまる。

「あつ、そういうえげなんでもライラはこの部屋にやってきたんだ？奴隷だなんだと言ってたけど…って、あれ？」

ここでふと気づく。ライラがやってきた？会いに？わざわざここまで？なんで？

混濁していた意識が明瞭になるや、あまりの不思議体験に思考停止していた脳が再起動し、状況の不可解さを疑問として浮かび上がらせてくる。とりあえず音声記録という、日常生活でこんなにあつたら犯罪なんて迂闊にできないだろうバックログを開く。

『こんばんは。突然で悪いけど、あなたをいただきに来たわ。』

『さて、このくらい水精を当てればもう私の奴隷になってるわね。』

『ふふふ、明日が楽しみだわ♪』

ライラが部屋を訪れて放った台詞はたった3つ。しかもこちらのことなどほとんどお構いなしの発言だけである。

「一体何がしたかったんだ？ライラは？って、それよりも気になったのは…」

「俺、なんでライラに惚れてないんだ？」

そう、全くライラに惚れていないのである。見ずとも心惹かれ、近づかれれば理性を殺されと、抵抗しようとも散々な結果だったはずなのに、全くと言っていいほど惚れていない。しかもライラの台詞通りなら、水精を意図的に直接ぶち当てられた状態なのだ。もはや脳内ライラ一色で、家抜け出してライラの部屋へゴーイングマイウェイなんだろうが、そんな気はさらさら無い。

「うーん。なんか変なことしたっけなあ？」

と、明らかな変化に困惑しつつ、とりあえずUI画面を開いて持ち物欄やステータスを確認してみると…

「あれ？なにこれ？特殊スキル…水精耐性【中】!!?なにこれモン○ンですか!?!」

あからさまにモン〇ンを意識して作られたのであろうスキルがそこには表示されていた。というかそもそも、ギャルゲーに自分のステータス画面があること自体おかしかったんだが…あれか？RPGが土台のギャルゲーだったのかな？そういえば『あぶない水着』を見かけたときも数値になんかしらの数値が書いてあったし、もしかして…

「あ!?やつぱり『水精耐性+5』とかいう数値があるう?！」

ライラが来る前まで学生服を探すので必死だ為か、服装が空たちに笑われた格好のままだった。その下着や肌着、アクセサリーの殆どは海棲種セイレーンのつけるものだったりと混沌とした装備のうちのいくつかに、そんな耐性値が付与されていた。

「えーっと、字面からなんとなく想像できるけど、どんなスキルなのこれ?！」

ギアの形をした設定アイコンから用語説明欄を開いて『水精耐性』の欄を開いてみる。

『水精耐性』…海棲種セイレーンが持つ特殊な精霊、『水精』の効果を打ち消す作用を持つ。主に海棲種セイレーンが身につける衣装やアクセサリーに付与されており、これは同種セイレーンの海棲種セイレーンに水精の効果を与えないようにするためのものである。

「…まさか海棲種セイレーンが付けたアクセサリーって、異性を引き寄せるために着飾るだけじゃなくって、他の海棲種セイレーンを惚れさせないための対策だった?！」

用語解説欄に載せられた文言通りなら、海棲種セイレーンからの着せ替えイベントがなけりや今頃モロに洗脳受けてたのか…というか、そのイベントの最中に魅了に完全にかかって

なかったのもこのせいかも？

「んー、原作には書いてなかったけど、どうなんだろうなあこれ……。まあ、何はともあれ、これに正気を救われたのは確かか……。」

とりあえず、ライラの水精を防いだ原因がわかったことに一安心。

「んで、そのライラさんは一体何がしたかったことに？」

そう、もう1つの疑問点はライラの行動の目的である。

「わざわざ個室に押しかけてまで水精を当てて惚れさせて、ただ手紙を置いていく？…ダメだ。全然わからん。」

なんだろう。もし、ライラが俺に惚れたのだとしたら、その時点でゲームはクリアするはずだし、そもそも惚れない相手を探しているのであって、惚れさせて俺を手に入れる理由って何だ？

「うーん。やっぱりわからない。こう、原作と違うと予想がつかなくなるのはいけないなあ……。とりあえず手紙見てみるか……。」

ライラが机上に残した手紙の封を開いてみると、そこには一行だけの文字が書かれていた。

《left》『明日の朝、校門の前で待ってるわ♥？』《left》
ライラ』

「… えっ？一緒に登校すんの!? ますますわかんねえ…。」

ライラが俺と一緒に校門を潜りたいとのご所望である。恋人ごっこをするにはは
いささか先の行動の強引さが目立つ。

「あつるえ…ライラってどんなやつだったっけ？マゾな海棲種^{セイレイシ}ってイメージが先行し
すぎてて良く思い出せない…。」

ライラの行動を不可解に思っていると、UIに『1日の時間期限が近づきました。明
日の朝へ移行しますか?』と表示が出てきた。

「げっ!? もうこんな時間か… 仕方ない。良くわからないけど、ライラの考えに
泳がされてみるとしますか…。」

ライラの目的がわからない以上、下手に動くわけにも行かない。幸い、原作知識があ
るおかげでライラの攻略法自体はわかっているため、そこを押さえれば大事にはならな
いだろう。

「今日は色々あったな…。おやすみなさい…。」

おはようございます。いやー、眠るといふものはいいものです。脳がスッキリ爽やかになって、昨日起きた出来事がきっちり脳内で整理整頓されている。これで今日もなんとか過ごせそう…

と、思っていた矢先に、データを纏めた結論がハッと脳内に浮かぶ。

「あれ？ちよつと待てよ？今の俺の状況、詰んでないか？」

よーしよし、朝っぱらから嫌な予感がよぎったがひとまず整理しよう。今の俺のライラとの関係の終着点は2つのパターンに分けられる。

パターンA 今日恋人のフリしてライラと過ごし本当に恋仲になったら？↓ライラが恋に目覚めてエクストラEND

パターンB ライラの誘いを振っていつもどおりステフと一緒にいたら、水精が効かないってことがバレて原作の攻略基準を満たす↓ライラがマゾになって原作END

…おやあ？どっちにしてもライラENDになっちゃうぞお？俺はステフ✓を目指していたのにどうしてこうなった!？

…もしかして空たちは水精が効かないことを最初の夢介入時にライラにバラさないために接触を極力避けていたというのかっ!!?やはり策士だぜ…。

まあ、エクストラEDはさほど可能性はないとはいえ、そもそも起きる条件が固定さ

れているようなゲームじゃない。そもそもライラはゲームのつもりで寝こけてないからな。普通の恋愛で起きてしまう可能性もあるだろう。

「ととと、とはいえ、今日は少なくとも接触しないことには話は始まらないな…。」

ライラの目的がどうであれ、手紙に書いてあった通りにしなければ、パターンB直行なのである。それはできるだけ避けなければならぬ。なぜなら、

「パターンBは完全に攻略法を知ってるからこそやる方法だからなあ…。」

そう、パターンBはライラに惚れない、かつ好きにならない人物、まあ、言ってしまうえばぶん殴ればそれでOKなんだが、空たちのように最初から水精の影響を受けない人物だからこそやれる方法であって、今回のような場合だと、原作知識持ちだとあっさりバレてしまう。せっかくこの世界に来たんだから、空たちには気持ちよくゲームプレイしてほしいし？原作知識持ちなんて知られたら…ねえ？

「ま、俺が加わってる時点で原作崩壊は始まってんだ。締まっていきますかねえっ!!」

そうしてクローゼットから水精耐性が付与された装備を大量に身につけ、その上から学生服をピツシリ来てごまかしつつ、ライラのもとへ向かった。



キーンコーンカーンコーン……

(と、言う感じで校門からお手々繋いじやつてリア充感パないことになっておりますが、内心相当やばいシユウです。)

いや、うん。いのが土下座してるのはわかってたから何の動揺もなかったけど、今はライラに惚れているという設定上、ステフを置いていこうとしたときの罪悪感と、去り際に見たステフの寂しそうな顔が脳裏に焼き付いて離れない。

(うーん！今すぐライラの恋人役止めてステフを笑わせたいのに……)

そんなことを思っていると、教室の扉が勢いよく開かれる。

「はぁーい☆昨日ぶりのアミラちゃんだよ♪みんな元気してた？って、なんかイケメン増えてる!?!いやーん♪そのイケメン、早速自己紹介ドゾ☆」

授業開始とほぼ同時に意気揚々と入ってきたアミラは瞬時に新たな異性である空を感知し、その存在を海棲種セイレイシの生徒全員に知らせるよう促した。その指示を受けた空は一瞬顔がひきつった表情をみせたものの、何とか椅子から立ち上がって自己紹介を始めた。

「はっ、ハイッ！エルキア王国出身のソ、空ですっ！みみみ、皆さんどうか仲良くしちえ……してくださいっ！」

「わかりましたぁ♪空クンの言う通り、皆仲良くしてあげてね♪もちろんアミラも

とことこん仲良くするつもりだから、よろしくね♪」

「はー！ー！いつ!!」

「ぜえ…ぜえ…。」

元氣良く答える海棲種生徒一同の傍らで、席に座って過呼吸気味になった息を整える空。

「し、白、やったぞー！学校で一度も達成できなかつた『自己紹介を最後まで言う』がようやく達成できた！もう学園生活クリアで良いですかねえ!?!」

「…に、い、おめでと♪」

「いや、学園生活クリアしてないで、ライラ様を攻略完了して欲しいんですけどお…。」

「何を言ってるんだねプラムくん!?!学園事情を制覇した上での攻略が、学園恋愛ゲームにおいて重要な要素フアクターとなり得ることを知らないのかねん!?!」

「自己紹介とか初歩の初歩で喜んでるようなら、わざわざ学園生活上で攻略する必要ありませんたあ!?!もつと簡単なシチュエーションありましたよねえ!?!」

「ハア… 全く恋愛の王道を知らないようだねえ…。学園生活という、毎日が人生の強制&矯正イベント発生地帯において、その地獄すらも天国に感じるようになるのが異性との恋愛なのだよ。現実では有り得なさすぎるシチュエーションを体験することで、学園という現実を幸せ薔薇色に染め上げるのが、このシチュエーションの醍醐味だという

のに。」

「なんか力説してますけど、要するに今空様は地獄を味わってるんですよえ!」

「正解だ!今すぐ部屋に引き籠りたいっ!周りの海棲種(セイレイ)の視線がきつすぎるんだよこんにゃろがあ!!」

「……に、しるも頑張るから、耐えて……っ!」

こんなふう騒ぐ声の後ろの席の方から聞こえる。それと同時に、

「……………」

「はて?ドラちゃんはず前の二人を真剣に見つめていたのでしょうか?」

「そ、それは……昨日と席が変わって……その、シユウとライラさんが隣の席に座ってるからですわ!」

そう、さつきから会話が後ろから聞こえていた原因は、昨日はステフと隣同士の席だったが、今日はステフ、ジブリー、空&白、プラムの席順で、その前列に俺とライラが隣同士で席に着いているのだ。どうやらそのことにステフは不満を持っているようだ……。

「あつれー?なんか昨日と席が変わっているのは何でかな?」

アマミラもその事実気付いたようで、一瞬真剣な目差(まなざ)しで俺とライラを見た後、おどけた態度で質問する。

「あつ、すみませんアミラ先生。どうやらシユウは視力が落ちてしまったので、前の席に移動したんですよ。」

「たった1日で視力が下がるわけないでしょう!？」

「そっかあ、それなら仕方ないネ☆」

「ええ…。」

ライラの勝手な行動を特に注意することなく話題を済ませたアミラに、ステフは困惑するしかなかったようだ。

「さつて!今日の授業をはつじめまあすつ!!で、そのためにまずは…『二人組み』を作ってくださいあい☆」

「待つてくださいいアミラ先生!?!そんなことしたら世の中のボッチが死んでしまいます!!?!」

「…ガクガクブルブル…。」

『二人組』というを耳にした瞬間、学生時代のトラウマの一部がフラツシユバツクしたのか、見事な過剰反応を示した空。その膝の上にいる白はどうやら震えているようだ。うん。気持ちは超わかる。俺も少し発狂しそうだから。

「え?ダイジョーブダイジョーブ☆空くんには白ちゃんがいるじゃない!」

その言葉になにか感銘を受けたのか、空は少しの間黙った後、

「はっ?!? 今まで学校では年齢の違いで気づかなかったが…」

「…今は、にいがいる…っ?!?」

当たり前過ぎて気づかなかった事実^に気づき、

「白、俺達は二人で一人だ。」

「…うん。しろ、にいと一緒で、よかった…。」

と、両手を恋人繋ぎして向かい合い、組作りのトラウマから解放された二人を見て、

「いや、そのために『^{くうはく}』を結成した訳じゃないでしょうに…。」

プラムはジト目で二人を見つめながら突っ込んでいた。そんな感じで後ろの席の様子を伺っていると、袖口が引つ張られて意識がそちらへ向かった。

「シユウ? シユウはもちろん私と組むわよね?」

ライラが傍目ぼーっとしていた俺の意識をこちらに向け、意思疎通を図ろうとしていたようだ。

「ああ、もちろんだ。」

とりあえず笑顔とふたつ返事で返しておく。しかし、水精の影響がかかっているライラをそつと見つめてみるが、なんとも…うん。いい感じのモブキャラって感じだろうか? そのくらいには見ええない。

「うう…。」

「さて、では私はドラちゃんを組み合わせようか。」

「え、ええ。わかりましたわ…。」

どこか残念そうな声でジブリールの要求を承諾する。

「よーっし!!二人組はできたかな?そしたら今日の授業内容をはっじめます!!」

「アミラ先生!!その気になる内容はなんですかもうなんでもかかってこいやあ!!」

『二人組』というトラウマを克服した空が躍りになっている。…えつと、もしかして空、昨日の俺の報告書読んでなかったのかなあ…?アミラさんの授業は空の倫理規定にガッツリはまつてる気がしたんだけど…。

「さて、昨日は男を落とすためのテクニク集を解説したけど、今日はその実践をしてみようと思いまあす☆」

「フアツ!!?」

「それじゃあ手始めにキスしてみよー!!」

「ああつ!!?」

「え?空クン何か不満?」

「不満というか、そんな授業で大丈夫なんスカ!?!」

「え?何言ってるの空クン?この学園、保健体育専攻だよ?全時間保健体育に決まってるじゃん☆」

「何その男の夢しか詰まってなくて速攻で廃校しそうな学園スタイル!」

「まーまーいいじゃんいいじゃん☆ほら、キツス、キツス♪」

『「一気!一気!」みたいにいってんじやねえよ!?酒場じやないんだからな!」

「え〜?でも、他のみんなは割と乗り気だよ?」

「んあ?」

そうして辺りに空が視線を向けると、

「あつ、んーっ!!」

「ふう、ふう…はむっ!!」

「んあ…ん…」

「なんか周りで海棲種セイレイシのキマシタワーが乱立してるんですけどお!!」

「というか、空クンの目の前でもおっ始めようとしてんだけどネ?」

「あつ!!? シュウ…は…」

と、そんな空の目に私達の姿が映る。もうライラの腕が俺の首に巻かれるように抱きつかれ、その様子は恋人同士が今日の前で愛のあるキスをしようとしていた。

「り、リア充が目の前に……」

「「……………」」

空は何やら白目をむいて上の空状態に、白は何やら疑念を抱くように、ジブリールはただただ見入って、ステフは悲しげな目で見ていた。

(ま、マジでやんの!?)

そしていよいよ、互いの唇が合わさりそうになるとき、ライラが口ずさんだ。

「さあ、あの女に見せつけるように、たっぷりしましょうか♪」

その言葉を耳にした瞬間、思考が……いや、自分の世界が凍りついた。

(……あの女?今、ライラは『あの女』と言ったのか?それって一体……)

ライラが恍惚とした表情を一瞬だけ止めて放ったその一言が思考回路を埋め尽くす。が、その答えは嫌に簡単に出た。

(……いや、考えるまでもなかった。今ライラが気にしている女とやらで、見せつけたい人物の候補は後ろの席にいる三人。そしてその中でライラと接点を持ち、なおかつライラの行動の目的の優先となっている人物は……)

(お嬢様ただ一人。)

その事実気づいた途端、思考回路が急速に回りだす。その思考回路はもはや冷静さなど程遠い、暴走にも似た怒りの兆候。

（へー？ふーん？ほー？あの時ステフに邪魔されたのがそんなに悔しかったんだあ〜？そっかそっかふう〜ん♪）

目を閉じて迫ってくるライラを無視し、UIからコマンド『スキップ』を則座に選択。それと同時に、景色が食堂へと変換する。

「さ、ライラ、昼食時間だぞ？何食べる？」

「え？あ、あれ？なんで食堂に？」

「なんでって言われても、もうその時間だし。さ、何か食べようぜ？」

そう言つて困惑した表情のライラの腕を引いていく。もちろん演技上、優しく、しかし力強く…だが、その腹の中は煮えくり返っていた。…例えばこんな風に。

（我が愛しき人への凶行、誠に遺憾である。一国の女王だか真実の愛を求めのお姫様だかなんだか知らないが、ステフが傷つく行為を横暴にも我がステフ教徒を利用してまで行おうとしたことは万死に値する。して、貴殿、ライラに告ぐ。）

ステファニー教第三章二項の教え『お嬢様を陥れて楽しもうとする輩には天罰を』に則

り、貴殿を不幸の彼方へぶっ飛ばす!!!

さあ、断罪を始めよう。

上げて落とすその先へ

と、言うわけで今回のビックリドッキリ刑罰はコチラ。

「メチャクチャいやついでつる。」でございます。

いわゆる「上げて落とす」ですね。古典的ながら効果は絶大な訳で、しかも水精を我が物にするライラにとってはフラれるなんてあり得ないこと。「目に入れてでも結婚したい。」とか、似たような事は散々言われてきただろうが、「眼中にすらありません。」と言われたことは一度も無いだろう。

何もかもを惹きつけてきた、それこそ視線すらも磁力のように引きつけ魅了させてきた彼女が、「あなたとは無理です。」と言われたら、それこそ仰天モノだろう。

その言葉を、今魅了されて傀儡になった様に振る舞う私の口から聞いた時、ライラの顔はどのような表情になるのでしょうか。ああ、これだからが楽しみでゲフンゲフン！

あ、これは決して私怨ではございません。ええそうですとも。これはステフ教からの刑罰であり、ライラ様に厚生のお機会を与える為にやっているのです。

断じてステフを出汗にして愉悦感に浸ろうとしているあのアマを天から地べたに這いつくばらしてNDKしたいわけではございません。出来れば地べたではなく地中に埋葬したいゲフンゲフン。

あくまでステフ教はステフ様を愛し、ステフ様に愛され、守り守られる為の宗教なのであって、刑罰はステフ様に愛される為に教訓を体にブチ込む為の処方箋。いわばステフ教徒による愛の鞭なのです。

さあ、ステフ教徒であるあなたも鞭を取り、ステフ教をこの世の宗教とするのです。ああ、この世にステフのあらんことを…。

と、いうわけで今は昼食を取っている最中なのだが、もちろん相席となっているのは今回の犠牲者ライラです。

ライラが口になっているのは海鮮パスタ。フォークを使うことに慣れていないのか、非

常にぎこちない様子でパスタを絡め取って食べている。まさに作法を知らないお転婆お姫様といったところだろうか？ただ、周りの海棲種セイレーンを見てみるとうっとりとした様子でこちらを見ている。おそらくライラの食事の様子を見て「美しい食事の取り方ね！」とか思ってるんだろう。水精の力は幻覚おも引き起こすらしい。便利だな。

：少なからず私の方に熱い視線が送られているのは気にしないでおう…。

さて、皆さま。このシチュエーションで恋人同士がやりそうなことといたしたら何を思いつくでしょうか!?

私は2つ程心当たりがあるので、それを試してみようと思いまーすっ！都合がいいのか意図的なのかはわからないが、お嬢様が座るテーブルが私から見て左側にありますからねえ!!絶対仕込んだらライラア!?!でもグツジョブだ！やりやすくなったぜ！

今はライラの迷惑「ステフに私とシユウの関係の差を見せつける。」という何ともみみっちい嫉妬心に溢れたモノに合わせてあげましょう。

では、参ろうか。

「ライラ、それ美味しい?」

「それ」というのはもちろん海鮮パスタ。先の件(キスシーンスキップ)の事を考えていたのか、若干の間があつてから返事を返す。

「えっ?え、ええ、美味しいわよ?…どうしたの急に?」

「どうしたもこうしたも、さつきから上の空で楽しんでなさそうだからな。ほら、頬にソースが付いてるぞ…つと。」

そう言いながらライラのほっぺについたソースを指ですくい取り、自分の口へ運ぶ。

「えっ…あ、ありがとう?」

「どういたしまして。ん、やっぱり美味しいな。」

突然の行為に驚いた様子のライラ。目を点にしてこちらの表情を覗き込んでいる。傀儡であるはずの私が自主的に行動を起こした事を不可解に思っているのだろう。

だが、その疑念は無駄に終わる。なぜなら…

(なっ!!そ、そんな事をする仲にまでなつてただなんて…っ!!)

隣の席にいるお嬢様の顔が引きつっている。フォークを持った手をプルプルと震えさせながら、こちらを凝視しているからだ。

そんなお嬢様の様子を目撃したライラが口角をスツと緩める。そして、先程まで私に向けていた懐疑心はどこへやら。瞬く間に猫をかぶつて話しかけてくる。

「そ、そうよ！私が選んだんだから美味しくくて当然だわ♪それとも…シユウは私の味覚センスを疑ってたのかしら？」

ニンマリと笑って、まるでお嬢様に見せつけるように、そして私に対してねだる猫のようにして会話を求めてくる。自分の計画通りに進んでいることさえわかれば、引つかかる行動をも無視して突き進むのだろう。やはり頭は海棲種セイレイシと言ったところか。

「疑っていたわけではないけどな。ただ、ライラの好みの味を知っておこうと思っただけさ。」

「あら？もしかして、もう手料理の下準備が始まっているのかしら？」

「ソ、ソナナコトハゴザイマセンヨ？」

「凶星だあー♪」

オメーにやるのは手料理じゃなくて手ほどきだけだとなっ!!と、心の中でツツコミを入れつつ、恋人同士がやりそうなことの心当たりのもう一つを試す。

「あ、そうだ。ライラの手料理も食べてみたいから、俺の好みをライラに知っておいてもらわないとなーつと。」

「えっ!?!わ、私は料理は…ねえ？」

ライラは料理が不得手なのか、苦い表情を示す。まあ生粋のお姫様ならそういうこともあるのだろうが、今はそんな事お構いなしに進める。

…チラツと隣の様子を覗くと、お嬢様はもちろん、空や白、ジブリールやプラムまでこちらをじつと見ていた。空と白は次に私のとる行為の予想がついているのか、「まさかっ!？」といった表情をしていた。

「はい、あ〜ん。」

と、自分のフォークに絡めたミート（魚肉）パスタを、ライラの口元に差し出す。

バンバンバン!!

…空が無言で台バンしているのは見て見ぬふりをしよう。

「え…あ、あ〜ん?」

どうやらこの行為自体が何を意味するのかよくわかっていないのか、戸惑ってはいたものの、ライラはフォークの先を口に含んでパスタを、絡めとり、ゆつくりと咀嚼し始めた。

「ん…お、美味しいわね…それ…!」

素直に美味しかったのか、こちらのパスタを子供のようなキラキラした目で凝視す

る。

「だろ？将来はライラの手料理で毎日過すと思うと、俺はなんて幸せものだなと…」

「うん？そんなことは無いわよ？私はシユウの手料理で食べていくって決めてるから」
♪

「ワーオ！」

子供みたいな目をコロツと変えて、いやらしく応えるライラ。どうだろう？私とライラは恋人同士に見えているだろうか？

□□□

その頃、隣の席にいる空達はというと…。

「あの、白さん？そろそろ砂糖吐きたくなってきたんで、この身内リア充イベントすつ飛ばしていいつすか？」

「ダ…メツ…!!」

「何ですか白さん!?!いや監督ウ!?!こんな絵いくら撮ったって俺の脳内マイレージに1バイトすら保存しないのに、いつまでこんな非リア充危険地帯にいなきゃなんないんですか!?!」

「…さつき、シユウのキスシーン、見たなくなつて『スキップ』コマンド押したの…:いいでしょ…?」

「ぐっ!?ば、バレていたというのかっ!」

「…:いいの隠し事、白に暴けないことは無いから…:」

「あの…:白さん?その洞察力をもっと他の事に役立ててくれると、にいちゃんとしては助かるかなあなんて。」

「…:却下。」

「ぐはっ!!」

「…:あの時、キスシーンを飛ばしてなかったらもしかしたらクリアできてた。…:なのに、にいが飛ばしちやつたから、その機会失つた…:そうでしょ?」

「ぐっ、返す言葉ありません…:」

と、がっくりとうなだれる空と、単調に返事をする白であったが、

(…:とは、言つたけど…:)

(あのままゴールインされるのはちと癪なんだよなあ…:)

『くっはく』の内心はひどく冷静であった。

(…:もしこのまま上手く行くのなら、海棲種セイレーンと吸血種ダンピール、この2種族が手に入る…:)

(だが俺らが手に入れたい…:いや、こちら側に引き込みたい種族がもう一つある。その

もう一種族に合う理由として『ライラが惚れる条件』が使えるんだが…。

(…それが『わからない』…つまりは『未知』の状態じゃないといけないわけで…)

(シユウとライラ、今の二人が不可解な恋人同士であることが明白。だが本当の關係になる可能性もゼロではない。)

(…だから、『キス』、もしくはそれ以上の行為はスキップして流し…)

(それ以下のスキンシップは『条件』の絞り込みに利用するため、観察していく。)

(…そして、もしシユウがにいの設定したステータス変化…)

(あの数値を利用してライラに近づいているのだとしたら…)

(その理由を探る必要がある…)

と、『^{くっはく}』が考えを巡らす中。

(ふう…何とかごまかせてたようですねえ…。ボクだけ『スキップ』コマンドを操作していたら、怪しまれるどころかゲームセツトでしたよお…)

苦笑いを崩さずに、シユウとライラの様子を覗っているプラムの内心は、焦りと慎重が入り混じっていた。

(まさか一夜でこんな事になるなんて…ライラさんも大胆ですねえ…。シユウさんの部屋に押し入って傀儡化するだなんて…。まあ、空さんの設定で、個人の私室内の出来事が私でも観測出来ないように設定されているから、詳細までは見れませんでしたけどお

…何にせよ、ライラさんの目的ははつきりしてますねえ…。

どうやらゲームの大部分の情報は得られる様子のプラム。それによってライラの目的は予想がついているようだが…。

(だけどシユウさんがライラさんを惚れされる可能性もゼロではないですよえ…極力過激な行為は避けてもらわないとお…。まあ、傀儡化されているなら心配はしなくて良さそうですが…。)

(ライラさんの様子からして、自発的に動いてるようなんですよねえ…シユウさんはあ…。)

先程のシユウの思いつきのやり取りからいくらか察した様子。

(おそらく空さんがこっそり仕込んだあの数値を使ってライラさんに近づいているのは明白ですよ…。 おそらくライラさんへの報復でも目論んでいますねえ…。)

(それをされるのは別にいいんですが…。 どうせライラさんを盛大にぶる算段でしょうけど、結局ライラさんからフラレてゲームオーバーですよ…。)

(でも、極力可能性は排除することに越したことはないですよ。シユウさんがチートコマンドを使いそうならスキップしてお茶を濁していかないとけませんねえ…。)

と、シユウを注意対象として警戒するプラム。その前に座っているジブリールはじつとシユウの行為を見続け、その隣のステフは…

『あくん』ってなんですかの『あくん』って!!?私ですらシユウの料理を味見する時は自分のスプーン持つてくるのになんですかの自分のフォークを差し出して『あくん』って!!?なんなんですこの気持ちはああああああ!!!

内心荒ぶっていた。

□□□

よし、多分恋人同士に見えるな！お嬢様が俯向いているのが恐ろしいほど心を痛めるが、報復の為だ、今は見て見ぬふりだ。

空様は荒ぶっている。気持ちはわかる。身内の友達（男）がイチャイチャしてるところなんて見たくないだろうからな。

：なんかジブリールが物凄く凝視してるのはなんでだろう？凄いい気になるんだが…。

まあ、結果は上々だろう。さあ、後は落とすだけ。あなたのプライドをへし折つてくれようぞ!!

「なあ、ライラ。」

「うん？なに？」

取り留めの無い話をしながら食事を続け、そろそろ食べ終わる頃にライラに話しかけ

る。声色の変化に気がついたのか、少々真面目にライラが返事をする。

「今日の放課後、伝説の珊瑚の下で待つててくれないか？…話したい事があるんだ。」



伝説は終わることなく語り継がれ、その伝説はかくありきと形を残して人々を魅了し、畏怖させ、何かを、伝説以上の何かをもたらさんとする。

伝説は伝説を起こすのではなく、その先の奇跡を起こすものだ、誰かが言っていた。その誰かはきつと、奇跡を起こした人物なのだろう。

さて、私は奇跡を起こせるのか…。

起こしません

ただ伝説を利用してライラのプライドを地獄の底へ蹴り飛ばすだけです（真顔）。

と、言うわけでやって参りました『伝説の珊瑚』。とき〇もの『伝説の木』に比べたらまあ違和感満載ですが、珊瑚単体で見たら非常に立派な形をしています。近くで見たらグロテスクですが、遠くから見れば伝説と謳われてもおかしくありません。

さて、放課後まで特に何もなく（授業の殆どは空の倫理規定に反してた為スキップ連打で）過ごしましたが、ちゃんとライラは来てるかな…。

…チラツ

…ジーツ

…所々から視線を感じる。恐らく告白の話を聞きつけた海棲種セイレーンに吸血種ダンビートル…まあ確実に空達もいるだろう。

仮にも校内トップの美女として君臨してるライラに告白の話が上がったわけだ。しかも、その告白にライラも乗り気と来た。そりゃ集まるに決まっている。

そんな中、伝説の珊瑚の下へと向かう。そして…。

「シューウ!!」

珊瑚の陰に隠れた人物が姿を現し…って、ん？この声は…？

「お…す、ステフさん!!」

後ろの方から追いかけてきたのは、何とステフだった。突然の事に一瞬だけ演技を忘れそうになるほどだった。

「はあっ…はあっ…!!」

「どどど、どうしたんだ一体!!」

直前まで迷っていた為か。直前になって、肩で息をするほどにまでがむしやらに走っ

てきたのだろう。

「や、やっぱり…おかしいと思うんですの!!」

「お、おかしいって…何が?」

「二日で私との関係まで変わるほど、シユウがライラさんに惚れるわけありませんわ!! だから私気づいたんですの!もしかしたら、シユウは操られてるんじゃないかって!」

「あ、操られてなんかいないぞ?」

正直このまま演技を続けるべきか非常に悩む、想定外の出来事でございます。誰か助けてえ!?

「…そう、ですの…。でも、私、それよりも前に気づいたことがあるんですの。」

「え?」

「私の…本当の気持ちに…。」

メメメメ、メーデーメーデーメーデー!!ちよつ待つてステイ!!いや助けは早く来てく
ださい状況が全く読み込めませんん!!?本当の気持ちって何だ!?一体何なんですか教
えて偉い人お!!?

「だから、私、伝えますわ!!本当の気持ちを、ここぞつ!!」

(ま、まさか、シユウを正気に戻すために説得を…!!?)

(…にいい。それ鈍感じやなくて無感の発言だと思おうよ…。)

(え?)

(あんた…それ冗談で言うてへんのなら、一度女心ちゆうのを学び直した方がええで?)

(冗談で言うてないの分かっていてますよね巫女さん!?!?というかそんなに言うなら女心を教えてくれやオウコリア!!)

昼食後に合流した巫女と空が激を交わす。それを傍らで見てたいづなが、

(女心ってなんだ、です?うめえのかそれ?)

(…いづなたんにはまだ早い。ジブリアル、目隠し。)

(…か、かしこまりました…。)

どこか調子が悪いのか、気の抜けた声で返事をしながら、いづなの目元を手のひらで覆う。

(むう!?!何しやがるんだ、です!?!)

(も、申し訳ありません。白様の御命令でございますから…。)

(うん?…おめー、一体どうしたんだ、です?)

普段から高圧的な態度を取るジブリアルが謝ってきたことに疑問を抱いたいづなが

問いかける。

(なんでも……ぎいません……)

???)

ジブリールからただならぬ何かを感じ取ったいづなだが、そのが正体は結局よくわからなかった。仕方なく耳に意識を集中させて、事の成り行きを探ることにした。

驚く聴衆の中、固唾を飲んで何かを言おうとするステフと、何がなんだか状況が掴めていないで脳内真っ白状態のシユウ。何やら別のイベントが起こっている。そう確信した聴衆は、ひっそりと二人の様子を見守っていた。

ただ、一人を除いて。

「あら？ 私達の邪魔をするのは誰かと思えば、ステフさん、あなただったの。」

珊瑚の陰から現れたのは、水精を統べる女王、ライラ。普段の素振りとは打って変わって凛々しい佇まい。だが、その目は絶対零度に等しいほど冷たく、ステフに敵意すら見せる目だった。

「ま、ここで見てるといいわ。邪魔したことは許さないけど、むしろ好都合になったから♪」

「な、何を言ってる…っ!!」

ライラが手をかざすと同時に、私とステフとの間に水精の壁が出来あがる。

「—————!!!」

ステフの口が動いているものの、その声は聞こえていない。

「そこでじつと見ているといいわ♪私達の愛の始まりを…ね♪」

ライラがその言葉を言った途端、ステフの表情が消えた。恐らくこちらからの声は通るようになっているのだろう。そして、ライラがこちらに向き直り、小声で話しかけてくる。まるで打ち合わせをするかのようにヒソヒソと。

「さあ、盛大に告白しなさい♪あの女が絶望するくらいに♪」

はい。死刑確定でございます♪

堪忍袋の尾がついに弾け飛び、刑罰の時が幕を閉じる準備を始める。上げて底を突き抜く程落として差し上げましょう♪

さあ、『告白』コマンドを押し、いざー！

「俺…ライラの事…。」

「うん♪」

「全然好きじゃねえんだわ。」

「うん♪…うん？」

「「はいいい？」」

聞いた全員が唾然とした。今コイツは何を言ったんだ？と。

『好き』という言葉に条件反射で『スキップ』コマンドを押そうとしていた空達すら耳を疑った。

「え、えつと、シユウ？今なんて…。」

「うん。オメーのこと、別に好きでもなんでも無えって言ったの♪それじゃ、言いたい事はそれだけだから、じゃあね♪」

そう言っつてライラに向かって軽く手を振り、ステフの方へ向かう。あまりの動揺のせ

いか、ライラが作り出した水精の壁も無くなっているようだ。

「ちよちよちよ、ちよつと待ちなさいっ!? 話が全然違うわ!」

「はいいい? 『話』いゝ? なあんのことですかあ? ww」

「えっ!?!」

「さ、お嬢様。こんな娘は放っておいて、帰りましょうか。」

「へ? えっ? ……し、シユウ。正氣に戻ったん…ですの?」

「元より正氣にございましたよ? ライラ様の事を探るためにあのような真似をしておりましたが、正直あの脳足らずとこれ以上話すのは耐えられのうございました。」

「え…演技だったんですの!?!」

「はい。その通りにございます。いやはや、お見苦しい所をお見せしました。申し訳ございません。」

「そ、それならいいん…ですけど…。」

どうやら少々納得の行かないステフ。あ、そういえばライラがステフをコケにしようとした事をステフは知らないのか…何とか説明しないと…。

「おーい! シユウ!!」

と、ステフに説明しようとしたところで、空達が駆け寄って来た。

「一体全体どうしたってんだ!? 盛大にフってぶぎゃー出来たのはいいが、その後フラレ

てゲームオーバーだぞ?!」

「あー、そのことなんですけど…。」

説明すると長くなるなあ…と、言葉を選びながら話そうとすると、空の後ろの方から声がかかる。

「あー、実を言うんですけどすねえ? シュウさんを傀儡化してステフさんを陥れようとしたライラさんに報復する為に、あんな演技を続けてたんですよねえ? まあ、ゲームオーバーになるのは承知の上っぽかったですがあ…。」

「あ、あゝ、なるほど。あの変な服装が洗脳から守ってくれたって訳ね…。」

言いたいことを要約してわかりやすく話すプラム。その言葉を聞いて、どこか納得の行った様子の子の空。

「…でも、あんたがここに居れへんのやったら、もう守れへんとかやうん?」

一緒に事を見守っていた巫女が、今後の事の指摘をする。その言葉を聞いてステフは一瞬にして表情を失った。空や白もどうやらその事に気がついていた様子。

だが…そんな心配は御無用である。なんせもう終わりなんだからな!!

…ん？終わり？なにが？

「え？あ、あれ？ちよーつと待つてくださいいねー？」

「え？待つって何をだ？」

困惑した表情をする空達に返事ができない。先程まで暴走していた思考回路が一瞬にして氷漬けになったからだ。そして、今の現状を聞き出す。

「え、えっと…もしかして…フリました？」

「お、おう？皆の前で盛大にな？」

…これれ、冷静になれ。恐らくまだ挽回で…きねえ!!? 巫女さんといづなたんがいる前でとても嘘なんて通るはずがねえっ!!

あれねえ？おつかしいぞお？朝のうちにこのエンド想定してたのにどうしてこうなっちゃったのかなあ？…自分の私怨のせいだよ畜生っ!!…あーもー、理性って大事だなーと、痛感しました。ハイイ…。

ああ、というわけで、この物語ももう終わるのかあ、そつかあ…。二次元に来て18年とちよつと、楽しかったです。後悔しかない（泣）。

「あー、詰んだわコレ。」

「はあ!?! シュウ何を言い出す…んあ!?!」

ビキツ…ピシツ…!!

空が、問正そうとしたその時、夢の空間に亀裂が生じた。

「な、何が起こって…」

『プププ、プラム様ア!!!』

突如、空間に響き渡ってきたのは吸血種^{ダンピール}達の悲鳴にも似た声。

「えっ?ど、どうしたんですかあ!!?」

『そ、それが…女王様の氷が…割れそうなんですう!!』

「…「な、なんだってー!!?」「」」

その言葉が響き渡ると同時に、目の前は真っ暗になった。



「っはあ!!…おいシユウ!? 『詰み』ってどう言う…って、何してんだ?」

ライラの夢から覚めた空は、シユウの方へ真っ先に視線を向ける。そこには…。

「…はい。えつと、ライラ。あなたから貰った全権。そっくりそのまま返します。ハイ。受け取らないといじめない。オーケー?」

「はいい♪貰いますもらいますう♪だからもつと、もつと強く殴つてえ♪」

膝を抱えて俯きながらライラの頭にチョップを入れ続けるシユウと、その力加減に満足できていないのか、快楽で崩れた顔のまま要求をするライラの姿がそこにあった。

(あー、ライラチョップしたらタイムスリップとかしないかなあ…。)

「じよ、女王が…起きた…」

「そんな!？」

「嘘…ですよねえ？」

信じられない光景を目の当たりにして目を見開く一同。だがその中で、空だけがひどく冷静だった。

「おい。シユウ。」

「…はい。」

あまりに真面目なトーンでシユウに語りかける空の様子に2度驚く一同。しかし空は気にも止めずに進める。

「…その台詞、あー、『全権』がどーのこーのつてやつ。俺が言った台詞なんじゃないか?？」

「…ええ。そうですよ。」

「…え? な、何が起こってる…の?」

「あーうん。白、掻い摘んで言うのと、シユウは転生者だ。しかも、とびつきり厄介な。」
「て、転生者!?! それって空達と一緒の!?!」

「ええ、まあ、そうですね。もつと正確に言うのなら…。」

「『原作知識持ちの転生者』…と言ったほうが正しいかと。」



ポクポクポク…

「あいたっ♥あいたっ♥あいたっ♥あいたっ♥」

ポクポクポク…

「あん♥あん♥あん♥」

ポクポクポク…

「はん♥はん♥はん♥」

チーン…

「ああああああああああん♥」

この小説は不健全です。

どうも皆様。ご無沙汰しております。シユウです。

現在水槽から頭を突き出したライラを木の棒で木魚の様に叩いて昇天させるとい

日課をこなしております…自宅で。

というのも、あれから空の方から

『…俺たちの元いたような世界からこつちの世界にただけなら盛大に歓迎したんだが…』
『答え』を見ながらやる『問題』はただの作業にしかならないんだ…。悪いが、俺たちの『ゲーム』に極力関わってほしくない。今までの助けは感謝しているし、シユウがいたからこそ出来たこともあった…が、…あー、この世界に來ただけでも、満足しちゃくれねえか…?』

という言葉を受け、まあ俺もそれを了承したわけだ。空の最後あたりの台詞で苦い顔をしていたのが何とも言えなかったな。同じような世界から來たという境遇からか、同情という優しさが空のゲーム攻略の目的と葛藤していたのかもしれない。

もちろん、ステフの表情も忘れられなかった。が、空との盟約により、空の関係者と話すことを完全にとは言わないが禁止されてしまった為、何もできなくなってしまった。

生活は父の給料と、特別待遇というべきか、城から給付金が届いている。自宅待機…もとい、監禁のようなものだがな。

『よつぽほどの事…まあ、俺ら』くっくっく『でも解決できなくて詰んでしまうような事があれば呼ぶよ。』

…それってもう後はないってことですよん。

うん、まあ、いつかボロを出すとは思ってたけど、意外に早かったなあ…。というかステフに好意すら言っていないんだが、行為すらしていないんだが…あ、この小説は不健全です。

いや、ステフの事を諦めている訳じゃない。ただ、解決策も何も浮かばずに、ここ数日自宅でライラをいじめる事しかしていない。ライラは『ダーリンにいじめられる為ならどこへでも！』と言って自ら水瓶に身を入れて宅配で送られてきました。その行動力だけは評価したい。空すらも説得しきれずに折れたらしいし。

宅配と一緒に来た手紙には『余計なことは教えるなよ？まあ、こいつの頭なら問題は無いだろうがな by 空』と書かれていた。知能テストの結果、問題無いと判断したらしい。ある意味信頼されているようだ。

ちなみに母さんにはライラの事を『退職金と一緒にもらった海棲種』セイレイシと書いてある。ライラは自己紹介で『虐待用魚ですっ!!ダーリン限定の!!』と、張り切つて言い放つたので水瓶に沈めたら嬉しそうに身をくねらせていました。もうやだこの魚。

母さんには『色々しでかして退職した。』と伝えて、

『うーん、ステファニーちゃんを無理矢理襲っちゃったかあ…。』

と、コメント。被告はこれを否定している。

まあ金銭的な面は負担されているからまだいいが、『シユウちゃん。今はゆっくり休みなさいね。』と、言ってくれた。母さんマジ女神。

と、まあ現状を話すとこんなところだろう。いやー、異世界に来れたと言うだけならまだしも、いよいよ目的が達成できなくなってしまった。今のところ詰みである。

「はあ…どうしようかねえ…。」

このまま別の事でもしようか…それともまたステフと一緒にいたいのが為に策を講じ続けるか…。今は原作5巻辺りが終わったあたりだから、もうすぐ7巻か？しかし天翼種フリュウゲルとの関係がまだ築ききっていない…。まあ、モブリール達の空たちへの信頼は厚いから、そっち方面から攻めればなんとかかなりそうだが…。

「…まあ、俺が出る幕無さそうだなあ…。」

と、水瓶の中でアへ顔晒しながら昇天（気絶）してるライラを『見慣れた光景だ』と流しつつ無表情で見つめている（この行為すらライラは喜びを感じているらしい）。

「あー、心にポツカリ穴が空くってこういう事なんかねえ。」

いつも通りの日常を、無くして初めてそのありがたさに気づく。よくあることだな…。

とかなんとか思っていると、

ザボーン!!!

「フアツツ!?」

(いきなり水瓶が泡だらけに!? ななな何が起こった!?)

若干放心状態だった俺の目の前で、水瓶が突如として泡で真っ白になった。その拍子に意識を取り戻し、辺りを見回す…その原因を起こしたのは…

「探したにやーよー? 人類種? 最近ジブちゃんの事故つて置いて、どおーこで遊んでるかと思つたら、おうちでこんな魚と遊んでたにや? 命は惜しくないのかにやー?」

片足を水瓶に突っ込み、俺の方を睨みつけながら、ライラをさも当然のように踏み

じっている。ジブリールよりも複雑な光輪と角を頭に携える、特徴的なオツドアイの天翼種。^{フリュージェル}

「ア、アズリールⅡサン…。」

『十八翼議会』議長にして最終決定権者『全翼代理』、天翼種が一翼、アズリールであった。

終卷

さあ、終戦（ゲーム）を始めよう

「にやー？ どうしてうちの名前を知ってるにやー？ 人類種？」
イマニテイ

「そりやーもーあなたの愛しの妹様から散々聞きましたからねえ。。」

「にやにいつ!? ジブちゃんがうちの話を…っ!? ほ、本当かにやつ!?」

「ええそれはもう饒舌に語っておられましたよー。こちらの耳が痛くなる程です。」

「にやははあく照れるにやく♪で、どんなこと言ってたにや?」

『先輩マジないわー。』とか『書籍共有法』とかマジチョベリバなんですけど?』と
 か…。」

「ジブちゃんがそんな口調で言うはずないにや! 今すぐ訂正するにや!!」

「口調が問題なのかよ!?!」

「そうにや! ジブちゃんをそんなふうに育てた覚えはないにや!」

「…」そんなふうに育てた妹”に悪態をつかれてる現状に一言。

「どうして”お姉ちゃん大好き妹”に育ててくれなかったのにやああああ!!!」

「いやー、そんな事言われましても…ん?」

ガボツ!!ゴボボボツ!!

（ああっ♥いいっ♥いいっ♥今まで素手や木の棒でしかいじめてくれなかったのに、いきなり足蹴にされるだなんて♥）

ゴボボツゴボツ!!

（あんっ♥水瓶の底に顔面押し付けられながら、踵で後頭部を局所的に踏み抜かれる…気持ちいいっ♥）

ゴボババツババツ!!

（ああー♥もつとぐりぐりしてえっ♥もつと突き抜いてえっ♥あつ、イk…）

「あの…アズリールさん？」

「なにやー？イマニテイ人類種？」

「さつきから踏んでる水棲種なんだけど、もしかしたら今とんでもない勘違いしてて、俺の今後の日課に支障をきたしそうな予感がするからさ、そろそろやめてくれませんか？」

「あ、忘れてたにや。コイツなんにも抵抗しないから感覚が無かったにやー。ほいにや。」ポチャン

「ぷはあっ!!だ、ダーリン？その、普段からそんなに虐めたかったのなら、木の棒なんか

じゃなくてもっと硬いナニかで殴って虐めてくれても…イ・イ・の・よ♥」

「やつぱり勘違いしてるじゃねえか!!おいライラ!お前を踏んでくれてたのはこの
天翼種だ!俺じゃねえ!!」
フリーゲル

「え?そうなの?」

「そうにやー。でも、踏まれて興奮するだにやんて…やつぱり魚の頭のネジは飛んでる
のかにや?」

「ライラは頭のネジしか無さそうだけどな。」

「ふっ、そうだったのね…。ダーリン以外の奴に踏まれて興奮するなんて、私もまだまだ
ダーリンに染まりきってないってこと…。」

「いや染まらなくていいから。永久に自分色に染まっていいから。」

「それでなんだけど、あなたにお願いがあるの。」

「ん?うちかにやー?」

「そう。あなたの踏みの技術…嫌いじゃないわ!その踏みをダーリンに1から10まで
教え込んで欲し…!!」

「よしアズリールさん!ジブリールを助けに行くぞっ!!今すぐ!!ハリアツプ!!ライラ
は水瓶の底で大人しくしてろやあつ!!」ガシッ!!

「えっ!?ダボボバツ!!」

（ああー！♥ダーリンにアイアンクローで頭鷲掴みにされて、私…絶頂んじやううううううう♥）

□□□

「で、ジブリールの様子ってどんな感じなんだ？」

取り敢えずライラを気絶（絶頂）させ、アズリールに事の状態を聞き出す。

「にやー？とぼけるのかにやー？人類種風情が？」
イマニアイ

「え？俺のせいなの？」

「そうにやっ！うちからジブちゃんを盗って10年間も同棲しておいてよく言うにや！！どーせお前がなにかしたに決まってるにや！！さあ吐くにや！！この泥棒猫お！！」

「まあ確かに”しでかした”のは認めるが、今回はジブリールに関しちやなんにもしてないぞ？」

「にやー？まーだとぼける気にやあ？よくわかったにや！！なら論より結果にや！！これを見るにや！！」

アズリールが手を突きつけて、壁に時空の穴を出現させた。

「んー？」

その先に見えたのは…。



「あー。どうしてこうなったああああ…。」

「にいがシユウを解雇した…から?」

「そうなんだろうなあ…でもさあ…ここまでシユウがフラグ乱立してるとは思わなくってなあ…ハア…。」

「に、それより書類終わらせないと…。」

「うがあーっ!!政治ゲームは一番面倒なジャンルなんだよ!!やったらやった分仕事が増えるゲームってなんだよ!?楽しみにしてくださいお願いしますからあっ!!」

「…電源ボタン、ポチツとな。」ムニツ

「あんな妹よ?俺の左乳首は電源ボタンじゃありません。いや、”動力源”という意味なら一番近い場所ではあるんだがな?」

そんな兄妹がじゃれ合いながらこなしているのは無論、『政治活動』である。目の前に大量に置かれた書類の山を、『めんどくさい』と言わんばかりの顔…いや、実際口にしなから処理をしている。こなすスピードこそ破格なものの、大臣たちとの知識のすり合わ

せ、政策に対する貴族たちの反発等、ゲームのように思い通りにならない事に苛立ちを覚え始めていた。

…だが、本来この仕事は兄妹の仕事ではない。元はステフが担っていた仕事だったが…。

「当のステフは部屋に引きこもって出てこないし、ジブリールは呼び出しても生返事するだけで上の空。いづなたんは泣いて怒るしくラミーは絶望して寝たきりだもんなあ…。」

「…ファイは、狂喜乱舞してたけどね…。」

そう、今まで空白を支えてきた人材が、揃いも揃って『くわはく』に協力しようとしなくなったのである。唯一中立の立場にいる巫女というのが、エルキア王国と東部連合の両国をつなぐ政策を勧めているが、それに手を取られて他の国へ手を出せないでいる。

それもこれも、空がシュウを王城から追い出した直後からであった。

「まっさかここまでフラグ建てまくってるとは思わねえよ!? 乱立して回収する気あんのかってくらいですよ!?!」

「でも多分…シュウの世界で描かれてるには、もつとフラグ立ててると思う。」

「ハア!?!どこにそんな建造物建てんスカ!?! 指差し確認ヨオーイツ!!」

「…。」

「…あ、あのー、ここに白が乗ってくれないと兄ちゃんの立つ瀬が…。」
「…ふう。」

ため息をつく。兄が鈍感だということは知っていたが、ここまでとは思っていなかった。でも、

(シユウがここに来てくれたことで、多分、白は救われてる。)

原作知識というチートを使って、本来にいいに向けて建てられる筈のフラグを、シユウが今請け負っている。

もしシユウがここに居なかったら、今のようになにの視線を独り占めにできては居なかっただろう。

おそらくシユウの言う原作ステフやジブリールは、なにに好意を抱いていたに違いはない。それを、シユウは意図的でなくとも、なにからその好意を逸してくれた。その上、シユウは私達の間接関係を陰ながら応援してくれていた。

…もしかしたら、にいとステフをくつつけないためかもしれないけど、二人を邪魔するようなことはシユウはしてない。多分、にいと白に、幸せになってほしいのだろう。

でも、にいはきつと気づいていない。白はきつとまだ、”妹”のまま…。

なら…？

「にいい？」

「な、何だ妹よ？にいちやん今ご傷心中なんだが…。」

「…にいいは、しろの事、どう思ってる？」

「ん？白は白だろ？どうしたんだ急に？」

「…。」

「？」

（…ああ、言葉が出ない、よ。）

勇気が出ない。その先を、言ってしまったばどりつはずの結末に、だけど、今感じているぬくもりが消えてしまいそうで…居心地が変わりそうで…。望んでいるはずなのに、目の前に映るにいの顔が、とても優しく…。

（…ねえ、シユウ。あなたならこの足りない勇気、見せてくれる？）

いま置かれている状況から、シユウがもしステフに会いに行こうと藻掻いて、足掻いて、何かを伝えようとする勇気があるのなら。

（…しろもきつと、できるかな？）



「何だ、いつものジブリールじゃないか。」

穴の先に見えた光景は、白紙の本に何やら書きなぐっているジブリールの頭が見えた。

「にやー？あれが普段のジブにやんに見えるんだったら、眼球くり抜いて捨てたほうがマシにや。」

「こええよアズにやん…。」

「だあれがアズにやんにやあ!!」

「ジブリールにそう呼んでほしい？」

「呼んでほしいです!!」

「語尾が無くなる程か…。」

（んー、しかし何も変わった所なんて…ん？）

しばらくの間、ジブリールの様子を見てみると、ある事に気づいた。

「なあ、アズにやん。」

「…もうそれでいいにや。で、なにかわかったかにや？」

「…もしかして、本を読まずに書き殴ってるのか？」

「そうにやー。ここ数日、一冊も手を付けずに書き続けてるにや。」

…たしかにそれはおかしい。普段、ジブルールは読んだ本の中から様々な疑問を引き抜いて質問集に書き留めていく。そして実際にその本のページを俺に見せながら質問を言ってくるのだ。まして、『読み返す』を重視しているはずのジブルールが、本を読まずに質問を書くことはない。ならば、

「…何を書いてるんだ？」

「それは…お前を取り戻す方法にや。」

「お、俺をか？」

「そうにや。ジブちゃんが得てきた知識を総動員して、解決策を練ってるにや。…果ては今の主に反逆する手まで考える程に、にや。」

「そ、そこまで!？」

「…ジブちゃんは今亡き^{フリーユゲル}天翼種の主、アルトシユ様が居なくなった時すら、存在意義の根底が無くなったことで失意に暮れる私達を尻目に、いち早く知識の収集に向かったにや。『^{オールドデウス}神霊種がどうして敗れたのか』…その疑問を解き明かすっていう、好奇心に基づいて…にや。」

「…。」

「そんなジブちゃんがこうまでして取り戻そうとしている^{イマニテイ}人類種がいる…まして、我が主にすべき行為を、お前に向けている。正直、わけがわからないにや。お前はそうまで

「…いや、そんな事は無い筈…」
「さて取り戻そうとされるほど、利用価値のある人類種イマニテイなのかにや？」

「…いや、そんな事は無い筈…」
「なんだが、確かに引つかかる。今まで見たこともないジブリールの姿からは、明らかに変化がジブリールの中で起こっているということに。」

「…前にジブリールは言った。『たとえどこかへ逃げようとも地の果てまで追いかけて、死んだとしてもありとあらゆる手段を尽くして復活させるのでご心配なく♪』と。今、それを実行しているのだとしたら？」

「何故か背筋が凍る思いがしたが、それも一瞬。次の疑問がそれを氷解させた。」

「(例えばそうだったとしても、普通は主である『くわはく』への反逆を企てるなんてことは…しない…はず。というか盟約によってできない行為だ。でも、そんな行為すら天秤にかけた…俺という重りに対して。)」

「思考がジブリールの事を中心に回りだす。原作と現状で違う点はただ一つ。俺という存在の介入のみ。」

「互いに利用し合う、利害関係のみの盟約で構築されたその関係が、ジブリールを変えた。」

「(ただどジブリールは言った。俺と10年間過ごしても、『特に変わったことはない』と。)」

…でも、俺がステフだけを見ていたせいで、ジブリールの変化を見過ごしていたら？
「…。」

その気づきを発端に、今までのジブリールとの思い出が脳裏をよぎっていく。

質問に対する俺の返答を聞いて、『脳みそにカビでも生えているので？』と蔑むジブリール。

俺の作った料理を食べて、『何も感じません』とジト目で言うジブリール。

俺を吹き飛ばす為に5%天撃を放って無邪気に笑うジブリール。

…。

（うーん、碌なことされてない…けど、）

原作で『くうはく』にしなかつた行動ばかりである。崇拜の対象である彼らにせず、俺と
いう存在にのみ取った行動の数々。それらを思い起こした末に、たどり着く一つの仮
定。

『…なあ？ジブリール。』

『そこで…はい？なんででしょうか？』

『俺らつてき、10年以上ここでこんなことやって来たんだよな？』

『…ええ。そうでございますね。』

『…ジブリールつてここ10年でなにか変わったか？』

『…そうですね…質問を集めて答えを編み出し、それを考察する。その行為が定着したことからいでしょうか？』

『…そ。んじや、続きやっていきましようか。さつさと家に帰って、仕事しなきゃならんからな。』

『…そう、で…ございますね。続けましようか。』

…あの時抱いていた違和感。最後のセリフの妙な間。そして、その後『くうはく』という識者を主に持ったジブルールから見たら、俺という存在は盟約上『利』には到底ならぬ。それでも、ジブルールは盟約解除を頑なに断った。

（もし、感情というものにひどく疎いジブルールなりの行動だったとしたら…？）

…。

「…ふう。」

自惚れだろうか？この結論は？でも、もしそうだとするなら、この暴走とも言えるジブリーの行動が、俺がステフに対して取り続ける理由と同じ感情に基づいているのなら…辻褄があってしまう。

「…そうか。」

利害関係。そんな関係は、それ以上の関係に発展するなんて…しかもジブリール相手にそうなるなどあの時から全く考慮に入れてなかったが…。

「そういう、ことなのか。」

ジブリールに自覚があるかはわからない。でももし…。

ジブリールが、俺のことをただの人類種イマニテイじゃなく、『掛け替えのない存在』だと思ってるのなら…失うことを恐れてるんだとしたら…。

「…よし。わかった。」

「ん？何がわかったのかにやー？」

「俺のやるべきことがわかったんだよ。んじや、早速で悪いけど、手伝ってくれない？アズにやん？」

「にや？お前一人でなんとかするにや。これ以上うちが人類種イマニテイを手助けするなんてこと…」

「ジブリールの口から『お姉ちゃんありがとう』って言葉を言わせてやる。」

「のつたにやあ!!」

あつけなくドデカイ餌に食いついて、大はしやぎするアズリール。そんな彼女に申し

訳無さを抱きながら、アズリールとの利害関係を結んだところで、この先にあるエンディングにたどり着くための覚悟を決めて、心のなかで唱える。

さあ、終戦^{ゲーム}を始めよう。

無理ゲーに挑むならバグを持って立ち向かえ

前回までのあらすじ！

ご無沙汰しております。シユウです。

前々回、空様達との盟約によつて”原作の関係者に会えなくなる”という状況に陥った私でございますが、そんなところにアズリールⅡサンが現れたではありませんか！

AZにやん曰く、”ジブちゃんの様子がおかしい。それはおみやーのせいにああ!!”と。

そんなこんなでとりあえず今の状況を打破すべく、色々やつちやおう!…というのが前回のあらすじ。

(…:我ながら適当すぎないか?)

ともかく!あらすじを脳内に書き出し終え、本編に意識を持つていこう!…えー、その意識の先にいるのは、何やら興奮気味のアズリールさん。

「さあ、早くするにあ!!ジブちゃんから『おねえちゃん大好き!!愛してる!!もう抱いてっ!!』って言われるため、うちは何でもするにあーあ!!」

「ん?今『何でも』って?」

「そうにや!」何でも”にや!!ジブちゃんの為なら戦火の中、魔水の中!!どこへだって何だって、やってやるにやあ!!」

「ふーん…。じゃあ脱いで♪」

「剥ぐぞ?」

「…。」(↑白目&土下座)

純正な、しかも第一号の天翼種、アズリールの殺気に、ジブリールから得た殺気への『耐性』も虚しく吹き飛び、土下座をかます。

(いやー、本能って凄いな。瞬時に土下座の姿勢取るんだもん。アレだ、意味深な意味で剥がれるならまだしも、完全に”『皮を』剥ぐ”って意味だったよ。たまりません全く(↑白目))

「にやー?何を考えているか知らないにやけど、そんなに早く骨から肉が剥がれる音を

聞きたいのかにやー？」

「エグいよアズにやん!？」

想像したより10倍ヤバかったです、ハイ。

己の想像力の無さを痛感しつつ、アズリールに顔を上げ、視線を向ける。アズリールはしばしの間、絶対零度の視線光線を私に浴びせ続け、盟約により手が出せないことに、冷め始めた理性で気づいたのか、ため息をついて口を割る。

「はあー、で、うちは何をすればいいのかにやー？次余計なこと口走ったら帰るにやよ?」

「ハイ。スママセンデシタアズリールサマア!!」

盟約で殺されないとわかってても、本能で従っちゃやう。悔しい!!でも、死にたくないのお!!

「それじゃあ…何から始めよつかねえ…。」

唐突に現れたアズリールが協力してくれると言う。それだけで、今まで考えていた策の穴を一気に埋められる。さて、どの策を試そうか、そんなことを考えていると、アズリール。

「にやー?何を言ってるにや?今すぐ穴から飛び降りてジブちゃんに死んで詫びればいいにや。」

「…RTAやってる訳じゃないんだけどなあ…。」

まさかの策が、『策に出来てた穴に真っ向から飛び込んで死ぬ!』というものである。速攻で即効の方法をこそ所望のようで、早くジブリールの甘い言葉に溺れたい様子のアズリール先輩。

(…まあ、代償になつて俺の命については、気にも留めてないようですがねえ…。)

「というか、取り戻そうとしてる存在が死んで俺びに来たら元も子もないんじゃ?」

「その時はジブちゃんも諦めて、悲しみという心の穴を埋めにうちの胸を借りに来るにや!だからさっさと飛び死ぬにやあ!!この泥棒猫オ!!」

「…ジブリールが俺の死に”悲しみ”を覚えてくれると…?」

「…はっ!?そうにや!?こんな猿モドキの為にジブちゃんが泣いてくれる訳無いにやあ!?!
くそう…泥棒猿を消してジブちゃんを独り占めにするうちの計画があ!!」

「結局私利私欲のためじゃないですかーやだー!!」

「にやー!!!私欲だろうと死体だろうと、お前が戻ればジブちゃんも元に戻るにや!!
早く飛び降りろにやあ!!」

「…。」

(うーむ。こりやダメだ、聞く耳持たずって感じだな…。)

プンスカと私欲に駆られて荒事をつきつけてくるアズリールさん。目の前に垂らさ

れたジブリールからの愛に盲目模様だ。

(はあ…でも、それで解決するなら、それはそれでアリか…。)

”現状を知らない”…かつてジブリールが恐れなかった”未知”の恐ろしさを知らない。もしくは、ジブリールから聞いていても理解できないアズリールに、今はお灸を据えてみることにした。

「…じゃ、やってみる？」

「にやー？ようやく覚悟を決めたのにや？じゃ、張り切つて死ぬにや♪」

「よーし、人生初の飛び降り自殺だ！シユウ、いつきまーす!!」

あーいきやーいん…フラアアアアアイ!!!

家の床を盛大に蹴り、次元の狭間を通り抜け、ジブリールの元へドラゴンダイブをかましにかかる。

重力という名の加速器に後押しされ、急速に地面への距離を縮めていく。

(うーむ…。盟約通りなら無事なんだが…。)

今まで、ステフに会おうと思ってやって来たことを根拠に、この飛び降りには”何事もなく終わる”と結論づけている…が、

(やっぱり飛び降りなんて怖いわあ!!)

一瞬意識が遠のくを感じ、それが引き金になったのか、一気に恐怖が湧き出した。
(む、無理無理無理無理無理無理イ!!!、命綱無しとか無理イ!!!)

『助かる』という保証のないバンジージャンプ程、怖いものは無いわけで、
(はっ!!あの考えておいた『セリフ』を…っ!!)

飛び降りの直前、『あ、これヤバくないか?』と思い、一瞬で練った『別の策』を投じる。

「さあジブリアルよお!!俺に抱きつかれるがいいわあ!!」

そう言いながら、私服を脱いでいく。…フリをする。

「にやあ!?!しまったにやあ!!あいつ、死ぬんじゃないかとジブちゃんを襲う気にやとお!?
ジ、ジブちゃんに指一本触れさせないにやあ!!」

(無事に釣れたか…。)

”ゆうかん”な『ドラゴンダイブ』を”すけべ”な『ル○ンダイブ』へと変更したことにより、ジブリアルの身の危険を暗示させる。それにより、ジブリアルに辿り着く…
まあ、俺が地面に突き刺さる前に、アズリアルが捕獲してくれるという保険を作って置く。

(ま、間近で見てもらったほうが、良いってこともあるんだよな…。)

と、ジブリールの光輪が手に届きそうな距離まで迫った瞬間、

ギイイインツ…!!

「な、なんにや…なにが起こってるにや!？」

その時…俺とジブリールの時が止まった。



「さて、説明してもらおうかにやー?」

「説明って言ったって、全部見てたんでしょ? 百聞は一見に如かずって言いますし?」

「はあ？そんな言葉知らないにや。『百の見聞、一殺に如かず』って言葉ならあるにや。」
「相変わらず物騒な迷言集だこと…。」

「殺さないだけマシだと思えにや。百の見聞で許してやると言ってる今がチャンスにや
よう。それよりも…。」

「はーい!!盟約提示をさせていただきます喜んでえ!!」

生命の危機を感じ取ったので、素早く盟約が書かれた書簡を渡す。



『一つ、『』、及び『』の指定する関係者との接触・会合・会話を禁ずる。』

『二つ、上記の行動を試みた場合、両者の意識を遮断する（生命は維持される）。』

『三つ、原作における、ゲームに関する知識の流布、伝達を禁ずる。』

『四つ、盟約の内容の決定、変更、及び破棄の権利は『』のみが持つものとする。』



「はあ…。だからあの時ジブちゃんも気絶してたにやね…。」

「そ。これが盟約を決める前に聞かされた、盟約の概要ね。」
「ん？どういうことによ？」

「つまり、今この盟約は変更されてる可能性が高いってこと。」

「はあ？」

「本来』』の関係者であるライラと普通に話せてるのがその証拠。一つ目の盟約の枠から後でライラが外されたってことだ。」

「ほーん…。でも、変更がどうか関係無いにや。そんな盟約を交わされてちや、なくんもジブちゃんにできないことに変わり無いにや。やっぱ死ねにや。」

「そんなに結論を急がないでくれよアズにやん…。」

「にやー!! だったらどうするにやー!! その『』』とやらを冥土に送ればいいのにやー!!?」

「いや、ちよつと脅すくらいでいいんだけど…。」

「にやー? うちが全力でやれば、ヘコヘコ頭下げて命乞いするんじゃないのかにやー?」
「ジブリアル相手にそんなことしてなかつたし、アズにやん相手でも怯みはしないよ…あの二人なら。そもそも、こっちはジブリアルと話すための許可をもらいに行くだけなんだから。」

「ほー? でもどうするにや? 脅しの内容が『原作の知識』だとしたら、『盟約』によつて

伝えられないから無理にや。」

「そりゃ盟約に書かれてる方法で伝えるのは無理……。だけど、それ以外にも『知識』を伝える方法があるとしたら?」

「にやー? それ以外い?」

「ふっふっふ。まあ、これが^{イマニテイ}人類種^{イマニテイ}の為せる技つてね。さて、あとは“領土侵犯”の問題だな……。」

「領土侵犯? それがどう関係するにや?」

「いや……とある人のところにアズにやんの次元の穴を開通させたいんだけど、許可がないじゃん? 『十の盟約』によってさ?」

「あー、そういうことにやーか。」

そう、そもそもなぜここにアズルールが来れたのか。今現在エルキアに侵入できるのは^{イマニテイ}人類種^{イマニテイ}と^{ワビースト}獣人種^{ワビースト}のみ。その他の^{ブラム}吸血種^{ブラム}や^{ジブリール}天翼種^{ジブリール}、^{ライラ}水棲種^{ライラ}や^{ファイ}森精種^{ファイ}は特例扱いでエルキアにいる事を許されている状態だ。

だが、原作でもあったように、空達が巫女様のところへ転移する際、巫女の許可した範囲……いわば、天守閣内だけは侵入が可能になった。

だから、この家の空間……というより、自分の部屋の領域だけを『誰でも入ってよし! ……というか、早く来て!!』状態にしておくことで、アズルールが直接ここへ来れたとい

うわけだ。

「と言う訳で、その人から許可を取るよう連絡してくれる人が欲しいんだが…。」

(なかなか想像するだけで遠いんだよなあ…。俺が直接伝えるわけにもいかないし…)と、そんなことで悩んでいると、

「それならそこにいるにや。」

「あ?…あっ!!」

アズリールの指差す先に居たのは、未だ水瓶の中で気絶しているライラだった。

「おいライラ!! いい加減起きろ!!」

「…はっ!? 何!? ダーリン!? もしかして私を虐めてくれるの!? 辱めてくれるの!」

「いや、お使いを頼みたいんだが…。」

「いじめる!? いたぶる!」

「…ああー、すごい不安だなあ…。」

目をキラキラ輝かせて見つめてくるライラに、”お使い”をきちんと遂行できるか不安になつてきたが、

「…で、こいつをどこに落とせばいいにや?」

『そんなことに期待するな。』と、もう落とす準備満々なのか、ライラの方に手をかざして聞いてくるアズリール。

「え…あーうん。じゃあ…。」

とりあえずライラに言わせるセリフは置いといて、場所の指定だけ先に伝えておこう。

（まあ、取り敢えず伝わればいいか…。）

できるだけ言わせるセリフを短く、簡略化を重ねておこう。

（んじや、行動開始と行きますか!!）

そして、その場所の指定を皮切りに、動き出す。

「東部連合上空でお願いします♪」

繋ぎ紡ぐはゲームの道

「巫女様、ご報告がございます。」

「お？なんや、空はんの方で進展でもあったんか？」

東部連合の島々を巡りながら、イマニテイ人類種との国の併合、更には海棲種セイレーン、吸血種ダンピールとの協定関係を結ぶための会合を繰り返していた巫女、その元へと駆けつけたのから報告を受ける。

「いえ、それが…ライラ殿が巫女様に伝言をと…。」

「…ほお。」

わざわざライラを寄こして伝えに来たつてことは、その飼い主であるシユウの入れ知恵によるものの可能性が高い。そう判断した巫女は、

(ま、あん子もへそ曲げとるし、聞かないわけにはいかんなあ。)

カラカラと、心の中で笑って、いの方へ向き直り、促す。

「続けえ。」

「はい。ライラ様は『天守閣、次元の穴、許可』と何度も連呼しているようです。おそらく、ジブリール以外の天翼種フリュウゲルからの連絡と思われるが…いかが致しますか？」

「ほう…。」

巫女に接触することを頭ににした伝聞の意図を掴み、早速その場所へと向かう。

「…下がり。」

「御意。」

巫女に一礼入れて、静かにいのは去って行った。

「さて…放つて置かれた分、構ってもらわんと、割に合わんよなあ。」

そう独り言を呟いて、軽い歩調で目的の場所へ歩みを進めた。

高い、天守閣を遠目に眺めながら…



「どうだった？高度1万メートルからのスカイダイブは？」

「うーん、ダーリンに比べれば、『全く興奮しなかった』と言っているわ。」

「何をどう比べたんだよ…。」

一仕事終えたライラに、感想を求めると、予想外の台詞を貰い困惑するシユウ。そんな彼にライラは怒った素振りを見せながら答えた。

「だって、アレにはダーリンの冷たい視線も、私を軽々しく扱う力加減も！何も無いんだ

ものー！」

「あつてたまるか!？」

「とつても早く落ちたのに、海つたら私を絹でも扱うように優しく包み込むんだもの!!
ああ!!ダーリンが海そのものだったら、海面を鉄板並みに固くして私を拒絶してくれるの……♪」

「コイツ大地に叩き落としても良かったんじゃないかにやー?」

「色々面倒になりそうだから却下にしたんだけどなあ……。」

「そ……そんな……っ!!」

「なんでこの世の終わりみたいな顔してんだライラ!？」

「い、痛みこそ……私の人生だというのに……。」

「ワーツラソウダナー（棒）」

「あ、でもダーリンから限定ね☆」

「ソレサエナケレバナー（泣）」

相変わらずのライラの態度に、涙が出そうになる。もちろん呆れ涙だ。

（自分の失態でライラをこんな風にしちやつたのは反省すべき点だけど、ここまで依存するとはなあ……。）

原作で空とライラが日常会話するシーンがもしあつたら、それを参考にして以前の失

態を緩和できたかもしれない…と、考えを巡らせたところで、今更どうにも出来ないと虚しさが走る。

(タラレバの話ししてても仕方ない。今はこの状況を利用し尽くすんだ!)

気を引き締めて、次の段階へ移行する。ライラがきちんと伝言を送ったのなら、そろそろ巫女さんの方も準備ができている頃だろう。

「よし!アズにゃん!いっちょお願いします!」

「ほいにやつと。」

アズリールが自分の目の前に時空の穴を開ける。そしてその先には…。

「あ、巫女さ…」

目と目が合う瞬間好くきだと気づく…

ギイイイイイン!!

□□□

「巫女さんの真正面に次元の穴作ったら盟約でカチコチになっちゃうでしょうが!!」

「にゃー!? 文句あるなら自分で穴開けてやれにゃ!!」

「滅相もございませんアズリール様。」↑土下座

「ふん、分かれればいいにゃ。さ、次行くにゃよー…うえへへ♪」

「ん?なんで涎垂らしてんのアズにゃ…えっ!?ジブリッ…!!」

目と目が合う瞬間…

ギイイイイン!!

□□□□

「うおいいいい!!何やってんのアズにゃん!」

「いやあ…微動だにしないジブちゃんを四方八方から眺め回す…。最高の時間だったにゃあ…♪」

「そんなことやってたのかよ!」

巫女様との視線正面衝突事故で思いついたのか、実行してさぞ満足の様子のアズリール。

「でも触れなかったのが残念だったにや…。」

（前回の件でジブルールも警戒してたんだろうなあ…。アズルールの声が聞こえていたなら、確実に盟約を使つてやらかしの来ると踏んでの対抗策だろうし。）

アズルールの策略は半分阻止されたところで、いよいよ本題へ移る。

「それじゃアズにやん、改めてお願いします。」

「ま、お前のおかげで良い思いもできまし、今回だけにや。」

（アズにやんがデレただと!?!）

「後でたつぷりジブちゃんとかグへへ♪」

（あ、欲望ダダ漏れなだけだわコレ。）

当初から目的が変わってないアズルールは、次元の穴を少し開け、探りを入れてもう一つの穴をこちらへ向けて開けた。その先に佇むのは、こちらに背を向けている巫女であつた。

「これでいいにや?」

「バツチリだ。」

意識が途切れない事を確認して、再び巫女の方へ向き直る。

なぜ盟約が発動しないのか。なぜならこれは接触でも会合でも無く…。

（一方的な覗き見行為であるからだつ!!）

そう、最初にジブリールの様子を覗いていた時、盟約は発動していなかった。つまり、一定以上離れていれば、見ることでだけは可能になるという訳であるっ!!

(まあ、アズにやんがいるからこそできることな訳で…。)

そもそもエルキア王城に入るには門番に、東部連合へは島国ということもあり、移動手段で阻まれる。

さらに、何かを相手に伝えようとした時点で盟約が発動するため、覗き見だけでは何も意味をなさないのは、前回のジブリールの件で証明された。

が、

(その伝える対象が巫女さんでないのなら、話は別になるっ!!)

というわけで、次元の穴から巫女様の背中をじっと見つめて、心の中で必死に語りかけ、念じる。

(神霊種様神霊種様神霊種様神霊種様神霊種様神霊種様神霊種様)

【うるさい!! そんなに呼ばんでも聞こえておるわ!!】

(やったー!! 想いが通じたぞお!!)

久しぶりの帆楼の声に歓喜する。

【想いも何も、思念を通して話しておるのじゃから、当然じやろうて。】

(その通りでございますハイ…。)

なんだろう、せっかくボケたのに、理解されず真正面から正論を受けるこの悲しさは…。

【全く…あの海棲種セイレーンの一件でおぬしがしくじってからというもの、我は退屈で仕方なかったのじゃぞ?】

（え? 巫女さんと話す機会が増えたでしょ?）

【何を言うか! あやつは連邦構築の仕事で気に掛けることすらしなくなったのじゃぞ!】

（ワーミコサマヒドリー!）

【馬鹿者! 元はと言えば怒りに任せて暴走したおぬしが元凶ではないか!!】

（なにおう!? 神霊種オールドデウス様だって知識欲に負けて俺の正体巫女さんにバラした癖に! バーカ!!）

【なっ!? 我を馬鹿者と称するつもりか!? 身の程を弁えぬか!! バーカ!】

（神様のくせに生意気だ! このバーカミサマ!）

【なんじゃとお!?!】

（どうーゆーあんだーすたあん!?!）



「…さつきからコイツは何で睨みつけてるんだにや？」

オールドデウス
神靈種と思念を通じて会話（罵倒合戦）しているとは思ってないアズリールは、シユウの表情の原因を理解出来ずに居た。

「ああっ!!ダーリン!!その食いしばった歯、シワを寄せた眉間、その態度すべてを私に頂戴っ!!」

「お前は少し黙ってるにやっ!!」

「あがぼぼぼぼっ!!?」

思考を邪魔されたアズリールが、腹いせにライラの顔を掴んで水瓶へ沈める。

「ふん。うちのアイアंकローをモロにくらって逝きそびれた奴は居ないにや。さつきと逝き死ぬがいいにや。」

「…。」

（うーん。痛いんだけど、それだけね。やっぱりダーリンじゃないとダメだわ。）

□□□

【も、もうよいであろう…、おぬし…。】

（あ、ああ、なんか一生分の軽口言い合った気がするよ。）

【お互い口は割っておらぬのにな。】

（全くだ。）

【して、我に何を遣わせるつもりじゃ？今の状況を変えるのじやろ？このままではろくに話が出来んからな。】

（話が早くて助かるよつと。）

【ここまで来るのに時間がかかったがの。】

（余計な口挟めるようになるとはな…んじや、これから言う事を、巫女さんを通して『くわはく』に伝えるよう伝えてほしいんだ…。）



『くわはく』とやらに伝言を申す。』

【『私の目的は、貴殿らの遊戯妨害に非ず。今一度、覚悟を持ちて、真の目的を達成せんとす。どうか我に、僅かばかりの慈悲を願ひ致す。』…以上。】

「…はあ…巫女さんがなんで『巫女』と名乗ってるのかはよくわかった。んで、この行動の意味もよく理解した。」

全く違う声色の巫女から伝言を聞き、事の次第を理解した空が頭を掻く。

そう、巫女が何かしらの存在……つまり、内包する神霊種オールドデウスを、その存在を知っていたシユウが利用して、ネタバレ情報を散布……いや、その存在を空の元に連れてくるという『行動』のみで情報を押し付ける事が可能だと、暗に告げる方法で、空達を脅し、盟約の變更を迫ったのだ。

それを理解した空は、困った表情で続けた。

「だが、ここまでして盟約を覆しに来る程の、シユウのこの世界に来た目的って一体何なんだ？」

「……え？にいい、まだ気づいてない……の？」

「そ、そんな憐れむような目で兄ちゃんを見るな妹よおっ!!なんだ……この世界にゲーム以外の目的で来るやつなんているのか!？」

「んー、こりや”無感”確定やね。」

「ふっ、残念だったな!その巫女さんの一言で、俺にはすべて理解したぞっ!!」
「……。」

「『無感』は『鈍感』の上位互換!!つまり、シユウの目的は恋愛成就に関連するもの他ならないっ!!ならばそう、この作品の中でハーレムを作ることこそが目的だったんだっ!!」

「…にいい、おめでどう…。」

「やった、やったぞ!!これで『超鈍感』に成長…」

「『無感』の称号やで、ありがたく受け取つとき。」

「なんでだあ!?!」

女性陣に呆気なく無感の称号トロフィーを頂いた空は、その場に倒れ込み、頭を抱えて悶絶していた。

そんな空を据え置き、白は巫女へ話しかける。

「…巫女さん。」

「どうしたん?」

「巫女さんの中の神霊種オールドデウス…シユウと仲良し?」

「そうや。さつきまでどつちが馬鹿やとか、そんなくつだらな事で言い争うくらいにはな。」

その状況を思い返しているのか、まるで我が子を見守る母のような、柔らかな笑みを巫女は浮かべていた。

「巫女さんも、神霊種オールドデウスと仲良い?」

「ふふっ、つい最近までは嫌われとつたけど、シユウはんを介してようやく口聞いてくれたんよ。ほんつと、笑えるやろ?」

今度は自嘲気味に、だが永らくの願いを叶えた後のような、そんな表情を見せる巫女。
「…わかった。」

そんな巫女を見て、納得がいったのか、片手を挙げて、宣誓をする。

「…『くはくはく』として、盟約に誓い宣言する。シユウとの盟約に追記、『その五、”真の目的”を遂行する間、上記の盟約内容を無効とする。』…これでいい？」

「いいも何も、あてはそれを聞いて何も出来やせんよ。それをするのはシユウはんだげや。」

「…そうだね。」

「…あんたも頑張り。きつと、何か見えてくるもんがあるやろ。」

「…うん。そうする。」

白は何かを決意したように、胸に拳を当てて、果てを見るように空を見た。



「よし、後は伝えてくれるのを待つだけ…って、何してんのアズにやん？」

「やかましいから黙らせてるだけにや。」

次元の穴からアズリールの方へ視線を向けると、何故かライラにアイアンクローをか

ましていたアズリールの姿があった。

「うーん。ダーリンじゃないと何も感じないわ。ごめんなさいね。」

「にやにい!？」

その言葉を聞いてシヨックだったのか、その手をライラから外すアズリール。

「うわー、メツチャ痛そう…。」

アズリールは本気で掴んでいたのか、顔面に指の跡が痛々しく残ってる…にも関わらず、ライラは笑顔と両手をこちらに向けて言う。

「さあダーリン! 貴方の”愛”^{アイ}アंकローを私に!!」

「…ふっふっふ。甘かったようだなアズにゃん。私の本気のアイアंकローを見せて差し上げよう!」

「なんにゃとお!!」

人類種である私に負けたのがよっぽど悔しいのか、歯をギリギリ鳴らすアズリールを置いて、アイアंकローの手本を見せようと、ライラに近づこうとした時…。

ガシッ

「…。」

突如後頭部をガツチリ掴まれ、進行を阻害された。

「にやつ?!その手は…!!」

「Hurry, hurry, hurry!!」

アズリールはその手の主に見覚えがある様子。ライラは目をハートにしてヨダレを垂らしつつ待っているが、どうやらこれはお預けのようだ。

(…こつからだな。)

その手の主を想定、これからの事を想像し、すべてを終結させる為に、己の心に手を当て、鎖を巻き、鍵を掛ける…真似をする。

(さ、目指すエンディングの為、頑張りますかっ!!)

そのままその手に引っ張られ、景色の転移を体験する。

そして、その先に居た人物を確認して、心の中で宣言する。

(本番開始だっ!!)

ジブリール最後の質問

この図書館には……これといった想いはない。

強いて言うならば……そう、ジブリールと交わした無数の言葉の羅列だろうか。

だが、もうその殆どの記憶は残っていない。交わした盟約の、義務の一環としてひたすらその場しのぎの返答をしていただけだ。

質疑応答の音声情報は、耳に入り、脳に伝播、取捨選択の選別を受け、優先順位を確立し、記憶媒体の片隅に保存され……結果的には、意識しても思い出せない事実となっている。

ジブリールにとってこれらの行為は、鬱陶しいことこの上無かつただろう。なんせ一度読んだり聞いたりしたことは、否応無しにそのハイスペックな頭に永久に記録されるんだから。

俺にとって、図書館は、通過点でしかなかったんだ。

……そう、思っていた。



輝くステンドグラスが、網膜を貫く。家のガラス窓なんかとは比べ物にならない程、緻密に陽の光を計算して設置、装飾を施された細工の技術作品に、改めて魅了される。

そんな光の中に、影があつた。

その影は俺の事をただ見つめていた。さつきまで俺の頭を掴んでいたくせに、あんな遠くへ一瞬で行けるモノ。

「…。」

「…。」

…何秒お互いに見合っていたかわからない。ただ、その静寂に永遠など訪れない。いや、訪れさせては駄目なのだ。

(俺は、覚悟を決めたのだから。)

そうして、口を出す。

「ジブリール…話がある。」

「…。」

その言葉を聞いたジブルールは、ゆっくりと地上に降りてきた。改めて見て、外見だけは本当に天使に見える。綺麗で、潔白で、何よりもまばゆい程に。

「…(ちらへ。)」

そうして、ジブルールは席に着いた。いつも俺たちが言葉をぶつけ合った席の一つに。

そして促した。自身が座る席の隣を手の平で。

「…。」

その招きにはもう、強制力は無かった。この図書館の所有権はあれど、俺に対する『盟約』は破棄されている。

(いつもは背を押される感覚があったんだが…、本当に盟約が無くなったんだな…。)
ジブルールとの盟約が本当に無くなっていることを実感しつつ、席に手を掛ける。

「よっこいせつと。」

ちよつとだけ座り心地が変わったか…？ いや、違うか。

「…あなたの席はそこではない筈ですが？」

「…そうだな。」

今日の前にはジブールの顔がすっかりと見える位置にいる。大衆用の長机を挟み、

対面するように。

ここはジブリールの言うとおり、定位置じゃない。俺の定位置はジブリールの隣、いつもそこで質問に答えていた。

理由はジブリールが『あなたのアホ面を見ながら話したくありません。』と言った時から、そうだった。『隣ならあなたの醜い姿を極力視界に入れずに済みますから』などと。それも小学生の頃からである。子供は愛嬌というが、どうやらジブリールには通用しないものらしい。

「…わかっついていて、その席を選んだと？」

「…カビきった脳みそでも、考えあつてこうしてるんだよ。」

「…。」

いつもなら突つかかってくるはずのジブリールが、真剣な眼差しを向けるだけ。明らかに様子が違う。

それは、ジブリールから見た俺も、そうなのだろう。

対面の位置に座る。それは、盟約を交わすため、ゲームをするために唯一座った位置関係。その位置に座った意味を、ジブリールはこう捉えるだろう。

「では…再び盟約を交わしましょうか。」

ジブリールが手をかざし、机上に現れたのはチェス盤。特別なルールは無い。本当に

何もない、『チェス』。

それで盟約を過去に交わした。そして、成す術もなく、いや、何もせずに負け、盟約を受け入れた。

盟約を調整するときも、チェス以外の簡単なゲームをして、そして負ける。それだけの儀式。

ただその時だけは必ず、対面に座っていた。

だから、ジブルールはゲームを提示した。それは当然の行為で、当たり前で、自明で、明白な、俺たちが決めていた暗黙の了解のようなものだった。

だけど、

「俺はゲームをしに来たんじゃない。」

その言葉に、ピクリと身を震わし、射殺さんばかりの視線で睨みつける。

「俺はジブルールとの関係を回帰させる為にここに座ったんじゃない。」

「…あなたは…っ!!」

ジブルールが俺の言わんとする事に気づいて叫び止めようとする。が、構わずに続けた。

…続けなければならないんだ!!

「俺は話をしに来たんだ。俺が掲げた『真の目的』の為に、ジブリアルにすべき事を。」

その言葉を聴いたジブリアルは、少し驚いた表情を見せた。だが、それも束の間。

「…私を…。」

「…この天翼種^{フリュージェル}である私に、逆らうと…?」

ジブリアルの肩の震えが一層激しくなり、遂に弾けた。

「あまつさえ、この私を使い捨てて行くともっ!!?調子にのるな劣等種つ!!」

真の目的の為に行動している俺が、盟約の再結をしない。その意味を理解したジブリアルが激情に駆られて叫ぶ。

溢れ出す怒気、迸る嫌悪、剥き出しの殺意。限界まで広げられた腰の翼が、全てを白く塗りつぶす兵器に見えた。俺相手でも敬語をやめなかったジブリアルが、初めてそれ以外の口調を晒した。

『最終番个体』、作られた順番が最後という事もあり、天翼種^{フリュージェル}の間では最も後輩。それ故に敬語が標準装備だったのだろう。その口調から繰り出される罵倒はかなりの煽り耐性がなければ、他種族の相手はたちまち沸点到達したに違いない。

そんなデフォルトをかなぐり捨て、全力で見下し、掌握し、圧殺し、屈服させる。どんな手を使つてでも。

…それほど、『必死』なのかもしれない。

盟約でそれらが不可能だということを、念頭に入れてないはずがないジブリールが余裕を失う程の、迫力の影にちらつく焦りが見えるようだった。

だからあえて、口にする。

「…俺は、最初からそうだったじゃん。お互いに利用しあつて、必要がなくなれば解消する。盟約の施行権はジブリールにあるにせよ、互いの損得が合わなくなれば盟約は破綻する。」

もしかしたらそれは、最初から破綻していた盟約。だが十年も続いた、その事実だけは揺るがない盟約の軌跡。

けれどもそれは、終わりがある筈だった。王城へ勤めに行くときに、断ち切ることでできなかった鎖。

いや、俺は断ち切れるだろうと、本当に思っていた。

十年も、本当に無味乾燥な返事ばかりしていた筈だ。いや、真剣に考えていなかったわけではない。でも知識量や想像力の限界はある。その全てにおいて、ジブリールを上回ることはなかった。むしろ、教えられてばかりだった。

本当に無能だったのだ。俺は。

ジブリールからしたら何の利用価値もない存在。ただジブリールの庭に唯一立ち入ることを盟約の制限下で認められた人類種^{イマニティ}として、立ち入っていただけ、質問に返答しただけ、必要のない料理を作っただけ。ただの邪魔者でしかなかった。

なのに、ジブリールはその盟約を却下することは、一度として無かったのだ。

互いに利用価値が無くなっても、その鎖は繋がれたまま。その鎖に縋っていたのは他でもない。

目の前で死を体現しているジブリールだ。

失うという恐怖を感じ、掌に置けないと怒り心頭する感情を、わけもわからず解き放っている彼女が、である。

だけど、俺は怯まない。

もちろん、盟約に守られているという面が強い。盟約上、挑む側より、挑まれる側の方が圧倒的に有利なのだ。ジブリールもそれを理解しているからこそ、やるせなさでいっぱいなのだ。

だからこそ…

「ゲームをするぞ。ジブルール。」



「…あの、ジブルールⅡサン？」

「何でございましょう？」

「この【質問】、答えなきや駄目つすかねえ…？」

「もちろんにございます。」

【質問】 貴方の元の世界での異性との交際回数はいくつ？

「いやだ!! 答えたくない…っ!!」

「答えなければゲームの続行拒否となり、敗北となりますが…よろしいですか？」

「…う、うおおおおおおお!!」

「0^{ゼロ}ですっ!!!」

「はい、ではあなたの手番にございます。」

「ノーコメントかよ!? くっそう、なら仕返し…だっ!!」

シユウは盤上の手駒である『ルーク』を動かし、ジブリールの手駒である『ポーン』を討ち取る。すると席を立ちジブリールへ指をさして叫ぶ。

【質問】 つ!! 『アズにやんに色んなスキンシップをされて、正直気持ち良いと思っただ事がある。イエスカノーかでお応えください』 つ!! どうだ!! 嫌だ嫌だと言っても、性感帯だとさえ言った翼を触られて『気持ちいい』と思っただ瞬間くらい…。」

「一度としてございますん。」

…バタン!!

「おいジブリール、こっち覗いてたアズにやんが倒れたぞ?」

「『知らぬが仏』とはこの事でございましょう。あ、きちんと答えておりませんでした。」

『ノー』でございます。」

…バタン!!

「二段構えが無慈悲にアズにやんの心を打ち砕いたあ!!」

「勝手に詮索するのが無作法というものでございましょう?」

「それには同意するけども…。」

と、アズルールを哀れんだところで…コホン。

「ご無沙汰しております。シユウです。今現在、私の提案により始まったゲームの最中でございます。」

ルールについては何も特筆することのない、平凡極まりないチェス。勝手に駒が動いたり、新勢力が湧いて出る事もありません。

しかし、このチェスには敵の駒を倒した際に一つ、施行できる権利を獲得することができます。できます。

…まあ、上記のやり取りをご覧になった方々ならお察しでしょうが、その権利とは…

『相手に【質問】を一つしてもよい。相手はその【質問】に正直に答えなければならぬ。』

…というもの。ちなみに質問の内容に制限はございません。

…自分でこのルールを決めておいてアレだが、中々に答えづらい質問を度々寄越すジ

ブリールに苦戦しております。そんなジブリールは即答。羞恥の欠片も見えないという有様である。

念の為に勝利報酬を提示しておく、ジブリールが勝利した場合『再度盟約を締結する権利』を獲得し、俺が勝った場合『盟約の再度締結を永続的に不可能とする権利』を獲得するという物だ。

普通に戦えば勝つ可能性は方に一つもない。ならばその精神をゆさぶり、動揺によるミスで勝ち筋を見出さん!!…と、思ったのだが…。

「さて、私の手番にございますね…。」

「あの、もう少し質問の内容に手加減をば…!!」

そんな悲鳴を耳に入れず、すつと駒を動かし、ジブリールは告げる。

「はい、あなたの『ルーク』を討ち取りました。それでは【質問】にございます。」

【質問】 あなたの黒歴史において、最も印象に残っている台詞を吐け

「いやあああああ!!」

むしろこちらが辱めを受けて状況が不利になりまくる始末である。そしてそんな俺の姿を見てジブリールはニッコニコであらせられる。

「くそう!!こんなはずじゃなかったのにい!!」

「アホ猿の世迷言など述べずに答えをお聞かせくださいませ♪」

「…わ…。」

「わ?」

「我が左眼に宿りし魔りよ…!!」

「はい、では馬鹿の手番にございます。」

「せっかくだから最後まで聴いてえ!?!」

（俺の左眼が利き目だという事を特別に思っ作りあげた約1000文字の厨二台詞があ!!）

「…はあ、しかし、マスターに食らいつく程の実力が無いあなたが、どうしてチェスで私に勝てると思ったのでございましょうか?」

「…それは次の【質問】フェイズにてお聞きください。」

「いえ、これは【質問】にございませぬ。言うなれば疑問ですので問題はないかと。」

「屁理屈を言うんじゃないやありません…っと、はい、次ジブリアルな。」

考えた末に次の一手を打つ。しかし、この手ではジブリアル側の駒は取れなかった。

「…さて、そろそろ終わらせて差し上げましょうか。」

「…。」

互いに駒を取り合いながら、【質問】を投げあっていたのも、こちらの手駒が表すように、終盤へと向かっていた。

ジブリールの方の手駒は『クイーン』やら『ビショップ』やら、優秀な駒が多く残っており、こちらの勝機は無いも同然の盤面だった。

が、ここで終わるわけには行かない。

(…そろそろ始めるか…。)

ジブリールが駒を取ろうとした時、息を吸い、声を投じる。

確実にゲームに勝つ、『唯一の一手』を。

「あー、ジブリールが勝ってしまったら、『真の目的』が達成できなくなるなあ…。」

「…っ!!? な、何を…言ってる…!!?」

「だから、ジブリールが勝って、盟約が再締結したら、『真の目的』が達成できなくなるって言ったんだ。」

「…あ、あなたは最初から、それを見据えて…っ!!」

「そう。だからジブルールは勝っても、なんの得もない勝負をしてたんだよ。」

「…っ!!」

先程まで俺をからかって楽しんでいたジブルールは一変。怒気を顕にしてこちらを睨みつける。

そう、このゲームは最初からジブルールは得にならないゲームとして提案したチエスなのだ。

普通にやれば、俺には方に一つも勝ち目のないこのゲームを提案されて、ジブルールは自身の目的を達成するのにこれ程楽で、確実な方法を断る理由は無いのである。

だがここに、『^{空白}』からの盟約が重なってくるとどうなるだろうか？

ジブルールの勝利によってもたらされた盟約は、『^{空白}』達の盟約を一時的に無効化する『真の目的』の遂行の妨げとなるため、『^{空白}』の盟約が無効化が解除され、元の状態…すなわち、接触禁止の状態に戻るということになる。

その事を理解したジブルールは、更に強い視線を送り、叫ぶ。

「…どこまでも、私を舐め腐るおつもりで…っ!!」

「…。」

「ですが、その『真の目的』とやらが不明瞭なままゲームに負けるのは癪にございます。

よって…。」

そして、ジブリールは俺の最後の『ポーン』を討ち取って告げる。

「【質問】 あなたの言う『真の目的』とは、何でございましょう?」
嵌められた腹いせにその質問を寄越してくる。

「ありがとう。ジブリール。」

「…はい?」

待っていた。この時を…。

(ようやく、ここまで来た。今こそ、このゲームの真の目的を達成する時!!)

そう、実はこのゲームに勝つことはさほど重要では無い。

ジブリールに勝つことでも、『真の目的』という罫でジブリールを嵌める事でもない。

今までの過程は、あくまでこの瞬間に導くための、手段にすぎなかったのだ!!

(さて、今まで曖昧にしてきた『真の目的』の表明をするか…!!)

誰にも宣言することなく、しかし自分の中で確固たるものとして掲げていた目的を、ジブリールに告げる。

(俺のけじめとして、嘘偽りの無い言葉で伝えなければならぬから…)

もし、俺がジブリールの大切なモノになつたんだとしたら…。

(そうはなれないと、ちゃんと告げる必要があるだろ!!)

そして、盟約の力を借りなきや言えない事を、今、宣言する。

「俺の『真の目的』は『ステフに告白する』事だ。」

「…。」

ジブリールは目を見開いて固まった。

口を小さく開けたまま、呆然として、佇んでいた。

そして…。

「…プツッW」

「えっ?」

突然ジブリールの表情が崩れ、口から息を吹き出したかと思うと、

「ふっ……くくく……ふふふっ……あははっww」

「なっ……なんでそこで笑うの!?!」

閉じた瞼から涙を流しながら、腹を抱えて笑いだした。

「ふふっ、な、何を言い出すかと思えば、そんな事でしたか…!!」

「そ、そんなこと!?!」

「ええ、そんな事にございます。何を勘違いしているか存じ上げませんが、私は最初からドラちゃんなど眼中に入れておりませんので。」

「え、あ、はい?」

ジブリールから怒りの罵倒やら、悲しみの言葉、果ては天撃の一つでも受ける覚悟でいたのに、予想外の事態に困惑して生返事しかできない。

「では、遠慮なく勝たせていただきます。とつとつ次の手を打ってくださいませ。」

「お、おう?」

ジブリールの心境がよくわからないまま、最後に残った『キング』を一步後退させて手番を終える。

(え?あ、あれ?これって…どゆこと?)

ジブルールの手駒がなにやら恐ろしいものに見えて、今にも逃げ出そうとする姿勢は、手駒の『キング』の動きそのものだった。

「さて、では、『最後の質問』にございます♪」

そう笑ってジブルールは『クイーン』の駒を動かし、『キング』を打ち倒して、言う。

【質問】 あなたは私のことが好きですか？

「い、いいえ…。」

「まあ、そうでございましょうね。」

絞り出すように告げた言葉を、まるで意に介さない速度で返事をしたジブルールは、「ですが、それは、今、の話にございます。」

「えっ!?!」

「あなたは私がようやく見つけた」とまり木にございませれば、何が起ころうと手放

しはいたしません。」

「ですがその『真の目的』とやらの為に邪魔だというのならば、”今”は『盟約』は施さないでおくとうしましょう。」

「ですがその後は、手段を選ばずに私の鳥籠の中へと引きずってでも格納致しますので…」

「ちよ、ちよつとジブリールっ!？」

ふわりと席から身を乗り出したジブリールは、俺の頬に手を伸ばして…。

コツン

「…んあ?」

「…。」

ジブリールの額が俺の額にくっついていた。

そして、ジブリールは閉じていた瞳をゆつくりと開き、俺の瞳を覗き込んで、言った。「覚悟しておいてくださいませ、シユウ♪」



私はこのアホ猿を、最初はただのクソガキと思っておりました。

一時の気の迷いで使用を許可した図書館を、その日のうちから走り回り、埃を立て、手垢を付けまくる姿に、

(殺したほうが本のためでしょう♪)

と、手をかけそうになりました。

私の質問に回答する時はいつも不機嫌そうな態度で答え、あれがわからない、これかわからない、そんなの知るか、と答えるアホに、

(脳味噌を洗浄したほうが手っ取り早いかもしれませんね♪)

と、幾度となく思っておりました。

毎回来るたびに雑草や根を持ってきては、切り刻んで湯で煮て変な臭いを漂わせる馬鹿に、

(本に腐った土の臭いが付く前に、体液から消臭しましょうか…♪)

と、実験体にしようと試みてみると、逆に料理の味見役という実験体に仕立て上げられる始末。よくわからない味や食感を聞かれ、

(そんなに料理の意見を聞きたくば、同種に振る舞うという知恵は無いのでしょうか?)
と、匙を投げたのは何本か…。

ですが、しばらくそのような毎日が続いていた頃、学校の用事か何かは存じませんが、猿が1日来なかつた日がございました。

『…。』

その時から、なにやら不思議な、そして不可解な感触を抱いていたのを覚えております。

そして、最初の頃は私の腹辺りまでしかなかつた子猿の身長は、日を追うごとに伸び、遂には私の身長を越えた頃、私は恐怖という感情を持ったのでございます。

我々天翼種^{フリュウゲル}には無い、変化する生命の形を、死という終わりに向かつて進む姿を見て

…
どうか失いたくないと、そう思っていたのです。

果てに、私は絶対の繋がりである盟約の鎖を解かれ、何かが壊れたように飛び回ります。

す。

かつては自由に空を飛び回る事に、なんの感傷も抱かなかった私が、その浮遊感に、あらゆる事か不安を覚えて…。

その唯一の繋がりであった鎖を、どうにかして手繰り寄せようと。無我夢中で模索していたのです。

そして…そんな中で行き着いたその気持ちの正体は…。

□□□

「いつまでくつついてるのにやあああ!!!」

「うおっ!!」

「おや?アズルール先輩。もう気絶からお覚めになったので?」

「そうにや!!…つて、そんなことどうでもいいにや!!」

プンスカと地団駄踏みながら、ジブルールに向かって叫ぶアズルール。

「ハツと起きて見てみたら、ジブちゃんがとても良い顔してたのにや!!なんにやあの笑顔はあ!!?うちですら初めて見たにや!!それをこんなクソ猿に向けるなんてどんな天変地異にやあありがとうございませす!!」

「おい最後本音出てるぞ!」

最後はなぜか腰を45。曲げて礼をするアズリール。それを見たジブリールは、

「まあ、今回はアズリール先輩がいなくてはこうはならなかったでしょうから、一応お礼を言っておきますね。ありがとうございました。アズリール先輩。シユウをここに連れてきてくださって。」

アズリールに向かって、感謝の意を伝えた。なんともアズリールに対するジブリールらしい感謝だった。

「ふ、ふん!そ、そうにや…妹のためなら何でもするのがお姉ちゃんにや…。」
「そうでしたか…。」

真正面から感謝を伝えられて照れたアズリールはそっぽを向いて答える…が、何やら物足りないのか調子に乗ったのか、ジブリールの方をチラチラと見て、

「…あ、あの、ちよつとお願いがあるんだけどにや、ジブちゃん?」
「何でございましょう?」

「お、『お姉ちゃん』って、い、言ってみてくれないかにやくなんて…。」
「ふむ…。」

今なら行けると自分の願望を乗せたわがままを伝えた。が、流石にやりすぎだと思つたのか、視線の明後日の方向へ走らせ、とっさに取り繕った。

「にや、にやはは!!ちよつと調子に乗り過ぎたかにや!?今のは忘れ…」

「ありがとね、アズリールお姉ちゃん♪」

「…!!!」

ばたんきゅー!!

「あ、アズリール!!サン!」

重力を感じない筈の体を、スツと背中から地面に叩きつけ、恍惚の表情で悶るアズリール。

「も…もう死んでもいいにやあ…。」

そのまま目を回して、アズリールは静かに気絶した。

「おや、ちよつとサービスが過ぎたようにございますね？」

「そ、そうだな…。」

きつと幸せな夢を見てますように、と祈っておく。

「さて、シユウ。」

「は、はいっ!？」

ジブリールから名前と呼ばれるという未曾有の事態に、まだ困惑は続いている。さつきから心の中が荒れまくって仕方がない。

『『真の目的』とやらのために、ドラちゃん元へ行くのでございませう?』

「…まあな。」

さっきの事もあって少し後ろめたく思うが、そんな俺の気持ちなど気にしてないのか、ジブリールはすつと手をこちらに伸ばしてきた。

「では、目的地まで転移致しますので、お掴まりください。」

「…お、おう。」

俺がその手を取ると、ジブリールは俺の手に添えるように握って、微笑んだ。

(…なんだかなあ…。)

今まで俺に触れることはヘッドロック(手掴み的な意味)くらいしかなかったし、ス

キンシップなんてありえないことだった。

ジブリールは俺に触れることを極力拒んでいたし、俺が触れようものなら良くて盟約BAN、悪くて天撃なのだ。

だから…まあ、なんというか…。

(調子狂うなあ…。)

納得の行かない気持ちを払うように髪を掻きながら、視線をジブリールに移す。

「なあ、ジブリール。」

「はい？ なにか不都合がお有りです？」

「…なんで俺を気に入ったんだ？」

一瞬目を見開いて、『そうでございますね…』と繋いでない方の手で顎を引きながら、「さあ…私にも理解できない感情にございますれば、その質問に満足のいく回答はできかねます♪」

「そうかよ…。」

『わからない』を心底楽しそうに感じているジブリールの顔は、とても直視できるものはなかった。

「ですが、今これだけは提言する事が可能でございます。」
 「も、もういい!!これ以上は…!!」

「この手を決して離したくないと、そう、思うのでございます♪」
 「だあああああつ!!ダメに決まってるだろうがっ!!」

「あん♪」

俺が思うと同時に、盟約によりジブリールと繋がれていた手が強制的に弾かれる。

「今そーゆーこと禁止!!早くステフのところへ連れてつてくれ!!」

「はて、『そーゆーこと』とは、”どーゆーこと”でございますよう?僭越ながら、人類種^{イマニテイ}の『ゆーもあ』というものには疎うございます故、ご鞭撻の程お願いできませんか?シユウ♪」

「うるさいですう!!いいから転移して下さいってのお!!」

「では手を…。」

「繋がなくてもできるでしょうがっ!!次元の穴開けるよ!!」

「…嫌でございます♪」

「ぬ、ぬあああああもうっ!!」

これでは埒が明かないので、ジブリールの手を強引に取って急かす。

…極力ジブリールの方を見ないようにしながら。

「これでいいんだろ!?早く行くぞっ!!」

「…ええ、まあ、今回のところはこれで良しといたしましょう。私も早めにマスターへ謝罪を述べに向かわなくてはなりませんので。では…。」

「…。」

ジブリールが静かになると同時に、辺りの空気が張りつめ、景色の転移が始まる。

…その瞬間だけ、俺の手を握るジブリールの手の力が、増したような気がした。

□□□

肌に触れる空気の変化が、図書館のそれと変わった。

その変化が心の鼓動を狂わせ、緊張へと変わる。

押しつぶされそうなプレッシャーを感じて、呼吸が重い。できればこんな重荷放り投げで逃げ出したいくらいだった。

だけど…

(もう先に進むと決めたんだっ!!)

その覚悟を胸に、瞼を開けた先に待っていたのは…

「やっぱり来たか…シユウ。」

「ん…待ってた。」

玉座に腰を下ろす『』の姿がそこにあつた。